

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 2 —

福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の調査Ⅰ

2012

九州歴史資料館



1. 遺跡上空から平尾台方面を望む



2. 遺跡上空からビワノクマ古墳方面を望む



1. 道路状遺構東半完掘状況（西から）



2. 道路状遺構東半帯状硬化検出状況（西から）



1. 道路状遺構西半側溝掘削状況（東から）



2. 道路状遺構西半波板状痕跡検出状況（東から）



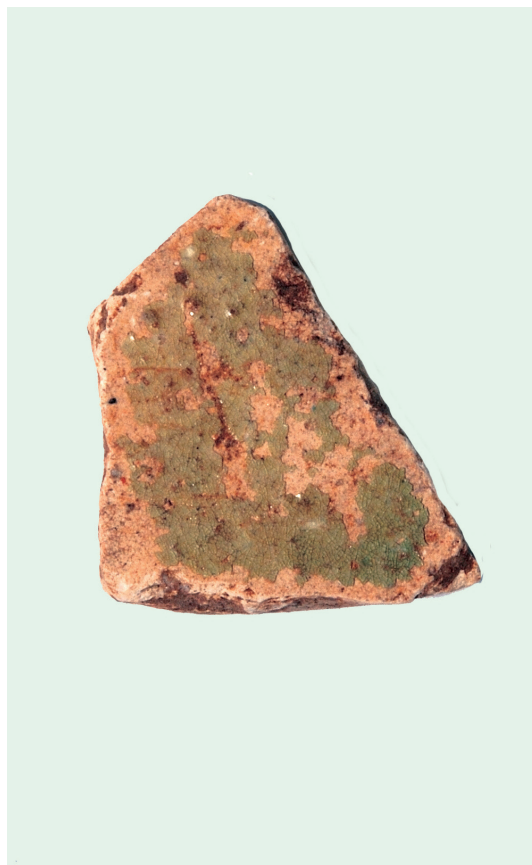
1. 12号土坑馬骨出土状況（東から）



2. 13号土壙遺物出土状況（東から）



1. 8号土坑出土「京郡物太」墨書土器



2. 25号溝出土緑釉陶器片



1, 13号土壙出土鏡

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成19年度から23年度にかけて行った、行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡の調査の記録で、本遺跡の調査報告書の第1冊目となります。

本遺跡は行橋平野の丘陵上に立地しており、近隣には県指定史跡である「ビワノクマ古墳」などが分布しています。今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭、ならびに古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡であり、以降も中世まで遺構が見られる遺跡であることを確認しました。また、古代の道路や井戸などの遺構群が発見され、周辺の調査の状況から、官衙的な性格があった可能性が今後の整理によって明らかになることが期待されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成24年3月31日

九州歴史資料館

館 長 西谷 正

例 言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第2集にあたる。
2. 発掘調査は西日本高速株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、整理報告は同社の委託を受けて、文化財保護課および九州歴史資料館が実施した。
3. 本遺跡は、東九州自動車道福岡工事事務所管内の第15地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は城門義廣が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社・東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、城門が行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、濱田信也・新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・蓑島・中津・田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9. 平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
10. 本書のⅣ章の墨書土器については、九州歴史資料館学芸調査室学芸調査班長 松川博一が執筆した。その他の執筆・編集は城門が行った。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	4
3	調査・整理の組織	7
II	位置と環境	8
III	発掘調査の記録	15
1	遺跡の概要	15
2	遺構と遺物	15
(1)	竪穴住居跡	15
(2)	掘立柱建物	62
(3)	土坑	62
(4)	溝	82
(5)	道路状遺構	89
(6)	土壙墓	96
(7)	その他の遺構	96
IV	おわりに	111

図版目次

巻頭図版1	1 遺跡上空から平尾台方面を望む	
	2 遺跡上空からビワノクマ古墳方面を望む	
巻頭図版2	1 道路状遺構東半完掘状況（西から）	
	2 道路状遺構東半带状硬化検出状況（西から）	
巻頭図版3	1 道路状遺構西半側溝掘削状況（東から）	
	2 道路状遺構西半波板状痕跡検出状況（東から）	
巻頭図版4	1 12号土坑馬骨出土状況（東から）	2 13号土壙遺物出土状況（東から）
巻頭図版5	1 8号土坑出土「京郡物太」墨書土器	2 25号溝出土緑釉陶器片
巻頭図版6	1 13号土壙出土鏡	
図版1	1 調査区北東側全景	2 調査区北西側全景
図版2	1 調査区南西側全景（25号溝）	2 調査区東側全景（17号竪穴住居跡）
図版3	1 調査区南側全景（26～28号竪穴住居跡）	2 調査区南東側全景（道路状遺構）
図版4	1 調査区東側土層（西から、道路状遺構）	2 調査区東側谷落ち部土層（西から）
	3 表土剥ぎ風景（東から）	
図版5	1 1号竪穴住居跡炉跡検出状況（東から）	2 1号竪穴住居跡完掘（西から）
	3 1号竪穴住居跡屋内土坑（南から）	
図版6	1 2号竪穴住居跡出土状況（東から）	2 2号竪穴住居跡完掘（東から）
	3 3号竪穴住居跡出土状況（西から）	
図版7	1 3号竪穴住居跡完掘（西から）	2 3号竪穴住居跡屋内土坑（南から）
	3 4号竪穴住居跡（東から）	
図版8	1 6号竪穴住居跡出土状況（西から）	2 6号竪穴住居跡完掘（西から）
	3 7号竪穴住居跡出土状況（東から）	
図版9	1 7号竪穴住居跡完掘（東から）	2 8号竪穴住居跡カマド（南から）
	3 8号竪穴住居跡完掘（西から）	
図版10	1 13号竪穴住居跡完掘（西から）	2 16号竪穴住居跡完掘（西から）
	3 16号竪穴住居跡P-1出土状況（南から）	
図版11	1 17号竪穴住居跡南壁土層（北から）	2 17号竪穴住居跡北半完掘（北西から）
	3 17号竪穴住居跡南半完掘（南から）	
図版12	1 17号竪穴住居跡P-1出土状況（北から）	2 18号竪穴住居跡出土状況（東から）
	3 18号竪穴住居跡完掘（東から）	
図版13	1 SX05出土状況（南から）	2 19号竪穴住居跡完掘（東から）
	3 20号竪穴住居跡出土状況（南東から）	
図版14	1 21号竪穴住居跡出土状況（西から）	2 22号竪穴住居跡出土状況（東から）
	3 26号竪穴住居跡土層（南東から）	

図版15	1	26号竪穴住居跡完掘（西から）	2	27号竪穴住居跡土層（南東から）
	3	27号竪穴住居跡カマド（南から）		
図版16	1	27号竪穴住居跡完掘（南から）	2	28号竪穴住居跡土層（北東から）
	3	28号竪穴住居跡カマド土層（南から）		
図版17	1	28号竪穴住居跡完掘（西から）	2	SX07出土状況（東から）
	3	1号掘立柱建物全景（北西から）		
図版18	1	1号土坑出土状況（東から）	2	2号土坑出土状況（東から）
	3	3号土坑土層（西から）		
図版19	1	4号土坑土層（東から）	2	5号土坑土層（北から）
	3	7号土坑完掘（南から）		
図版20	1	7号土坑断ち割り状況（南から）	2	7号土坑内部状況（南から）
	3	8号土坑土層（東から）		
図版21	1	8号土坑出土状況（北から）	2	8号土坑完掘（東から）
	3	9号土坑土層（東から）		
図版22	1	9号土坑完掘（東から）	2	10号土坑土層（東から）
	3	10号土坑完掘（南西から）		
図版23	1	11号土坑土層（西から）	2	11号土坑完掘（東から）
	3	12号土坑馬骨出土状況（東から）		
図版24	1	12号土坑完掘（東から）	2	22号土坑土層（東から）
	3	22号土坑完掘（南から）		
図版25	1	23号土坑完掘（南から）	2	24号土坑土層（西から）
	3	24号土坑完掘（西から）		
図版26	1	1・2号溝土層（南から）	2	5・6号溝土層（東から）
	3	6号溝西半部土層（西から）		
図版27	1	8・6号溝土層（西から）	2	10号溝土層（西から）
	3	23号溝土層（北から）		
図版28	1	25号溝土層（西から）	2	25号溝全景（北西から）
	3	道路状遺構東半検出状況（東から）		
図版29	1	道路状遺構東半側溝検出状況（西から）		
	2	道路状遺構東半上面帯状硬化検出状況（西から）		
	3	道路状遺構東半上面帯状硬化近景（西から）		
図版30	1	道路状遺構東半上面帯状硬化近景2（西から）		
	2	道路状遺構東半土層（北西から）		
	3	道路状遺構東半下面帯状硬化検出状況（西から）		
図版31	1	道路状遺構東半下面帯状硬化検出状況（西から）		
	2	道路状遺構東半下面帯状硬化②（西から）		
	3	道路状遺構東半下面帯状硬化掘削（西から）		
図版32	1	道路状遺構東半帯状硬化・波板状痕跡（東から）		

- 2 道路状遺構東半波板状痕跡掘削（西から）
- 3 道路状遺構東半完掘（東から）
- 図版33 1 道路状遺構西半側溝検出状況（東から）
- 2 道路状遺構西半側溝完掘（東から）
- 3 道路状遺構西半足跡状痕跡？検出状況（東から）
- 図版34 1 道路状遺構西半足跡状痕跡？完掘（東から）
- 2 道路状遺構西半带状硬化7（東から）
- 3 道路状遺構西半土層（南東から）
- 図版35 1 道路状遺構西半波板状痕跡検出状況（東から）
- 2 道路状遺構西半完掘（東から）
- 3 13号土壙出土状況（東から）
- 図版36 出土遺物1（住居跡出土）
- 図版37 出土遺物2（住居跡出土）
- 図版38 出土遺物3（住居跡出土）
- 図版39 出土遺物4（住居跡出土）
- 図版40 出土遺物5（住居跡・土坑出土）
- 図版41 出土遺物6（土坑出土）
- 図版42 出土遺物7（土坑出土）
- 図版43 出土遺物8（土坑・包含層出土）
- 図版44 出土遺物9（包含層・その他の遺構出土）
- 図版45 出土遺物10（その他の遺構出土・石・土製品）
- 図版46 出土遺物11（石・鉄製品）



体験発掘状況

挿図目次

第 1 図	延永ヤヨミ園遺跡の位置	1
第 2 図	東九州自動車道路線図および調査地点位置図 (1/100,000)	2
第 3 図	延永ヤヨミ園遺跡調査区割 (1/1,200)	5
第 4 図	周辺遺跡分布図 (1/70,000)	10
第 5 図	調査区周辺地形図 (1/5,000)	11
第 6 図	調査区遺構配置図 (1/300)	13
第 7 図	1・2・4号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	18
第 8 図	1・2・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	19
第 9 図	3・12・5号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	21
第10図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	22
第11図	3・5・6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、17のみ1/4)	23
第12図	6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第13図	6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	26
第14図	6・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	27
第15図	7号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3、9のみ1/8)	28
第16図	7号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	29
第17図	8・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	30
第18図	9・10・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第19図	13・14・23・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)	32
第20図	8・9・13・15・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	33
第21図	17号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第22図	17号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	36
第23図	17号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	37
第24図	17号竪穴住居跡P-1実測図 (1/30)	38
第25図	17号竪穴住居跡P-1出土土器実測図 (1/3)	39
第26図	18号竪穴住居跡・SX05実測図 (1/60)	40
第27図	18号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	42
第28図	18号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	43
第29図	18号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3、56は1/2)	44
第30図	SX05出土土器実測図 (1/3)	45
第31図	19・20・24・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	46
第32図	19・20・24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	48
第33図	21・22号竪穴住居跡、SX06・08実測図 (1/60)	50
第34図	21・22号竪穴住居跡、SX06出土土器実測図 (1/3)	51
第35図	26号竪穴住居跡実測図 (1/60)	52

第36図	26号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	54
第37図	27号竪穴住居跡実測図(1/60、1/30)	55
第38図	27号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	56
第39図	28号竪穴住居跡実測図(1/60、1/30)	57
第40図	28号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	58
第41図	SX02・09実測図(1/60)	59
第42図	SX02出土土器実測図(1/3)	59
第43図	SX07実測図(1/60)	60
第44図	SX07出土土器実測図(1/3)	61
第45図	1号掘立柱建物実測図(1/60)	62
第46図	1～6号土坑実測図(1/30)	65
第47図	7号土坑実測図(1/40)	66
第48図	14～17号土坑実測図(1/30)	67
第49図	19・21号土坑・SX01実測図(1/30)	68
第50図	1・2・3・16～19号土坑・SX01出土土器実測図(1/3)	69
第51図	SX04実測図(1/30)	70
第52図	8号土坑実測図(1/40)	71
第53図	8号土坑出土土器実測図(1/3)	72
第54図	8号土坑出土遺物実測図(1/3)	73
第55図	9号土坑実測図(1/40)	74
第56図	10・11号土坑実測図(1/40)	75
第57図	12・20号土坑、馬骨出土状況実測図(1/40、1/15)	76
第58図	9～12号土坑出土土器実測図(1/3)	77
第59図	12号土坑出土斎串実測図(1/2)	78
第60図	22～24号土坑実測図(1/40)	79
第61図	22号土坑出土土器実測図(1/3)	80
第62図	23号土坑出土土器実測図(1/3)	81
第63図	溝1・2・5・6・8・10・23～25土層実測図(1/40)	83
第64図	溝出土土器実測図(1/3)	85
第65図	道路状遺構带状硬化実測図(1/90)	90
第66図	道路状遺構足跡状痕跡? 実測図(1/40)	91
第67図	道路状遺構波板状痕跡実測図(1/40)	92
第68図	道路状遺構土層実測図(1/40)	93
第69図	道路状遺構出土土器実測図①(1/3)	94
第70図	道路状遺構出土土器実測図②(1/3)	95
第71図	13号土塋土塋実測図(1/20)	96
第72図	13号土塋出土遺物実測図(1/3、3は1/2)	96
第73図	調査区南東端谷落ち土層実測図(1/40)	97

第74図	灰褐色土包含層出土土器実測図(1/3).....	98
第75図	灰褐色土・黒褐色土包含層出土土器実測図(1/3)	99
第76図	暗青灰色土包含層出土土器実測図①(1/3).....	100
第77図	暗青灰色土包含層出土土器実測図②(1/3).....	101
第78図	暗青灰色土包含層出土土器実測図③(1/3).....	103
第79図	P282土器出土状況、出土土器実測図(1/20、1/3)	104
第80図	その他の遺構出土土器実測図①(1/3).....	105
第81図	その他の遺構出土土器実測図②(1/3).....	107
第82図	遺跡出土石・土製品実測図(1/2)	108
第83図	遺跡出土石製品実測図(1/3).....	109
第84図	遺跡出土鉄・木製品実測図(1/2、32は1/3、33・34は1/4)	110
第85図	時期別変遷図(1/800).....	112

表目次

第1表	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧	3
第2表	延永ヤヨミ園遺跡の調査区および期間	4
第3表	遺構対照表	16
第4表	特殊遺物一覧表	116
第5表	出土遺物一覧表	117 ~ 124

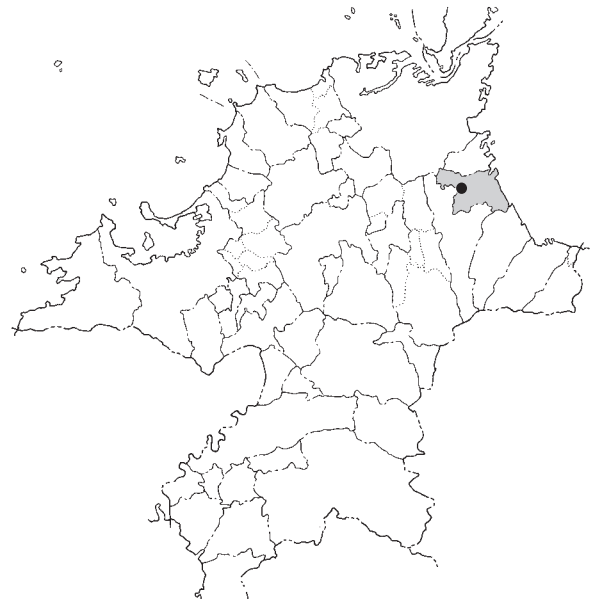


下山先生現地指導風景

I はじめに

1 調査に至る経緯

九州内では、九州縦貫自動車道を始め、大分道や長崎道、宮崎道と高速道路の整備が進められてきたが、東九州側は停滞しており南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。近年では各地に工場の誘致も進み、物流の効率化や更なる企業の進出、また農業・水産業・観光の面でもアクセス道路の整備は欠かすことが出来ず、東九州域の発展に期待がかけられている。このような中で計画された東九州自動車道は、福岡県北九州市から東九州の各県を結び、鹿児島県鹿児島市に至る総延長約436kmが予定されている。このうち福岡県内のルートは北九州市から築上郡上毛町に至る49.5kmで、北九州JCT～苅田北九州空港IC区間については2006年2月26日に開通している。



第1図 延永ヤヨミ園遺跡の位置

現在工事が進められている苅田北九州空港IC～県境については、2005年10月1日に道路公団の民営化組織として誕生した、西日本高速道路株式会社（ネクスコ西日本）九州支社が事業にあたっている。既存の椎田道路を利用するため、苅田町からみやこ町の椎田道路に接続する部分、ならびに築城IC、椎田ICの改修については福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して大分県へと続く部分については中津工事事務所がそれぞれ担当している。

東九州自動車道の整備計画から平成15年までのことについては、報告済みの『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－1－雨窪遺跡群』に詳しいため、そちらに譲ることとし、それ以降の主な経緯を記述していく。

平成14・15年度に現苅田北九州空港IC部分の発掘調査を実施して以降は、しばらくの間試掘調査のみを行っている。調整会議の中で用地取得が進んだ箇所から順次試掘確認調査を行っており、発掘調査に取りかかったのは平成19年度の馬場遺跡群・岩屋古墳群・延永ヤヨミ園遺跡である。それ以降は今年に至るまで、試掘確認調査と並行し、多くの発掘調査を実施してきている。本遺跡から苅田町上片島遺跡にいたる北側の低地部分については平成19年度に試掘調査を行い、山崎川から行橋ICにいたる南側部分については平成18～20年度にかけて試掘調査を行っている。試掘の結果、概ね河川堆積物が厚く堆積しており、遺跡は発見されていない。調査地点の丘陵部分については、当初より周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたことから確認調査は行わず、用地取得の状況を待って、平成19年12月から調査に入った。

また、東九州自動車道全体で、コストダウンを図る目的で、緑地化部分や橋桁の下部、将来車線として当面工事を行わない部分など、将来的に調査が可能と考えられる部分については、「限定協議範囲」として、調査対象から外すこととなった。苅田北九州空港IC～行橋IC間について



第2図 東九州自動車道路線図および調査地点位置図 (1/100,000)

第1表 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪			4000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13100	H16・20・21	1200				
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35300	H18・19	3900	H19・20			
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30600	H18・20・21					
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20～22	5000	H19			
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20～22		H19			
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21～23			
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21			
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23～	本冊	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21・22			
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20・21	31550	H22～			
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20・21	2900	H22			
27	福岡		行橋市流末	840	H23					遺跡なし
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20・22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19・22	16574	H22～			
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21			
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21・22	13888				H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20・21	4560	H21			
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42940	H20～22	2720+7000	H22・23			
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29491	H20～22	29491	H21～23			H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	砦見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町砦見	1132	H21	1132	H22			
39	福岡	砦見中園遺跡 砦見大塚古墳	京都郡みやこ町砦見	8218	H21・22	5918	H21～23			H22砦見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 ハッ重遺跡	京都郡みやこ町砦見・下原	45510	H19・20・21	22763	H20～22	H23～	3集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町砦見	5080	H21	3580	H21・22			
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21・22	26000	H22・23			一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21					

は平成18年、行橋IC～豊津IC間ならびに築上～県境間については平成20年に協議文書を交わしている（苅田北九州空港～豊津間は平成23年に再協議）。ただし、遺跡の内容を知る上で重要と考えられる部分については、協議の上で発掘調査を行っており、本書で報告を行う延永ヤヨミ園遺跡においても平成20年9月に「限定協議対象地の発掘調査」の依頼を行い、承諾を得た。

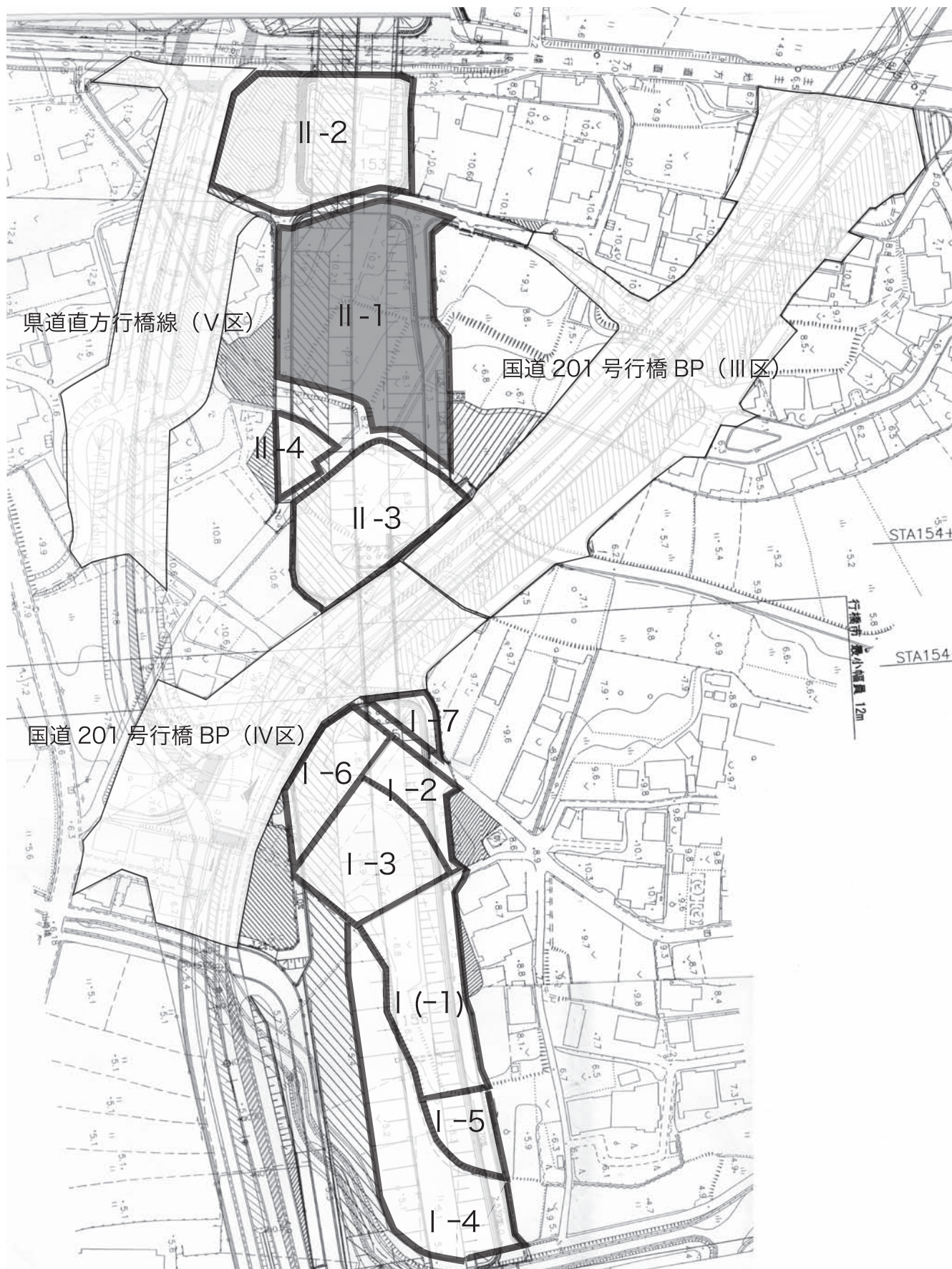
2 調査の経過

延永ヤヨミ園遺跡は、東九州自動車道建設に伴い国道201号行橋バイパスおよび県道直方行橋線の建設や改良等も同時に計画されており、3つの路線が、遺跡が包含される丘陵上で立体交差するため、調査面積は全事業あわせて約47,300㎡にも上る。しかも共用期間がほぼ同じであるため、同一遺跡内で3事業の調査が同時に行われたり、用地の進捗に合わせて複数の調査担当者が五月雨式に調査にかかるという状況になることもしばしばあった。そのため、他の遺跡で一般的に見られる1,2…次という方法ではなく、事業ごとに区分けし、調査を進めていった。東九州自動車道はⅠ・Ⅱ区、国道201号行橋バイパスはⅢ・Ⅳ区、県道直方行橋線はⅤ区としている（第5図・第2表）。また、用地取得の関係で一気に調査できないという事情もあり、各区の中をさらに枝番号をつけて細分した。東九州自動車道に関係するⅠ区は、1～7、Ⅱ区は1～4に細分している。このうち、本書で報告する範囲はⅡ－1区、3,400㎡である。以下に、報告する範囲の調査経過を纏める。

平成20年度の調査はⅡ区（Ⅱ－1区）を実施した。用地の関係で1筆分入れなかったため、面積は3,000㎡である。平成20年5月7日にバックホーを搬入し表土の掘削を開始した。反転する必要があるため、先に一部苗を置いていた用地を残して、西側半分を掘削した。12日には建機を搬入し、翌13日には作業員による人力掘削を開始した。地山が粘土質のため、降雨直後にはぬかるみ、暫く晴れるとひび割れて見えづらい条件であった。7月10日には、遺構の掘削がほぼ終了したため、1回目のラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。その後土層観察用畦の掘削などを行い、7月15日に再度バックホーを用いて反転を開始した。反転に際し、ハウス等の建機類を移動し、7月22日に再度人力による掘削を開始した。反転後の調査は東に向かって傾斜していたため、最深部は表土から1mほどの深さがあり、8月27日、9月25日夜半の大雨で東南部が水没した。そのため、8月29日および9月26日は作業のほとんどが横の溜池に水を抜く作業に追われることとなった。9月20日には7号土坑の所見について九州大学理学研究院地球惑星科学部門固体地球惑星科学の下山正一先生に現地指導を頂いた。10月22日によりやく2度目の空撮を行い、翌23日からバックホーによる埋め戻しを開始し、30日に終了した。埋め戻しに際しては、未だ用地が解決していない部分に堅穴住居がかかっていたため（17号堅穴住居跡）、土嚢をつめ

第2表 延永ヤヨミ園遺跡の調査区および期間

事業主体	調査担当者	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
東九州道	飛野	Ⅰ区	Ⅰ-1区、Ⅰ-3区、 Ⅰ-4区、Ⅰ-5区	Ⅰ-3区、Ⅰ-4区、 Ⅰ-1区	Ⅰ-4区南端西側、Ⅰ-2区、 Ⅰ-3区北端部、Ⅰ-7区	
	城門		Ⅱ区（Ⅱ-Ⅰ）	Ⅱ-2区	Ⅱ-2区残り、Ⅱ-1区、Ⅱ-3区	Ⅱ-4区
国道	進村		Ⅲ区	Ⅲ区(吉国715)、 Ⅳ区(谷)		
	下原			Ⅳ-A区	Ⅳ-A,B区	Ⅳ-B区
	城門				Ⅲ区(谷)	
	大庭					Ⅳ-B区 Ⅲ区(北端、H24まで予定)
県道	小澤・岡田			Ⅴ区(A,B)		
	宮地				Ⅴ-2区、Ⅴ-3区、Ⅴ-4区	
	飛野					Ⅴ-5区



第3図 延永ヤヨミ園遺跡調査区割 (1/1,200)

て埋め戻した。この年の普及啓発事業として、8月11日には作業員の子供（小学生）3名が夏休みを利用して体験発掘を行い、9月10日に地元の区長が小学生に説明をするための資料を作成、同15日には老人クラブに講演（飛野博文）を行った。また、交換留学でイギリスから作業員の家にホームステイに来ていた高校生に、行橋市の歴史と遺跡の説明を英語で書いた文章を渡し、現地にて説明した。

平成22年度の調査は用地の関係で20年度に入れなかったⅡ－1区（以下1区）の残り部分ならびにⅡ－3区（以下3区）を行った。農道をはさんで北側（1区）と南側（3区）で分け、ともに反転する必要があるため両方同時に剥いで調査を進めることとした。1区は、7月26日からバックホーを用い、奥の畑に行く道路を確保するため、南東隅から約150㎡を剥ぐこととし、2日間で終了した。3区は中央に比高差1.5mほどの段差があったので、それを境として下の段の表土剥ぎを8月17日から3日間行った。

1区は東に開口する谷の落ち際であり、谷に堆積した包含層の上面に井戸と考えられる土坑が認められたため、黒褐色土包含層の上面までバックホーによる掘削を行い、それ以下は人力により掘削することとした。なお、南端のみ深さを確認するためバックホーによって地山まで掘削した。まず、谷の落ち際ならびにそこから1mほど地山を出し、落ち際に遺構が無いかを確認することとした。包含層を掘削しながら検出作業をしている中で、8月5日に平行する2本の溝と固く締まった土や小礫、小土器片が認められた。そこで翌6日にサブトレンチによる観察を行い、下部から波板状遺構と考えられる痕跡が認められたため、道路状遺構を認識するにいたった。調査区の南側はトレンチ状にバックホーで地山まで掘削していたため、道路状遺構の一部は掘削してしまっていたことが悔やまれる。谷部東側の端では表土下2m以上にも達しており、包含層全てを掘削することは危険を伴うため、調査区中央に確認トレンチを設定した。道路状遺構以外の遺構掘削が終了した8月19日からは1区には数人の作業員を残し、3区の掘削を同時併行で進めていった。3区は南側の段差直下ではほとんど遺構が存在せず、北側でも中近世の遺構が主体であった。ただ、真夏の井戸掘削は想像以上に辛く、またこの年は猛暑であったため、掘削に多くの時間を要した。両方の調査が一段落ついた9月22日に空中写真の撮影を行い、同24日にバックホーで掘り残した包含層の掘削を行った。その後、1区の反転をしている間に、3区の切り合った下の遺構の掘削を行い、9月30日には再び1区に作業員を順次戻し、作業を継続した。10月6日にはバックホーによる1区の表土剥ぎが終了し、3区の反転作業に入った。10月21日には12号土坑から馬の骨が出土し、写真撮影後に実測をしていると、同日に13号土坑から埴と白磁、鏡が出土した。次の日から雨予報ということもあり、その日のうちにばたばたと実測し持ち帰った。10月28日には1区の掘削が一段落ついたため、3区の掘削にも入り再び同時併行で調査を行った。11月15日には1区のみ空中写真の撮影を行い、土層観察用畦等を掘削し、11月25日からは埋め戻しを始めた。3区は東隣を国道201号行橋バイパス建設に係り発掘していたこともあり、遺構認識が容易かと考えていたが、非常に密度が濃く、切り合いがひどかったため厳しい調査となった。12月16日に、切り合った上の遺構を掘削したため、空中写真を撮影しようとしたが小雪のため、翌17日に延期した。その後、切り合った下の遺構を掘削していき、翌2011年1月14日に終了した。

なお、2010年9月13日には早川泉氏、10月13日小田富士雄氏が来跡し、御指導頂いた。また、

10月19日行橋市長八並康一氏・教育長山田英俊氏など行橋市役所から来跡を得た。

3 調査・整理の組織

平成19(2007)年度から23(2011)年度の調査・報告に関わる関係者は次のとおりである。平成23年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管され、事業者との契約・整理報告等を行っている。

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
西日本高速株式会社九州支社					
支社長	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀(～9.30) 本間清輔 本間清輔(10.1～)	
西日本高速株式会社九州支社福岡工事事務所					
所長	竹國一也	竹國一也 福田美文(10.1～)	福田美文	福田美文	中藺明広
副所長(技術担当)	高尾英治	高尾英治	高尾英治(～9.30) 岩尾泉(8.1～)	岩尾泉(～9.30) 入江壮太(4.1～)	入江壮太 今井栄蔵(4.1～)
副所長(事務担当)	大内智博 塚本國弘(12.1～)	塚本國弘(～9.30) 原野安博(10.1～)	原野安博	原野安博	原野安博
総務課長	白川雄二	白川雄二	白川雄二(～9.30) 江口政秋(10.1～)	江口政秋	江口政秋
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之
工務課長	上川裕之(～6.30) 大久保良和(7.1～)	大久保良和	大久保良和(～9.30) 石塚純(10.1～)	石塚純	石塚純(～9.30) 塙山哲二(10.1～)
行橋北工事長	福島剛	福島剛(～1.31) 羽山広幸(2.1～)	羽山広幸	羽山広幸(～9.30) 税田賢二(10.1～)	税田賢二
福岡県教育庁総務部文化財保護課					
総括					
教育長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠	
教育次長	檜崎洋二郎	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	
文化財保護課長	磯村幸男	磯村幸男	平川昌弘	平川昌弘	
同副課長	佐々木隆彦	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋	
参事	新原正典 池邊元明 小池史哲	新原正典 池邊元明 小池史哲	伊崎俊秋 小池史哲	小池史哲	
課長補佐	中藺 宏	前原俊史	前原俊史	日高公德	
調査第一係長	小田和利	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳	
調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文	
地域担当	吉田東明	岸本 圭	小澤佳憲	宮地聡一郎	
庶務					
管理係長	井手優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫	
庶務担当	測上大輔	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔	
調査・整理作業					
参事補佐	濱田信也	濱田信也	新原正典	新原正典	
調査・整理担当	城門義廣	城門義廣	城門義廣	城門義廣	

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
九州歴史資料館					
総括					
館長					西谷 正
副館長					南里正美
総務室長					圓城寺紀子
文化財調査室長					飛野博文
文化財調査班長					小川泰樹
庶務					
庶務担当					近藤一崇
整理報告					
保存管理班長					加藤和歳
参事補佐					小池史哲
整理担当					城門義廣

なお、発掘調査に当たっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、行橋市および同教育委員会、同高速道路対策室の関係者の皆様より御協力を賜った。記して感謝いたします。

Ⅱ 位置と環境

地理的環境

延永ヤヨミ園遺跡は福岡県東部行橋市に位置している。行橋市は昭和29年10月10日に周辺の9町村が合併し誕生した市で、面積69.8km²、人口7万人強で、京築地域の中心都市である。東は周防灘に面しており、北は京都郡荏田町に接し、さらにカルスト地形の貫山・平尾台山系を以って北九州市に接している。西ならびに南は同一平野内でみやこ町、築上町と接している。周防灘には東西に流れる今川、長峽川、祓川が流れ込み、その本支流によって形成された小丘陵が平野内に多々見られ、丘陵上に遺跡が立地している。

行橋市周辺は3方を山に囲まれ「京都平野」と呼ばれている。平野内には段丘地形が発達しており、長井地区から稲童地区にかけて海岸沿いに標高10m前後の海岸段丘が見られる。河成段丘は、高来、入覚、みやこ町宮原まで標高50～90mの高位段丘があり、さらに盆地を取り囲むように3つの河川水系により形成された標高15～30mの中位段丘が見られる。さらに河川水系の扇状地では標高10～15mほどの低位段丘がみられ、特に今川周辺でよく観察される。一方で低地も平野東北部を中心として広く発達している。小波瀬川・長峽川流域では低湿な地帯が東西に広く分布しており、海岸から5km内陸部まで標高5m以下の地域であり、10m以下の地域も7～8km内陸まで広がっている。周辺では、ボーリング調査や遺跡の分布から縄文海進期や古墳時代には海が平野内部まで入り込んでいたと推測されている（第4図）。

歴史的環境

延永ヤヨミ園遺跡の所在する京都平野では旧石器時代から現在に至るまで、多くの遺跡が展開

している。

旧石器時代の遺跡としては行橋市渡築紫遺跡C区が挙げられる。後期旧石器の水晶・チャート・黒曜石など剥片が多く出土しており、石器製作所の想定がなされている。このほかにも行橋市鬼熊遺跡・同市柳井田早崎遺跡・同市稲童石並遺跡・荻田町富久遺跡・みやこ町徳永川の上遺跡でナイフ形石器などが出土している。

縄文時代になると、全国的に海進がおこり、延永地区周辺まで汀線が入り込んでいたと考えられている。早期段階には遺構は不明確ながら押型文土器が行橋市福丸遺跡や同市竹並遺跡で出土している。後期になるとみやこ町節丸遺跡で大規模集落が出現し、堅穴住居跡が30軒弱見つかっている。同じく後期には行橋市宝山遺跡やみやこ町中黒田遺跡、築上町山崎・石町遺跡など、広い範囲で当該期の遺跡が確認されている。

弥生時代の遺跡で最も古いものは行橋市長井遺跡で発見された小壺や夜臼式の甕で、これらは石棺墓群に伴ったといわれている。前期になると遺跡は飛躍的に増加し、竹並遺跡・行橋市前田山遺跡・同市下稗田遺跡など大規模な前期～中期の集落が出現する。荻田町葛川遺跡やみやこ町辻垣遺跡では、前期にあたる環濠が見つかり、東九州自動車道で調査を行った、行橋市矢留堂の前遺跡（未報告）でも同様に環濠が見つかり、後期になると、先述した前田山遺跡・下稗田遺跡・徳永川の上遺跡で墳墓群が確認されており、特に川の上遺跡では複数の舶載鏡が副葬されるなど多くの副葬品が出土している。このほか築上町安武深田遺跡では中期末～後期前半の集落が見つかり、鍛冶炉を持つ堅穴住居など特殊な遺構が発見されている。

古墳時代は全期間を通じて大形墳が築造されており、小規模墳も稠密に分布する。前期古墳としては、墳長110mで三角縁神獣鏡が10数枚出土したとされる荻田町石塚山古墳がある。ほかにも同町天疫神社古墳群や同町岩屋古墳群は同時期の墳墓群であり、行橋市ビワノクマ古墳では前期に属するとされる甲冑が出土している。

中期には周溝を有する墳長120mの荻田町御所山古墳があり、国指定史跡となっている。行橋市域では、墳長60mほどの帆立貝形古墳である稲童石並古墳が盟主墳と考えられ、この古墳が含まれる稲童古墳群では、石並古墳を中心として小古墳が集中する。

後期になると荻田町番塚古墳、みやこ町箕田丸山古墳、同町扇八幡古墳、同町庄屋塚古墳、行橋市八雷古墳など中規模の前方後円墳が築造され、なかでも番塚古墳は主体部が未掘であったため、銅鏡のほか、武具・馬具・装身具・装飾品など多くの副葬品が出土している。終末期には国指定史跡のみやこ町綾塚古墳（円墳）、橘塚古墳（方墳）があり、それぞれ墳長41m・38～40mの大形墳である。旧京都郡には46×36mの長方形方墳で周溝・周堤をもつ甲塚方墳、旧仲津郡には直径29mの円形墳丘に二重の周溝をもつ彦徳甲塚古墳があり、それぞれ地域の最大規模の古墳である。また、竹並遺跡や前田山遺跡、渡築紫古墳群に代表されるような横穴墓群が各地で見られ、そのほかにも山際には終末期の古墳群が各所に造営される。

一方、古墳時代の集落跡としては、荻田町近衛ヶ丘遺跡、同町法正寺木ノ坪遺跡、竹並遺跡などで弥生時代終末～古墳時代前期の遺構が発見されている。後期の集落も行橋市福富小畑遺跡、同市寄原遺跡、同市赤ハゲ遺跡など各地で見つかっている。また、同じ東九州自動車道建設に伴い発掘調査を行ったみやこ町京ヶ辻遺跡では、居屋敷窯跡で焼いたと考えられる初期須恵器が多数出土している。



- 1 番塚古墳 2 近衛ヶ丘遺跡群 3 岩屋古墳群 4 葛川遺跡 5 御所山古墳 6 福丸古墳群 7 椿市廃寺 8 延永水取遺跡 9 ビワノクマ古墳
 10 吉国木実堂古墳 11 八雷古墳 12 前田山遺跡 13 金屋遺跡 14 下稗田遺跡 15 庄屋塚古墳 16 橘塚古墳 17 中黒田遺跡 18 綾塚古墳
 19 御所ヶ谷神籠石 20 馬ヶ岳城跡 21 大谷車堀遺跡 22 天生田大池遺跡 23 矢留堂ノ前遺跡 24 崎野遺跡 25 福富小畑遺跡 26 赤ハゲ遺跡
 27 柳井田早崎遺跡 28 福原長者原遺跡 29 竹並遺跡 30 鬼熊遺跡 31 彦徳甲塚古墳 32 甲塚方墳 33 豊前国府跡 34 豊前国分寺跡
 35 徳政瓦窯跡 36 京ヶ辻遺跡 37 些見樋ノ口遺跡 38 徳永川ノ上遺跡 39 カワラケ田遺跡 40 上坂廃寺 41 長井遺跡 42 辻垣ヲサル遺跡
 43 稲童古墳群 44 渡築紫遺跡

■ 延永ヤヨミ園遺跡

第4図 周辺遺跡分布図 (1/70,000)

古代になると、旧京都郡内に四天王寺式伽藍配置をもつ行橋市椿市廃寺が創建され、旧仲津郡内ではみやこ町木山廃寺、同町上坂廃寺、同町豊前国分寺が創建される。また、国府や国分寺に瓦を供給した築上町船迫瓦窯跡が注目される。

西側の山麓には国指定史跡である行橋市御所ヶ谷神籠石が作られる。約2,900mの列石と土塁線を有し、7箇所門が確認されており、中門は幅30m、高さ10m、西門は幅40m以上、高さ



第5図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

7mの規模であり、版築土塁に被覆される列石や前面の柱穴が確認されるなど構造の解明が進んでいる。また、役所関係としては行橋市国作地区の豊前国府跡をはじめとして、行橋市崎野遺跡では廂付きの掘立柱建物跡が検出され、郷程度を管理する有力者の居館や海運に伴う物資の集積施設と想定されている。また、行橋市福原長者原遺跡では現在東九州自動車道にかかる発掘調査において、1m以上の掘り形を持つ掘立柱建物跡とその周囲に回廊が検出されている。さらに、各地で官道も発見されており、行橋市天生田大池遺跡、同市天生田矢萩遺跡、同市大谷車堀遺跡、みやこ町些見樋ノ口遺跡で検出されているほか、東九州自動車道にかかり調査が行われた、みやこ町カワラケ田遺跡においても新たに官道跡が検出されている。他に、同じ交通関係として、行橋市延永水取遺跡では草野津と椿市を結ぶ運河である可能性が示唆される大溝が検出されている。

中世になると、「京都金屋（今井）鋳物師」がいたとされる行橋市金屋遺跡があり、浄喜寺に鋳

物師製作の梵鐘が残っている。このほかにも中世の区画溝が行橋市下稗田台ノ下遺跡など多くの遺跡で検出されている。また、視山、馬ヶ岳、松山、障子ヶ岳に城館跡が残り、蔵持山、等覚寺などで修験道関係の信仰遺跡が盛行するのもこの時期である。

以上のように、地域内で連綿と遺跡が見られる中で、特に古墳時代～古代においては旧豊前国の中でも多くの重要な遺跡が発見されており、国府が設置される下地となっていると言える。

参考文献

- 石松好雄・高橋章編 1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書 行橋市教育委員会
- 伊藤昌広編 2010『稲童豊後塚遺跡1』行橋市文化財調査報告書第34集 行橋市教育委員会
- 伊藤昌広・中原博編 2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第37集 行橋市教育委員会
- 小川秀樹編 2001『崎野遺跡』行橋市文化財調査報告書第28集 行橋市教育委員会
- 小川秀樹ほか編 1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第24集 行橋市教育委員会
- 小澤佳憲編 2010『福富小畑遺跡D地点』福岡県文化財調査報告書第228集 福岡県教育委員会
- 秦憲二編 2004『福富小畑遺跡B地点』福岡県文化財調査報告書第194集 福岡県教育委員会
- 末永弥義編 2000『些見樋ノ口遺跡』豊津町文化財調査報告書第22集 豊津町教育委員会
- 末永弥義編 2003『豊前国府跡御所地区』豊津町文化財調査報告書第30集 豊津町教育委員会
- 末永弥義ほか編 2010『みやこ町内遺跡等分布地図』みやこ町文化財調査報告書第6集 みやこ町教育委員会
- 千田昇 1997「歴史の背景としての自然」『豊津町史』上巻 豊津町・豊津町史編纂委員会
- 副島邦弘編 1993『辻垣ヲサマル遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
- 竹並遺跡調査会編 1979『竹並遺跡』寧楽社
- 飛野博文・小池史哲編 2000『寄原遺跡・長者原遺跡』福岡県文化財調査報告書第146集 福岡県教育委員会
- 飛野博文・小池史哲編 2001『農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書第159集 福岡県教育委員会
- 長嶺正秀編 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会
- 長嶺正秀編 2000『苅田町の文化遺産』苅田町文化財調査報告書第34集 苅田町教育委員会
- 長嶺正秀編 2010『苅田町歴史資料館特別展 豊前地方の遺宝 律令時代と豊前国』苅田町教育委員会
- 柳田康雄編 1994『辻垣畠田・長通遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会
- 行橋市史編纂委員会編 2004『行橋市史 上巻』行橋市
- 行橋市史編纂委員会編 2006『行橋市史 資料編：原始・古代』行橋市
- 吉村靖徳編 1999『天生田大池遺跡』福岡県文化財調査報告書第137集 福岡県教育委員会



第6図 調査区遺構配置図(1/300)

Ⅲ 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

延永やヨミ園遺跡は、現在の海岸線から約5km内陸に入った標高10m前後の低・中位段丘上に位置している。北側は小波瀬川、東・南は長峽川による低地が広がっている。丘陵は、中央が東に向かって開口している馬蹄形をしており、古墳時代においてはすぐそばまで海岸線が入っていたことが推定される。現在の地形も東九州道と国道201号が交差する部分で東に開けた谷地形が見て取れ、北側は広い田園地帯が広がっている。現在は県道直方行橋線により丘陵が切られているものの、本来はピワノクマ古墳を含み長尾方面まで続く丘陵地帯の東端にあたると考えられる。また、丘陵の東側先端には吉国木実堂古墳が現存している。調査区内の堆積土は、地山が橙色土を呈しており、遺構の埋土は概ね黒褐色土である。

遺構および遺物は、概ね弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代、中世の4時期に分かれている。主要な遺構については、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期は竪穴住居跡、井戸など、古代は井戸を含む土坑、道路状遺構など、中世は井戸・溝などが検出されている。

竪穴住居跡はⅡ－1区で26 + α 軒あり、6～7割程度は古墳時代後期に属している。竪穴住居跡は北側の標高が高いほうに行くに従い、切り合いが激しくなり、Ⅱ－2区などは遺構面がほぼ真っ黒な状態であった。

古代の道路状遺構は東西方向に走っており、幅3.6m、長さおよそ20mが検出された。下部には帯状硬化、波板状遺構が見られ、古墳時代に埋没したと考えられる遺物包含層の上面にも硬化面が確認された。

調査区は先に述べたように、現道や水路など掘削できない部分で分けしている。また、道路建設の施工工程や用地の解決状況の都合から、各区でまとめて調査できなかったために、各区内で必要に応じて、着手順に1・2・3・・・と枝番号を付加して細分化している。

2 遺構と遺物

報告概要

本遺跡は遺構・遺物ともに多量なため、現在のところ4冊にわけて刊行する予定である。1冊目（本書）では、国土交通省の国道201号より北側のⅡ区のうち、Ⅱ－1区を、2・4冊目では国道の南側Ⅰ区、3冊目では、Ⅱ－2区ならびに3・4区を報告する予定である。また、自然科学分析や整理の中で新たに判明した所見などは、本書で報告した遺構であっても、後の報告で触れることとする。

また、本調査では、Ⅱ－1区に着手した時点で、Ⅱ区との混同を避けるため、竪穴住居や土坑、ピットなどの番号を1000番台から1001、1002・・・と付していった。しかしながら、同一区内であるため本報告では、より煩雑になるピットを除き、通し番号を振りなおしている（第3表）。

(1) 竪穴住居跡

今回報告する大部分は、20年度に調査を行った部分であり、削平が著しいためか比較的竪穴住居跡は少なかった。ただし、北側、Ⅱ－2区に近い部分は地山が見えないほど黒色土（住居埋土）

第3表 遺構対照表

区	調査番号	報告番号	備考
Ⅱ	住居1	住居1	
Ⅱ	住居2	住居2	
Ⅱ	住居3	住居3	
Ⅱ	住居4	住居4	
Ⅱ	住居5	住居5	
Ⅱ	住居6	住居6	
Ⅱ	住居7	住居7	
Ⅱ	住居8	住居8	
Ⅱ	住居9	住居9	
Ⅱ	住居10	住居10	
Ⅱ	住居11	住居11	
Ⅱ	住居12	住居12	
Ⅱ	住居13	住居13	
Ⅱ	住居14	住居14	
Ⅱ	住居15	住居15	
Ⅱ	住居16	住居16	
Ⅱ	住居17	住居17	
Ⅱ	住居18	住居18	
Ⅱ	住居19	住居19	
Ⅱ	住居20	住居20	
Ⅱ	住居21	住居21	
Ⅱ	住居22	住居22	
Ⅱ	住居23	住居23	
Ⅱ	住居20	住居24	
Ⅱ	住居20	住居25	
Ⅱ-1	住居1001	住居26	
Ⅱ-1	住居1002	住居27	
Ⅱ-1	住居1003	住居28	
Ⅱ	土坑1	土坑1	
Ⅱ	土坑2	土坑2	
Ⅱ	土坑3	土坑3	
Ⅱ	土坑4	土坑4	
Ⅱ	土坑5	土坑5	
Ⅱ	土坑6	土坑6	
Ⅱ	土坑7	土坑7	
Ⅱ-1	土坑1001	土坑8	井戸
Ⅱ-1	土坑1002	土坑9	井戸
Ⅱ-1	土坑1003	土坑10	井戸
Ⅱ-1	土坑1004	土坑11	井戸
Ⅱ-1	土坑1005	土坑12	井戸
Ⅱ-1	土坑1006	土坑13	土壙墓
Ⅱ-1	土坑1007	土坑14	
Ⅱ-1	土坑1008	土坑15	
Ⅱ-1	土坑1009	土坑16	
Ⅱ-1	土坑1010	土坑17	
Ⅱ-1	土坑1011	土坑18	
Ⅱ-1	土坑1012	土坑19	
Ⅱ-1	土坑1013	土坑20	
Ⅱ-1	土坑1014	土坑21	
Ⅱ-1	P1007	土坑22	井戸
Ⅱ-1	井戸1	土坑23	井戸
Ⅱ-1	井戸2	土坑24	井戸

区	調査番号	報告番号	備考
Ⅱ	溝1	溝1	
Ⅱ	溝2	溝2	
Ⅱ	溝3	溝3	
Ⅱ	溝4	溝4	
Ⅱ	溝5	溝5	
Ⅱ	溝6	溝6	
Ⅱ	溝7	溝7	
Ⅱ	溝8	溝8	
Ⅱ	溝9	溝9	
Ⅱ	溝10	溝10	
Ⅱ	溝11	溝8	溝8と同一遺構
Ⅱ	溝12	溝6	溝6と同一遺構
Ⅱ	溝13	溝13	
Ⅱ	溝14	溝14	
Ⅱ	溝15	溝15	
Ⅱ	溝16	溝16	
Ⅱ	溝17	欠番	
Ⅱ	溝18	溝18	
Ⅱ	溝19	溝19	
Ⅱ	溝20	溝20	
Ⅱ	溝21	溝21	
Ⅱ	溝22	欠番	
Ⅱ	溝23	溝23	
Ⅱ	溝24	溝24	
Ⅱ	溝25	溝25	
Ⅱ	溝26	溝26	
Ⅱ	溝27	溝27	
Ⅱ	溝28	溝28	
Ⅱ	溝29	溝29	
Ⅱ	溝30	溝30	
Ⅱ	溝31	溝31	
Ⅱ	溝32	溝32	
Ⅱ	溝33	溝33	
Ⅱ	溝34	SX07	住居の壁溝か
Ⅱ-1	溝1001	溝34	
Ⅱ-1	溝1002	溝35	
Ⅱ-1	溝1003	溝36	
Ⅱ-1	溝1004	溝37	
Ⅱ-1	溝1005	溝38	
Ⅱ-1	溝1006	溝25	溝25と同一遺構
Ⅱ	SX01	SX01	
Ⅱ	SX02	SX02	住居跡の可能性
Ⅱ	SX03	SX03	
Ⅱ	SX04	SX04	
Ⅱ	SX05	SX05	住居跡の可能性
Ⅱ	SX06	SX06	住居跡の可能性
Ⅱ	SX07	SX07	住居跡の可能性。2軒分?
Ⅱ	SX08	SX08	住居跡の可能性
Ⅱ-1	SX01	SX09	住居跡の可能性
Ⅱ	掘立柱建物1	掘立柱建物1	
Ⅱ-1	道路状遺構	道路状遺構	

が認められた。1区の調査段階では、この土を上面の包含層が残っているものと考え、一段ずつ下げて行った。しかし、市道を挟んで北側のⅡ-2区の調査にかかった段階で、一面の黒色土は、ほぼ弥生時代終末～古墳時代初頭と古墳時代後期の竪穴住居跡が切りあっているものであることが判明した。このため本調査区においては必ずしも十分な住居検出を行っておらず、本来は、より多くの竪穴住居跡が存在したものと考えられる。このことを念頭に置き、調査段階で不明遺構としているものも竪穴住居跡の可能性があるものについては一緒に報告し、そのつど指摘していくこととする。

1号竪穴住居跡(図版5、第7図)

調査区南西側に位置しており、1号溝に切られる。住居規模は東西540cm、南北520cm、深さ10～20cmの正方形住居であり、住居中央には炉が検出された。覆土はにぶい黄褐色土であり、P2～5が支柱穴となる。

出土土器(第8図)

1は壺で、口縁部が遺存している。口唇部には6mm間隔で縦方向のキザミが全面に付される。全体的に磨滅するが、ナデを施す。2は甕である。全体的に磨滅が激しいが、外面にはハケを施し、内面は不明である。屋内土坑出土。3は器台である。口縁部がわずかに欠損しており、脚部に2ヶ所穿孔を施す。脚部端がやや黒変しており、調整は磨滅のため不明瞭だがナデと考えられる。4は埴である。内面には黒斑が見られ、底部付近のみが遺存している。5は高坏である。坏部の屈曲部のみが遺存している。脚部との接合面で剥落しており、外面に黒斑が見られる。混入品か。

出土遺物から、古墳時代初頭の住居跡と考えられる。

2号竪穴住居跡(図版6、第7図)

調査区中央やや西よりに位置しており、6号溝に切られ、3号竪穴住居跡を切る。住居規模は南北390cm、東西250cm、深さ5cmの長方形住居である。中央部に炉と考えられる炭混じりの埋土が入ったピット検出された。覆土は暗褐色粘質土であり、P1・3が支柱穴、P4が屋内土坑と考えられる。

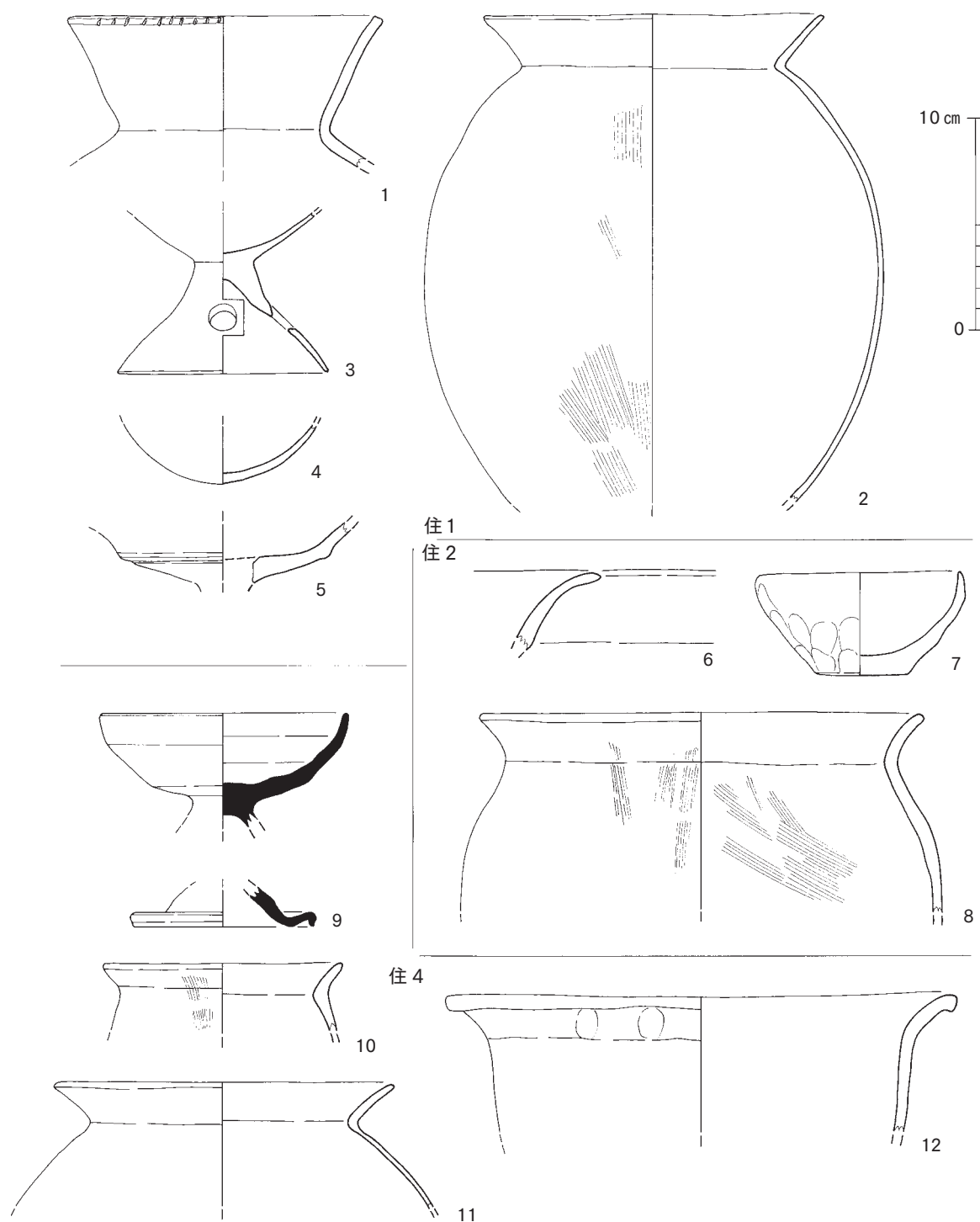
出土土器(図版36、第8図)

6は高坏で口縁端のみが遺存する。表面は磨滅しており、調整は不明である。7は鉢である。内外面ともにユビナデを施し、外面には指頭圧痕が残る。口唇部がやや内傾する。8は甕である。内外面ともに磨滅が著しいが、ハケの痕跡がわずかに残る。7・8ともに床面から3cmほど浮いた位置で出土した。

切り合いと出土遺物から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

4号竪穴住居跡(図版7、第7図)

調査区のほぼ中央に位置しており、2号溝に切られる。東側半分ほどは削平のために、残っていない。住居規模は東西300cm + α 、南北400cm、深さ10cmで正方形に近い住居になると考えられる。覆土は灰黄褐色粘質土で黒褐色の粒子を含む。P2～5が支柱穴となるか。その場合P-1は住居跡に伴わないものであろう。



第8図 1・2・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第8図)

9は須恵器の高坏である。坏部と脚部が明確に接合しないものの、同一個体と考えられる。内外面ともに磨滅気味ではあるが回転ナデを施す。P-1出土。10は小型の甕、11・12は甕である。全て磨滅のため調整が不明瞭である。12は外反する器形となっているが、頸部に指頭圧痕が残り、やや粗雑なつくりであることから、歪んでいる可能性がある。

出土遺物から、明確ではないものの古墳時代後期の住居跡か。

3・12号竪穴住居跡（図版6・7、第9図）

調査区の中央やや西よりに位置しており、2号竪穴住居跡、SX01に切られる。3号竪穴住居跡が12号竪穴住居跡を切る。住居規模は3号が東西530cm、南北480cm、深さ15cm、12号は東西 $420 + a$ cm、南北470cm、深さ15cmとともに長方形住居である。床面がほぼ同じであることもあり、12号の主柱穴は確認できなかった。3号竪穴住居跡の中央には炉跡、南辺に接して屋内土坑が検出された。覆土は上層：にぶい黄褐色土、下層：褐色土で、下層は貼床になる可能性もある。P1・2が主柱穴になると考えられる。

出土土器（第10・11・82図）

図化した土器は全て3号住居跡のものである。比較的多くの土器が出土しているが、概ね床面から若干浮いた状態で出土している。1・2は壺である。共に磨滅のために調整は不明である。1は長頸壺で、破片のために若干歪んでいる。3～8は甕である。3～5はやや小型の甕である。概ね表面が磨滅しており調整が不明瞭である。6は内外面共にハケの痕跡が残し、内面下半が黒変している。7は外面にタタキ、内面にハケの痕跡が残し、頸部内面には指頭圧痕が残る。8は内外面共にハケと指頭圧痕の痕跡が残る。9～13は高坏である。9・10は坏部、他は脚部が遺存している。10は内湾したまま口縁部に至り、脚との接合部分で剥落している。器台である可能性もある。11は中空の頸部、12・13は脚の裾部で、12・13には孔が穿たれる。12は下部で極端に屈曲し広く開くのに対し、13はハ字状に直線的に伸び、下部で緩やかに屈曲する。14は支脚である。欠損しているものの突起が一つ付いていたものと考えられる。15は小型の壺である。底部は平底で外面下部がやや黒変する。16・17は鉢で、17は脚付鉢である。17の内面は焼成不良で、外面に黒斑がみられる。18は甗である。内面には荒いハケ目残り、底部に直径5mmほどの孔が一つ穿たれる。19は手づくねのミニチュア土器である。第11図の1～5は屋内土坑出土の土器である。1・2は甕である。接合はしないものの同一個体と思われる。外面にはタタキ残り、内面は磨滅の為不明瞭だが指頭圧痕が残る。3は高坏である。外面にはハケ残り、脚部内面にはシボリの痕跡が残る。脚部はハ字状に伸び、下から2cmのところで屈曲する。4は埴ないしは鉢、5は鉢である。4は突起状の底部を持ち口縁部が窄まる。このほか石庖丁が出土している。

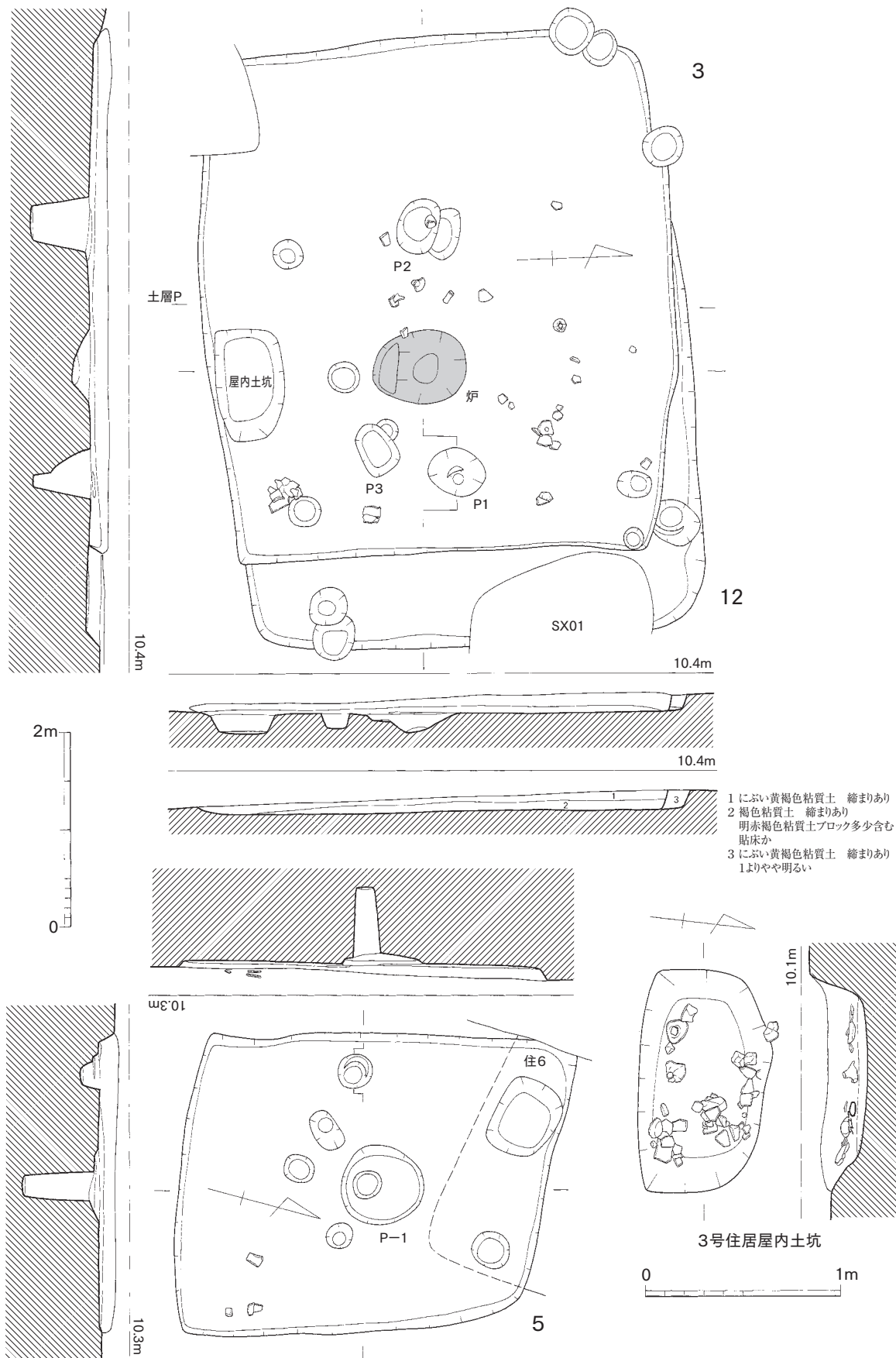
切り合いと出土遺物から3号住居跡については弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡と考えられる。12号住居跡については、図化できる資料がなかったものの、出土土器片から3号住居跡と同様な時期になるものと考えられる。

5号竪穴住居跡（第9図）

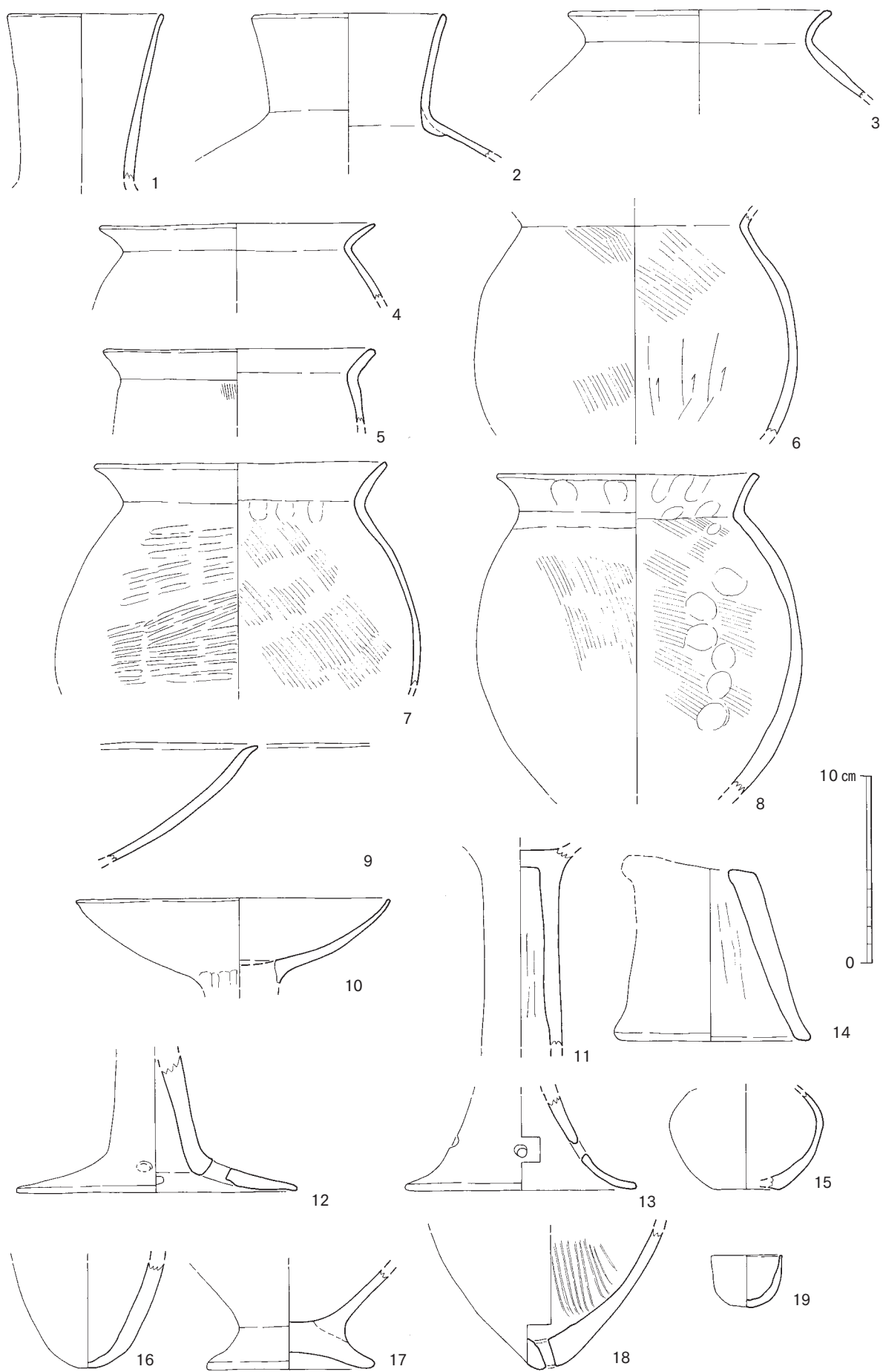
調査区のほぼ中央に位置し、住居群のほぼ中央に位置する。6・8・9号竪穴住居跡を切り、SX02に切られる。住居規模は南北380cm、東西310cm、深さ10cmで長方形住居である。覆土はにぶい黄褐色土で、中央に深い柱穴P-1があるが、主柱穴は明確には判別できなかった。

出土土器（第11図）

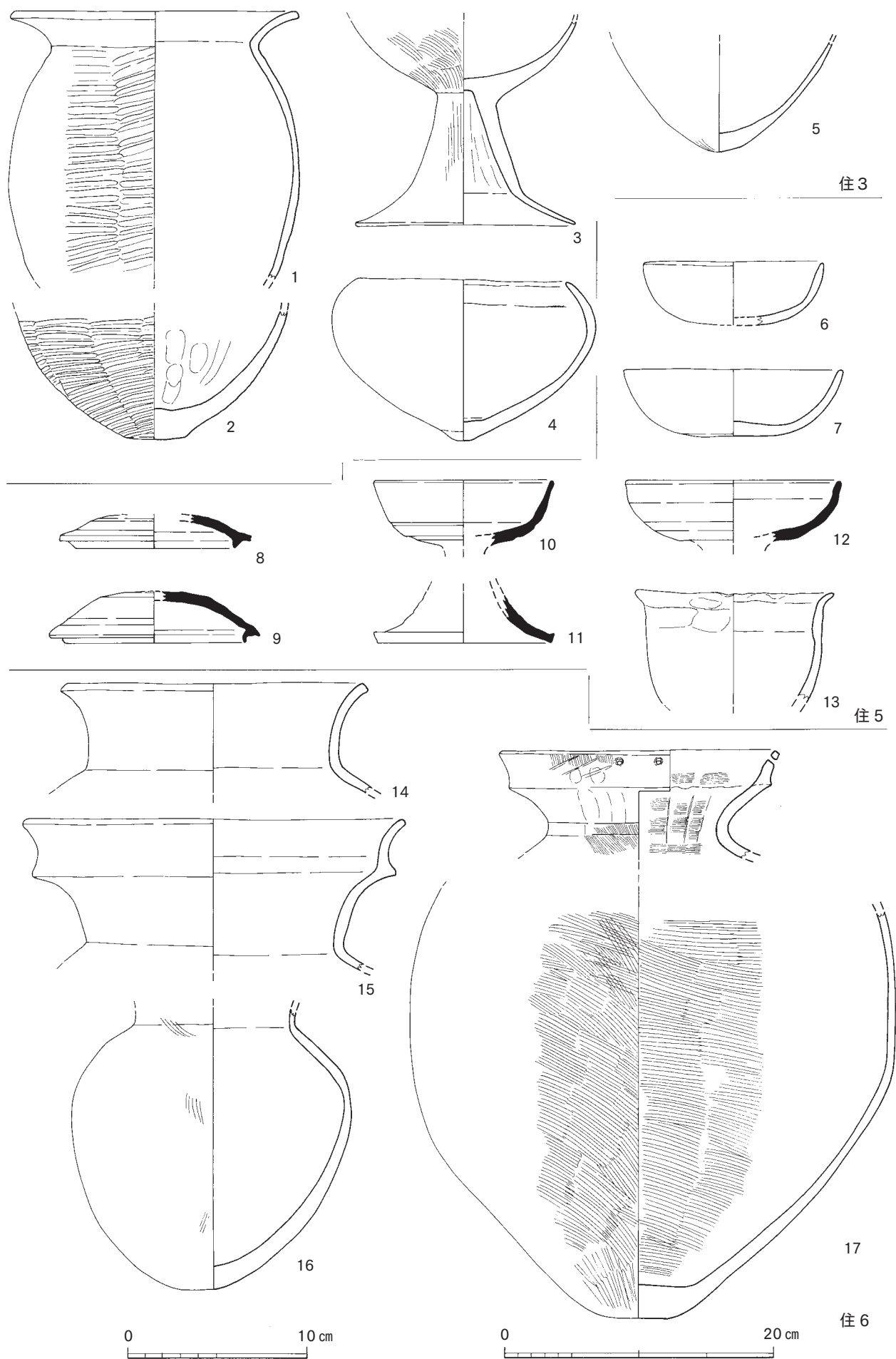
6・7は土師器の坏である。ともに磨滅のため調整は不明である。8・9は須恵器の坏蓋である。ともにかえりを持ち、宝珠形のつまみがつくものと考えられる。外面上部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを施す。10～12は須恵器の高坏である。内外面ともに回転ナデで10は坏下部に凹線を施す。13は鉢である。内外面ともに磨滅し、所々黒変している。



第9図 3・12・5号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)



第10图 3号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)



第11図 3・5・6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、17のみ1/4)

切り合いと出土遺物から古墳時代後期～末の住居跡と考えられる。

6号竪穴住居跡 (図版8、第12図)

調査区の北側に位置し、住居群の北側に位置する。5・7号竪穴住居跡およびSX02に切られる。住居規模は東西420cm、南北400cm、深さ20cmでほぼ正方形の住居である。中央に炉跡(P-5)、南側に屋内土坑(P-2)と考えられるピットが検出された。また、西側には幅100cmほどのベッド状遺構が認められ、その部分にのみ壁溝が検出された。ベッド状遺構は、地山を掘り残すことで作られ、壁溝の底部は、住居床面よりも高い。覆土は上層が暗灰黄色土等で、下層はにぶい黄褐色土等である。主柱穴は明確に判別できなかった。住居埋土から多量の土器が出土しているが、床面から出土しているものはほとんどない。

出土土器 (図版36、第11・13・14・82図)

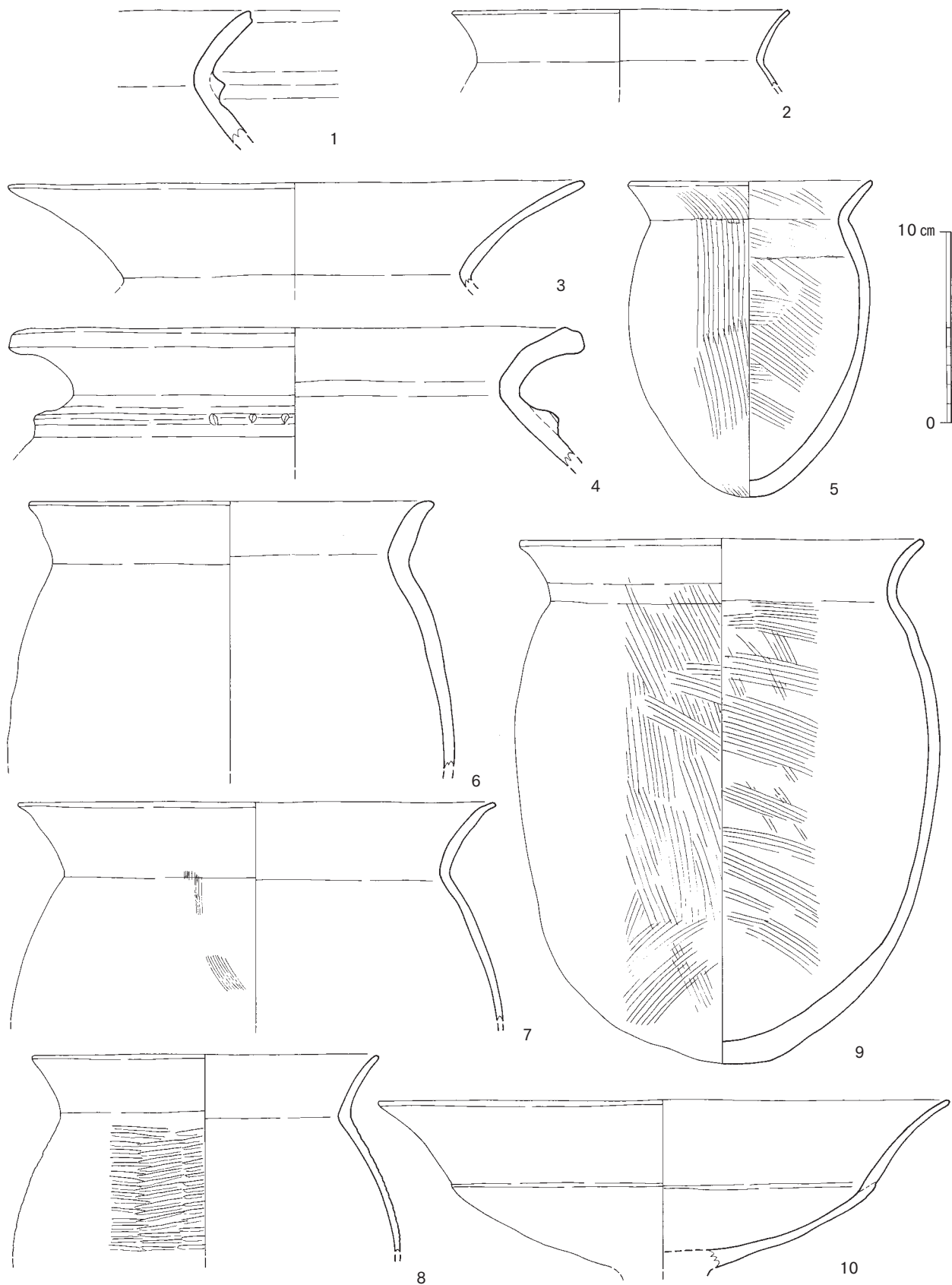
第11図の14～17は壺である。14は頸部が外反する。15は二重口縁を呈しており、屈曲は強く、口唇部は外反する。14・15ともに磨滅のため調整は不明である。16は胴部のみが遺存しているが、14と同じような器形になるものか。磨滅のため調整は不明瞭だが、外面にややハケ目が残る。17は大形の二重口縁壺である。明確に接合しないものの同一個体と考えられる。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に径4mmほどの孔を二つ穿つ。孔の内面側は二孔の内側に向かって紐ずれの痕跡があり、外側は若干ながら上方に向かって紐ずれの痕跡が認められる。このことから二孔に紐を通し、木製の蓋を口にかけていたものと考えられる。胴部最大径は約40cm、器高は残存高で38cm、底部は厚さ2.5cmで4cm程度の平底気味である。内外面ともにハケ目を施し、口縁部や頸部内面には工具痕が見られる。第13図の1～9は甕である。1・4は頸部に1条の突帯を付しており、4はその頂部にキザミを入れる。ともに磨滅のため調整は不明。3は口縁部が広く外反する。これも磨滅のため調整は不明である。5は小型の甕で、内外面にハケ目を施す。頸部の屈曲が緩やかで全体的に器壁が厚い。8は口縁部の調整は磨滅のため不明であるが、胴部にタタキの痕跡が残る。7・9は口縁が短く、外反する度合いも低い。9は内外面ともにハケ目を施す。5・6・9は古墳時代の混入品であろう。10は高坏である。接合部で段が付き、口縁が広く開く。第14図の1は器台であろうか。脚部端しか残っておらず脚付鉢の脚部になる可能性もある。外面にハケ目が残る。2は高坏である。直立で長い頸部から、明確な屈曲点を持たずにハ字状に開く。磨滅のため調整は不明だが、頸部内面に絞りの痕跡が若干残る。残りが悪いため不明確だが、緩やかな屈曲部付近に孔があったものと考えられる。3は脚付鉢である。比較的残りがよく、脚部端のみが欠損している。外面および口縁部内面にはハケ目を施し、胴部内面にはミガキを施す。胴部下半に黒斑が認められる。4～6は須恵器で、4は坏蓋、5・6は坏身である。4はやや扁平なつまみを持ち、外面上部は回転ヘラ削り、それ以外は回転ナデを施す。5は短いかえりを持ち、外面下部には回転ヘラ削り、内面底部には不定方向のナデ、それ以外には回転ナデを施す。6は口縁部のみが遺存しており、受け部から口縁が長く伸びる。須恵器は6,7世紀の混入品であろう。このほか住居跡の北側、床面から10cmほど浮いた地点から紡錘車が出土している。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末期の住居跡と考えられる。

調査区の北側に位置し、住居群の北端に位置する。6号堅穴住居跡を切る。住居規模は南北550cm、東西420cm、深さ20cmの長方形住居である。東側以外にはコ字状に高さ5cmほどのベッド状遺構が認められる。ベッド状遺構は、地山を掘り残すことで作られる。覆土は上層が灰黄褐色土で、下層は褐色土である。支柱穴はP-3・5と考えられる。住居埋土から多量の土器が出土しているが、床面から出土しているものはほとんどない。埋土からは黒曜石のチップも出土している。

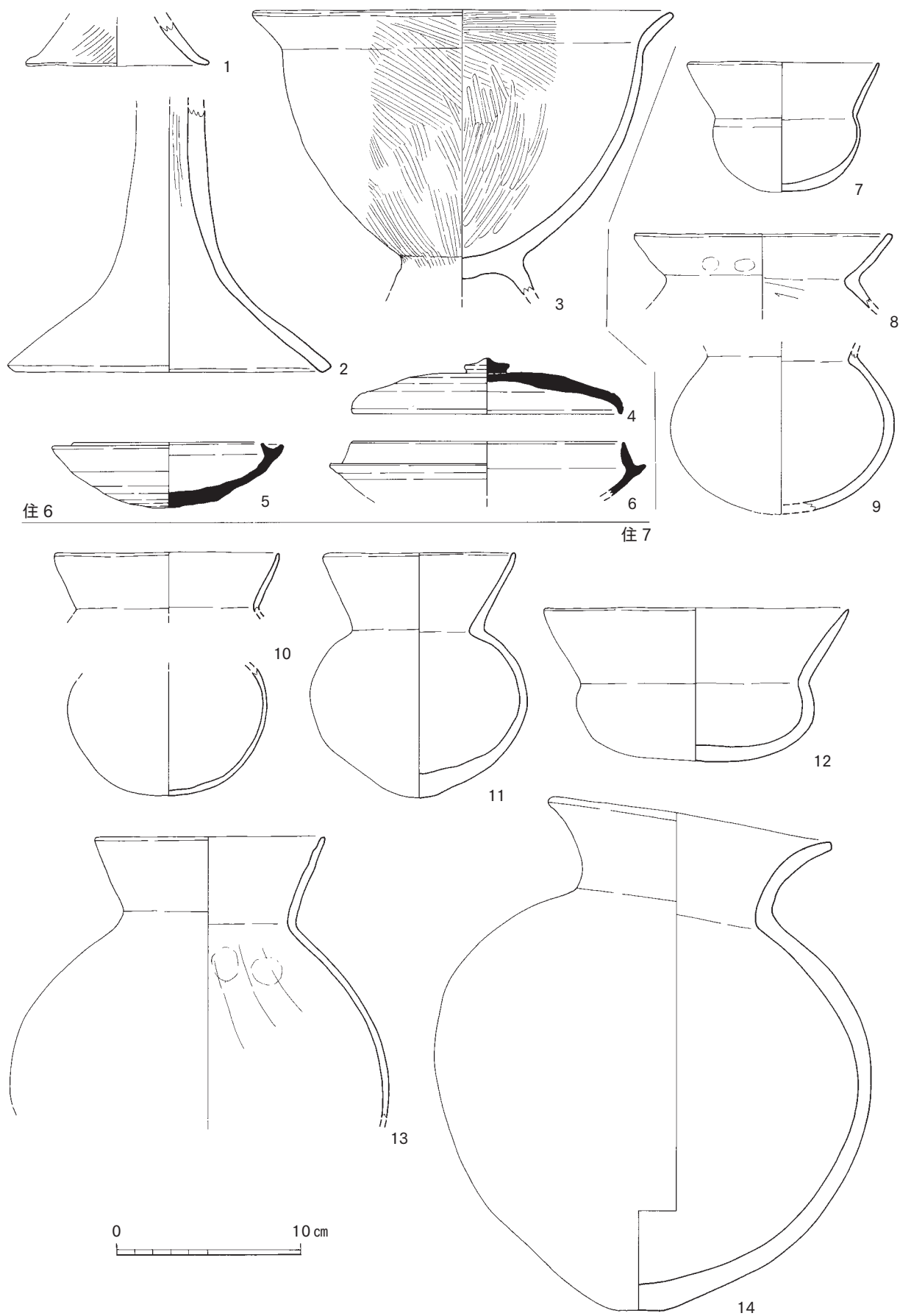
7・9～14・第15
図9は壺である。
7・9～11は小型
丸底壺でそれぞれ
口縁部がわずかに



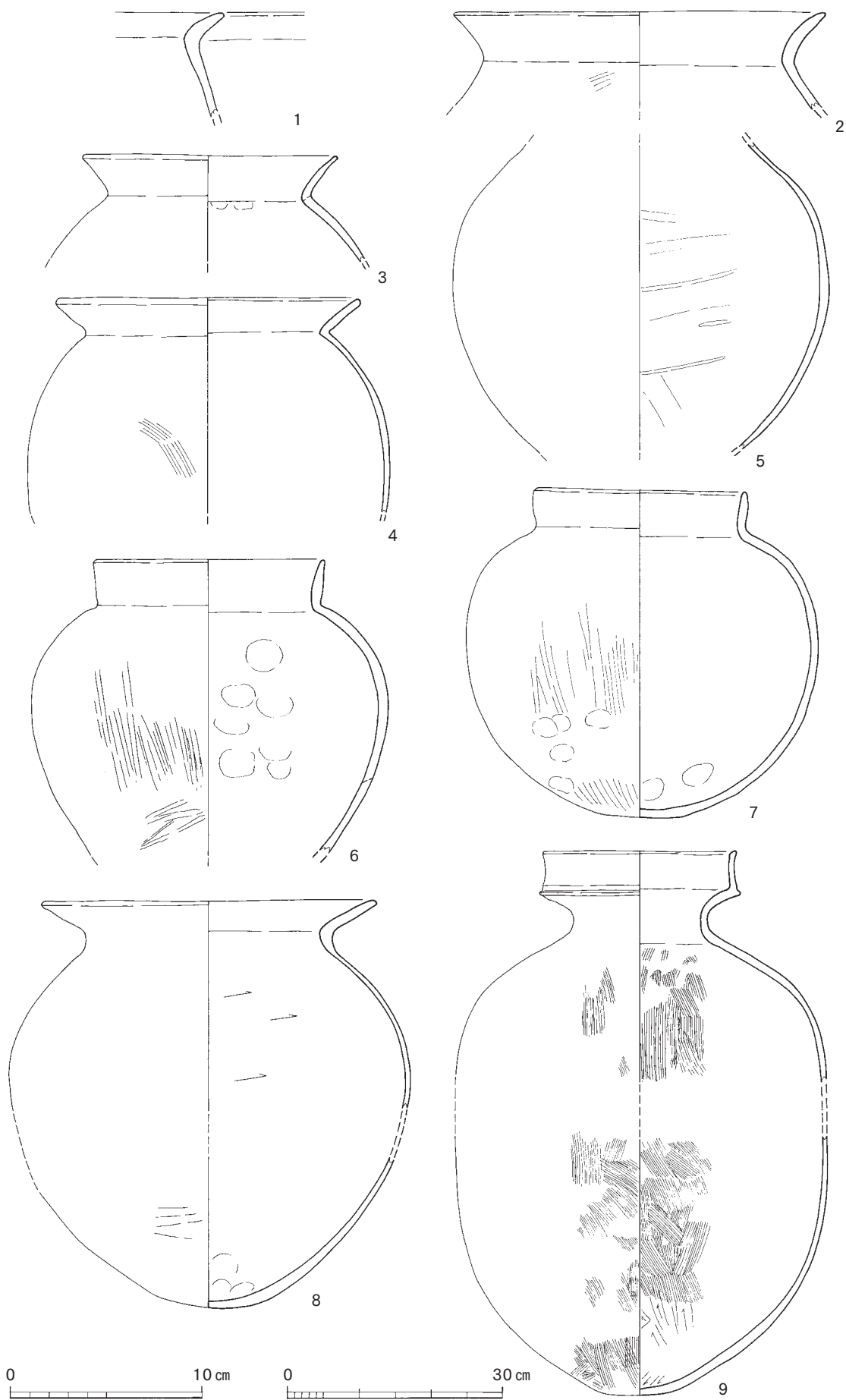


第13図 6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

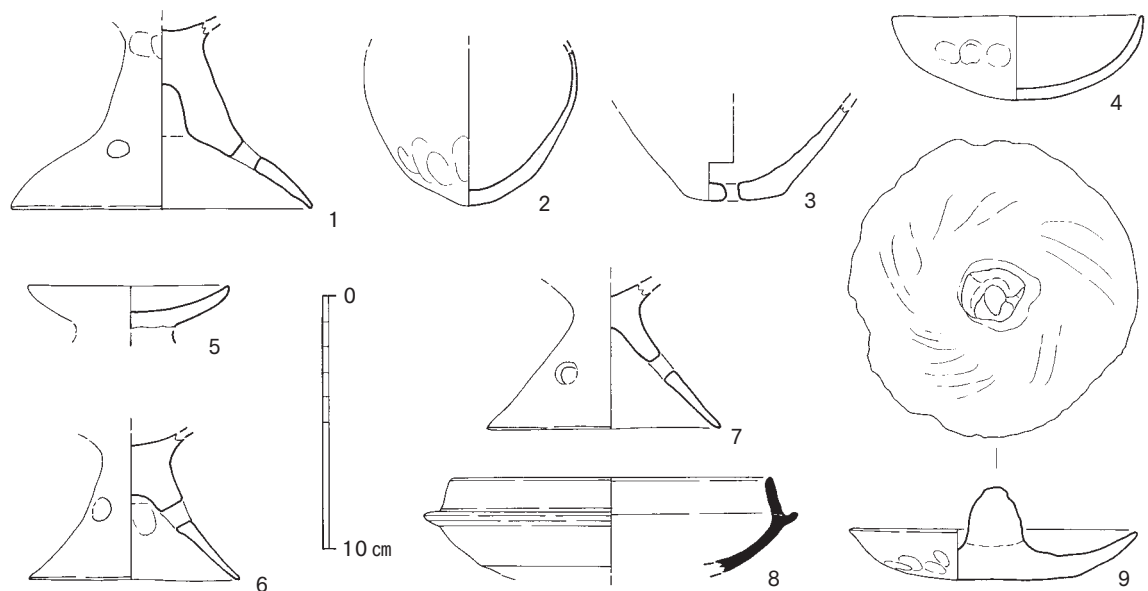
内傾する。器表面は全て磨滅しており調整は不明である。10は明確に接合しないものの同一個体と考えられる。12は扁平であるが、壺の一種と考えられる。口縁部はやや内傾し、底部は6～



第14図 6・7号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第15図 7号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3、9のみ1/8)



第16図 7号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

8cm程度の平底気味になる。もともと小型丸底壺を製作しようとしたものが、潰れて扁平になったか、口縁がやや開いてしまった鉢の可能性もある。13は口縁がほぼ直立し、肩部はなで肩形である。磨滅のため調整は不明瞭だが、内面の一部に指頭圧痕が残る。14は頸部が外反しており、底部は径3cmの平底である。しかし底と口縁部が著しく歪んでおり自立しない。底部付近には黒変・赤変が見られる。第15図9は大形の二重口縁壺で口縁部はほぼ直立する。胴部最大径は52cm、復元高は70cm程度である。底部は8.5cm程度の平底を呈する。内外面は磨滅のため不明瞭だが、ともにハケ目が残る。第14図8、第15図1～8は甕である。おおむね磨滅のため調整は不明瞭である。第14図8は中型の壺の口縁か。口縁部は内傾している。第15図1・2は口縁部の屈曲がゆるく、先端が肥厚する。古墳時代後期の混入品か。6・7は口縁部が直行し、胴部が球形に近くなるが、歪みが見られ、本来は若干外反するものと考えられる。7は径4cmほどの平底になり、外面には煤が付着する。ともに外面にはハケ目が残る。8は明確には接合しないものの同一個体と考えられる。磨滅しているが内面にはケズリの痕跡がわずかに認められ、底部外面付近には煤が付着する。第16図1は高坏である。脚部のみが遺存している。内面は明確に屈曲部を持つが、外面は緩やかな屈曲でやや膨らむ。孔が3ヶ所に穿たれる。磨滅のため調整は不明。2は鉢である。底部のみが遺存しており、底部外面には煤が付着する。3は甗である。底部のみだが3cmほどの平底を呈し、中央に径4mmの孔が穿たれる。4は埴である。外面にわずかに指頭圧痕が残る。5～7は器台である。5は坏部、6・7は脚部が遺存している。6・7は直線的に脚が伸び、孔が3ヶ所に穿たれる。6の内面下部には黒斑が認められる。8は須恵器の坏身である。受け部より直線的に口縁部が伸びる。外面底部付近は回転ヘラ削り、他は回転ナデを施す。9は土製模造鏡と考えられる。南側ベッドの脇で出土しており、床面からは1～2cmほど浮いた状態で出土した。径11.7cm、高さ3.5cmで、胎土や焼成の点で他の土器と差異はない。鈕部は径2.5cm、高さ2.8cm程度で手づくねで仕上げる。鏡部は坏状になっており、鏡面も4cm程のみが平らである。磨滅のため調整は不明瞭だが、内面にはシボリのような痕跡もしくは工具痕が認められ、外面には指頭圧痕がわずかに残る。上毛町(旧大平村)郷ヶ原遺跡で同じような大きさの土製模造鏡が出土しているが、その例は本例とは異なり鏡面がほぼ水平である。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡と考えられる。

8号竪穴住居跡 (図版9、第17図)

調査区のほぼ中央に位置し、住居群の東側に位置する。5・9号竪穴住居跡に切られ、10・15号竪穴住居跡を切る。住居規模は南北400 + α cm、東西310cm、深さ10cmの長方形住居である。南側は特に削平が著しく5cmほどしか残っていない。北側にカマド構築土と考えられる黄褐色砂や焼土が広がる。覆土は上層が灰黄褐色土で、下層は褐色土である。中央に深いP-4が検出され、P-5・6が支柱穴になるものと考えられる。

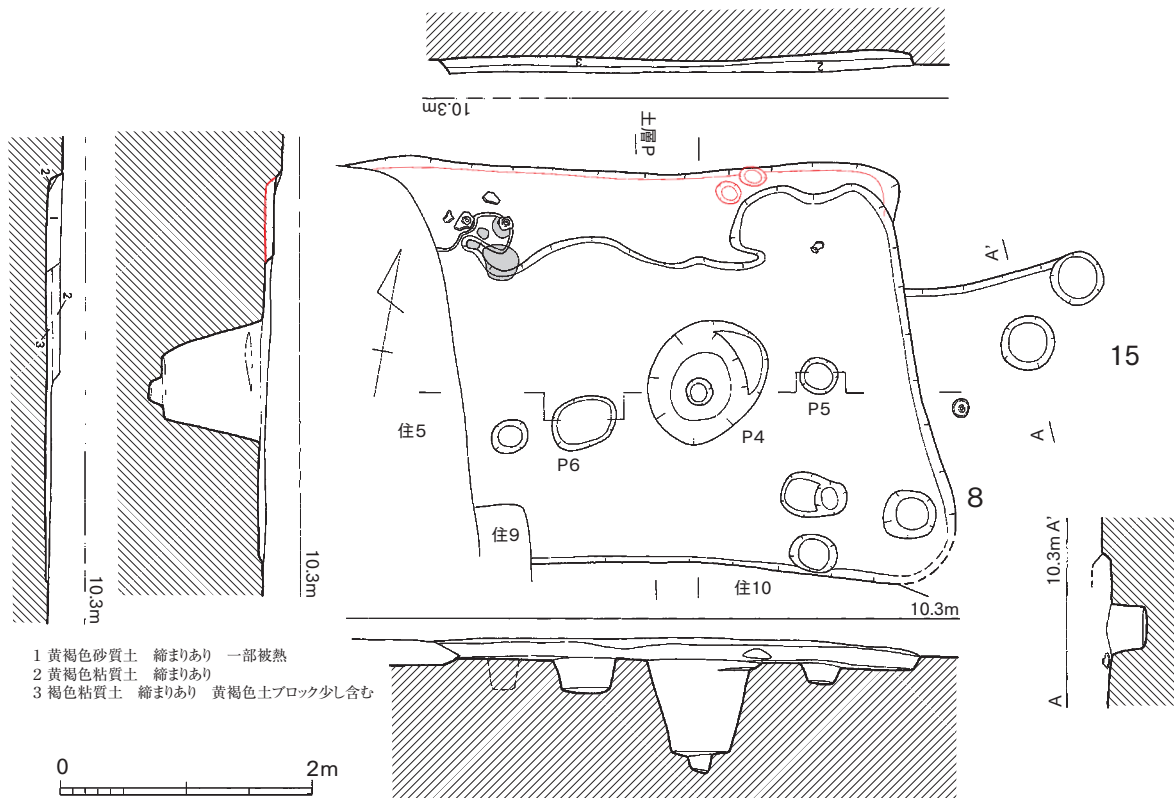
カマド (図版9、第17図)

住居の北側壁面に沿ってカマドを構築したと考えられる黄褐色砂質土が広く検出された。断ち割っても床面まで砂が入っており、完全に壊されたものと考えられる。住居の西よりには赤色土が認められ、被熱の痕跡があること、また、高坏や甕の破片が出土していることから、本来はこの位置にカマドが敷設されていたものと考えられる。

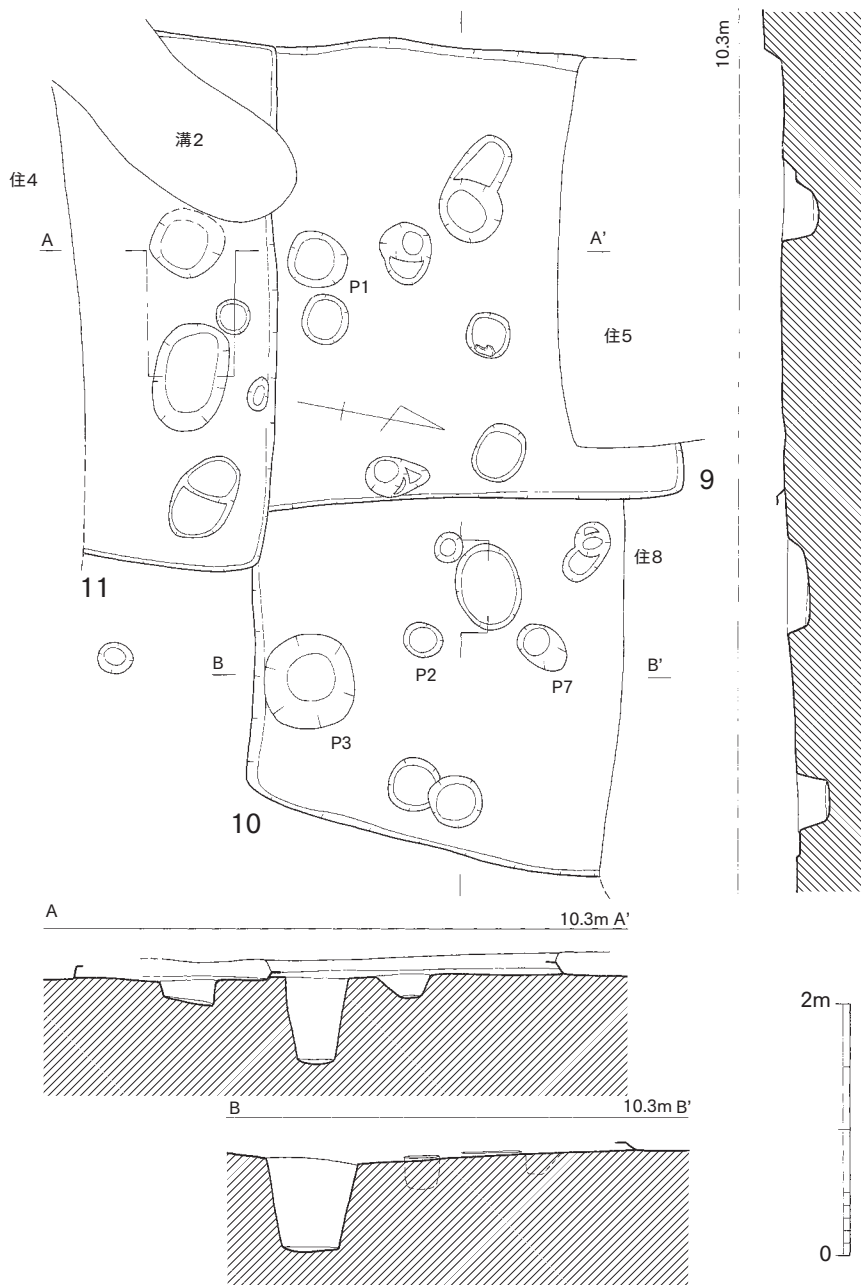
出土土器 (第20図)

1・2は甕である。頸部の屈曲は緩やかで、器壁は厚い。磨滅のために調整は不明瞭だが、2はわずかにハケ目の痕跡が残る。焼土付近の黄褐色砂直上から出土した。3は土師器、4・5は須恵器の高坏である。3は坏部が大きく開き、高さも4.5cm程度と浅い。調整は磨滅のため不明。焼土付近の黄褐色砂直上から出土した。4・5は同じような形態の高坏で、口径は11cmで、頸部径は3cm程である。坏部内面に不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。4は焼土付近の黄褐色砂直上から出土した。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期～末の住居跡と考えられる。



第17図 8・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第18図 9・10・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

15号竪穴住居跡 (第17図)

調査区のほぼ中央に位置し、住居群の東端に位置する。8号竪穴住居跡に切られる。著しく削平されており深さ3cmほどしか残っていない。住居群からまっすぐ褐色土が伸びていたため住居として取り扱った。床面近くから器台が出土しているのみで、支柱穴等は不明である。

出土土器 (第20図)

6は器台である。脚部のみが遺存しており、緩やかにハ字状に開く。やや磨滅するが内外面ともにハケ目を施し、3ヶ所に孔を穿つ。図化に耐えうるものはこれ1点のみだが、他に古墳時代後期に属すると考えられる土師器の破片も出土している。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡の可能性が高い。

9号竪穴住居跡 (第18図)

調査区のほぼ中央に位置し、住居群の中央に位置する。

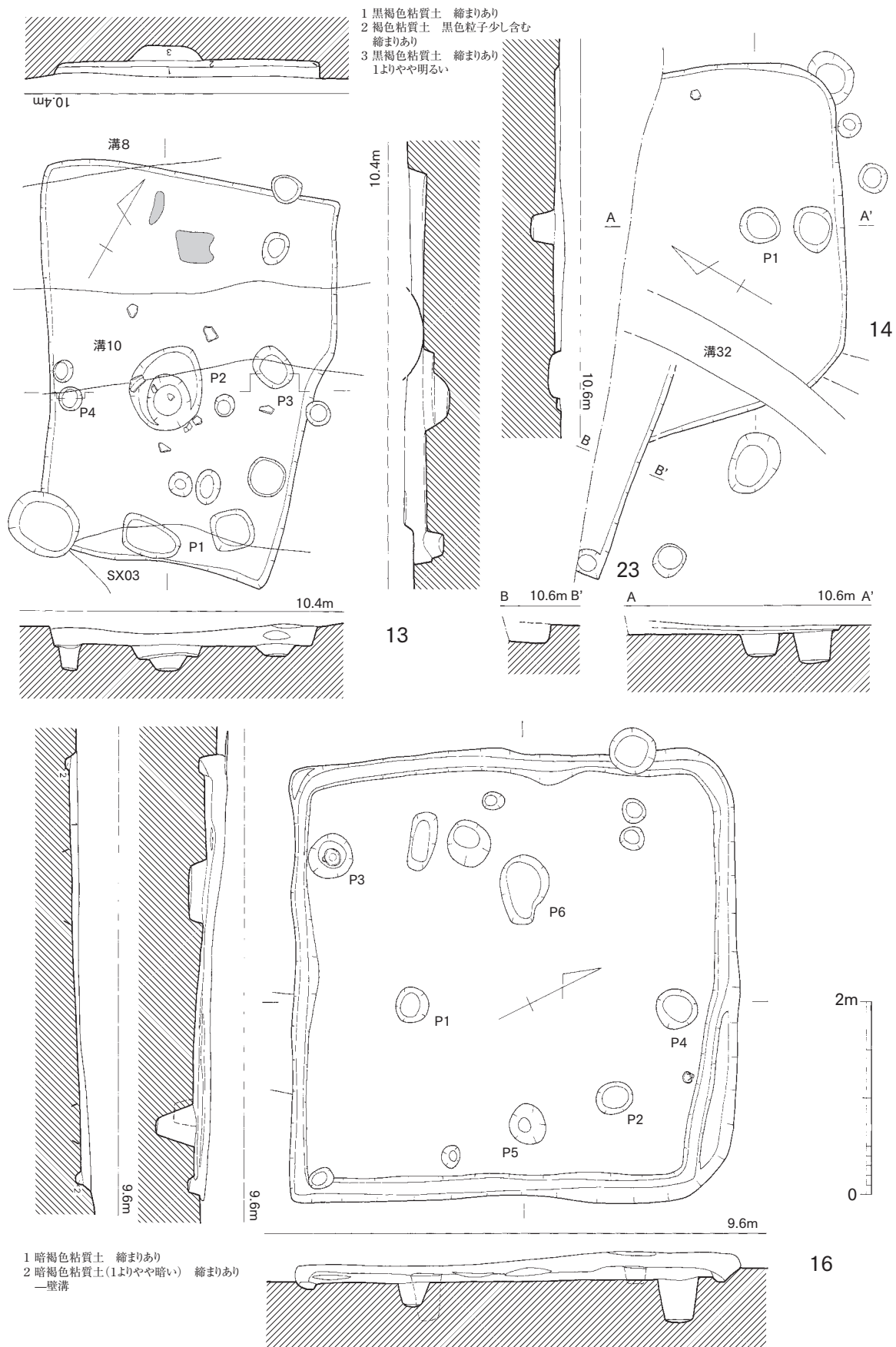
5・11号竪穴住居跡、2号溝に

切られ、8・10号住居跡を切る。住居規模は東西360cm、南北320cm、深さ10cm以下である。東側は削平されており深さ5cmほどしか残っていない。覆土は暗褐色粘質土である。支柱穴は認識できなかった。

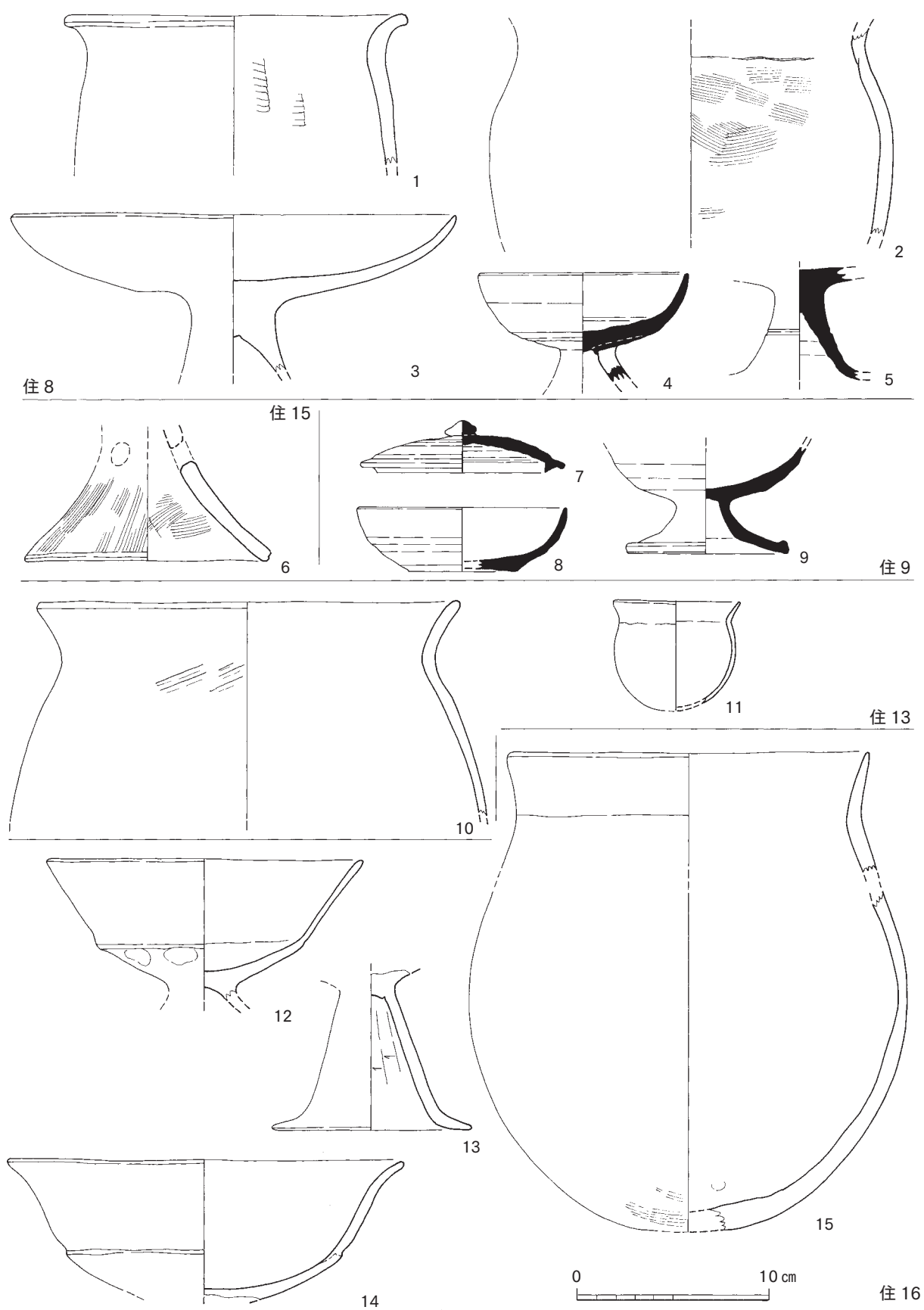
出土土器 (図版37、第20図)

7は須恵器の坏蓋である。高さ9mmほどの宝珠形のつまみがつく。外面上部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。外面に灰かぶりが見られる。8は須恵器の坏身である。底部にヘラ切り後ナデ、他は回転ナデを施す。9は須恵器の高坏である。口縁部の先端を欠損している。脚部は裾部で広がり端部を肥厚させる。磨滅のため調整は不明瞭だが、回転ナデか。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期～末の住居跡と考えられる。



第19図 13・14・23・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第20図 8・9・13・15・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

10号竪穴住居跡（第18図）

調査区のほぼ中央に位置し、住居群の東側に位置する。8・9・11号竪穴住居跡に切られる。住居規模は東西、南北ともに $290 + a$ cmである。著しく削平されており深さ3cmほどしか残っていない。覆土はにぶい黄褐色土である。南側壁際にあるP-3はその位置から屋内土坑である可能性がある。主柱穴は全体の大きさがわからず不明だが、P-2・7が候補となるか。

図化に耐えうる資料はなく、土師器ならびに須恵器の小片が出土している。

切り合いと出土土器片から、古墳時代後期の住居跡の可能性はある。

11号竪穴住居跡（第18図）

調査区のほぼ中央に位置し、住居群の南側に位置する。4号竪穴住居跡、2号溝に切られ、9・10号竪穴住居跡を切る。そのほとんどを4号竪穴住居跡に切られて、住居規模は東西420cm、深さ5cmである。覆土は暗褐色粘質土である。主柱穴は認識できなかった。

図化に耐えうる資料はなく、土師器ならびに須恵器の小片が出土している。

切り合いと出土土器片から、古墳時代後期～末の住居跡の可能性はある。

13号竪穴住居跡（図版10、第19図）

調査区の北側に位置し、8・10号溝に切られる。住居規模は南北400cm、東西280cm、深さ20cmの長方形住居である。南側のP-1は位置から屋内土坑と考えられ、北側には焼土が検出されている。覆土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒色粒子を少し含む褐色土粘質土である。中央には比較的大きなP-2が検出されているほかは殆どが浅いピットである。主柱穴はP-2～4付近になるか。

出土土器（第20・82・83図）

10は甕である。頸部の屈曲は緩く、なで肩形である。磨滅のため調整は不明瞭だが、外面に一部タタキの痕跡が残る。11は小型の鉢か。大きさは小さいが、比較的器形は整っており、器壁も薄いためミニチュア品ではない可能性が高い。磨滅のため調整は不明。このほか石庖丁、砥石が出土している。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

14・23号竪穴住居跡（第19図）

調査区の北西側に位置し、32号溝に切られ、33号溝を切る。23号竪穴住居跡が14号竪穴住居跡を切る。調査区端にかかるため、14号住居跡はその半分、23号はわずかに端を確認したのみである。住居規模は14号が東西370cm、南北 $240 + a$ cm、深さ7cm前後、23号が東西 $220 + a$ cm、南北 $40 + a$ cm、深さ15cm前後である。P-1が主柱穴の1つになるか。

図化に耐えうる資料はなく、14号住居跡からは土師器ならびに須恵器の小片が出土している。23号住居跡からは土師器の小片が出土している。

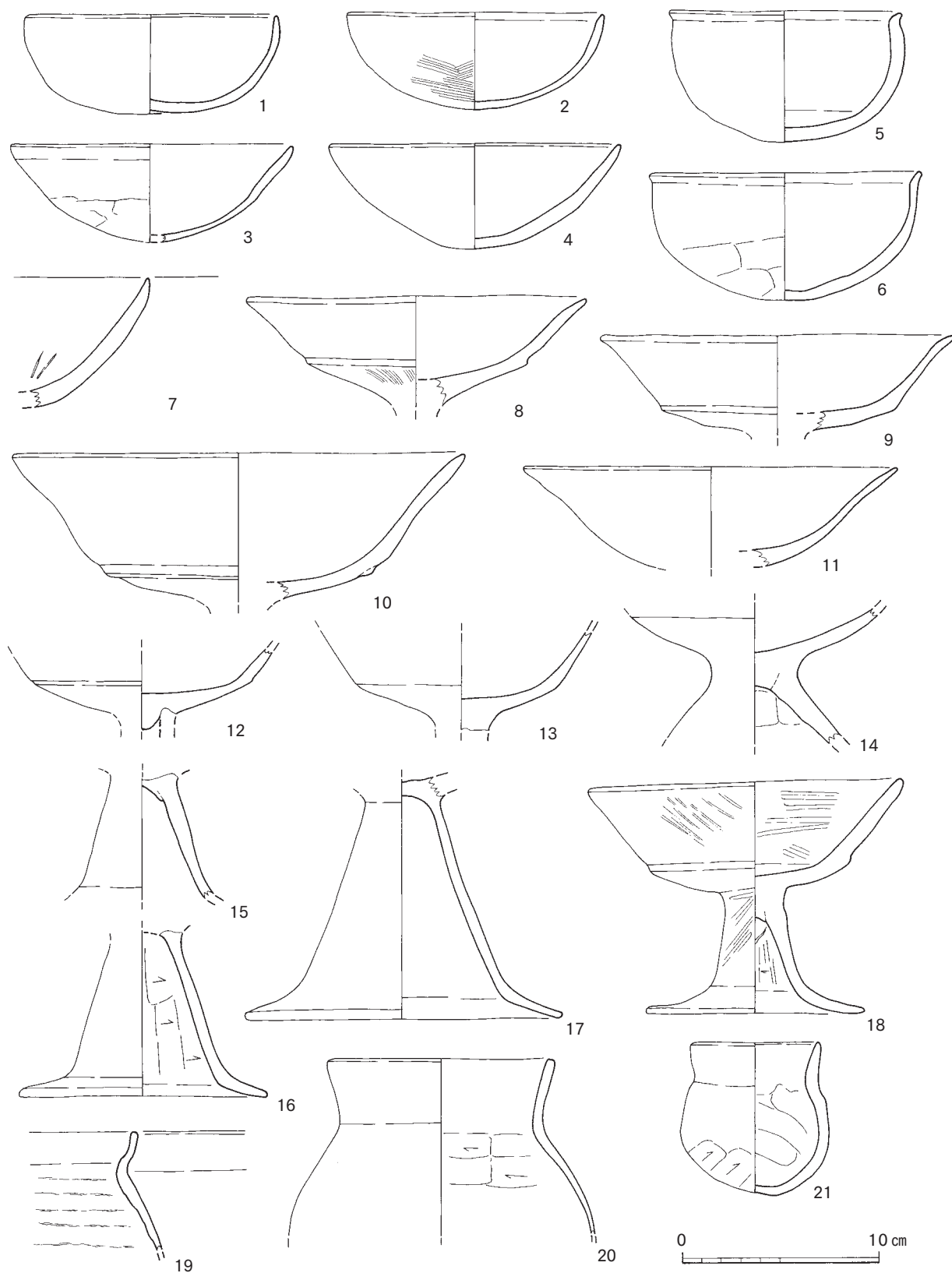
切り合いと出土土器片から、共に古墳時代後期の住居跡の可能性はある。



第21図 17号竪穴住居跡実測図 (1/60)

16号竪穴住居跡 (図版10、第19図)

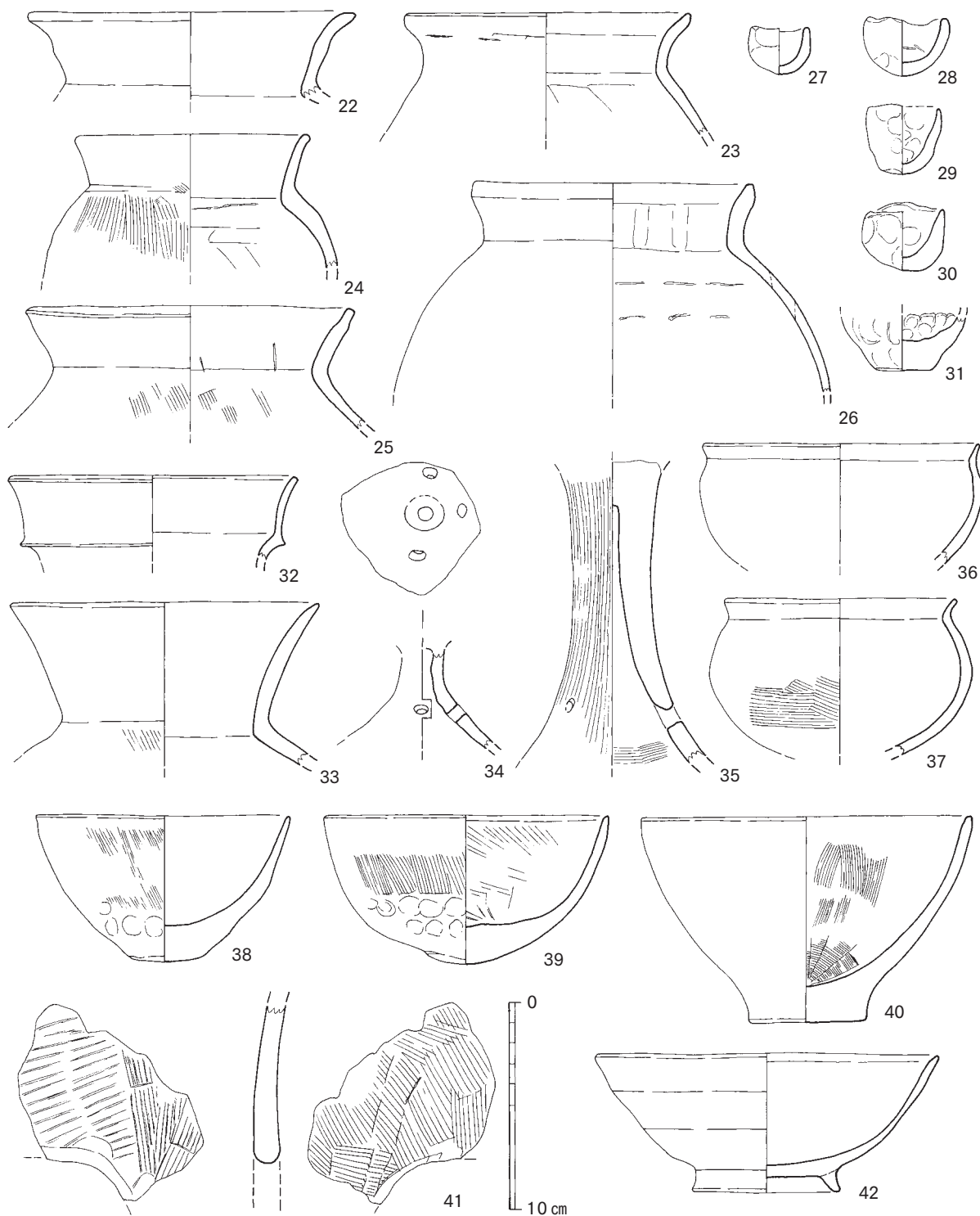
調査区の東側に位置する。付近に住居跡は確認できず、単独で検出された。住居規模は東西南北共に460cm、深さ10cmの正方形住居である。東側は削平のため5cmほどしか残っていない。4辺ともに壁溝がめぐるが、炉跡やカマドの痕跡は確認できなかった。覆土は暗褐色粘質土で壁溝にも同じ埋土が入る。P5・6が主柱穴になるか。



第22図 17号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

出土土器 (第20図)

12～14は高杯である。12・14は杯部のみ、13は脚部のみが遺存している。12は屈曲点が内外面共にはっきりしており、口縁の開きは直線的である。P-3出土。14は外面では屈曲点が明



第23図 17号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

確なものの、内面では緩やかになるように接合している。また、口縁部は緩やかに外反する。12・14ともに磨滅のため調整は不明である。13はハ字状に開いた脚部が裾付近で強く屈曲する。外面は磨滅のため調整不明だが、内面にはシボリの痕跡が残る。15は甕である。口縁部は緩やかに屈曲し、底部は器壁が厚い。磨滅のため調整は不明瞭だが、外面の底部付近にはハケの痕跡が、内面の底部付近には指頭圧痕の痕跡がそれぞれ残る。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

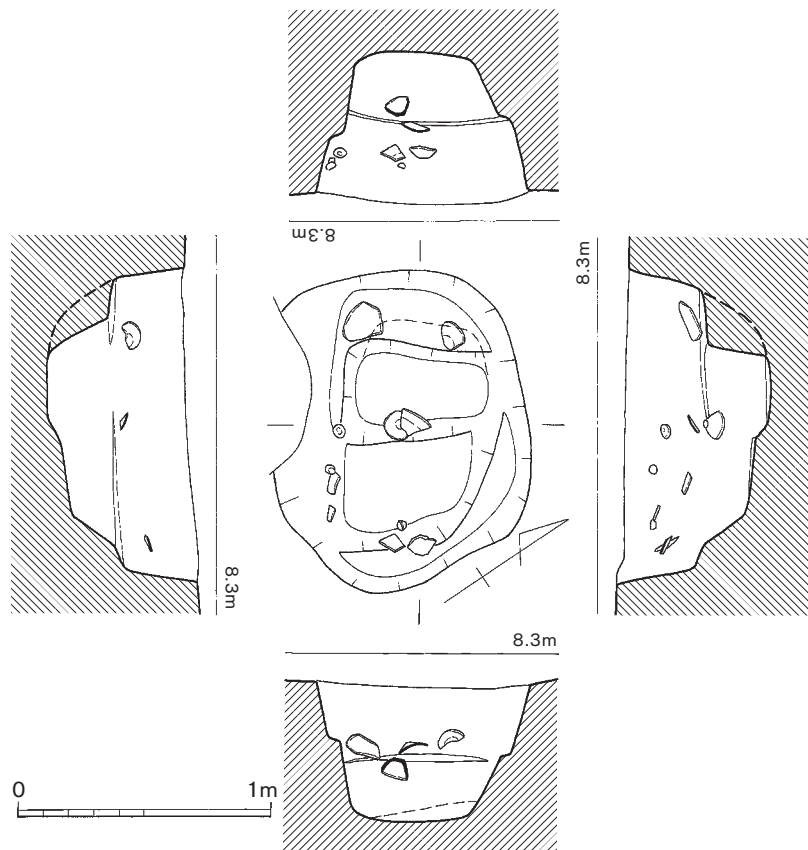
17号竪穴住居跡（図版2・11、第21図）

調査区西側中央部に位置しており、用地境にかかっていたため、H20年度に1/3を、H22年度に残りの調査を行っている。住居規模は南北730cm、東西650cm、深さ20～60cmと本調査区の中では最も大きく残りのよい住居跡である。東側の隅には焼土および木炭が検出され、その部分のみ壁溝が認められなかったことから、カマドが存在した可能性があるが、検出できなかった。中央にも焼土が検出され、炉跡と考えられる。また、床面の地山から5cmほど上面からピットならびに壁溝が掘り込まれており、貼り床があったものと考えられる。多くの土器が出土しているが、壁溝の上面から多くが出土している。覆土は上面が褐色粘質土、貼り床は灰褐色土が斑に混入する明褐色土、壁溝は灰褐色土である。P-5・9・24・25が主柱穴になるものと考えられる。

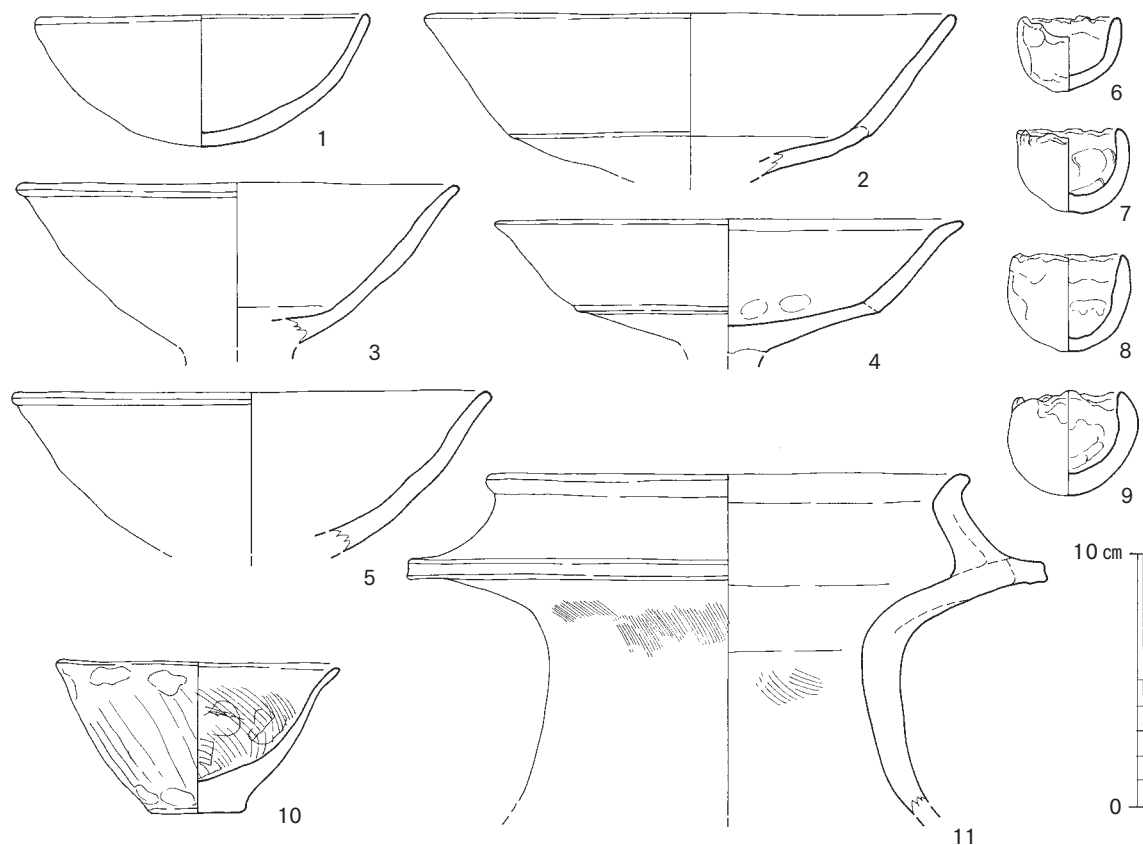
出土土器（図版37・38、第22・23・82・83図）

1～7は坏である。1・2は屈曲が強く、口縁部はほぼ直立になる。3・4・7は口縁が外反しやや開くタイプ、5・6は1・2と同じような屈曲を経た上で口唇部を外反させ、器高も高いタイプである。ほとんど磨滅しており調整は不明瞭だが2の外面にハケ目が、3・6の外面にケズリの痕跡がわずかに残る。8～18は高坏である。8・9・12・14・18の様に屈曲部分で接合し、明確な段を持つものと、10のように突帯様の粘土を貼り付け段を創出するもの、11・13のように明確な段を持たないものがある。脚部はハ字状に直線的に開き、下端部で強く屈曲する。また、12・14・18は充填法が認められ、特に12は脚部との接合部分で剥落する。8～11も残っていないものの、破損部分から同様の製作技法を用いたものと推測される。調整はおおむね磨滅のため不明瞭だが、8は外面下部にハケ目の痕跡、16は内面にケズリの痕跡が残る。18は残りがよく、外面に強いナデの痕跡、脚部内面にはシボリの痕

跡が残る。19～21は壺である。19は貼り床出土で口縁部が内湾する。内面に粘土の継ぎ目様の痕跡が7mmおきに認められる。20は口縁の屈曲が弱くなで肩形を呈する。内面にわずかにケズリの痕跡が残り、外面には黒斑が認められる。21は小型の壺で手づくね様である。外面にケズリ後ナデ、内面に強いナデを施す。22～26は甕である。どれも口縁の屈曲は強くなく口縁部がやや外反する。24は外面にハケ、内面にケズリ、25は内外面ともにハケを施す。また

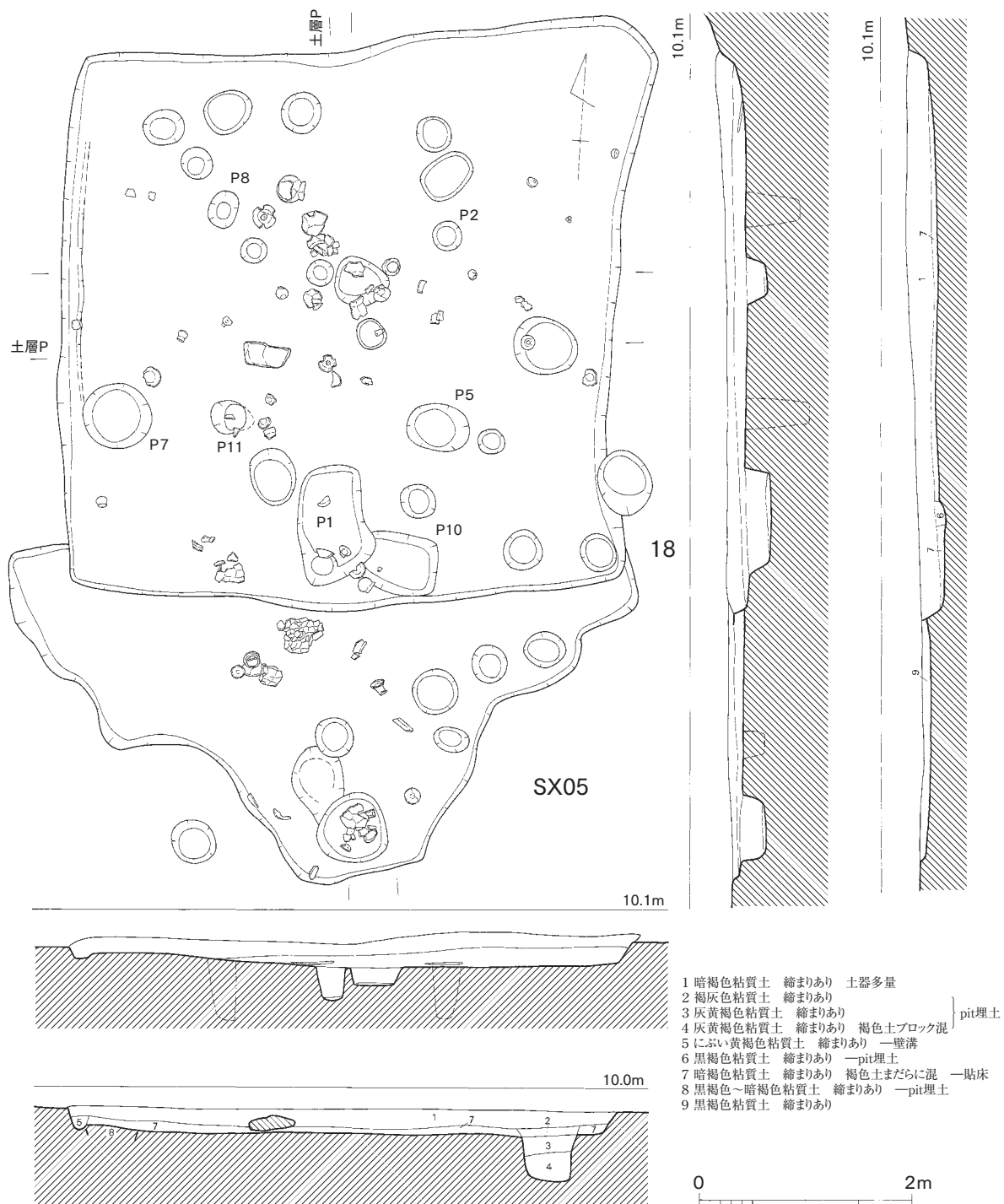


第24図 17号竪穴住居跡P-1実測図（1/30）



第25図 17号竪穴住居跡P-1出土土器実測図(1/3)

23の内面にはケズリの痕跡が残り、26の内面には粘土の継ぎ目が認められる。27～31はミニチュア土器である。いずれも指ナデによって成形され、口縁部は曲線を描く。31は細かい指ナデが施されており、平底を呈する。32・33は弥生土器の壺である。32は二重口縁をなし、口縁部がほぼ直立し端部はやや外反する。調整は磨滅のため不明瞭だが33の外面にハケの痕跡が残る。34は器台である。頸部は細く、径2cm程度である。孔を3ヶ所に穿つが「く」字状に施している。35は高坏である。脚部のみが遺存しており、直線的に伸びた後緩やかに裾部に向かって開く。残りが悪く明確ではないものの、孔を3ヶ所に穿っていると考えられる。外面は暗文状にミガキを施し、内面にはハケの痕跡が残る。36～40は鉢である。36・37は口縁が「く」字状になる。37の外面にはハケ目の痕跡が残る。古墳時代前期のものか。38～40は弥生時代終末～古墳時代初頭のもので、口縁はどれもやや内湾し、底部は厚い。38は径3.5cmほどで平底をなし、外面はハケ後ナデ、内面はナデを施し、外面底部付近には指頭圧痕が残る。39は底部に粘土を貼り付け厚くしているが、丸底になる。外面ハケ、内面はハケ後ナデを施し、外面底部付近には指頭圧痕が残る。40は完全な平底である。外面は剥落のため調整不明だが、内面にはハケの痕跡が残り、特に底部付近は底部中央を中心として、左回りに1cm弱ごとにハケを当てた痕跡が見られる。41は弥生時代の支脚と考えられる。破片のため詳細は不明だが、中央部が大きく挟れるタイプになるものと考えられる。外面にはタタキ後ハケ、内面にはハケの痕跡が残る。42は土師器の埴である。高台は踏ん張り、口縁は直線的に開く。調整は磨滅のため不明。中世の混入品である。このほか不明土製品、砥石が出土している。



第26図 18号竪穴住居跡・SX05実測図 (1/60)

17号竪穴住居跡P-1(図版12、第24図)

住居跡の北側隅に検出された東西120cm、南北110cmの土坑である。一部を支柱穴であるP-25に切られているため、住居に伴うものではない可能性が高い。土坑は2段掘りになっており、床面はテラスの中にオーバーハングしていた。また、出土土器を見ると上段が古墳時代後期、下段が弥生時代後期に属する。このことから、掘削時点では認識できなかったものの弥生時代の土坑の上に古墳時代の土坑が切りあっているものと推測される。古墳時代のものは標高7.8m付近にあり、そこから下は弥生時代のものだったのであろう。

出土土器 (図版38、第25図)

1は坏である。素口縁でやや外反する。磨滅のため調整は不明瞭だがナデを施すか。外面底部にわずかに煤が付着する。2～5は高坏である。2・4は接合面で段が明確に創出され、3・5は緩やかに開いていき、端部をわずかに外反させる。3は磨滅のため調整は不明瞭だが、ハケ目後ナデか。4は口縁部端でさらに外反し、内面には指頭圧痕がわずかに残る。6～9はミニチュア土器である。最上層で散乱した状態で出土した。どれも指ナデによって成形され、口縁部は凹凸が大きい。6は外面に粉圧痕が見られる。10は弥生土器の鉢である。口縁端は外湾し、平底である。外面には粗いハケ目を施し、口縁部ならびに底部付近には指頭圧痕が残る。内面はハケ目を施す。外面底部付近には黒斑が認められる。11は壺である。二重口縁を呈し、口唇部を外反させる。屈曲は強く、外方に強く張り出す。磨滅のため調整は不明瞭だが、外面に細かいハケ目、内面にハケ目の痕跡が残る。

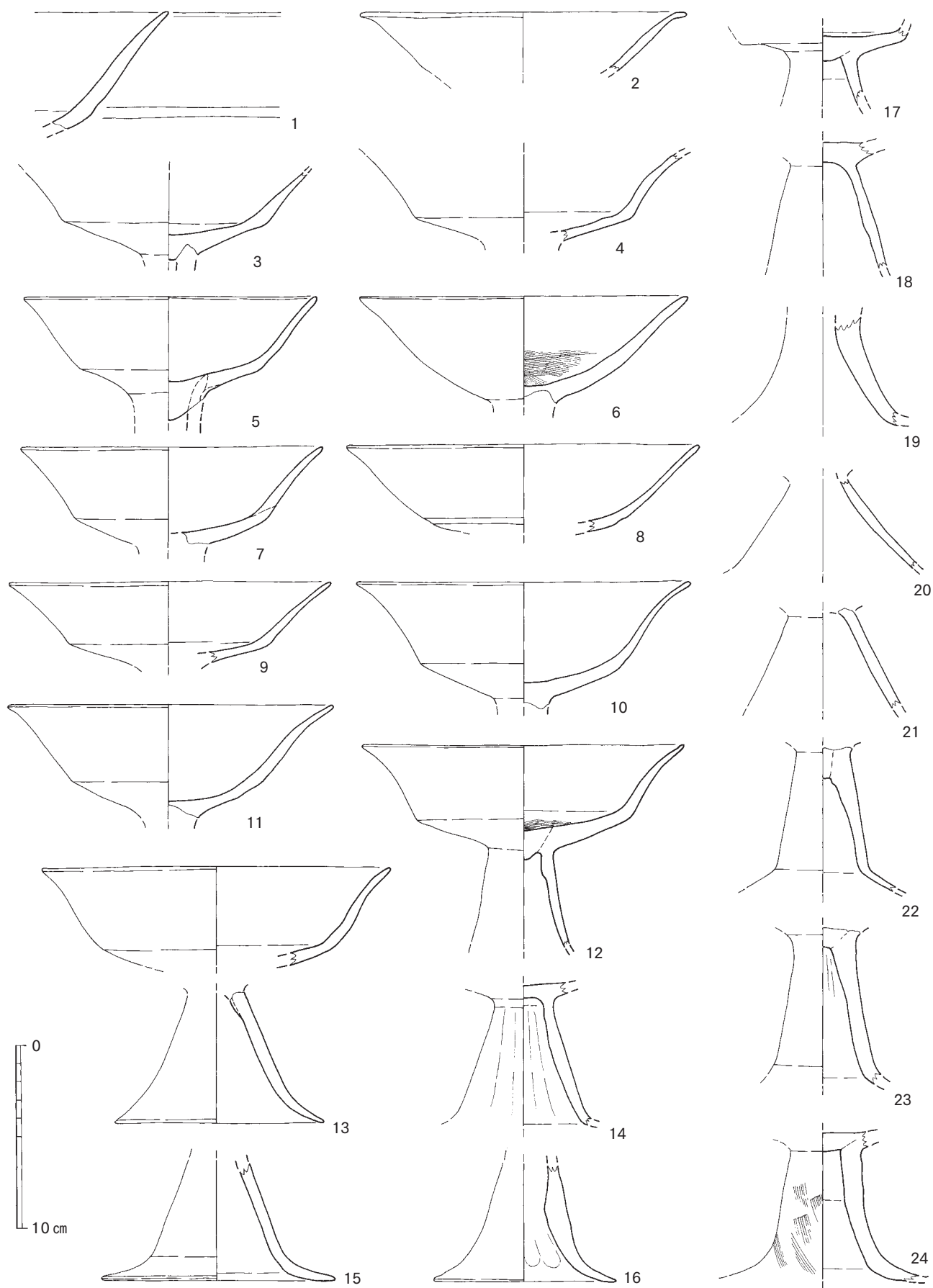
17号竪穴住居跡自体は、出土遺物から古墳時代後期の住居跡と考えられるが、貼り床と考えられる層の下からも多量のピットが検出されていることや、弥生時代終末～古墳時代初頭に属する土器も少なからず検出されていることから、同時期の住居跡が破壊されている可能性もある。また、本来であれば、27・29号溝が住居跡を切るはずだが、上面で確認できず掘りすぎてしまっている。

18号竪穴住居跡 (図版12、第26図)

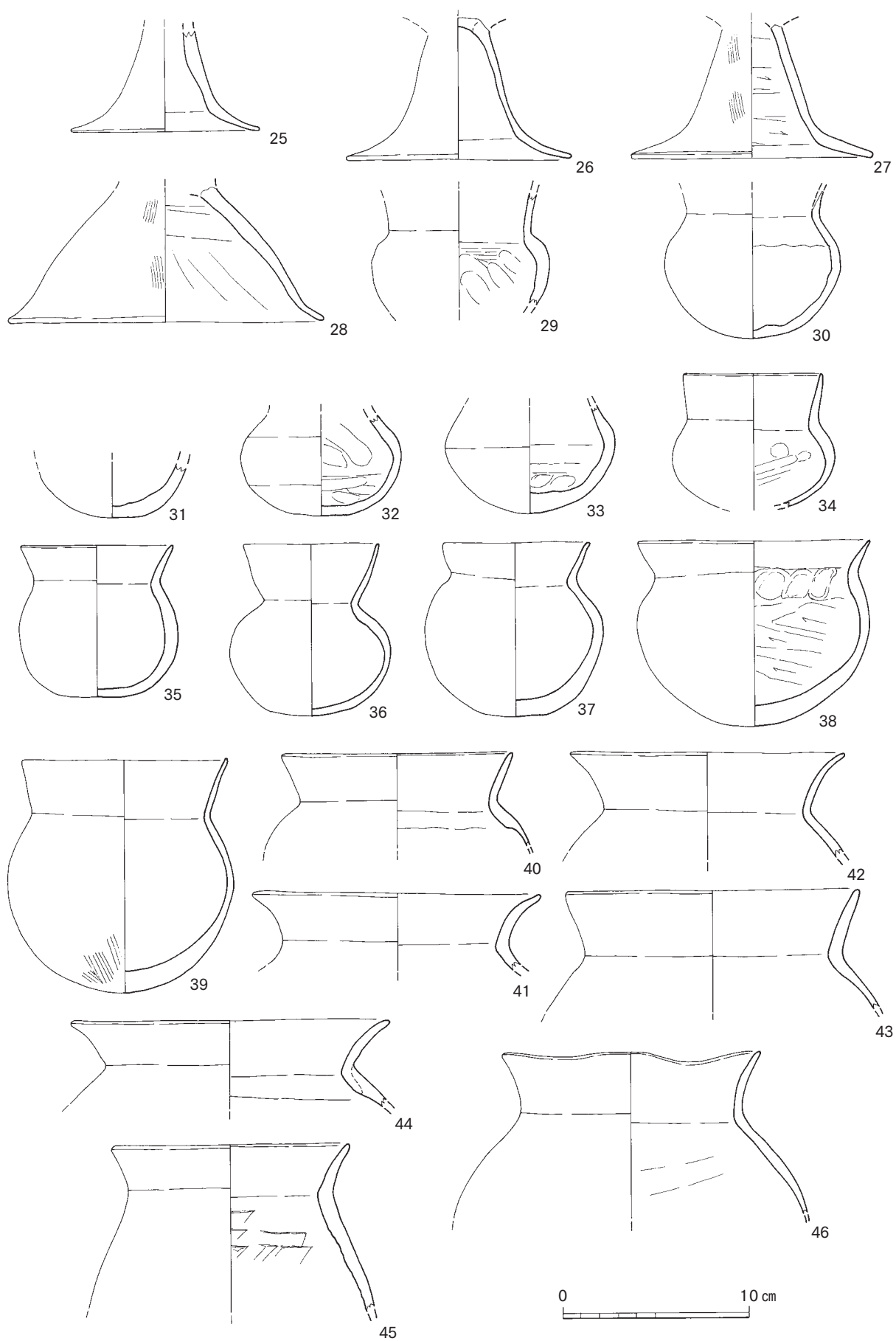
調査区の中央やや北側に位置しており、SX05を切る。住居規模は南北340cm、東西320cm、深さ20cmの正方形住居である。南側のP-1もしくは10が屋内土坑になると思われる。西側の一部でのみ壁溝が確認されている。地山から5cmほど上からピットならびに壁溝が掘り込まれており、貼り床があったものと考えられる。土器は多量に出土しているものの、ほとんどが床面より5cmほど浮いており、中央やや西よりの扁平な石のみが床面から出土した。埋土は上層が暗褐色粘質土、貼り床が暗褐色土と褐色土の混じった土、壁溝はにぶい黄褐色土である。支柱穴はP-2・5・8・11になるものと考えられる。

出土土器 (図版38・39、第27～29図)

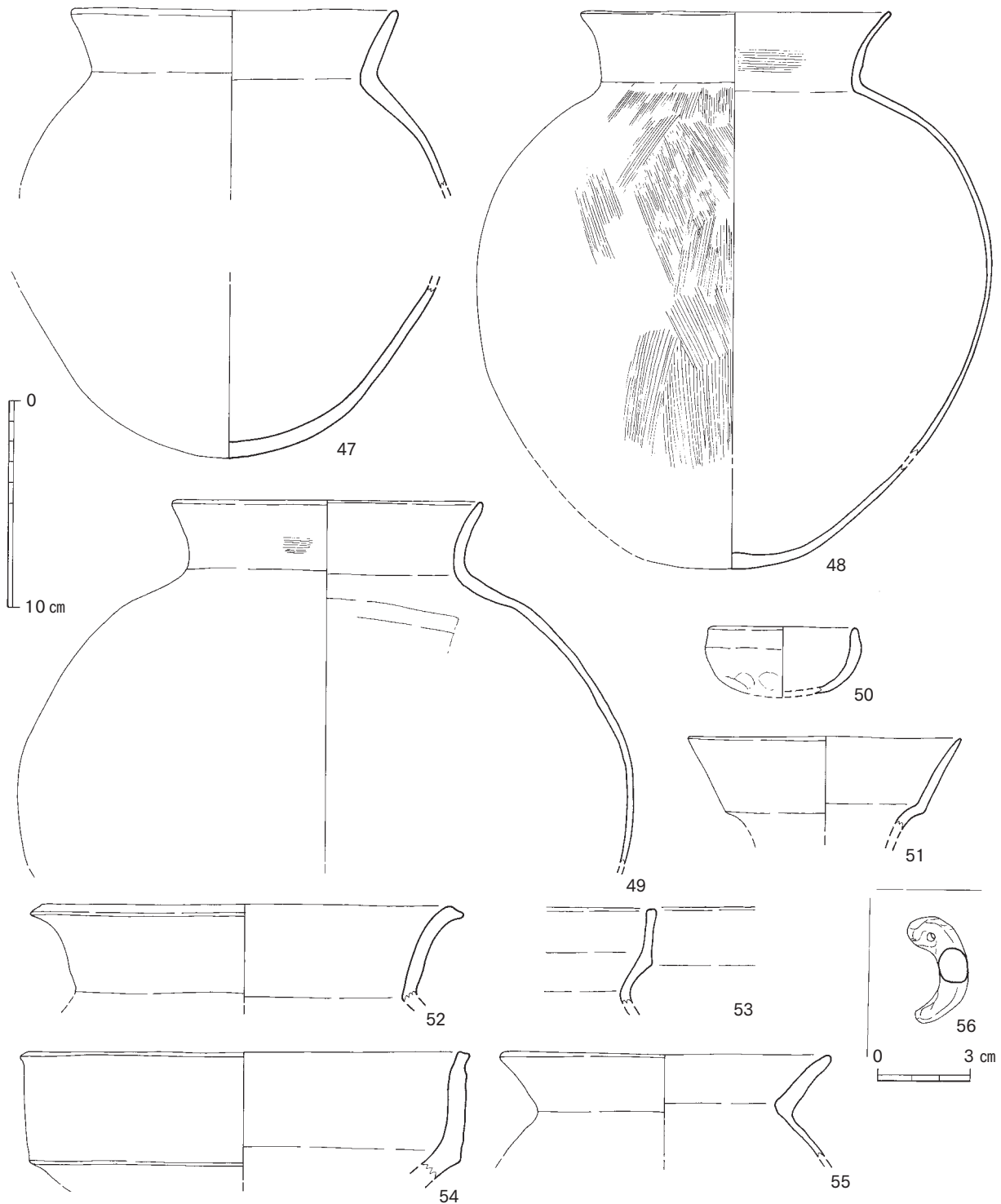
1～28は高坏である。坏部の特徴として1・3のように接合部分で明確に段を持つものと、6のように段を持たず緩やかに開くものがある。口縁部は全て外反し、中には2・10・11のように端部をさらに外反させるものもある。接合方法は3・5・12では充填法の痕跡が確認でき、他の例も坏部中央が破損していることからその可能性が高いものと考えられる。調整は磨滅のため不明瞭だが、6・12などで内面にハケ目が残る。脚部は22・23のような内外面ともに明確な屈曲部を持つもの、15・25・27のように下端で強く屈曲して開くものがある。調整は磨滅のため不明瞭だが、14・23の内面でシボリが残るほか、24・27で外面にハケ目の痕跡が残る。28は高坏の脚としているが、坏部のようにふくらみ、端部でわずかに外反させている。外面はナデ、内面はケズリを施す。内面の調整と口径などから脚部としているが、坏部である可能性もある。29～46は壺で、そのうち29～37は小型丸底壺である。29は口縁がほぼ直立し、胴部の張りは弱い。32・34は胴部最大径がやや下方にあり下膨れ形である。36は口縁部がやや内湾しており、古い時期のものか。磨滅のため調整は不明瞭だが、29・32・34などで内面に指ナデの痕跡が残



第27图 18号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/3)

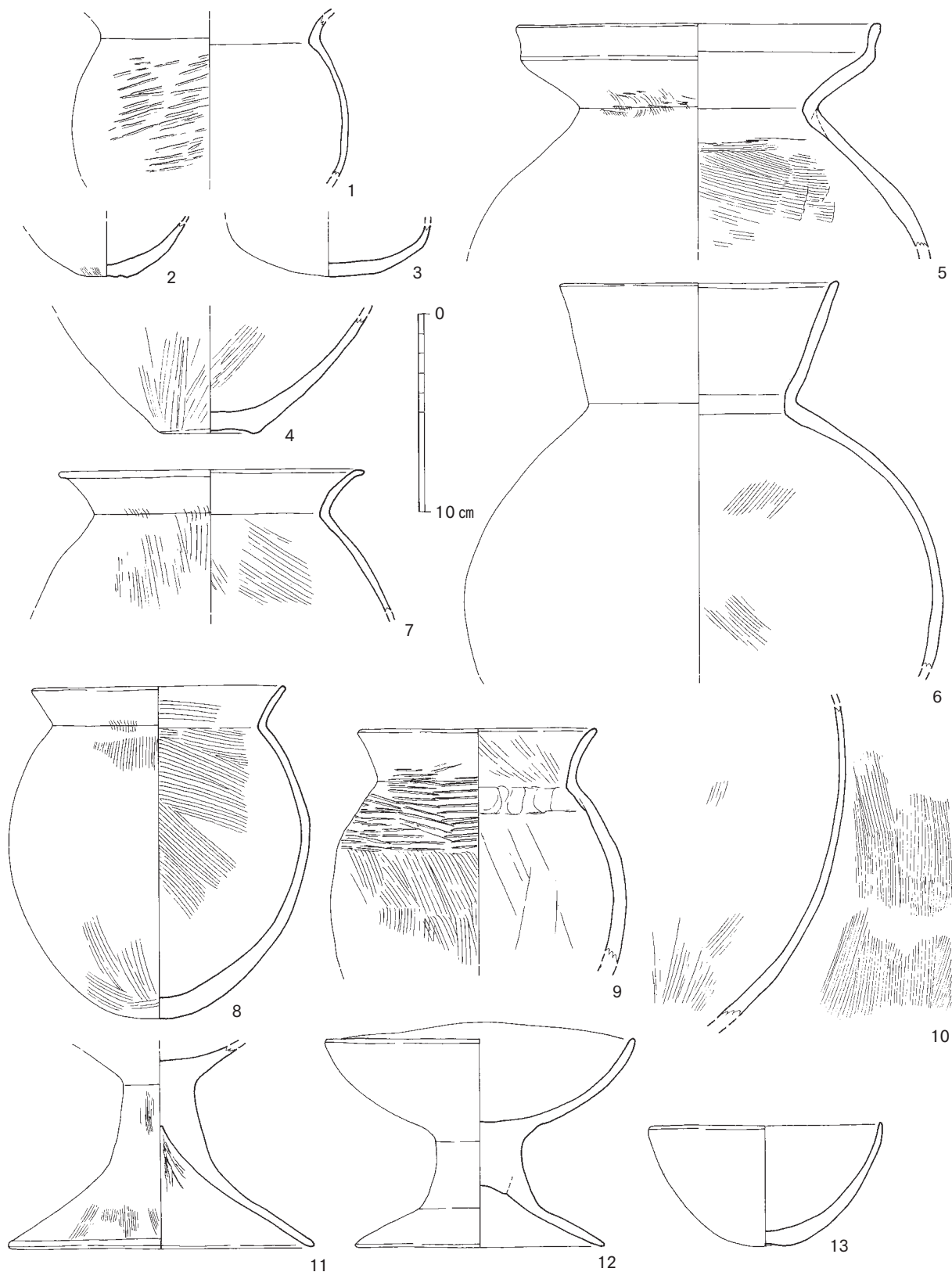


第28图 18号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)



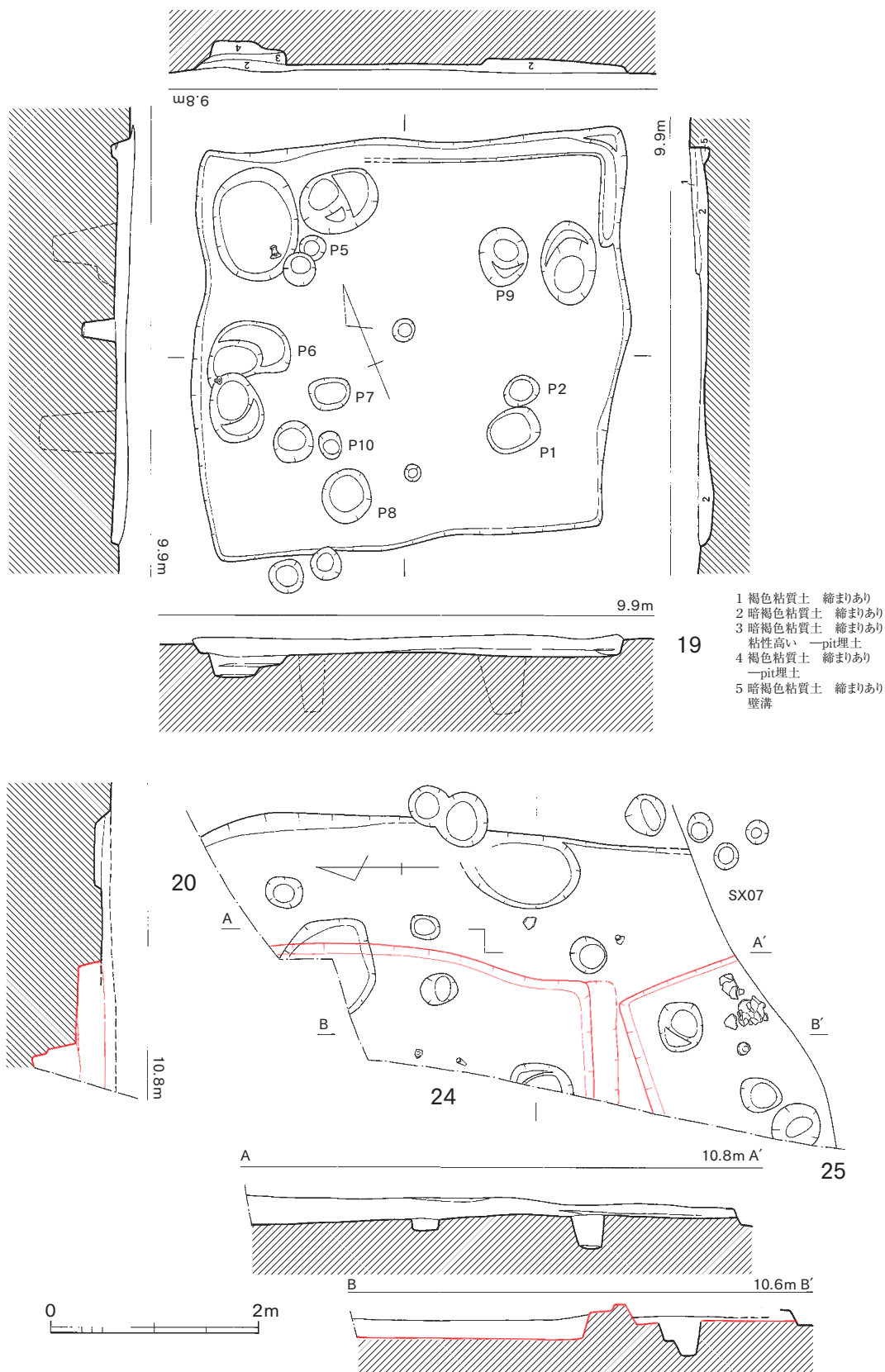
第29図 18号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3、56は1/2)

る。38は中型の壺で口縁の屈曲は弱く、胴部もやや扁平である。頸部内面に指頭圧痕、胴部内面にケズリの痕跡が残る。39は38と同様中型で口縁はやや外湾する。40は内面にケズリの痕跡残り、削りすぎのためか、一部器壁が非常に薄くなる。41～43は口縁のみが遺存しているが、小型の甕になるか。45は胴が張らずなで肩形になるものと考えられる。内面にケズリかと考えられる工具痕が認められる。46は口縁部が波状を呈しており、ややなで肩気味の器形になる。内面にはケズリの痕跡が残る。47～49は甕である。48は胴部最大径25cmで口縁部はやや外湾する。磨滅のため調整は不明瞭だが、外面および口縁部内面にハケ目の痕跡が残る。古い時期の所



第30図 SX05出土土器実測図(1/3)

産であるか。49は胴部最大径30cmで、口縁部は厚くわずかに外反する。磨滅のため調整は不明瞭だが、口縁部外面にハケ目、内面にケズリの痕跡がわずかに残る。50は小型の埴である。全面をナデで仕上げ、底部外面付近に指頭圧痕の痕跡が残る。51～55は弥生時代終末～古墳時代初頭の所産か。51は二重口縁壺の口縁部で、直線的に外反する。52は壺で、残りが悪いものの



第31図 19・20・24・25号竖穴住居跡実測図 (1/60)

頸部の屈曲は弱いものと推測される。口唇部は粘土を摘み出すようにして肥厚させる。53は二重口縁壺の口縁部で、端部は直立する。54も二重口縁壺の口縁部と考えられる。やや器壁が厚いが、口径はさほど大きくならず、やぼったい印象を受ける。口唇部をわずかに外反させる。55は甕である。口縁部はわずかに外湾し、胴部の器壁は薄い。磨滅のため調整は不明。外面に黒斑

が認められる。56は土製勾玉である。頭部に径0.3cmの孔を穿つ。焼成は良好で、胎土は赤橙色を呈する。磨滅が激しいが、化粧土を施していた可能性もある。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。また、本住居跡は高坏の出土量が他の住居跡と比べても非常に多い。

SX05 (図版13、第26図)

調査区の中央やや北側に位置しており、18号竪穴住居跡に切られる。不定形をしているが、削平の為と考えられ、さらに北西隅に角が検出されていることから、住居跡である可能性が高いと考える。規模は東西570cm、南北360 + α cm、深さ5cmである。床面から多くの土器が出土している。埋土は黒褐色粘質土である。

出土土器 (図版39、第30・83図)

1は壺か。器壁は薄く、外面にはタタキの痕跡が残る。床面出土。2・3は底部のみだが、小型の壺か。2は平底で、外面にハケ目の痕跡および黒斑が認められる。4は壺の底部である。平底で中央部がやや浮く。磨滅のため不明瞭だが、内外面ともにハケ目が残る。5は二重口縁壺である。口縁部は直立し、屈曲は鈍角を呈する。頸部外面付近、胴部内面にハケ目が残る。床面出土。6は壺である。胴部最大径は24.5cmほどで、口縁部は直線的に外反する。胴部内面にハケ目が残る。床面出土。7～10は甕である。7は口縁部が外湾し、内外面ともにハケ目を施す。床面出土。8は口縁部が直線的に外反し、内外面ともにハケ目を施す。9は口縁部がわずかに外湾し、なで肩形を呈する。胴部外面上半はタタキを施し、下半はハケ目を施す。内面は口縁部にハケ目、頸部に指頭圧痕、胴部にケズリを施す。10は胴部のみが遺存しているが、内外面ともにハケ目を施し、特に外面のハケ目は細かい。11は高坏もしくは器台の脚部か。脚は裾に向かって直線的に開き、脚部と坏部の境も明確に屈曲する。磨滅のため不明瞭だが、外面にはハケ目、脚部内面にはシボリの痕跡が残る。床面出土。12は高坏である。坏部は内湾し、脚部は直線的に開く。内外面ともに磨滅のため調整は不明。13は埴である。素口縁で底部はやや平底気味である。磨滅のため調整は不明だが、外面に5.5×3cmほどの黒斑が認められる。このほか床面から砥石が出土している。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡の可能性はある。

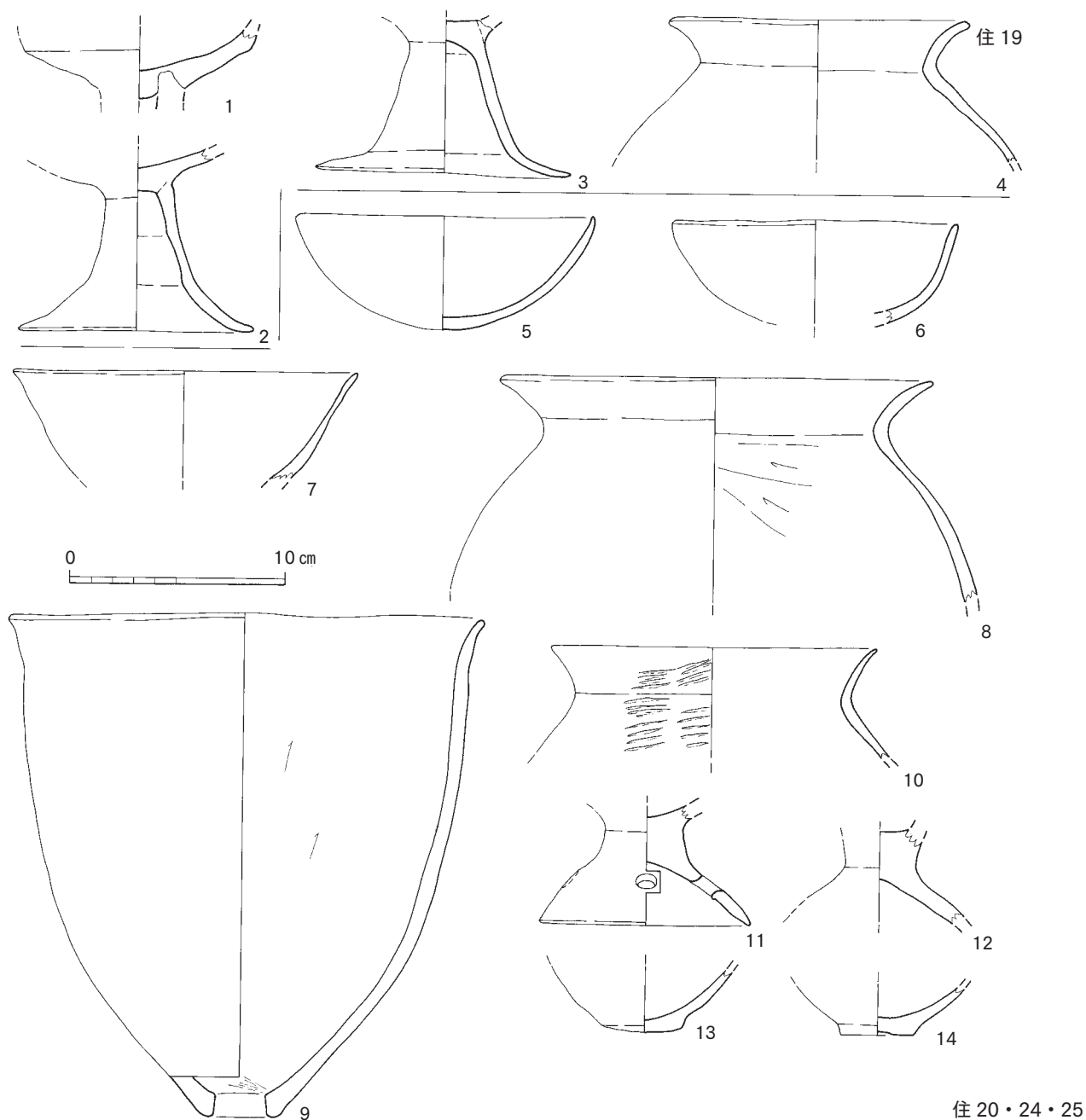
19号竪穴住居跡 (図版13、第31図)

調査区のほぼ中央に位置する。周囲に住居跡はなく単独で存在している。住居規模は東西410cm、南北390cm、深さ5～15cmである。住居の北東側に壁溝が検出された。出土土器は比較的少ない。埋土は上面が褐色土粘質土、下層および壁溝が暗褐色粘質土である。主柱穴はP-1・5・9・10になるものと考えられる。

出土土器 (第32図)

1～3は高坏である。すべて磨滅のため調整は不明。1は坏下半部である。接合部で段が付くもので脚部とは充填法によって接合している。2・3は脚部で2は緩やかな屈曲で、3は下部で強い屈曲で裾が広がる。4は甕である。口縁部は外湾し、肩はさほど張らない。磨滅のため調整は不明。

出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第32図 19・20・24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

20・24・25号竪穴住居跡 (図版13、第31図)

調査区の北西隅に位置し、SX07に切られる。調査区の端にあるため規模は不明だが、残存部分で南北 $480 + a$ cm、東西 $240 + a$ cm、深さ30cmである。上面では確認できなかったが掘り下げると2ヶ所の角が出てきたため、それぞれ24・25号竪穴住居跡とした。ただし、24号住居跡に関しては、20号の1辺と併行して検出されており、土器もさほど時期が変わらないことから、ベッド状遺構である可能性もある。ただし、24号住居跡は南辺と思われるラインがより上部で見つかり、もっと上部で検出できた可能性を残す。埋土は20号が暗褐色粘質土、24号は橙色土と暗褐色土粘質土が混在した土である。25号は不明。主柱穴は調査区の端であることと、住

居切り合いのため不明である。

出土土器 (第32図)

5～7は坏である。5・6はわずかに内湾し、7は口縁部端のみ外湾する。磨滅のため調整は不明。8は甕である。口縁部は外湾し、胴部内面にケズリの痕跡が残る。9は甑である。全体が緩やかなS字状の器形をなし、底部に径2.2cmの孔を一つ穿つ。磨滅のため調整は不明だが、内面はケズリの可能性がある。また、外面上部と中ほどに5×3.5cmほどの黒斑が認められる。5・6・8・9は25号竪穴住居跡上層付近から出土しており、25号に伴う可能性が高い。10は甕である。小型で外面にタタキの痕跡が残る。11・12は器台か。脚部がやや内湾し、長さは短い。11は孔を4ヶ所に穿つ。12は24号の埋土中出土。13・14は小型の鉢か。14は平底であるが、13はレンズ状を呈する。磨滅のため調整は不明。

切り合いと出土遺物から、20・24号は弥生時代終末～古墳時代初頭、25号は古墳時代後期の住居跡と考えられる。時期を考えれば25号が上面で検出できたはずであるが、認識できず掘りすぎてしまっている。

21号竪穴住居跡・SX06 (図版14、第33図)

21号竪穴住居跡は、調査区の北西側に位置し、SX07、6号溝に切られ、SX06を切る。6号溝の南側に8・10号溝があるため、南辺については不明である。残存している住居規模は東西410cm、南北200 + a cm、深さ15cmである。住居跡の北東隅に焼土が検出された。34図2の高坏は床面において逆位置で出土しており、支脚であった可能性がある。その場合焼土付近にカマドが存在していた可能性が高い。埋土は暗褐色粘質土である。大半を切られているので詳細は不明だが、P-1が主柱穴の一つになるか。

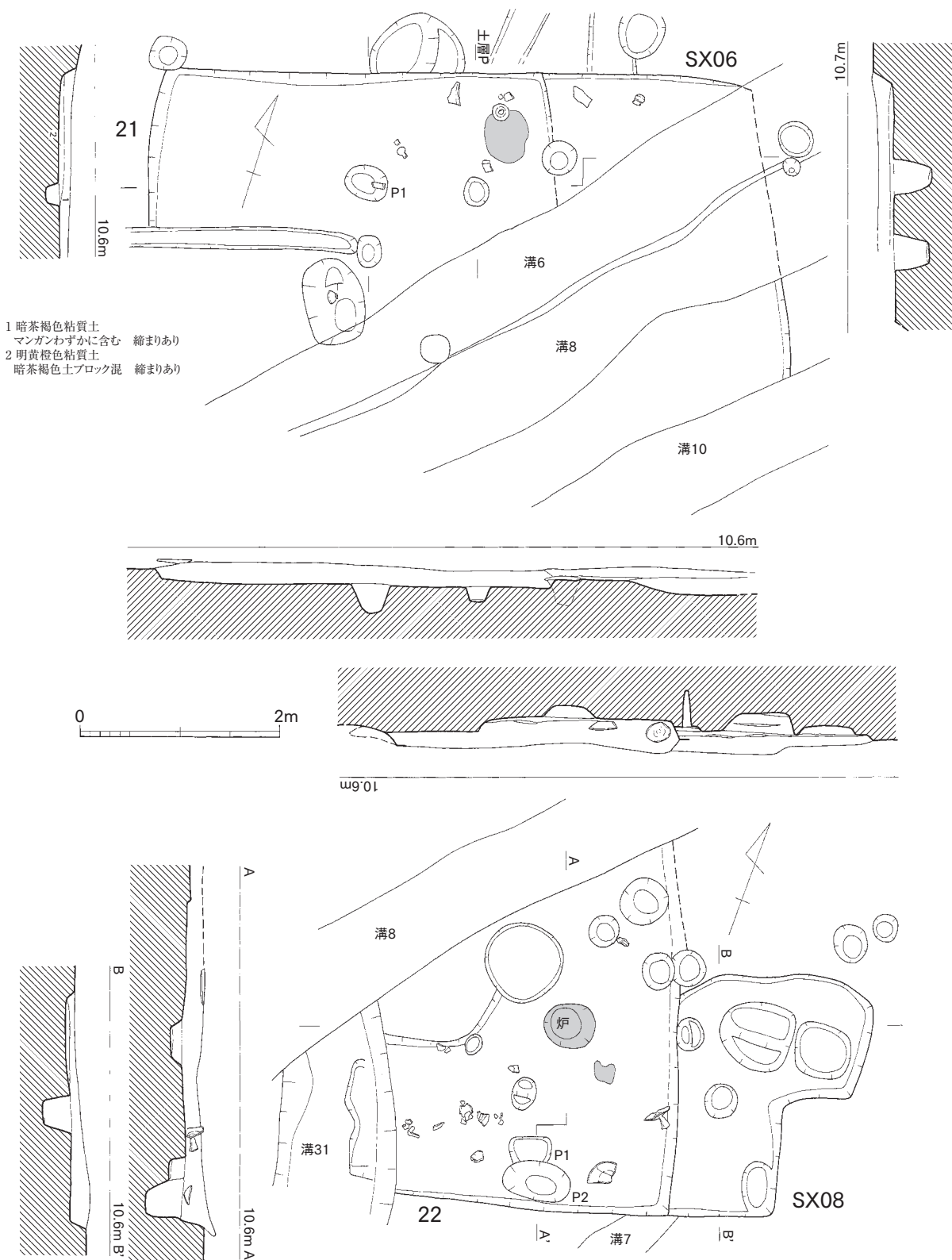
SX06は、21号竪穴住居跡・6号溝に切られる。8号溝の南側にも住居の西辺と思われる直線が検出されており、規模は南北340 + a cm、東西200 + a cm、深さ10cmである。主柱穴等は検出できなかった。

21号住居跡とSX06の北辺は直線上にあり、後述する土器も考慮すると同一住居である可能性もある。その場合SX06の床面が5cmほど高いことから、ベッド状遺構になると考えられる。

出土土器 (図版39、第34図)

1～3は21号竪穴住居跡、4～6はSX06出土である。1は小型の壺である。胴部外面や口縁部内面に一部ハケ目を施すものの、そのほかは指ナデを施しており、手づくね様である。底部は厚く、外面に板を押し付けたような痕跡が残る。2は高坏である。坏部の接合部で明確に段を持ち、口縁部端は外湾する。脚部は直線的に伸び、欠損部分で強く屈曲するものになると考えられる。磨滅のため調整は不明。脚部の下方が一部被熱しており、支脚として使用していたと考えられる。3は甕である。口縁部の屈曲は弱く、胴部もなだらかになる。磨滅のため調整は不明瞭だが、外面にハケ目、内面にケズリの痕跡が残る。4・5は須恵器の坏身である。底部外面に回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。6は小型の壺である。1よりやや作りが丁寧だが、手づくね様で、法量もほぼ同じである。

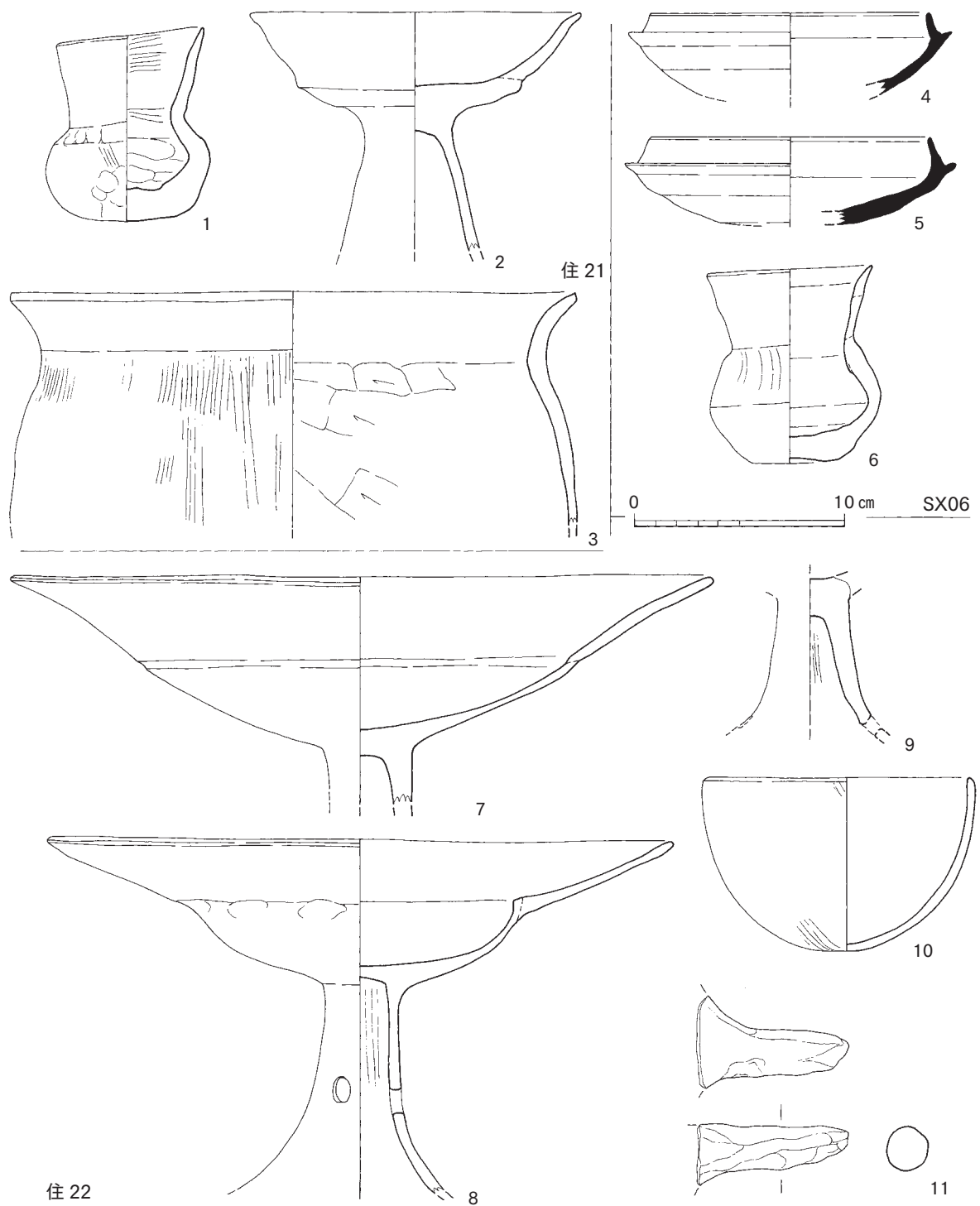
切り合いと出土遺物から、ともに古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第33図 21・22号竪穴住居跡、SX06・08実測図 (1/60)

22号竪穴住居跡 (図版14、第33図)

調査区の西側に位置し、8・31号溝に切られ、SX08を切る。二辺を切られるが、住居規模は、東西・南北ともに $320 + a$ cm、深さ20cmである。中央部に炉が検出されているため、規模はさほど大き



第34図 21・22号竪穴住居跡、SX06出土土器実測図(1/3)

くならないものと考えられる。炉のほか、南側のP-1もしくは2は屋内土坑と考えられる。また北西側は1段高くなっており、ベッド状遺構となっていたか。第34図7・8・砥石をのぞいて全て床面から浮いている。主柱穴は確認できなかった。

出土土器(第34・83図)

7～9は高坏である。7は坏部の屈曲が弱く、口縁がわずかに外湾し開く。磨滅のため調整は不明。床面出土。8は坏部の屈曲が鈍角をなし、口縁部は直線的に外方に延びる。脚部にはやや高い位置に、孔を3つ穿ち、孔下端付近から緩やかに開いていく。脚部内面にシボリの痕跡が残る。床面出土。9は脚部で、磨滅のため不明瞭だが、内面にシボリの痕跡が残る。10は鉢である。口縁

が若干内湾し、底部付近に一部ハケ目の痕跡が残る。11は取手付き塀の取手部分か。全体にナデ調整を施し、上面は平坦に仕上げる。接合面で剥離したものと考えられる。このほか床面直上から砥石が出土している。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡と考えられる。

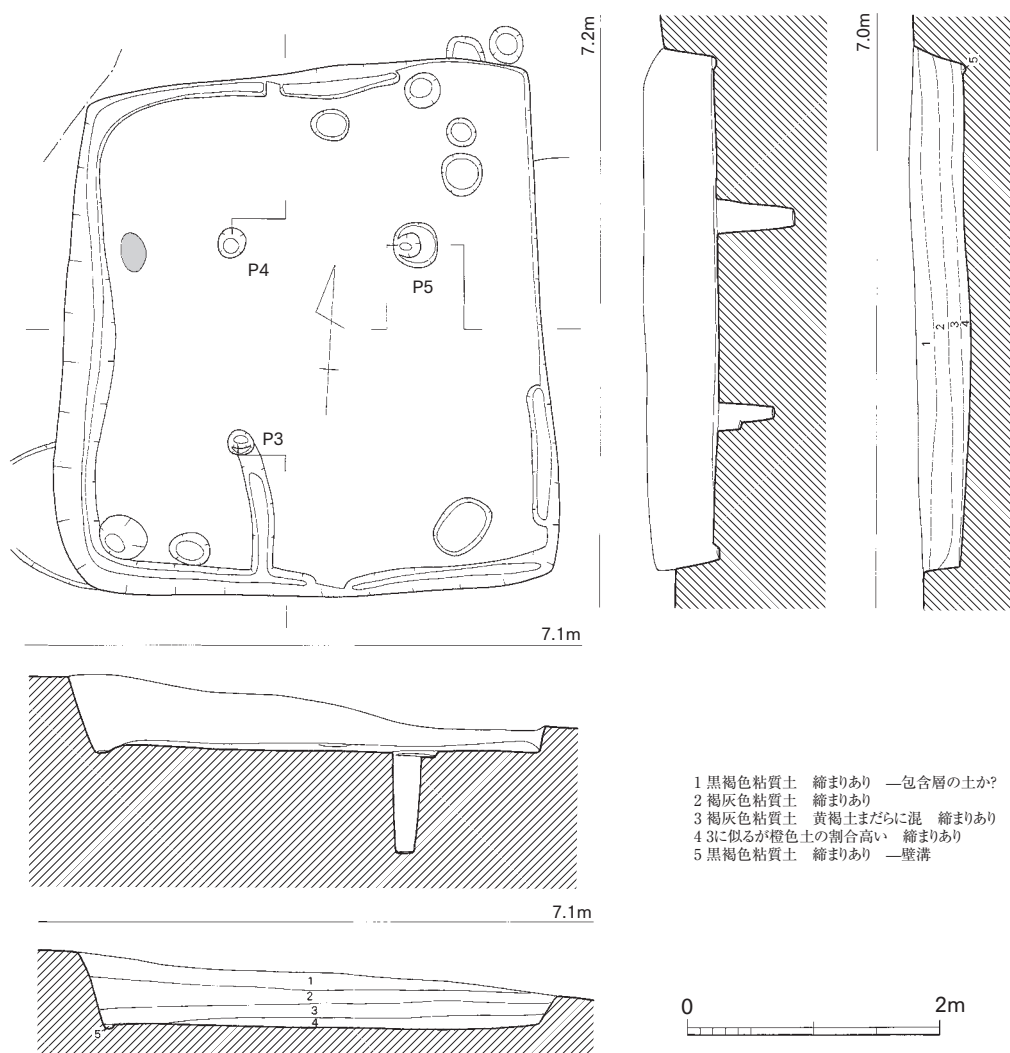
SX08 (第33図)

22号竪穴住居跡の東側に位置している。規模は、南北250cm、東西200 + α cm、深さ5cmで不定形である。浅いため、そのほかの部分の削平されている可能性もある。

図化に耐えうる資料はなく、弥生土器および土師器の小片が出土している。破片から判断すると22号住居跡と同様の時期と考えられ、削平されているが、22号住居跡のベッド状遺構である可能性もある。

26号竪穴住居跡 (図版3・14・15、第35図)

調査区の南側、谷に向かって落ちていく斜面に位置している。住居規模は南北420cm、東西



第35図 26号竪穴住居跡実測図 (1 / 60)

380cm、深さ25～50cmである。住居の北東側の一部を除いて、壁溝がめぐっており、東側には焼土が認められたが、カマドの痕跡は見つからなかった。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が褐灰色粘質土であり、壁溝は黒褐色土である。P3～5が主柱穴になると考えられるが、南東側には検出できなかった。土器が多量に出土しているが、床面出土のものはない。

出土土器（図版39、第36・83図）

1～3は坏である。口縁部は外反し、底部外面にはケズリを施す。3は外面上部にハケ目の痕跡が残る。4～7は壺である。4～6は口縁部が外湾し、7は内湾する。そのうち5・6は口唇部を肥厚させる。4は肩部に明確な段が付き、内外面ともナデを施す。5・6は磨滅のため調整は不明瞭だが、胴部内面にはケズリの痕跡が残る。7は口縁と胴部を接合した際の継ぎ目が頸部内面に残り、その下部に指頭圧痕、さらに下部にケズリを施す。8～18は高坏である。8～11は坏部、12～18は脚部が遺存している。8は屈曲部で明確に段が付き、口縁部はわずかに外湾する。頸部には充填法の痕跡が残る。9・10は、段は付くものの明確ではなく、口縁部端が強く外湾する。11は坏部の屈曲点に被熱の痕跡が見られる。12は、坏部の屈曲部分で剥落しており、明確に段が付くものであったと考えられる。12ならびに14は脚部がハ字状に直線的に開き、下部で強く屈曲し裾に広がる。12は外面ミガキ、内面下部にハケ目、上部にシボリを施し、14は外面上部ミガキ、下部ハケ目、内面ケズリを施す。13・18は、ハ字状に直線的に開き、下端で強く屈曲し裾に広がる。坏部との接合部には充填法の痕跡が残る。内外面にケズリの痕跡が残る。15・16は比較的緩やかに脚が開いていき、下端で外湾する。内面にはケズリの痕跡が残り、15には一部ハケ目の痕跡も残る。17は途中までは12・14と同様直線的に開いていくが、それより下部は一度内湾してから外反する。磨滅のため不明瞭だが、外面にはミガキの痕跡、内面にはシボリが残る。19は甑の取手である。胴部からやや上方に反るように伸び、胴部にナデつける。胴部外面にはハケ目を施す。20は多孔式甑の底部である。径13cmほどの平底を呈し、3孔が残る。磨滅のため不明瞭だが、外面にハケ目、内面底部付近に指頭圧痕の痕跡が残る。21～25は弥生土器か。21～23は壺、24は甕、25は脚付き鉢の脚部である。21は二重口縁壺の口縁部で屈曲が強い。22は口縁部が緩いW字状を呈しており、横ナデの強弱によるものか。23は明確に段を持たず、若干内湾する。24は頸部のみが遺存しており、頸部径21cmである。外面にはナデ、内面には粗いハケ目を施す。25は緩やかに外湾し、内外面ともにナデを施す。このほか砥石と、図化はしていないものの鉄滓が2つ出土している。

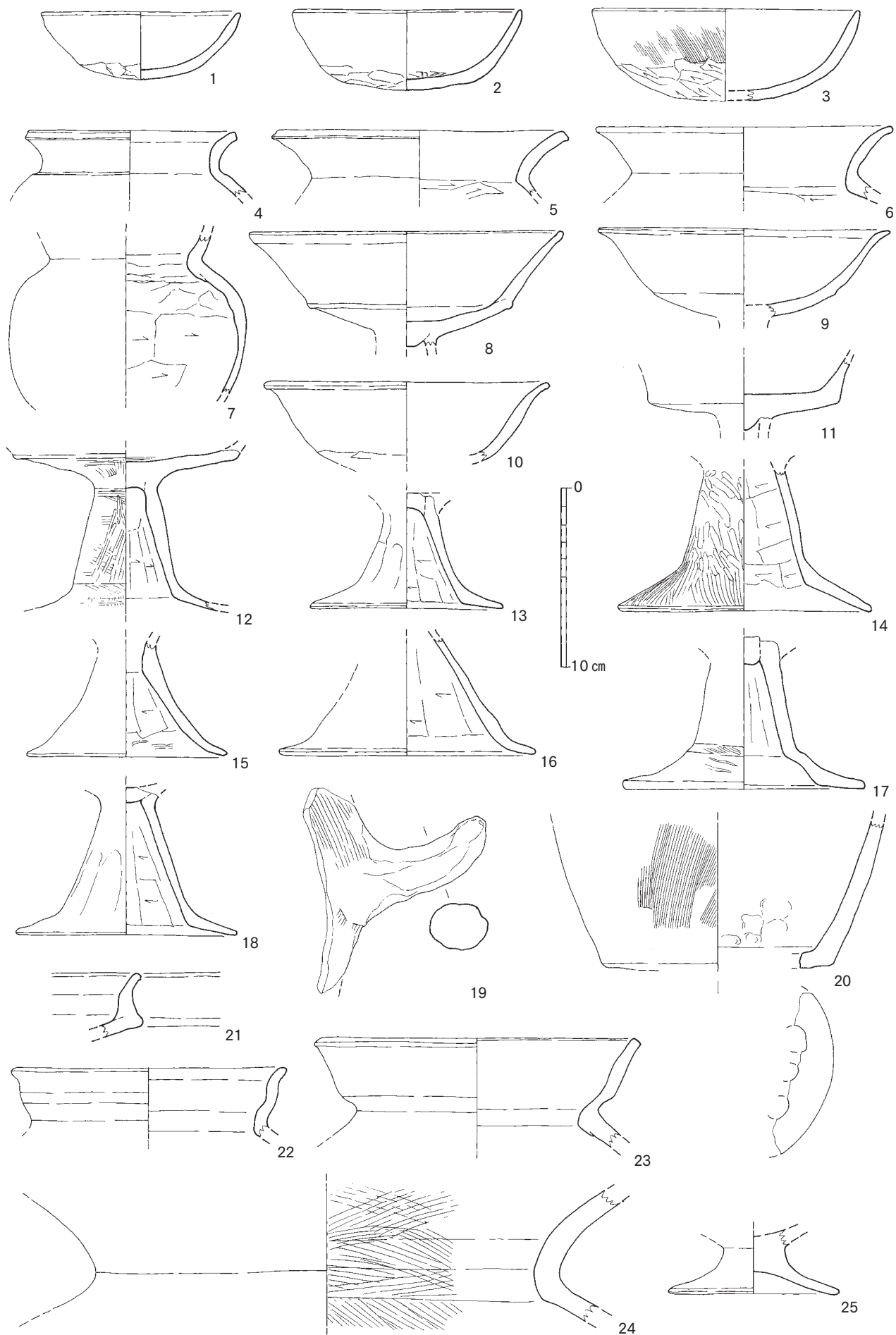
切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

27号竪穴住居跡（図版3・15・16、第37図）

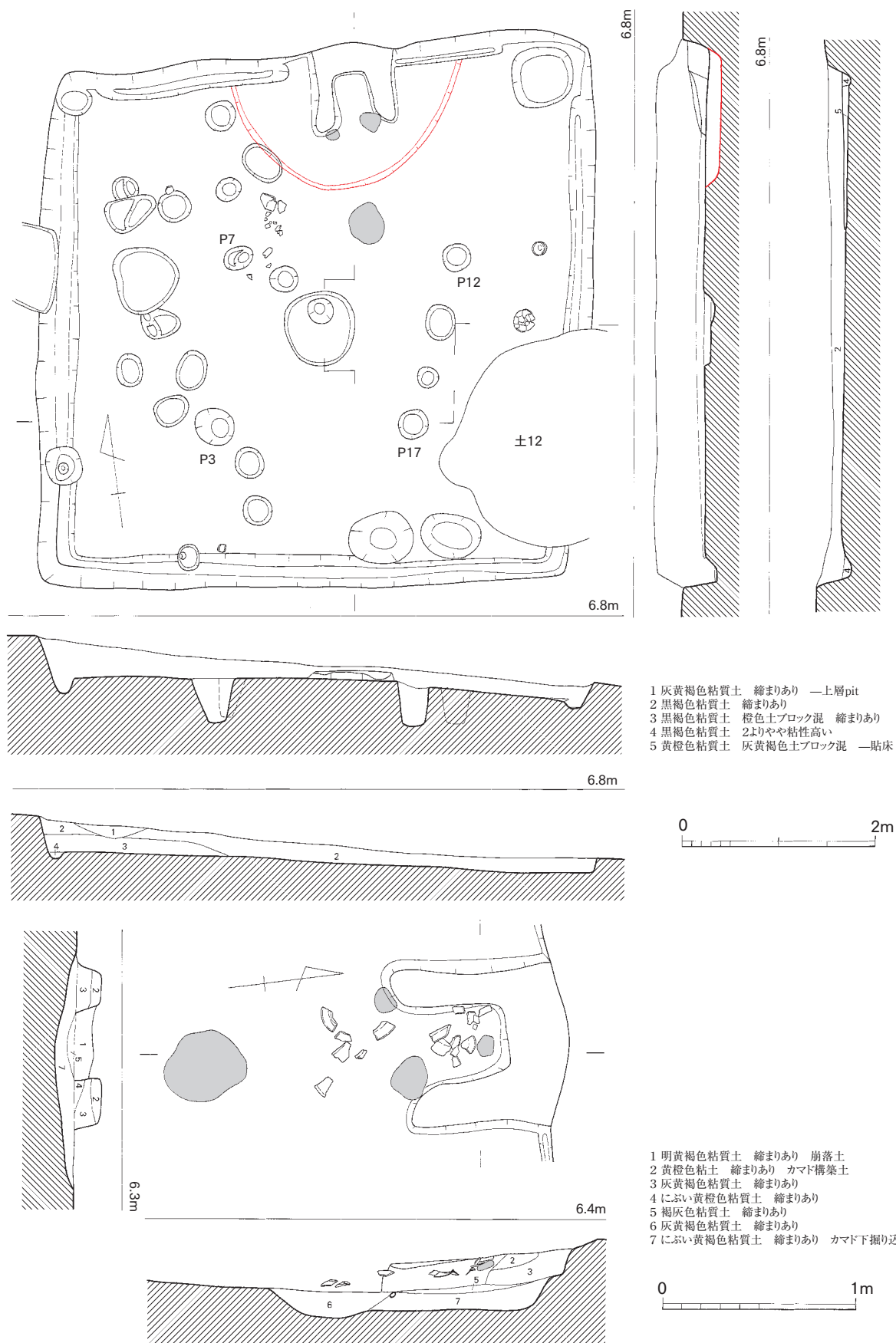
調査区の南西側、谷に向かって落ちていく斜面に位置している。19～21号土坑を切り、12号土坑に切られる。住居規模は東西、南北ともに570cm、深さ15～30cmである。住居の周囲に壁溝がめぐり、北側にはカマドを敷設する。第38図9・15が床面から出土している。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層は黒褐色土に橙色土ブロックが混在する。北側にはさらに下層に黄橙色土、灰褐色土が混在した層があり、貼り床の可能性もある。主柱穴はP-3・7・12・17になるか。

カマド（図版15、第37図）

住居跡の北側中央付近にカマドが検出された。右袖は壁面から75cm、左袖は85cm程度突出し、

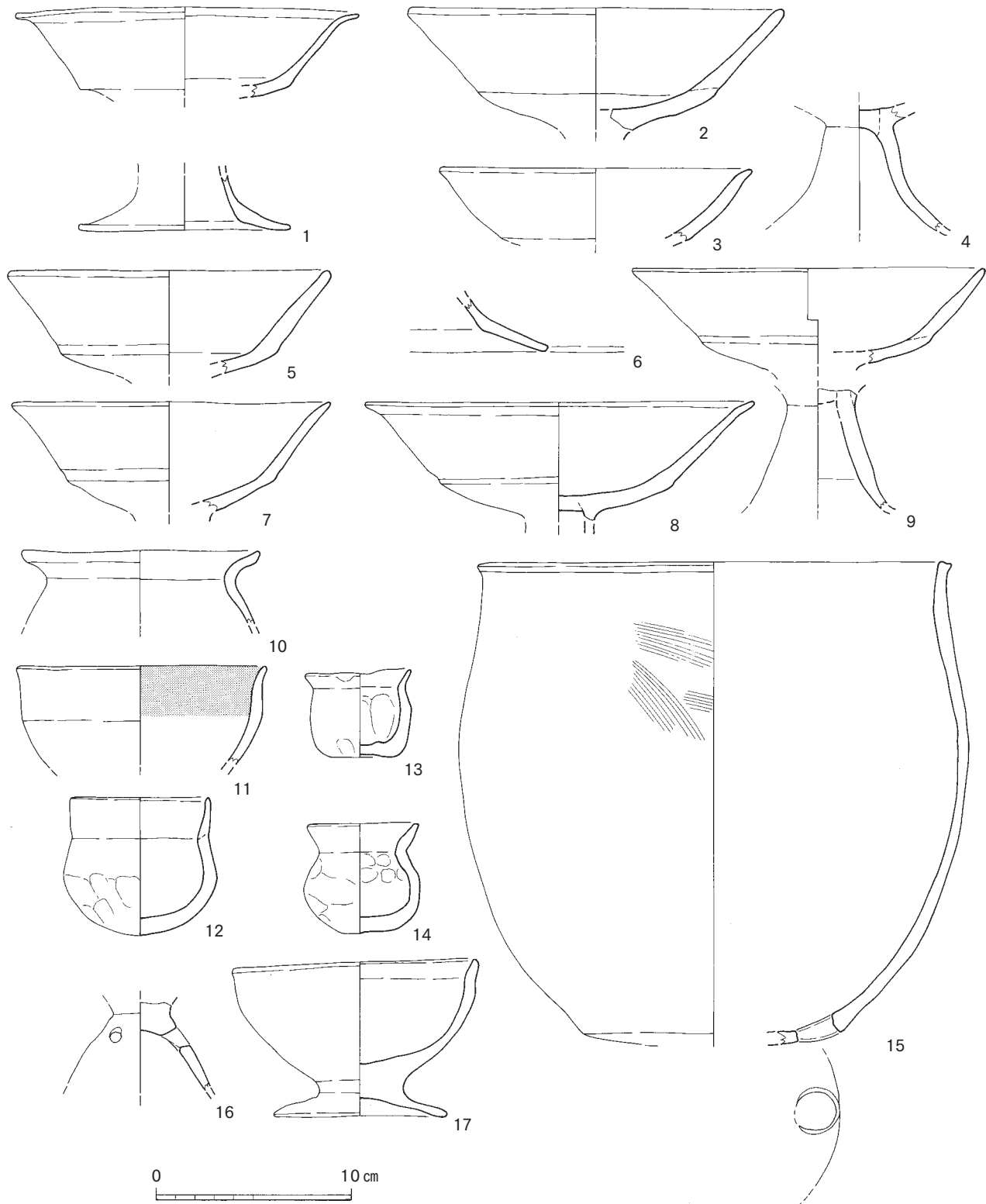


第36图 26号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)



第37図 27号竖穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

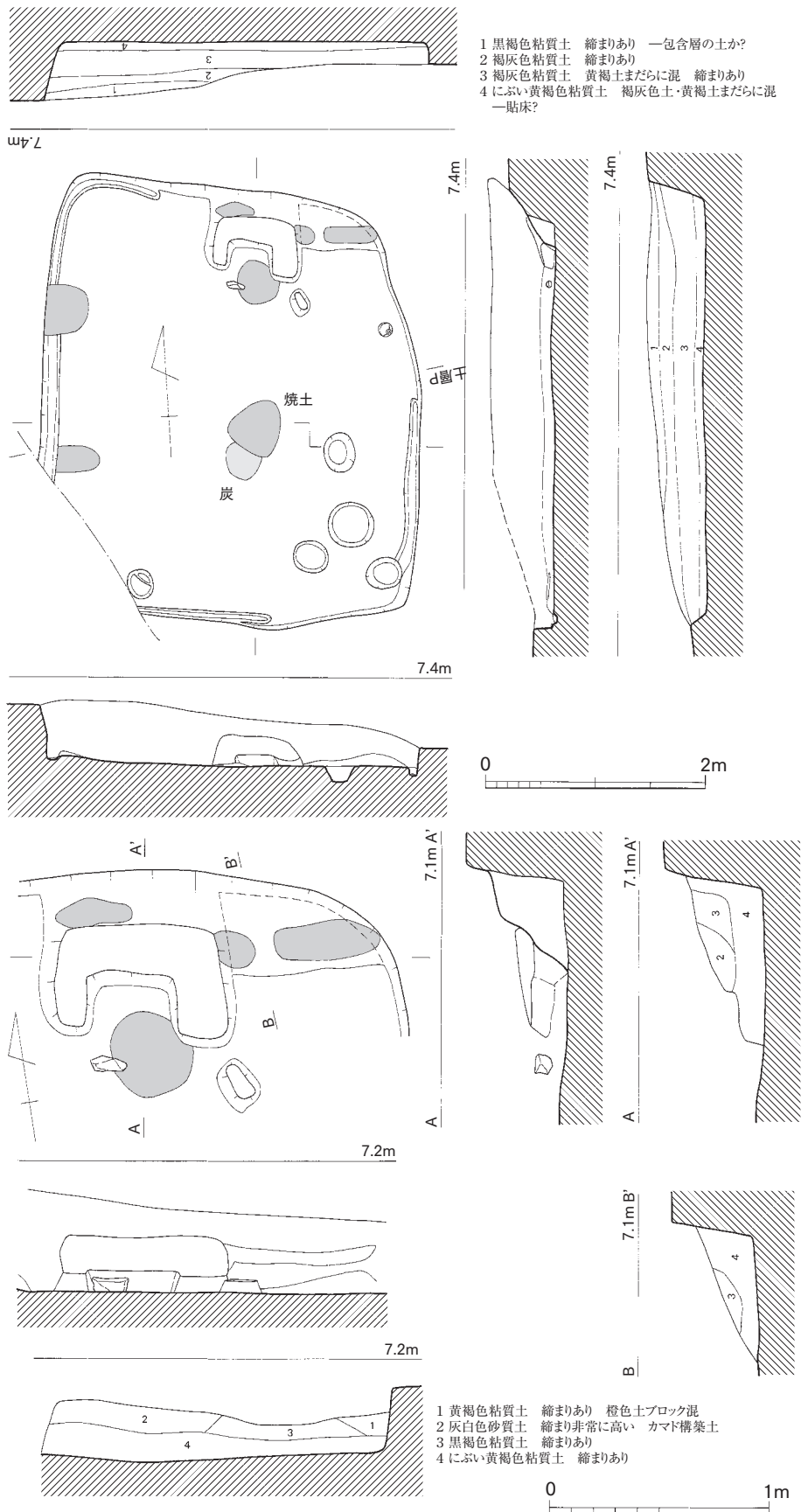
燃烧部奥と両袖内側で被熱面が認められ、さらに袖から85cm南側で径40cm程度の焼面が検出された。燃烧部幅は40cmで、南側の焼面までカマドが伸びていたとすれば長さ190cmほどの長大なものになる。カマドの下には掘り込みがみられ、床を貼っていた可能性もある。煙道は、明確に検出できなかったものの、中央の壁面が膨らんだ部分にあると思われる。カマド構築土は黄褐色粘土である。



第38図 27号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器（図版39・40、第38図）

1～9は高坏である。1・2はカマドから出土した。1は明確に接合しないものの同一個体と考えられ、坏部は明確に段をもち、口縁部端が強く外反する。2は坏部で1より厚く、口縁は直線的である。1・2のどちらかもしくは両方がカマドの支脚であったと考えられる。3・5・7～9は坏部の屈曲が明確で、5・9の口縁部は直線的に伸び、他は緩やかに外湾する。4は脚部の屈曲が緩やかになるものと想定され、6は強く屈曲する。4・8で充填法の痕跡が見られる。9は床面出土。10は小型の甕である。口唇部がわずかに肥厚する。11は鉢である。口縁部は緩やかなS字状を呈し、内面上部に赤化が見られる。12～14は小型の壺である。12は口縁部が緩やかに内湾し、他は外反する。磨滅のため調整は不明瞭だが、内外面ともに指ナデの痕跡が残る。15は甌である。器形は緩やかなS字状を呈



第39図 28号竖穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

し、底部は径13cmほどの平底になる。孔1つが遺存しており、多孔式になる。外面にハケ目の痕跡が残る。16・17は弥生時代の所産で混入品。16は器台か。脚は内湾し、孔を3ヶ所に穿つ。17は脚付きの鉢である。口縁は緩やかなS字状を呈する。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

28号竪穴住居跡（図版16・17、第39図）

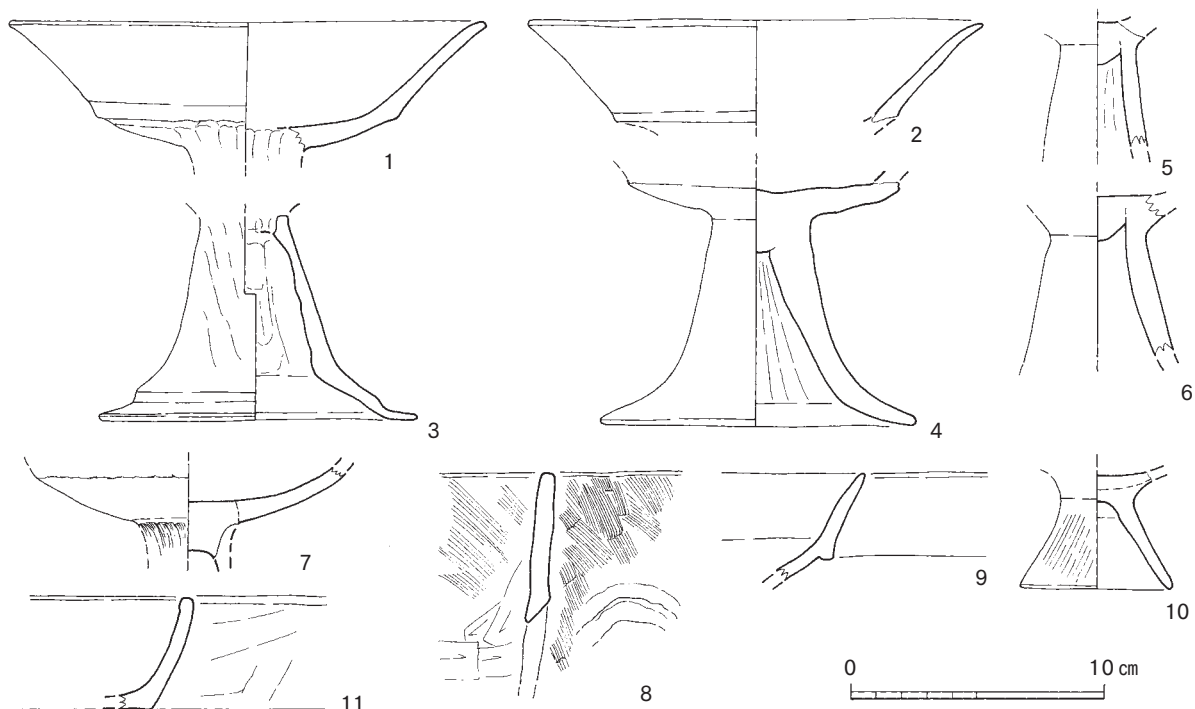
調査区の南側に位置し、南西の隅を調査区の端に切られる。住居規模は南北390cm、東西340cm、深さ20～55cmである。北側、東側、南側の一部に壁溝が検出され中央には焼土と炭がそれぞれ検出され、西側の壁際でも2ヶ所で焼土が検出された。北側にはカマドが敷設される。埋土は上層が黒褐色粘質土、中層が褐灰色粘質土、下層がにぶい黄褐色土である。内部にピットは少なく、支柱穴は確認できなかった。

カマド（図版16、第39図）

住居跡の北側中央付近にカマドが検出された。右袖は壁面から85cm、左袖は70cm程度突出し、両袖間で径35cm程度の焼面が検出された。燃烧部幅は35cmで、焼面の位置から考えると、長さ80cmほどになる。左袖の15cm南東には石が検出され、右袖の15cm南東にはカマド構築土と同じ土が塊状に検出されているため、カマドが右に曲っていた可能性もある。また、カマドの右側には黒褐色土とにぶい黄褐色土がテラス状に伸びており、その上面から被熱面が確認された。このことから、煙道が右に曲り住居の北東隅から煙を出していた可能性もある。カマド構築土は固くしまった灰白色砂質土である。

出土土器（図版40、第40図）

1～7は高坏である。1・2は坏部で、屈曲部で明確に段が付き、口縁は緩やかに外反する。1は中央に脚部を差し込んで、ナデつけることで接合していたものと考えられ、その接合部で剥落している。3は脚部で、直線的にハ字状に開いた後、逆S字状に一度膨らんでから、裾にいた



第40図 28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

る。内面にはシボリの痕跡が残る。4は坏の屈曲点で剥落しており、脚部は緩やかに開く。内面にはシボリの痕跡が残る。4～6は充填法の痕跡が残る。7は頸部で、段が付かず外反するものである。1と同様の接合方法であったと考えられる。8は甗である。口縁部付近のみ遺存しており、直線的な口縁である。胴部に取手を貼りつけた痕跡が見られ、取手は剥落している。内外面ともにハケ目を施す。9～11は弥生時代終末～古墳時代初頭の混入品か。9は二重口縁壺で屈曲した後外反する。10は器台もしくは脚付き鉢の脚部か。脚は直線的に伸び、外面にハケ目が残る。11は平底の鉢か。口縁はやや内湾し、外面に工具の痕跡が少し残る。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

SX02 (第41図)

調査区のほぼ中央に位置し、住居群の西側に位置する。5・6号竪穴住居跡を切る。規模は東西430cm、南北290cm、深さ5cmである。大きさ、位置から考えて住居である可能性が高いと考えられる。床面から支柱穴は確認できなかった。

出土土器 (第42図)

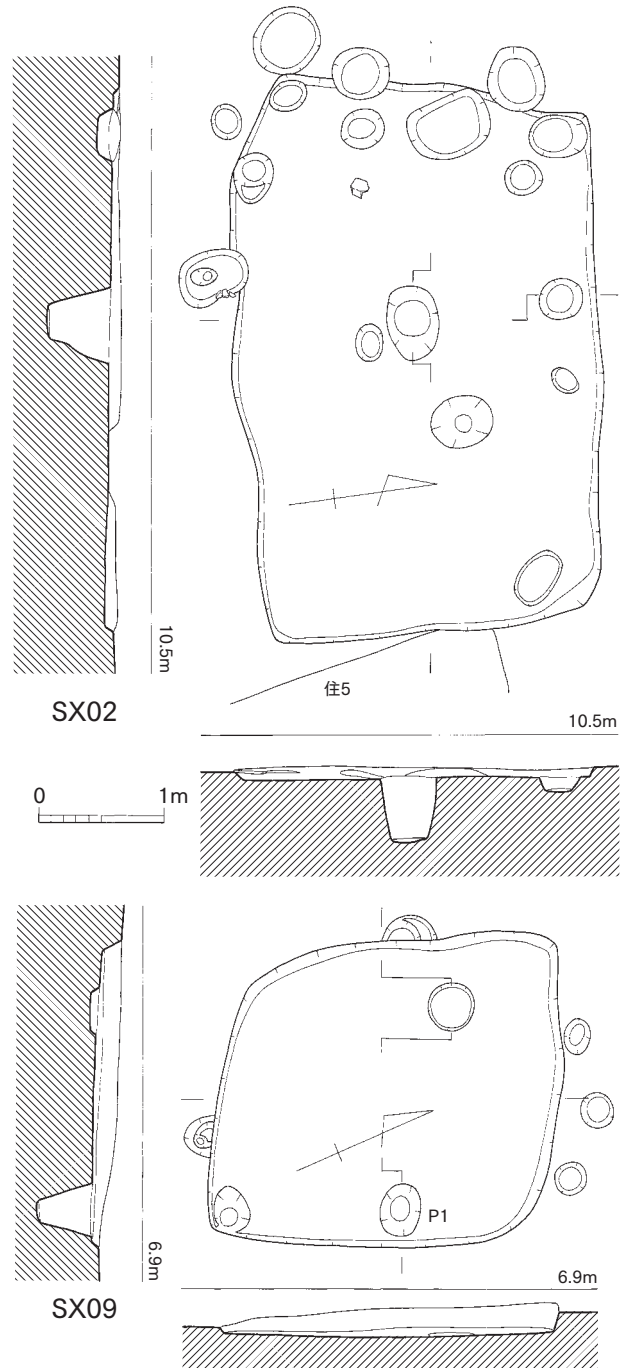
1・2は須恵器の坏蓋である。かえりは小さく、受け部との高さの差はほとんどない。内外面ともに回転ナデを施す。3は壺である。

口縁はやや外湾し、口唇部を肥厚させる。頸部外面にハケ目、他はナデを施す。

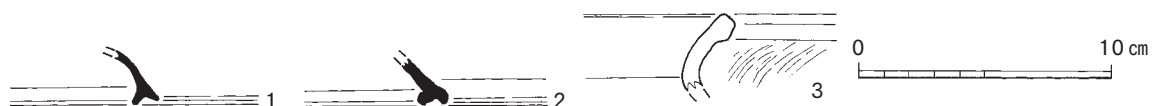
切り合いと出土遺物から、古墳時代末の住居跡と考えられる。

SX09 (第41図)

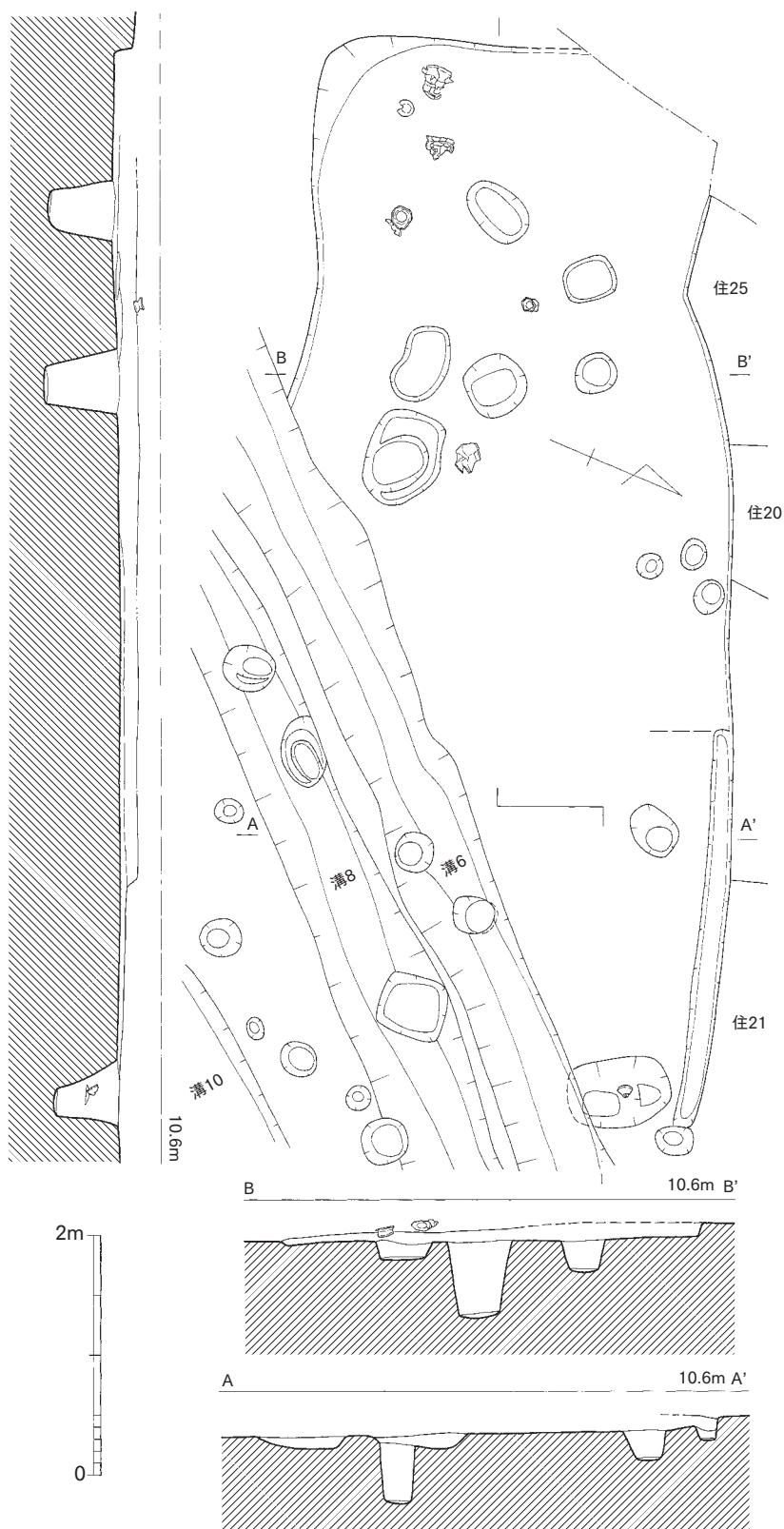
調査区の南端に位置する。規模は南北270cm、東西250cm、深さ5cmである。多少小さいものの、



第41図 SX02・09実測図 (1/60)



第42図 SX02出土土器実測図 (1/3)



第43図 SX07実測図 (1/60)

他調査区ではこれくらいの大きさのものも出ているため住居の可能性はある。床面からピットが二つ検出されたものの、西側のものは浅く、柱穴になるか不明である。

図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。

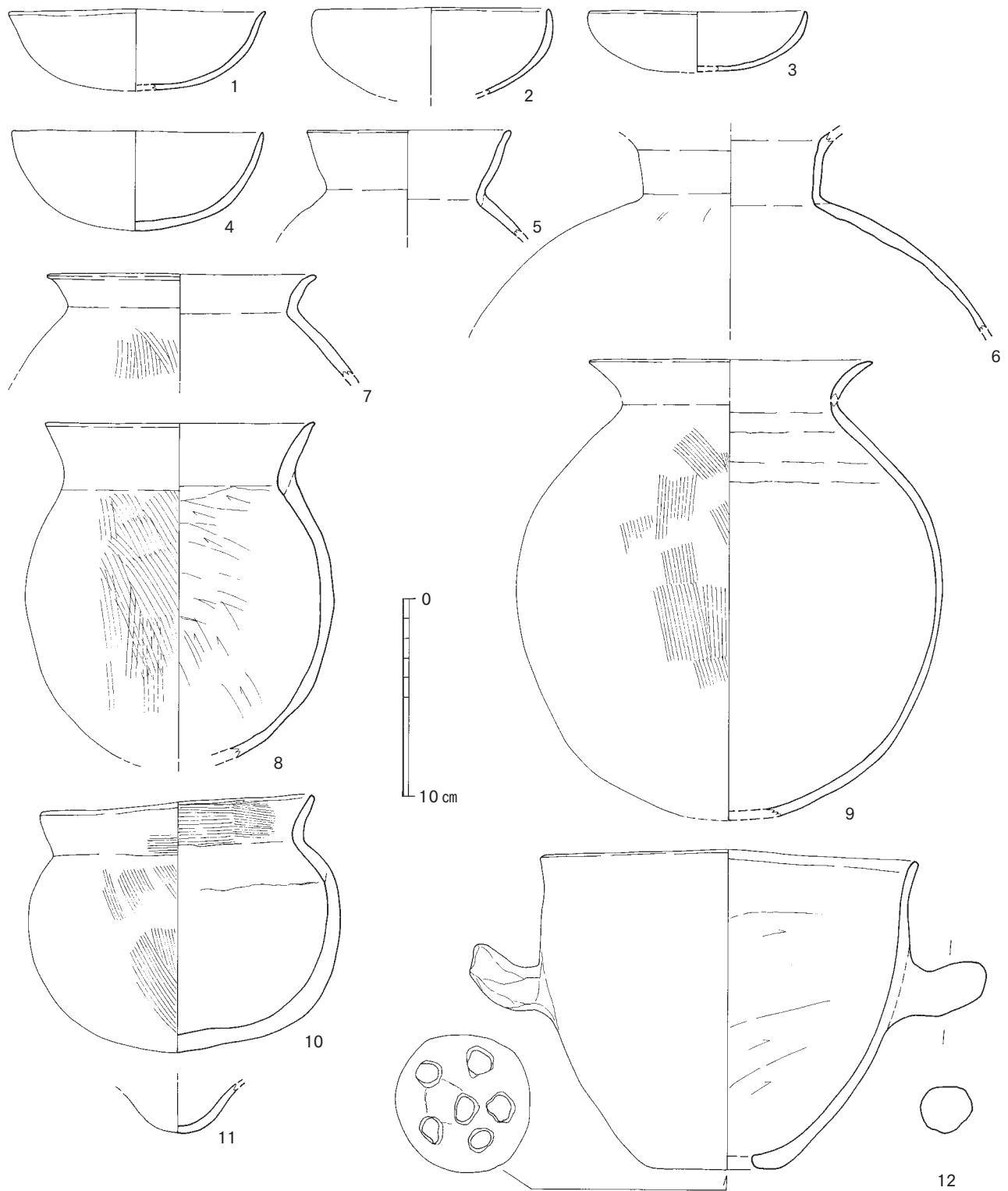
出土した土器片から、古墳時代に属するものと考えられる。

SX07 (図版17、第43図)

調査区の北西側に位置し、20・21・25号竪穴住居跡を切り、6・8号溝に切られる。規模は東西890cm、南北370cm、深さ10～15cmである。北東側には辺に沿って、長さ340cmの溝が検出されており、壁溝と思われる。西側では床面から若干浮いてはいるが、壺と甑が重なった状態で出土しており、使用時のままであると考えられる。全体に黒褐色土が認められたため、1段ずつ下げていったが、浅かったために、上面で切り合いを確認できなかった。しかし、その大きさから考えて、住居跡が少なくとも2軒は重なっていたと考えられる。特に北東部の壁溝と考えられる溝の部分で1軒、さらに西側の甑等が出土している場所付近にカマドがあったと考えられ、そこにも1軒の住居跡があったと考えられる。

出土土器 (図版40、第44・82図)

1～4は坏である。2・3は口縁部が内湾するが、1・4は外反する。5～6は壺である。5は口縁が直線的に外反し、6は直立した後外反する。ともに布留式期のものか。7～10は甕である。7



第44図 SX07出土土器実測図(1/3)

～9は口縁部がわずかに外湾し、なで肩の器形になる。7は胴部外面にハケ目、8は外面ハケ目、内面ケズリ、9は外面ハケ目を施す。8・9は外面下部に黒斑が認められる。10は、口縁は直線的で器高が8.2cmと小さい。12の甑の下に重なった状態で出土しており、被熱の痕跡が見られることから甕とした。外面ハケ目、内面口縁部にハケ目、胴部にナデを施す。11は鉢か。大きさから考えるとミニチュアになる可能性もある。底は尖り気味になり、磨滅のため調整は不明。12は甑である。口縁部は直立になり端のみわずかに外反する。取手は上方にやや反った形のものを

胴部に接合している。底部は6.7cmの平底で6孔を穿つ。このほか不明土製品が出土している。

切り合いと出土遺物から、西側は古墳時代後期の住居跡と考えられる。東側は若干弥生時代終末期の土器が出土しており、2時期の住居が重なっている可能性もある。

(2) 1号掘立柱建物(図版17、第45図)

今回報告する範囲では1棟のみ認識できた。調査区の北東側に位置し、2間×5間以上の建物である。建物規模は桁間175～210cm、梁間175～185cm、妻360cm、平785cm以上である。柱穴は径50～75cm程度の円形で、残存している深さは35～55cmである。柱痕は確認できたもので30cmほどである。

図化に耐える資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。

出土した土器片から、古墳時代に属するものと考えられる。

(3) 土坑

今回の調査区では26基検出した。性格は井戸が8基、土壌墓1基があり、その他は性格不明のものである。番号は調査した順番につけているが、ここでは性格不明のもの、井戸と分けて記述する。

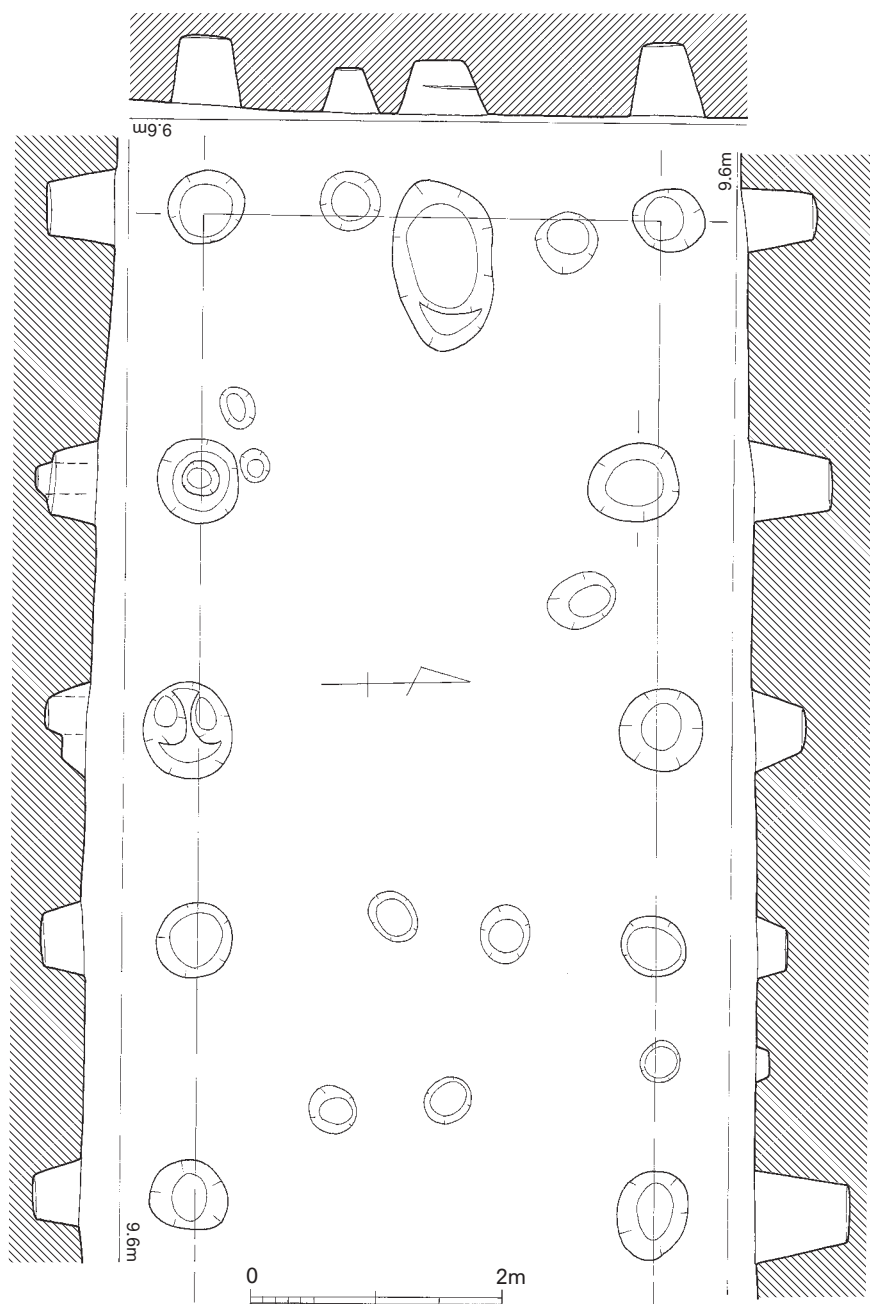
i) 土坑

1号土坑(図版18、第46図)

調査区の南西側に位置し、2号溝に切られる。規模は東西90cm、南北80cm、深さ15～30cmで隅丸方形である。土坑のほぼ中央に5cmほど浮いた状態で土器が出土している。

出土土器(第50図)

1は土師器の鍋になるか。器壁は厚く、口縁部は端部でやや外反する。磨滅のため調整は不明瞭



第45図 1号掘立柱建物実測図(1/60)

だが、内外面ともにナデか。胎土は非常に悪く、1～2mmほどの白色粗砂が多量に含まれる。外面に煤が付着する。

切り合いと出土遺物から、中世前期の土坑と考えられる。

2号土坑（図版18、第46図）

調査区の南西側に位置している。規模は径65cm、深さ15cmで円形である。土坑のほぼ中央に10cmほど浮いた状態で土器が出土している。

出土土器（第50図）

2は甕である。口縁部は外反し、胴はなで肩形となる。口縁部外面ナデ、そのほかはハケ目が残る。

出土遺物から、古墳時代初頭の土坑と考えられる。

3号土坑（図版18、第46図）

調査区の中央北よりに位置し、26号溝に切られる。規模は東西180cm、南北155cm、深さ40cmで、不定形である。西側にはテラスがあり、北東側に径100cm内外の落ち込みがある。

出土土器（第50図）

3は須恵器の坏である。高台が外方に踏ん張り、底径は小さい。外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデを施す。4は須恵器の高坏である。頸部のみが遺存しており、外面は回転ナデ、内面中央部は不定方向ナデを施す。5は須恵器の坏蓋である。器高は低く、口縁端はやや肥厚する。つまみがつくものと考えられる。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向ナデ、他は回転ナデを施す。6は土師器の甕である。磨滅のため調整は不明である。7は平瓦である。内面には布目跡が残る、外面にはナデを施す。

切り合いと出土遺物から、8世紀の土坑と考えられる。

4号土坑（図版19、第46図）

調査区の中央東より、24号溝の先端に位置する。規模は東西110cm、南北120cm、深さ60cmである。土坑の上面は円形であるが、15cmほど下部は、60cm×80cmの長方形を呈する。埋土は円形部分がにぶい黄褐色砂質土、方形部分の上層が暗褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。出土遺物はなく、時期は不明だが、24号溝の先端部分にあることから、溜め枘のような機能を持っていた可能性もある。

5号土坑（図版19、第46図）

調査区の南側に位置し、25号溝に切られる。規模は東西80cm、南北120cm、深さ45cmで隅丸方形ある。埋土は黒褐色土粘質土である。特に上層では土器小片が多く出土した。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土した土器片から、古墳時代～古代に属するものと考えられる。

6号土坑（第46図）

調査区の中央東よりに位置し、6・27号溝に囲まれる。規模は東西70cm、南北110cm、深さ20cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。

7号土坑（図版20、第47図）

調査区の南側、25号溝の角に位置している。規模は入口部が径90cm、床面径240cm、深さ200cmである。調査中に入口部が自然と開口し、その存在を認識した。当初は自然現象に伴うものと考えていたが、九州大学理学研究院地球惑星科学部門固体地球惑星科学の下山正一先生に現地指導を頂いたところ、遺構の可能性が高いと判明した。形成過程としては、地下水位の上下動によりもともと遺構だった弱い土が崩落していき、空洞となったのではないかという知見をいただいた。壁面に削ったような痕跡が残っており、もともと袋状であったものと考えられる。南側にあるピットは重機で断ち割ったため確認できなかったが、水位の上下動が土坑と連動すること、埋土が同じであることから一連の遺構の可能性もある。出土遺物はなく、時期は不明だが、地下式土坑のようなものになるか。

14号土坑（第48図）

調査区の東側に位置し、17号堅穴住居跡を切る。規模は東西105cm、南北385cm、深さ20cmの長楕円形土坑である。土坑のほぼ中央より北側はテラスが付き、西側の最下面は160×70cmである。埋土は暗褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器・青磁の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、中世に属するものか。

15号土坑（第48図）

調査区の南東側に位置し、39号溝を切る。規模は東西125cm、南北190cm、深さ5～20cmの方形土坑である。上面からピットが4つ切り込んでいる。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器・陶磁器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、中世に属するものか。

16号土坑（第48図）

調査区の東端に位置している。規模は東西60cm、南北150cm、深さ20cmの方形土坑である。北側から3段のテラスがあり、最下面は径40cm程度である。

出土土器（第50図）

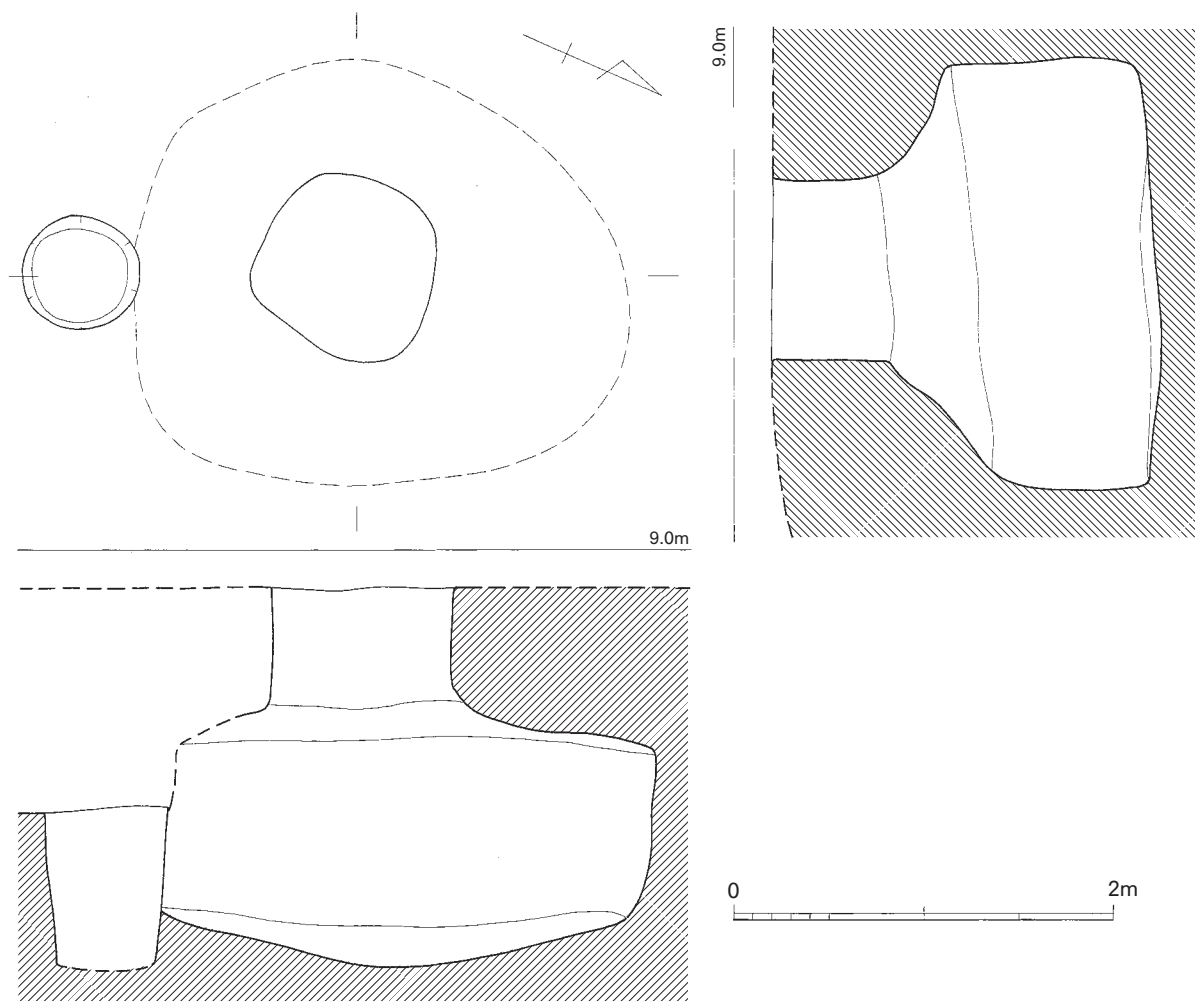
8は土師器の甕である。口縁は外反し、高さ0.2cmの高台がつく。底部内面は不定方向のナデ、外面中央部はナデ、他は回転ナデを施す。出土遺物から、古代末～中世の土坑か。

17号土坑（第48図）

調査区の東側に位置している。規模は東西240cm、南北120cm、深さ5～30cmの楕円形土坑である。

出土土器（第50図）

9は瓦質土器の甕である。口縁部のみが遺存しており、強く屈曲する。外面に横ナデの痕跡が



第47図 7号土坑実測図 (1/40)

残る。10は瓦質土器の三足器の足か。全面ナデ調整を施す。11は陶器の壺である。口縁部は直立し、肩に向かって開いていく。全面に施釉され、口唇部には自然釉が認められる。切り合いと出土遺物から、中世の土坑と考えられる。

18号土坑

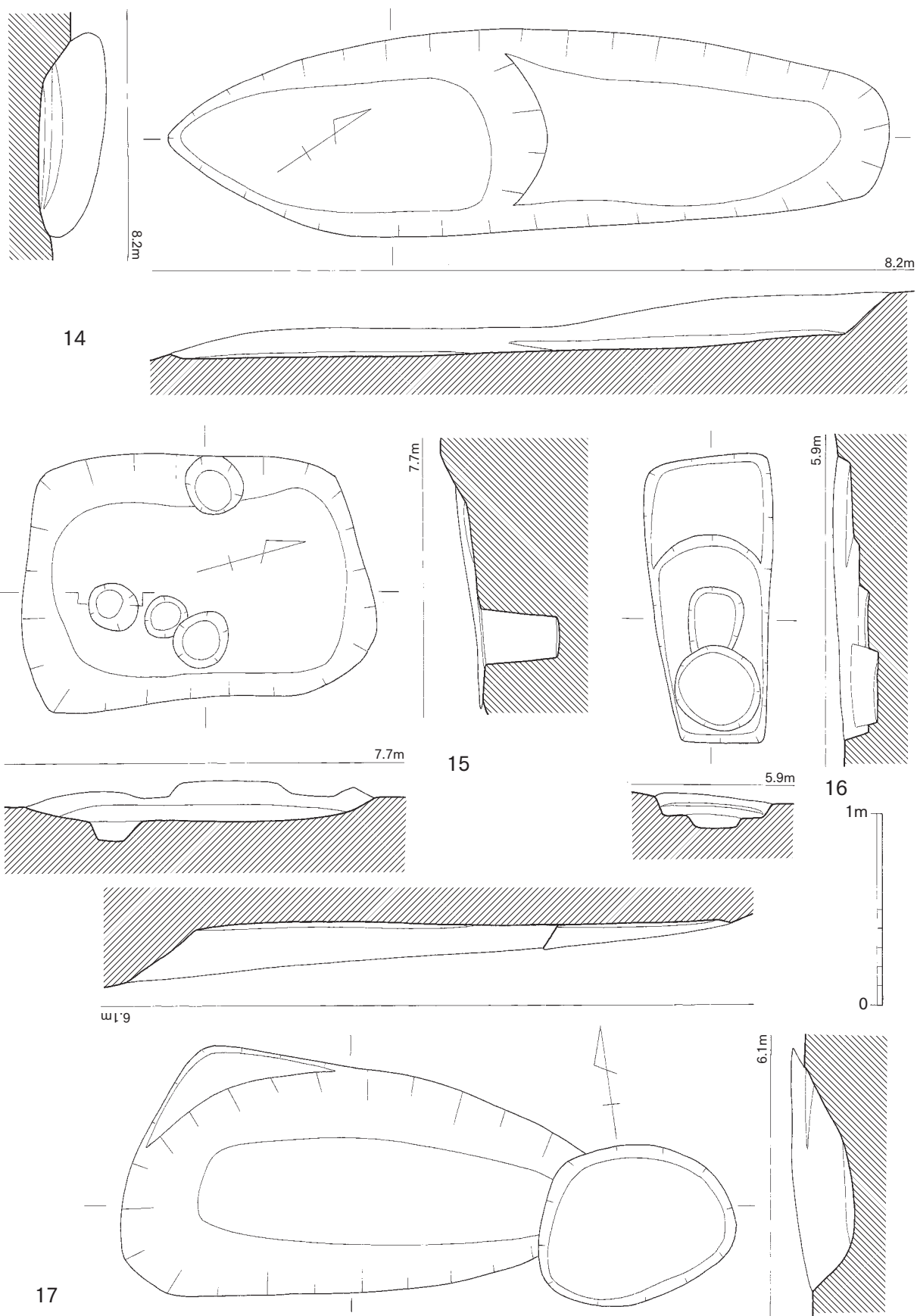
遺構配置図への記入漏れで、どこに存在していた土坑であるか判別できない。軒丸瓦が出土しており、痛恨の極みである。

出土土器 (図版45、第50図)

12は軒丸瓦である。一側面と上面が残っており半円の1/3ほどが残る。端部は未調整、外面は磨滅のため調整不明、内面は布目痕をナデ消しているか。出土遺物から、8世紀の土坑と考えられる。

19号土坑 (第49図)

調査区の南側に位置し、27号竪穴住居跡の下から検出されており、床下掘り込みの可能性もある。規模は東西110cm、南北135cm、深さ40cmの円形土坑である。埋土は暗褐色粘質土である。



第48図 14～17号土坑実測図 (1/30)

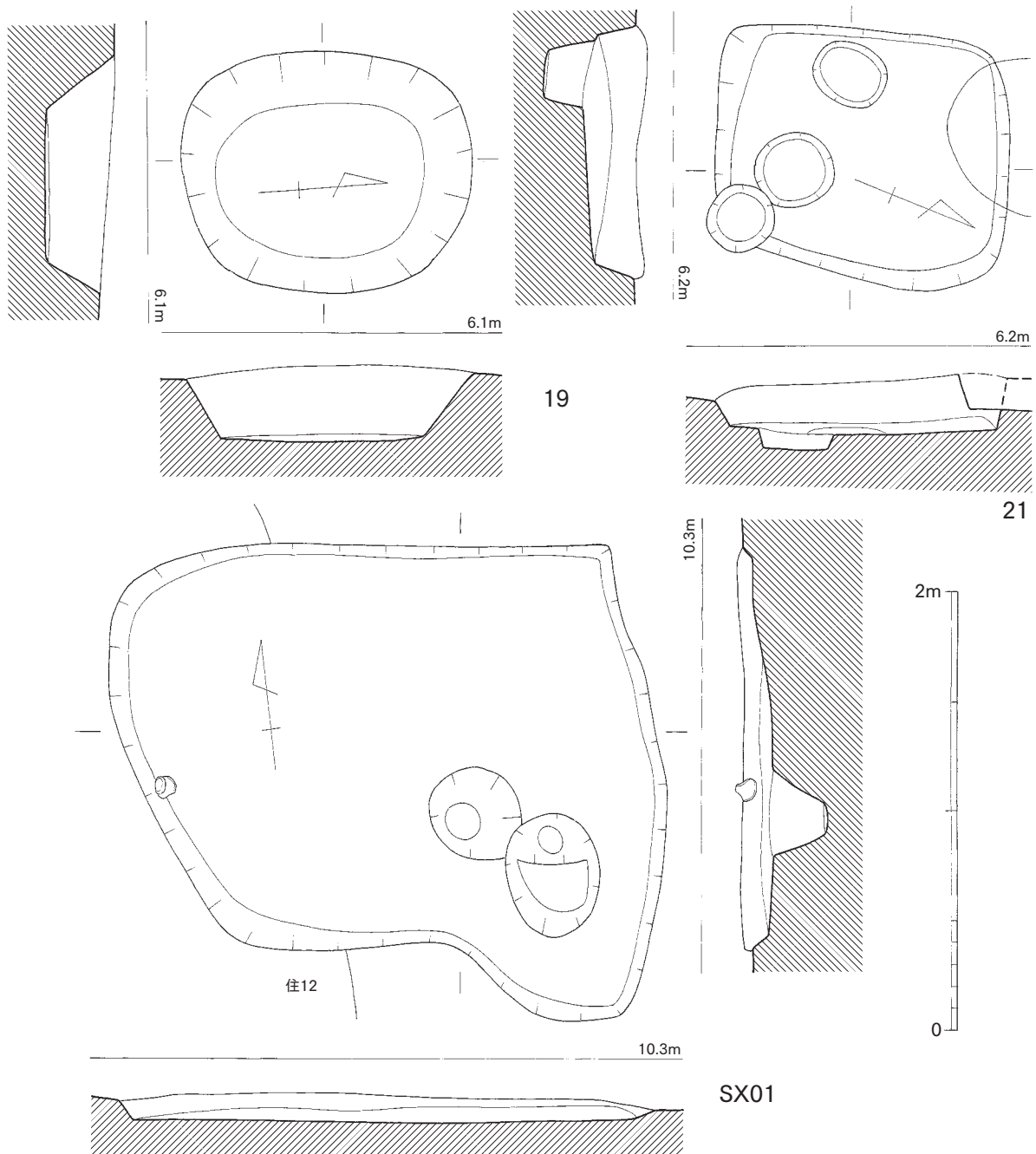
出土土器 (第50図)

13は土師器の甕である。器壁は薄く、口縁は弱く屈曲し、外反する。切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の土坑と考えられる。

20号土坑 (第57図)

調査区の南側に位置し、27号竪穴住居跡の下から検出されており、床下掘り込みの可能性もある。12号土坑に切られる。規模は東西110 + a cm、南北150 + a cm、深さ30cmである。埋土は橙色土が斑に混ざった暗褐色粘質土である。

図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、古墳

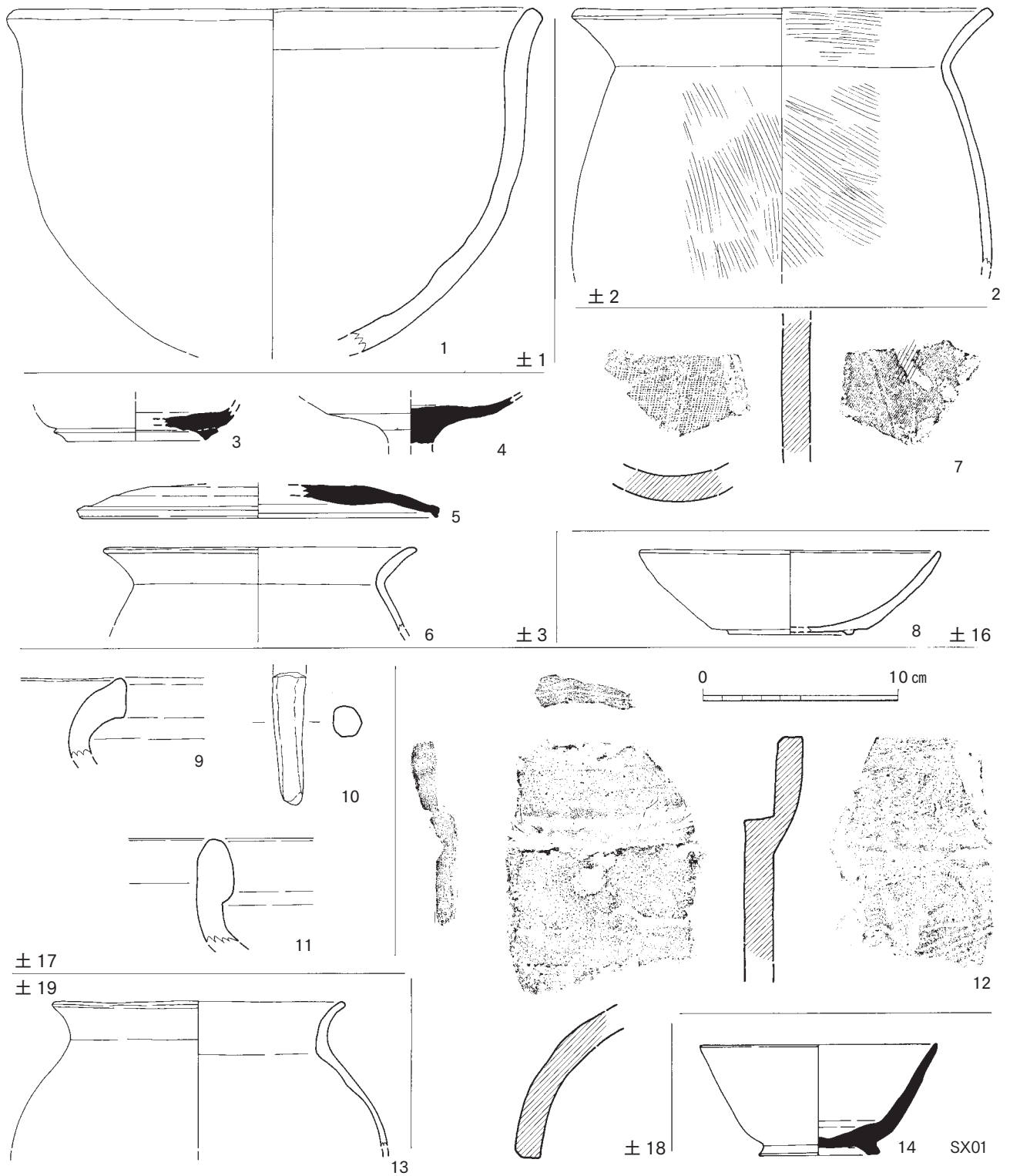


第49図 19・21号土坑・SX01実測図 (1/30)

時代後期に属するものか。

21号土坑（第49図）

調査区の南側に位置し、27号竪穴住居跡の下から検出されており、床下掘り込みの可能性もある。規模は東西115cm、南北135cm、深さ25cmの方形土坑である。床面に2基のピットが検出



第50図 1・2・3・16～19号土坑・SX01出土土器実測図(1/3)

された。埋土は黄橙色粘質土が筋状に入った黒褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。時期は不明である。

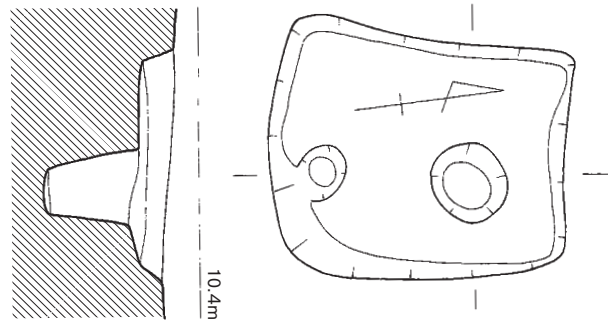
SX01 (第49図)

調査区の中央北よりに位置し、12号竪穴住居跡を切る。規模は東西250cm、南北210cm、深さ10cmの不定形土坑である。床面に1基のピットが検出され、西側の床面からは須恵器の坏が出土している。

出土土器 (第50図)

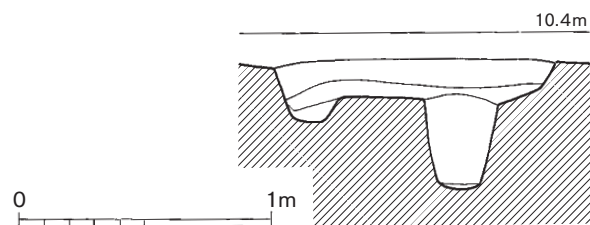
14は須恵器の坏である。口縁は直線的に伸び、高さ0.5cmの高台が付く。底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。

切り合いと出土遺物から、8世紀の土坑と考えられる。



SX04 (第51図)

調査区の北西側に位置している。規模は東西95cm、南北115cm、深さ15cmの方形土坑である。床面から2基のピットが出土している。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代に属するものか。



第51図 SX04実測図 (1/30)

ii) 井戸

井戸は8基検出されており、古代と中世に属するものに分かれる。ほぼ全てが南東側の斜面上に位置しており、比較的標高の高い部分にある井戸は溜め井戸も含まれる。

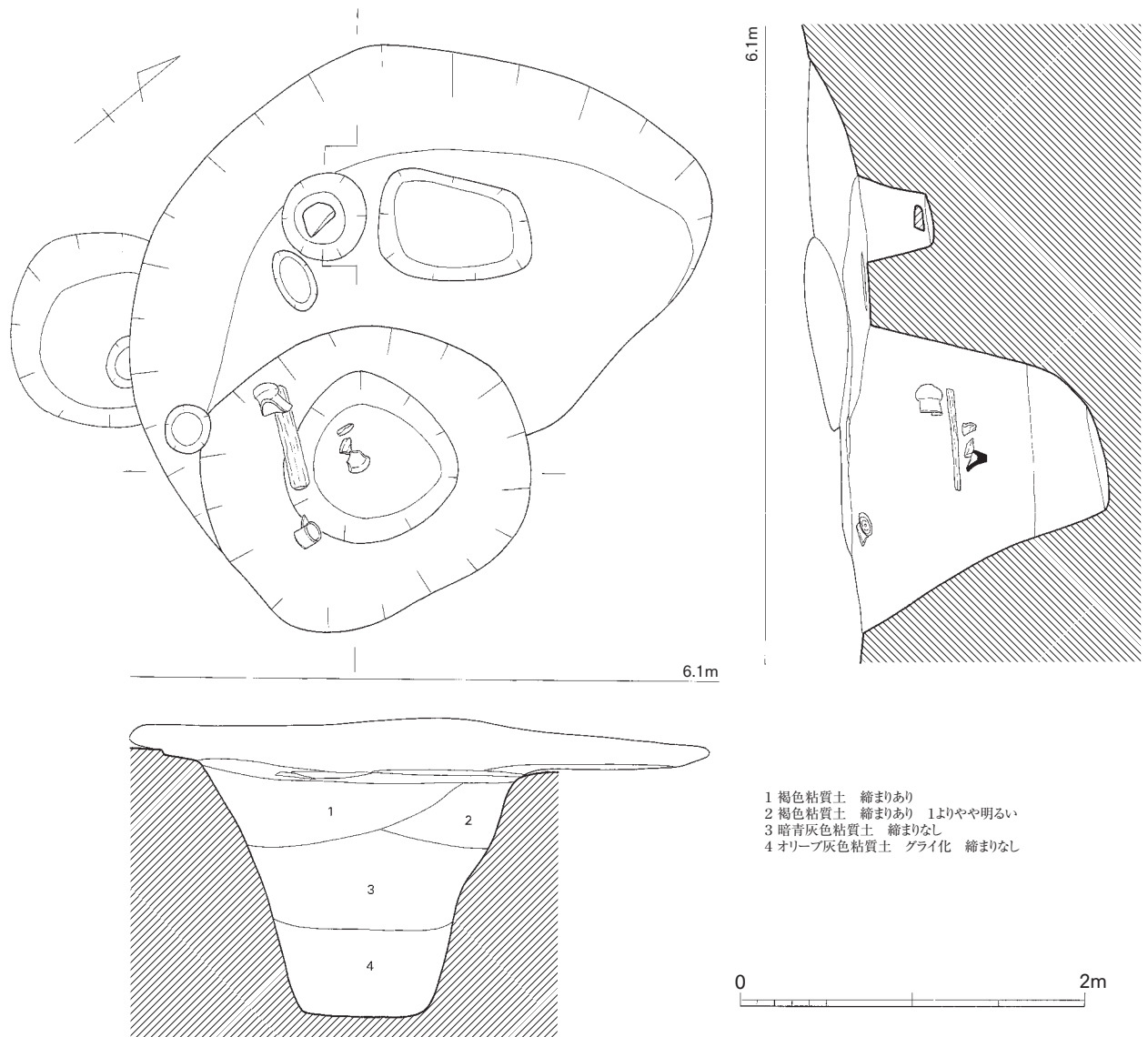
8号土坑 (図版20・21、第52図)

調査区の南東側斜面上に位置する。規模は井戸部分が190×170cmの円形、上面の窪地部分を入れると東西南北ともに340cmとなる。深さは140cmで、最深部の標高は4.1mである。調査中は湧水が著しく見られた。窪地部分には3基のピットが検出され、井戸部分の中層からは土器や木材が出土している。埋土は上層が褐色土、中層が暗青灰色土、下層がややグライ化したオリーブ灰色粘質土である。

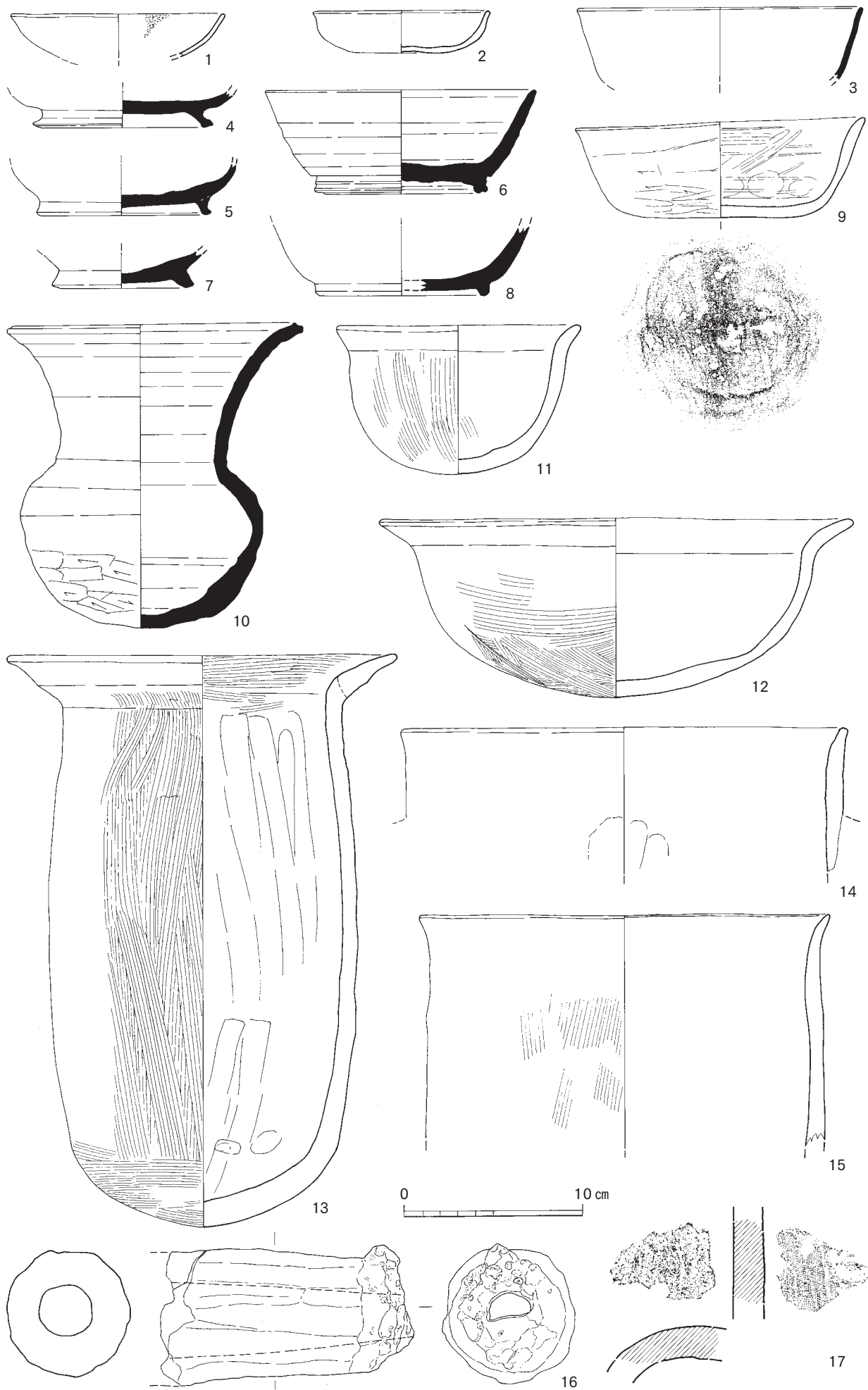
出土遺物 (図版40・41、第53・54図)

1～6・8・9は坏で、1・2・7・8は上面の窪地出土である。1・2・9は土師器の坏である。9は口縁がわずかに外湾し、底部は平底に近い。内面はミガキ、外面にはケズリの後ミガキを施す。底部には「×」のヘラ記号様の痕跡が見られる。3～8は須恵器の坏である。4・5は高台が開き、端部が外方に突き出す。一方、6・8は高台が短く踏ん張るタイプである。底部内面および外面には不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。7・10は須恵器の壺である。7は底部のみが遺存しており、外面には灰かぶりがみられる。10は中層から出土し、口縁部の一部を除いて完形品であった。頸

部径は9.5cmで、胴部最大径は13.5cmである。底部内外面には不定方向のナデ、胴部下端にはケズリ、他は回転ナデを施す。部分的に灰かぶりが見られる。11・12は土師器の鉢である。11は小型の鉢で口縁部は外湾する。内面は磨滅のため不明だが、外面には粗いハケ目を施す。12は浅鉢である。胴部内面はナデ、外面はハケ目を施し、外面には広く煤が付着する。鍋として使用したものか。13は甕である。13は中層出土で、ほぼ完形である。口縁部を貼り付けて外反させており、その影響で頸部は厚くなる。外面上部は縦方向のハケ目、口縁部内面および外面底部付近は横方向のハケ目、胴部内面は強いナデを施す。外面には煤が付着する。14・15は甑である。ともに口縁部のみが遺存している。口縁は直立し端部がやや外反する。磨滅のため調整は不明瞭だが、15の外面にはハケ目の痕跡が残る。16は甕の羽口である。径7.5cm、内径は2.4～4.2cmである。先端部は被熱が著しく、鉄が付着している。17は丸瓦の破片である。外面はナデを施し、内面には布目痕が認められる。19は平瓦の端部である。端部ならびに外面はナデを施し、内面には布目痕が残る。18は須恵器の坏で墨書土器である。高台は小さく、短い。口縁部はやや外反し、端部がわずかに外湾する。底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。底部内面はわずかに擦過痕が見られ、外周部分がわずかに凹むことから、転用硯と考えられる。底部外面にはやや



第52図 8号土坑実測図 (1/40)



第53图 8号土坑出土土器实测图 (1/3)

左によって「京郡物太」と墨書がなされているが、文字の解釈等は後に述べることにする。また、近隣の国交省用地内から出土した「京都大」墨書土器（報告書未刊行）とは書き方・字体が異なる。20～23は木器である。20は蓆編鍾である。片方のみが遺存しており、くびれ部には削った痕跡が残る。21は何かの台である。2/5ほどしか残存していないものの、台形をしており、裾部は突出する。上面には2条の凹線が円形に刻まれており、何らかのしるしであったと考えられる。土器その他を製作する際の置き台か。22・23は燃えさしである。22は上下端ともに、23は上面が炭化している。22は方形に加工しているが、23は径2.8cmの枝をそのまま使用している。このほかにも、炭化した部分が見える棒状木製品がいくつか出土している。

切り合いと出土遺物から、7世紀後半～8世紀の井戸と考えられる。

9号土坑（図版21・22、第55図）

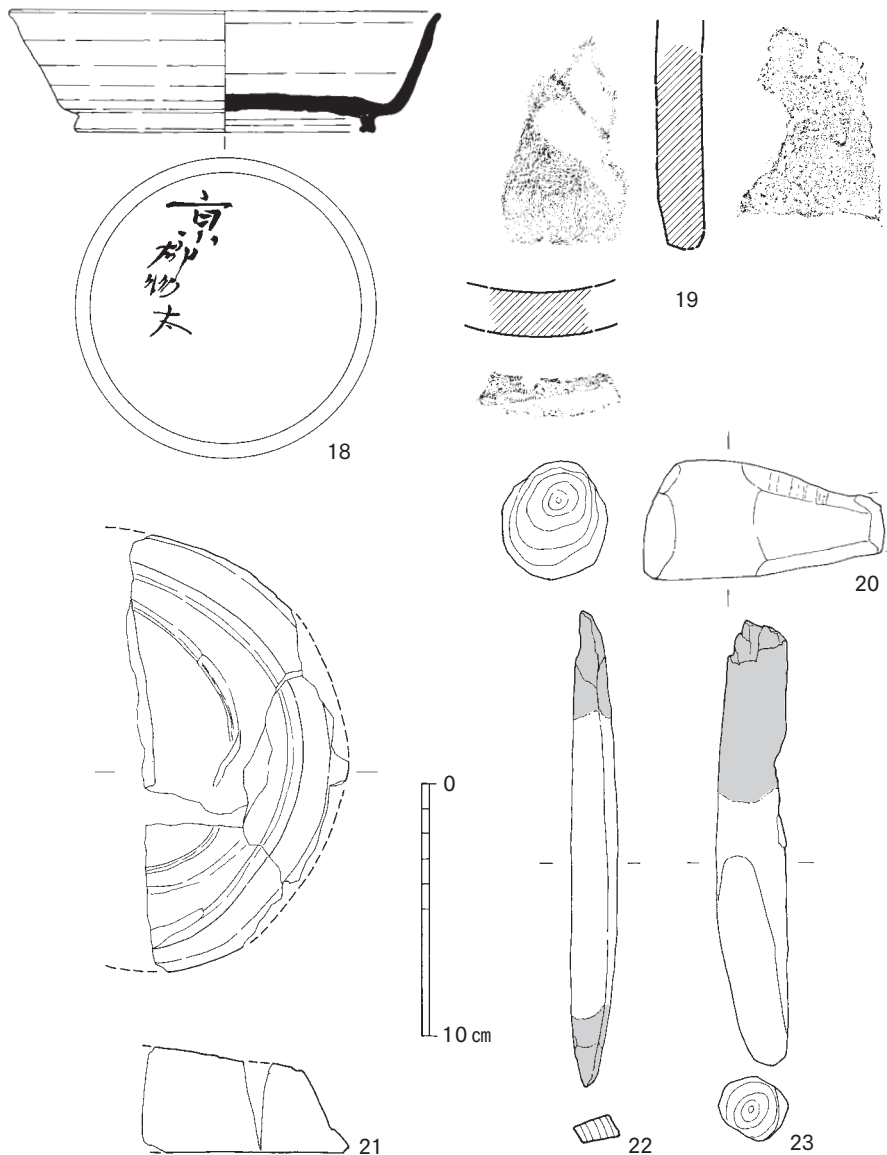
調査区の南東側斜面上に位置し、22号土坑を切る。規模は東西380cm、南北300cm、深さ180cmの円形土坑である。最深部の標高は4.1mで、調査中は湧水が見られた。全体が播鉢状をしており、

床面に1基のピットが検出された。埋土は上層が褐色土、中層が暗青灰色土、下層がややグライ化したオリブ灰色粘質土である。

出土土器（図版41・45、第58・83図）

1～4は碗である。1は玉縁口縁を持つ白磁である。口縁のみが残存している。2・4は瓦器碗である。高台がやや外向きに付き、口縁部は直線的でやや内湾する。磨滅のため調整は不明。3は青磁である。外面は回転ナデを施し、内面には文様を施す。このほか砥石が出土している。

切り合いと出土遺物から、中世前期の井戸と考えられる。



第54図 8号土坑出土遺物実測図 (1/3)

10号土坑（図版22、第56図）

調査区の南東側斜面上に位置している。規模は径125～135cm、深さ275cmの円形土坑である。最深部の標高は3.1mで調査中は湧水が見られた。中央部がややくびれる。埋土は上層が褐色土、中層が黒褐色土と暗青灰色土、下層がグライ化した黒褐色粘質土である。

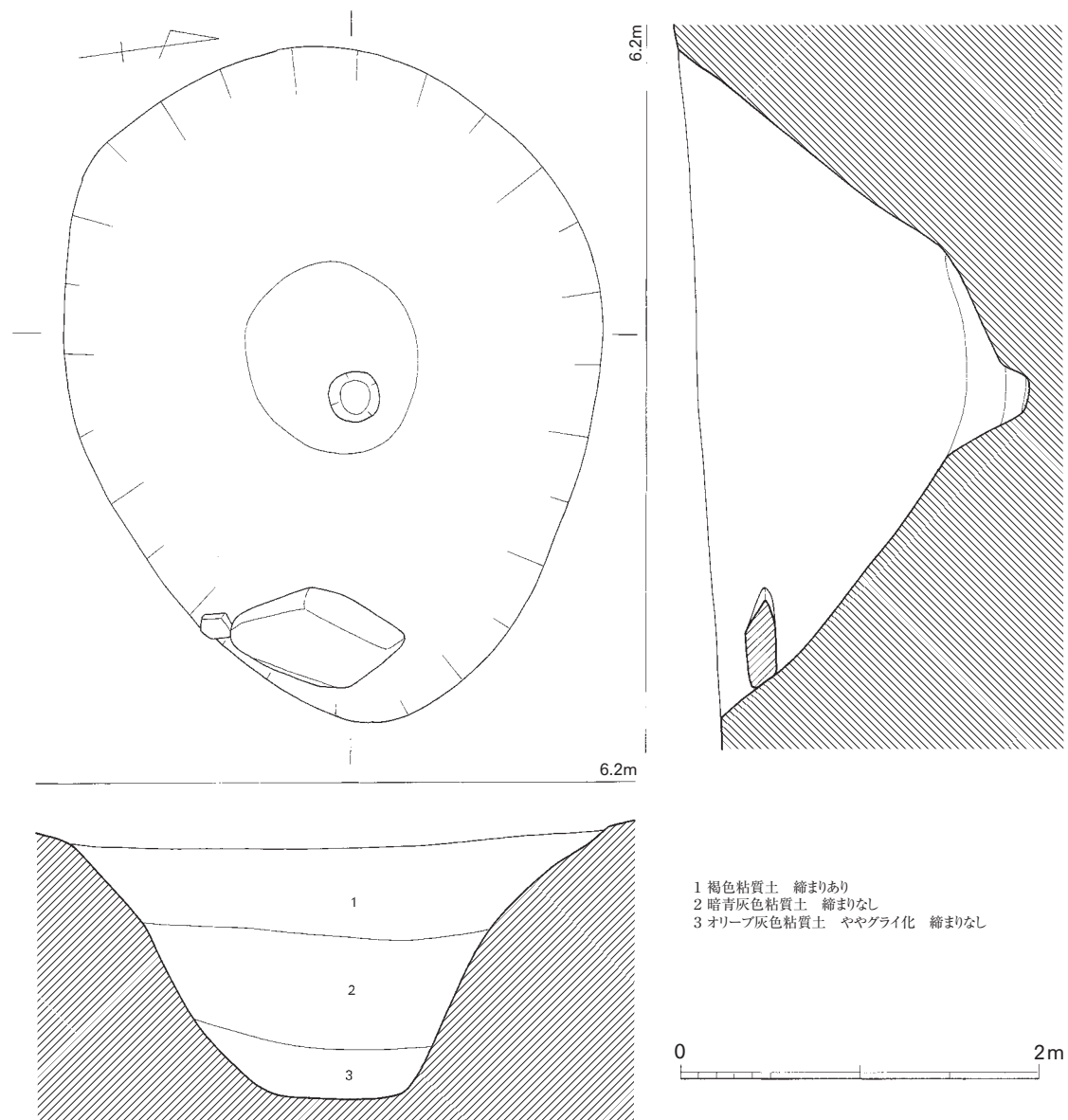
出土土器（図版42、第58図）

5・6は土師器の皿である。ともに底部に糸切りの痕跡が残り、口縁部は内湾する。7～10は埴である。7・8は土師器で低い高台が付く。8は内外面ともにミガキを施す。7は高台を持たない平底で口縁部はやや内湾する。10は高い高台をもち、やや外方に突出する。

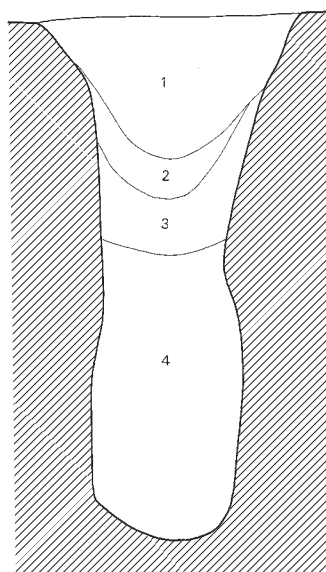
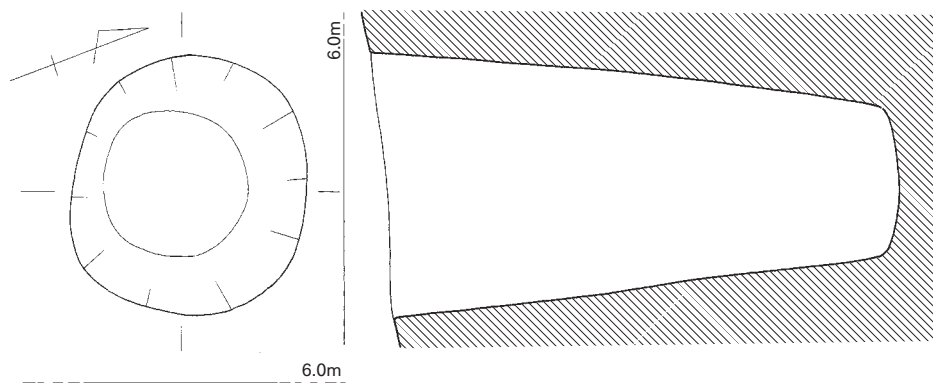
切り合いと出土遺物から、12世紀の井戸と考えられる。

11号土坑（図版23、第52図）

調査区の西側やや南よりの斜面上に位置している。規模は径170cm、深さ130cmの円形土坑で

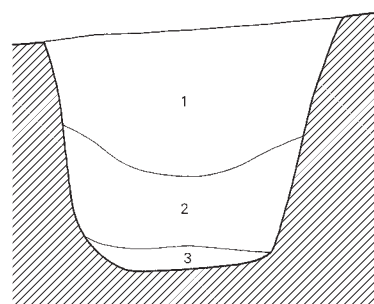
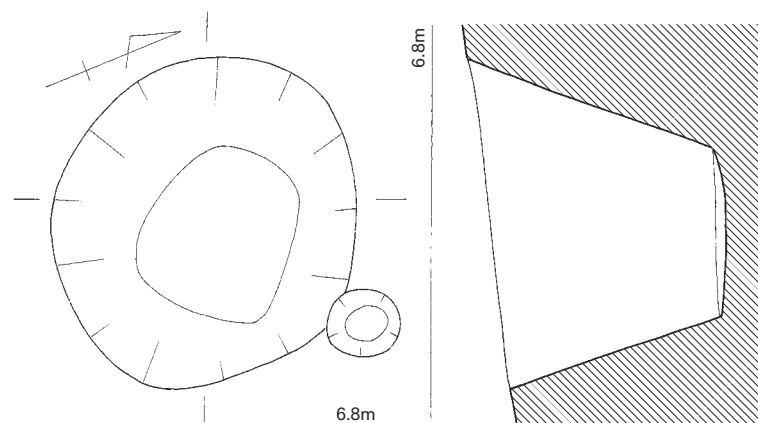
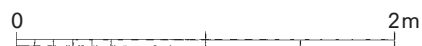


第55図 9号土坑実測図（1/40）



10

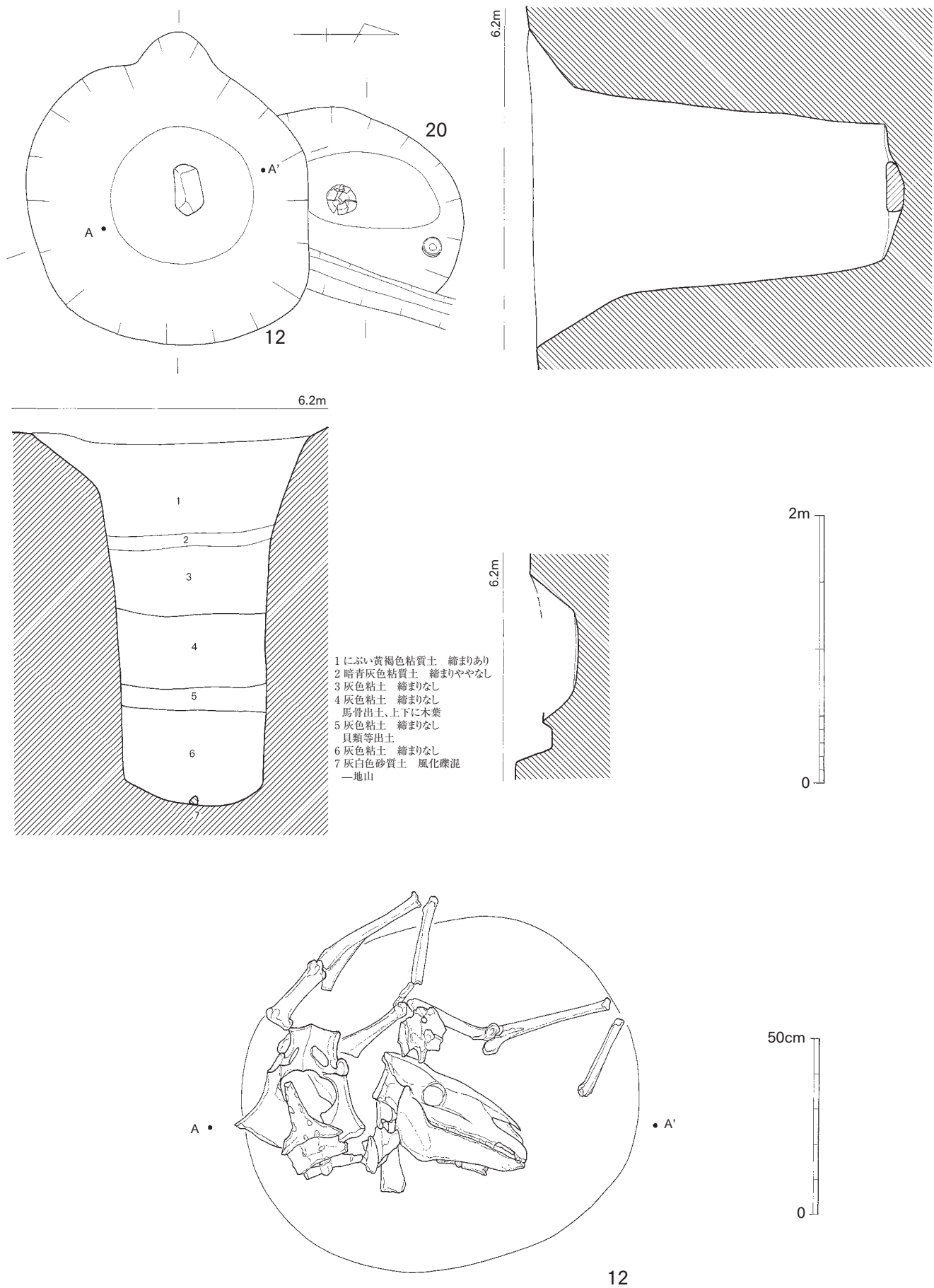
- 1 褐色粘質土 締まりあり
- 2 黒褐色粘質土 締まりあり 浅黄橙色土ブロック混
- 3 暗青灰色粘質土 締まりなし
- 4 黒褐色粘質土 グライ化 締まりなし



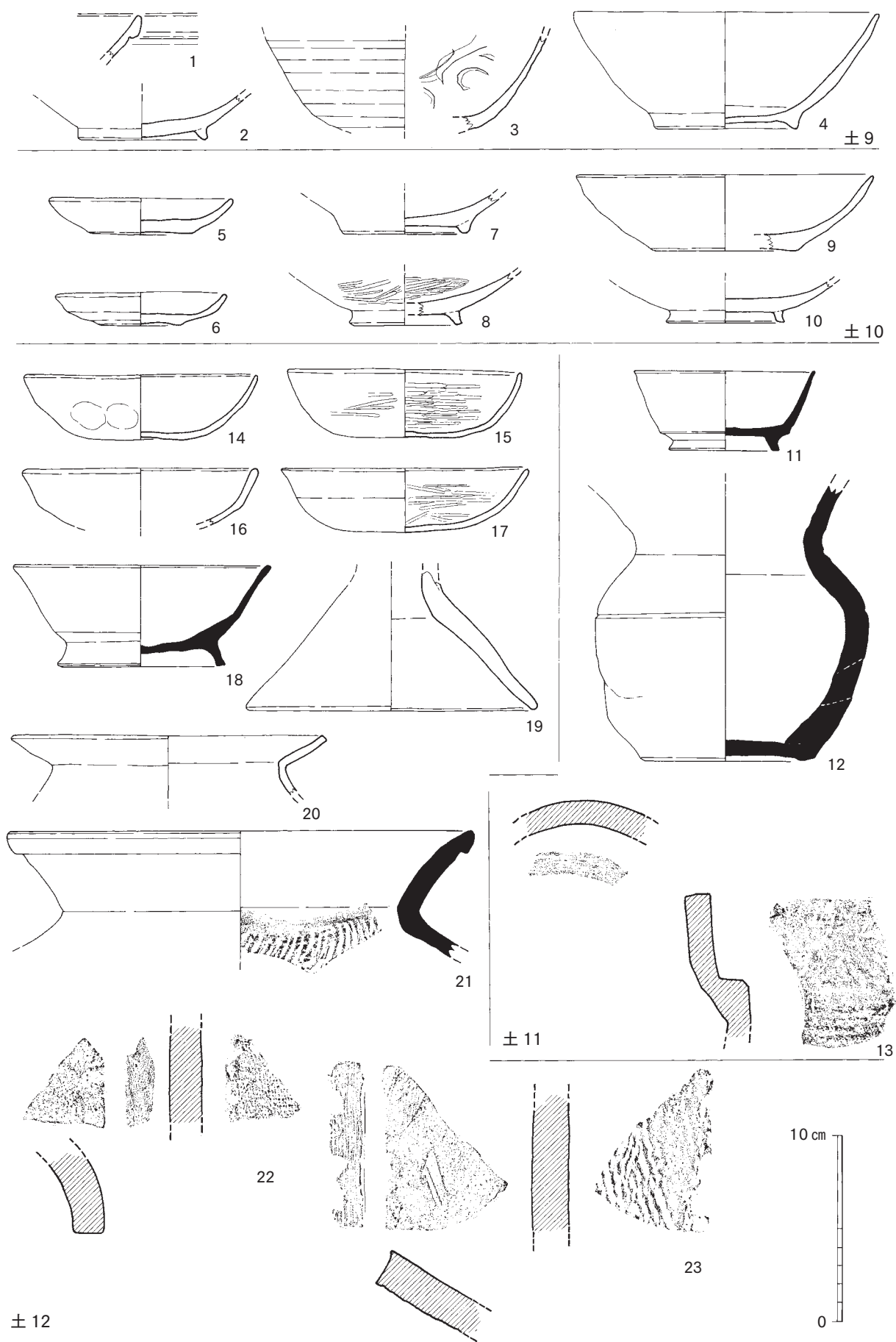
11

- 1 灰褐色粘質土 締まりあり
- 2 黒褐色粘質土 締まりやや弱い
- 3 暗青灰色粘質土 締まりなし

第56図 10・11号土坑実測図 (1/40)



第57図 12・20号土坑、馬骨出土状況実測図 (1/40、1/15)



第58图 9~12号土坑出土土器实测图 (1/3)

ある。最深部の標高は5.3mで水湧きはなく、溜め井戸と考えられる。埋土は上層が灰褐色土、中層が黒褐色土、下層が暗青灰色粘質土である。

出土土器 (図版42、第58図)

11は須恵器の坏である。高台は長く、外方に伸びる。12は壺である。底部は径9cmの平底になる。底部内面に不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。13は丸瓦の端部である。端部は未調整、外面にナデ、内面に布目痕が残る。

切り合いと出土遺物から、7世紀後半～8世紀の土坑と考えられる。

12号土坑 (図版23・24、第57図)

調査区の南東側に位置し、27号堅穴住居跡、20号土坑を切る。規模は径210cm、深さ280cmの円形土坑である。最深部の標高は3.25mで、調査時は著しく湧水が見られた。表土から130cmのところからは、馬の骨が出土しており、上下からは木葉が多く出土した。馬骨は半截の際に不注意のため一部取り上げてしまったものの、全身が残っているものと考えられる。また表土下190cmのところからはオキシジミ・シオフキ・タニシ・アサリ・ハマグリ・イシガイ科・マテガイといった淡水および海水性両方の貝が出土しており、貝中から犬の頭骨、センダンの種子が出土した。最下層には径40cmほどの石が置かれており、斎串がともに出土している。このほか出土層は不明だが(貝とおなじ層か)、桃の種が出土している。埋土は上層がにぶい黄褐色土、中層は暗青灰色粘質土、3～5層はすべて灰色粘土である。このうち馬骨と犬骨についてはH24年度に分析を行い、来年度以降に報告する。

出土土器・遺物 (図版42、第58・59図)

14～18は坏である。15は最下層出土。14～17は土師器、18は須恵器である。15は口縁部がやや内湾し、他は外反する。15は内外面ともにミガキ、17は内面にミガキ、外面にナデを施す。18は、口縁部は外反し、高台が高く、外方に突き出す。底部外面に不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。19は土師器の高坏か。内外面ともにナデを施し、直線的にハ字状に開く。20・21は甕である。20は口縁が若干内湾し、器壁も薄い。上層出土であり混入品か。21は須恵器の甕で、口縁部は回転ナデ、胴部内面には当て具痕が見られる。22・23は瓦である。23は最下層出土。22は丸瓦の破片で、端部および外面は磨滅のため調整不明だが内面には布目痕が見られる。23は平瓦で、端部および内面はナデ、外面はタタキを施す。第59図は斎串である。長24cm、幅2cm、厚0.5cmほどで先端が尖る。表面には一部、樹皮の痕跡が残る。赤外線カメラで撮影したが、文字等は確認できなかった。



第59図
12号土坑
出土斎串
実測図
(1/2)

切り合いと出土遺物から、7世紀末～8世紀の井戸と考えられる。

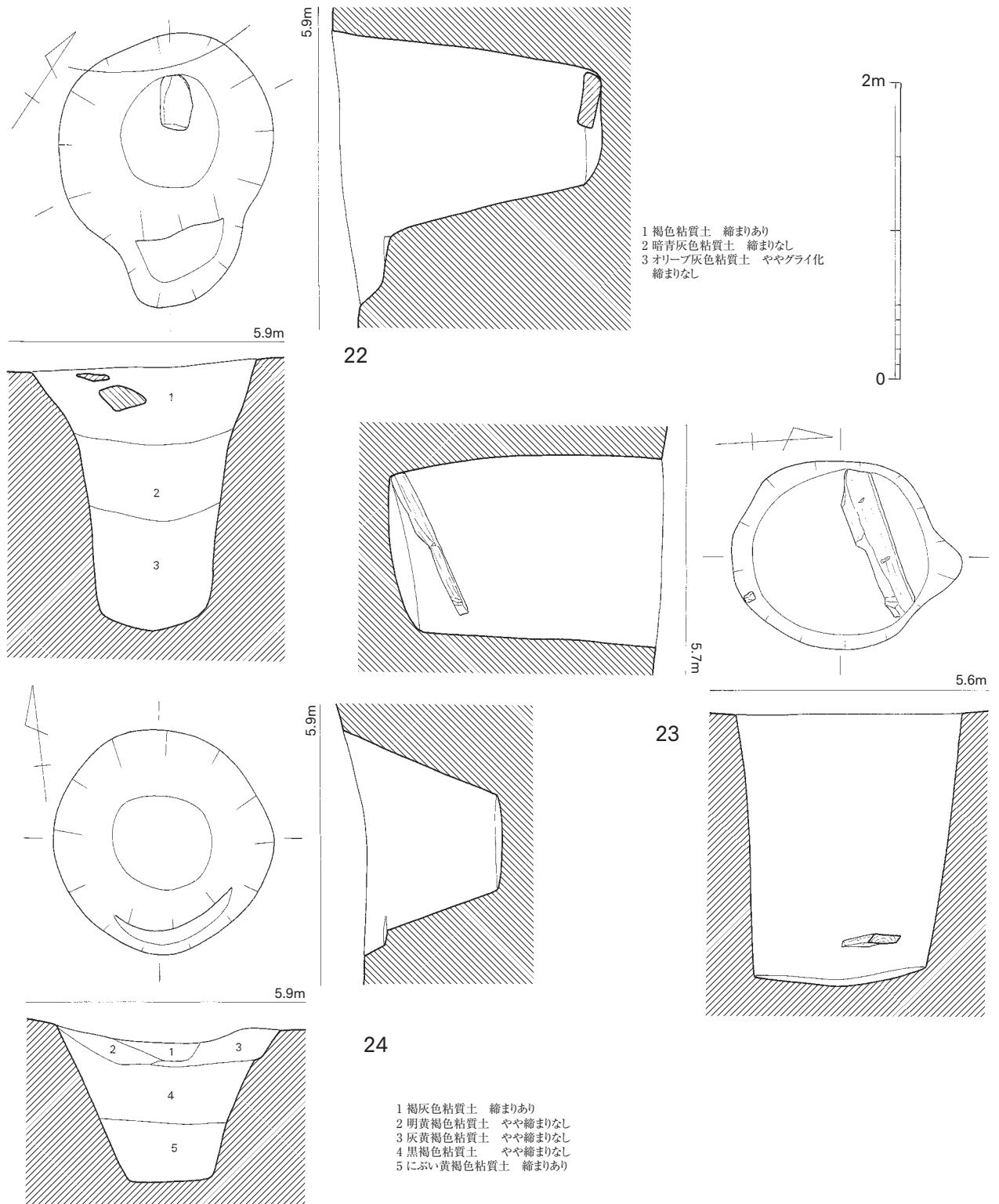
22号土坑 (図版24、第60図)

調査区の南東側斜面上に位置し、9号土坑に切られる。規模は東西145cm、南北185cm、深さ180cmの円形土坑である。最深部の標高は3.9mで、調査中は湧水が見られた。床面に35cmの石が検出された。埋土は上層が褐色土、中層が暗青灰色、下層がややグライ化したオリーブ灰色粘質

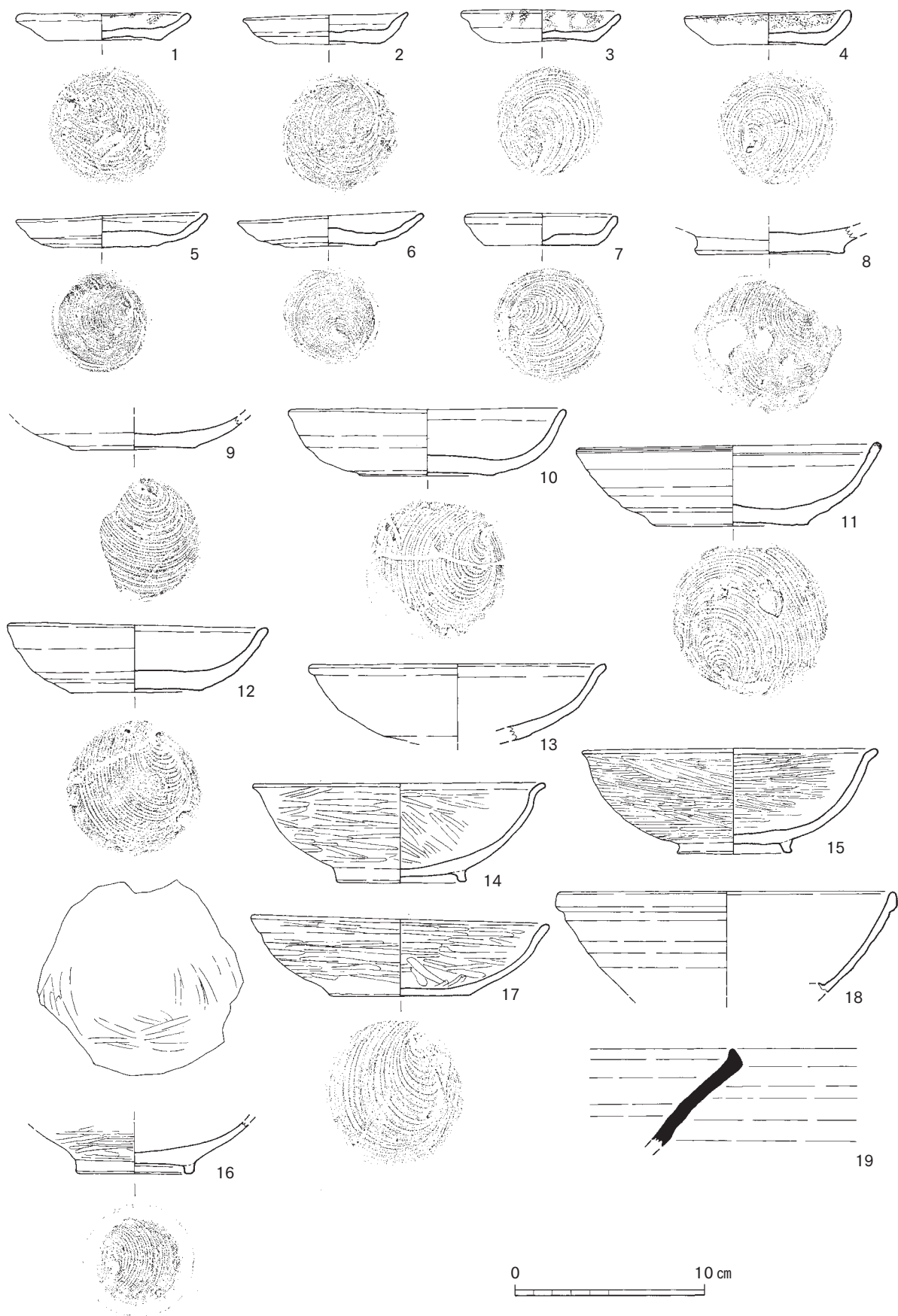
土である。

出土土器(図版42・43・45、第61図)

1～7は土師器の皿である。すべて糸切り底でそのほかはナデを施す。8～18は埴である。8



第60図 22～24号土坑実測図(1/40)



第61图 22号土坑出土土器实测图 (1/3)

～12は坏である。底部は全て糸切りで、他は横ナデを施す。11は口唇部に2条の沈線を施す。13～17は埴である。13は底部が欠損している。口縁から胴部にかけて横ナデを施す。14・15は黒色土器である。内外面ともにミガキを施し、底部外面にはナデを施す。16は底部糸切りの後、高台を貼り付ける。内外面ともにミガキを施す。17は底部糸切りで内外面ともにミガキを施す。18は白磁の碗である。口縁端部が玉縁状に肥厚する。19は須恵器の鉢である。口縁部のみが遺存しており、内外面ともに回転ナデを施す。

切り合いと出土遺物から、12世紀の井戸と考えられる。

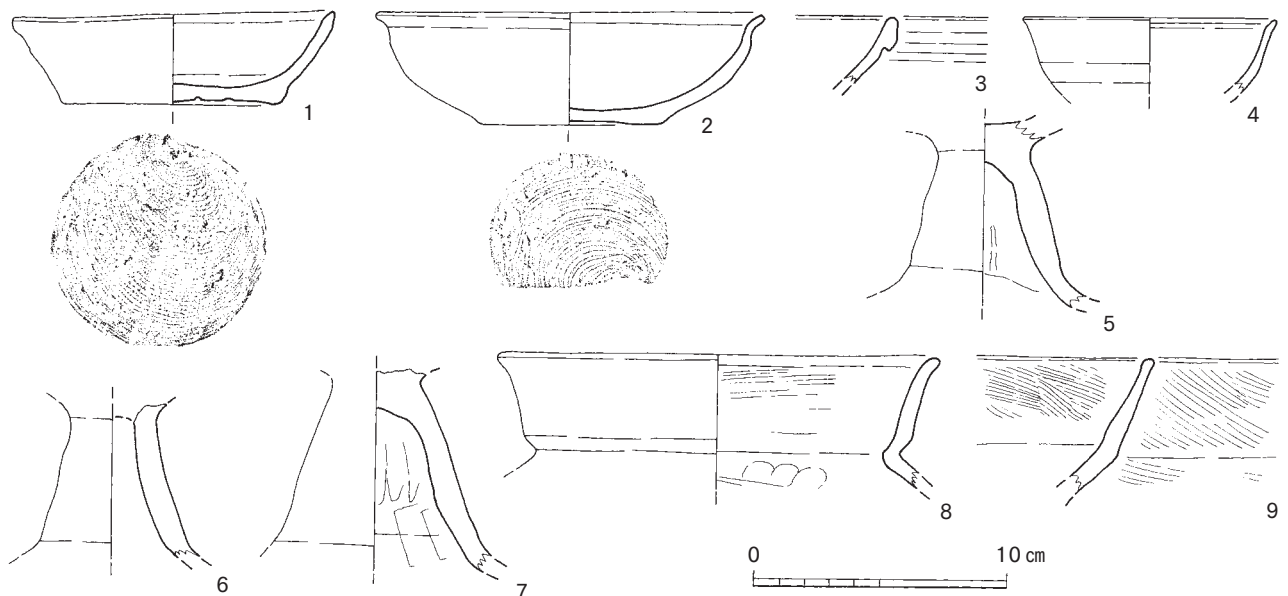
23号土坑（図版25、第60図）

調査区の南東側に位置し、道路状遺構ならびに谷部の包含層を切る。規模は東西120cm、南北150cm、深さ180cmの円形土坑である。最深部の標高は3.6mで、調査中は湧水が見られた。床面近くで長さ1m、幅30cmほどの木材が出土している。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器（図版45、第62図）

1・2は坏である。底部は糸切りで、2は口縁部端が屈曲し外反する。3は白磁の碗である。口縁部端が肥厚する。4は皿で、口唇部のみ釉をかきとる口禿皿である。5～7は土師器の高坏である。すべて緩やかに脚部が開いていき、下端近くで屈曲するものと考えられる。5は外面ナデ、内面シボリ、7は外面ナデ、内面下半ケズリ、上半強いナデを施す。古墳時代包含層からの混入品か。8・9は壺である。8は頸部が強く屈曲し、口縁部は内湾しながら、短部で外反する。外面ナデ、口縁部内面ハケ目後ナデ、胴部内面ケズリを施す。9は二重口縁壺の口縁部か。内外面ともにハケ目を施す。弥生時代終末の包含層からの混入品か。

切り合いと出土遺物から、中世前期の井戸と考えられる。



第62図 23号土坑出土土器実測図 (1/3)

24号土坑（図版25、第60図）

調査区東側やや南より、調査区の端に位置する。規模は径150cm、深さ100cmの円形土坑である。最深部の標高は4.7mで、水湧きはなく、溜め井戸と考えられる。埋土は上層が褐灰色土、明黄橙色土、灰黄褐色土、中層が黒褐色土、下層がにぶい黄褐色粘質土である。出土遺物はなかったため、時期は不明である。

（4）溝

今回の調査区では34条検出した。番号は調査した順番につけており、調査途中で11・12・1006号溝についてはそれぞれ8・6・25号溝と同一になることが確認された。また、先述のように34号溝についてはSX07内住居跡の壁溝の可能性が高い。そのため、11・12号溝については欠番とし、34以降はH23年度調査分を連続して振りなおしている。この他、番号の振り違いにより溝17・22が欠番となっている。

1号溝（図版26、第63図）

調査区の南西側から中央に向かって北流する。1号竪穴住居跡・2号溝を切り、5・6号溝に切られる。規模は長さ28m、幅1m内外、深さ15cmである。埋土は褐色・明褐色粘質土である。土層から、掘り直しが行われているものと考えられる。

出土土器（第64・84図）

1は土師器の皿である。磨滅のため調整は不明。このほか鉄滓が出土している。切り合いと出土遺物から、中世前期の溝と考えられる。

2号溝（図版26、第63図）

調査区の南西側から中央に向かって北流する。SX01・11号竪穴住居跡を切り、1・5・6号溝に切られる。規模は長さ41m、幅1m内外、深さ15cmである。埋土は上層が暗褐色土、下層が褐色粘質土である。

出土土器（第64・84図）

2は須恵器の坏身である。底部は平底気味になり、かえりの伸びは小さい。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。このほか鉄片が出土している。切り合いと出土遺物から、7世紀の溝と考えられる。

3号溝

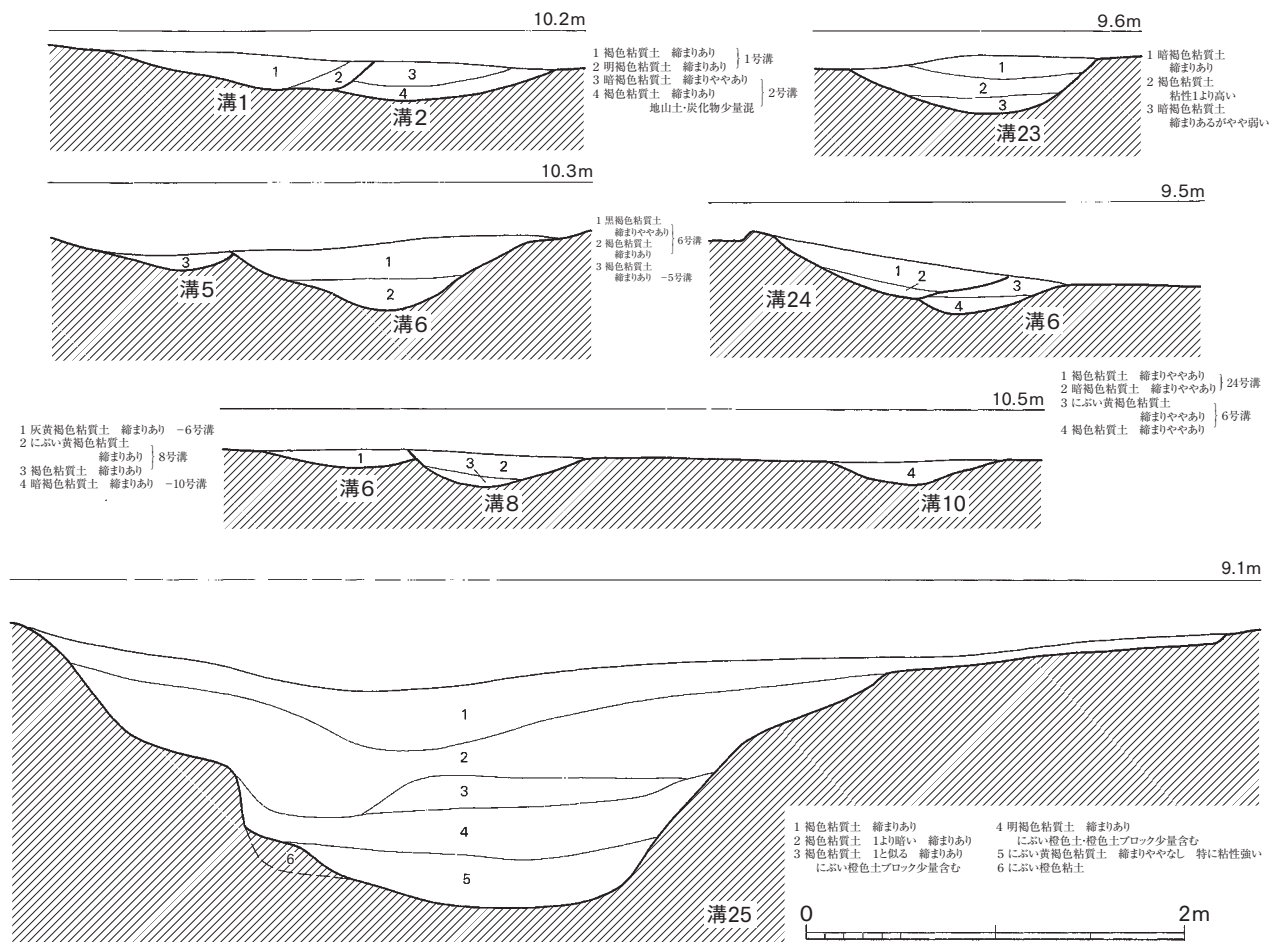
調査区の南側に位置し東流する。2号溝に切られる。規模は長さ3.5m、幅0.8m、深さ5cmで、東側は削平のため残っていない。

出土土器（第64図）

3は土師器の甕である。屈曲は弱く、調整は磨滅のため不明。切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の溝と考えられる。

4号溝

調査区の南東側に位置し、北流する。調査区の端に切られる。規模は長さ3.5m、幅0.85m、深



第63図 溝1・2・5・6・8・10・23～25土層実測図(1/40)

さ20cmである。

出土土器(図版43、第64図)

4は土師器の坏である。口縁は外反し、調整は磨滅のため不明。このほか図化に耐えないが、須恵器の破片が出土している。切り合いと出土遺物から、古墳時代後期の溝か。

5号溝(図版26、第63・84図)

調査区の南より側に位置し、東流する。6・8・29号溝に切られる。規模は長さ19m、幅1m、深さ10cmである。埋土は黒褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はなく、中世と考えられる土器片が出土している。このほか6号溝との切り合い部では、刀子の破片が出土している。切り合いと出土遺物片から、中世の溝と考えられる。

6号溝(図版26・27、第63図)

調査区の中央南よりから、東端で直角に曲り、北端まで達する。21号堅穴住居跡、SX06・07、5号溝を切り、8・29号溝に切られる。規模は長さ東西22、南北28m、幅1m内外、深さ35cmである。埋土は褐色土・灰黄褐色粘質土である。

出土土器(第64図)

5・6は瓦質土器鍋の足である。全面ナデを施しており、6の胴部との接合面にはハケ目が見ら

れる。7は土師器の甕である。器壁は薄く、古墳時代初頭の混入品か。8は須恵器の坏身である。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。混入品か。9は瓦質土器の鍋である。口縁端が内傾し、全面回転ナデを施す。10は平瓦の破片である。端部が遺存しており未調整、外面は工具によるナデを施し、内面には布目痕が認められる。

切り合いと出土遺物から、中世の区画溝と考えられる。

7号溝

調査区の東側調査区端から、中央に向かって北流する。5・6号溝を切る。規模は長さ22.5m、幅1.2m、深さ5cmである。図化には耐えうる資料はなく、近世の陶磁器片が出土している。切り合いと出土陶磁器片から、近世の溝と考えられる。

8号溝（図版27、第63図）

調査区の東端から北端に向かって、緩やかなカーブを描きながら北流する。13号竪穴住居跡、5・6・31号溝を切る。規模は長さ42m、幅1～1.6m、深さ15cmである。埋土はにぶい黄褐色土である。出土土器（第64・82図）

12は須恵器の坏身である。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。混入品か。13は白磁の碗である。底部のみが遺存しており、高台から底部外面にかけては無釉である。同安窯系か。14は高坏である。細身で長く、内面にはナデが残る。弥生時代終末～古墳時代初頭の混入品か。このほか石匙が出土している。

切り合いと出土遺物から、中世前期の溝と考えられる。

9号溝

調査区の中央部に位置し東流する。2・6号溝に切られる。規模は長さ5m、幅0.6m、深さ5cmである。東側は特に残りが悪く、削平されている。図化には耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。時期は不明である。

10号溝（図版27、第63図）

調査区北側から北東端に向かって東流し、緩やかな弧状を描く。13号竪穴住居跡、13号溝を切る。規模は長さ43m、幅1m、深さ10cmである。埋土は暗褐色土である。

出土土器（第64図）

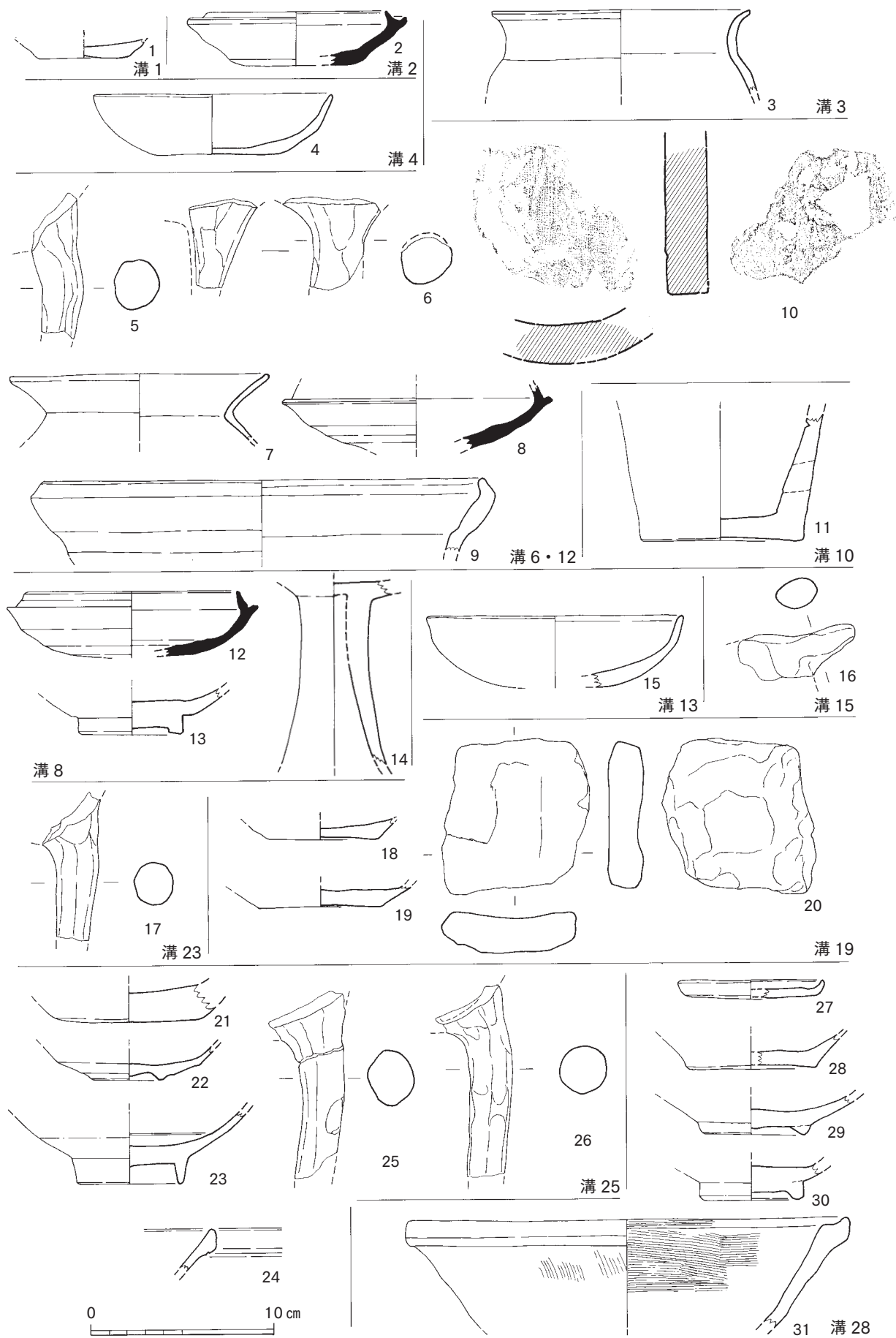
11は青磁の瓶である。底部は露胎として残り、調整は回転ナデを施す。切り合いと出土遺物から、中世前期の溝と考えられる。

13号溝

調査区の北側に位置し、南流する。SX03を切り、10号溝に切られる。規模は長さ6m、幅0.7m、深さ5cmである。

出土土器（第64図）

15は土師器の坏である。磨滅のため調整は不明である。このほか図化には耐えないが土師器



第64図 溝出土土器実測図 (1/3)

の皿と考えられる破片が出土している。切り合いと出土遺物から、中世の溝と考えられる。

14号溝

調査区の北側に位置し東流する。11号溝に切られる。規模は長さ9m、幅0.4m、深さ10cmである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

15号溝

調査区の北側に位置し東流する。規模は長さ17m、幅1.2m、深さ20cmである。

出土土器（第64図）

16は弥生土器の支脚か。磨滅のため不明瞭だが、全面ナデで仕上げており、胴部との接合面ではがれている。切り合いと出土遺物から、弥生時代終末期の溝と考えられる。

16号溝

調査区の東側に位置し、18号溝に切られる。規模は長さ1.8m、幅0.5m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、古墳時代の溝と考えられる。

18号溝

調査区の東側に位置し東流する。16号溝を切り、17号竪穴住居跡に切られる。規模は長さ8.5m、幅1.4m、深さ5～10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、古墳時代の溝と考えられる。

19号溝

調査区の東側に位置し東流する。調査区の端に切られる。規模は長さ5m、幅0.9～1.3m、深さ15cmである。

出土土器（第64図）

18・19は土師器の皿である。19は糸切りの痕跡が残る。磨滅のためはっきりしないが、器高は低く、法量も小さい。20は平瓦の破片である。磨滅のため拓本には出ないが、外面にはタタキの痕跡、内面には布目の痕跡が残る。

出土遺物から、中世前期の溝と考えられる。

20号溝

調査区の東側に位置し南流する。29号溝に切られる。規模は長さ7.5m、幅1.3m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、中世の溝と考えられる。

21号溝

調査区の東側に位置し東流する。規模は長さ5m、幅1.8m、深さ10cmである。図化に耐えうる

資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代の溝か。

23号溝（図版27、第63図）

調査区の中央に位置し、29号溝に切られる。規模は長さ8.5m、幅1m、深さ35cmである。埋土は暗褐色土・褐色粘質土である。

出土土器（第64図）

17は瓦質土器鍋の足である。全面ケズリで調整しており、胴部との接合面で剥離している。切り合いと出土遺物から、中世前期の溝と考えられる。

24号溝

調査区の中央に位置し東流する。29号溝から分かれて4号土坑に繋がる。規模は長さ4.5m、幅0.5m、深さ15cmである。埋土は褐色土粘質土である。図化に耐えうる資料はなく、土師器・陶磁器の小片が出土している。出土土器片から、中近世の溝か。

25号溝（図版2・28、第63図）

調査区の南側に位置し、28号溝・7号土坑を切る。調査区南側にも伸びていることを重機で確認している。南北に伸びた溝が、東側に直角に折れる。規模は長さ26×27m、幅2.5～5.5m、深さ120cmである。断面は逆台形をしており、北辺の方はV字形に近い。東端は斜面が下っていくに従い、浅くなり、標高7mのところで消えてしまう。削平された可能性、もともと東辺は存在しなかった可能性と双方が考えられる。埋土は上層が褐色土、中層が明褐色土、下層がにぶい黄褐色土である。

出土土器（巻頭図版5、図版45、第64・84図）

21は土師器の壺ないしは鉢か。底部のみで、表面は磨滅している。22～24は碗である。22は高台が不明瞭で露胎として残る。23は高台が高く、露胎として残る。24は口縁部破片で、端部が肥厚する。25・26は瓦質土器鍋の足である。全面をナデ調整し、胴部との接合面で剥離している。このほか図化には耐えないものの、長門産の緑釉陶器と考えられる破片が出土している。このほか鉄滓、砥石が出土している。切り合いと出土土器から、中世前期の区画溝と考えられる。

26号溝

調査区の中央に位置し南流する。3号土坑、29号溝に切られる。規模は長さ13.5m、幅0.6m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。切り合いと出土小片から、古墳時代の溝と考えられる。

27号溝

調査区の中央に位置し東流する。24号溝に切られる。規模は長さ7.5m、幅1.5m、深さ15cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器・陶磁器の小片が出土している。切り合いと出土小片から、中近世の溝と考えられる。

28号溝

調査区の南側に位置し南流する。25号溝に切られ、5号土坑を切る。規模は長さ19.5m、幅1.6m、深さ20cmである。

出土土器（第64図）

27は土師器の皿である。器高は低く、調整は磨滅のため不明。28も土師器の皿か。底部は平底で、調整は磨滅のため不明。29・30は碗である。29は磨滅しているが、高台が三角形を呈している。30は青磁。高台部分は露胎となる。31は瓦質土器の鉢である。磨滅のため不明瞭だが、内外面ともにハケ目が施される。切り合いと出土遺物から、中世前期の溝と考えられる。

29号溝

調査区の南側に位置し、25号溝と平行して直角に折れ曲がる。規模は長さ27×19m、幅1.1m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・陶磁器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、中近世の溝と考えられる。

30号溝

調査区の北西側に位置し西流する。6号溝に切られる。規模は長さ1.6m、幅0.8m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、中世の溝か。

31号溝

調査区の北西側に位置し西流する。6・8号溝に切られる。規模は長さ6m、幅1.2m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、古墳時代の溝か。

32号溝

調査区の北側に位置し西流する。14・23号竪穴住居跡を切る。規模は長さ3.5m、幅0.4m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、中世の溝と考えられる。

33号溝

調査区の北側に位置し西流する。14号竪穴住居跡、SX06に切られる。規模は長さ1.2m、幅0.5m、深さ5cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。切り合いと出土土器片から、古墳時代後期の溝か。

34号溝

調査区の東側に位置し南流する。「く」字状に屈曲する。規模は長さ3m、幅0.5m、深さ5cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代の溝か。

35号溝

調査区の東側に位置し、直角に折れ曲がる。規模は長さ2.1×2.1m、幅0.3m、深さ5cmである。当初住居跡の壁溝のみが遺存したものである可能性も考えたが、柱穴が見当たらないことや、その他の辺に溝が見られなかった。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代の溝か。

36号溝

調査区の東端に位置し南流する。規模は長さ8.5m、幅0.3m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代の溝か。

37号溝

調査区の東側に位置し南流する。規模は長さ5.5m、幅0.35m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代後期の溝か。

38号溝

調査区の南側に位置し南流する。15号土坑に切られる。規模は長さ3m、幅0.35m、深さ5cmである。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。出土土器片から、古墳時代の溝か。

(5) 道路状遺構(巻頭図版2・3、図版3・28～35、第65～68図)

今回の調査で、調査区の南端に沿って、長さ20m、幅3.6mにわたって、道路状遺構が検出された。そのうち約9mは黒褐色土包含層の上面に帯状硬化が認められ、残りは地山面に掘り込まれている。包含層に掘り込まれた部分では、表土剥ぎ中には道路面を確認することが出来ず、南側の側溝を含む一部を剥ぎ取りすぎてしまった。

以下、確認された道路の痕跡を上面から記載していく。また、西側の地山が残っている部分と、東側の黒褐色土包含層の部分では若干様相が異なるため、以下それぞれ西半、東半と呼称する。

最上面(硬化面)

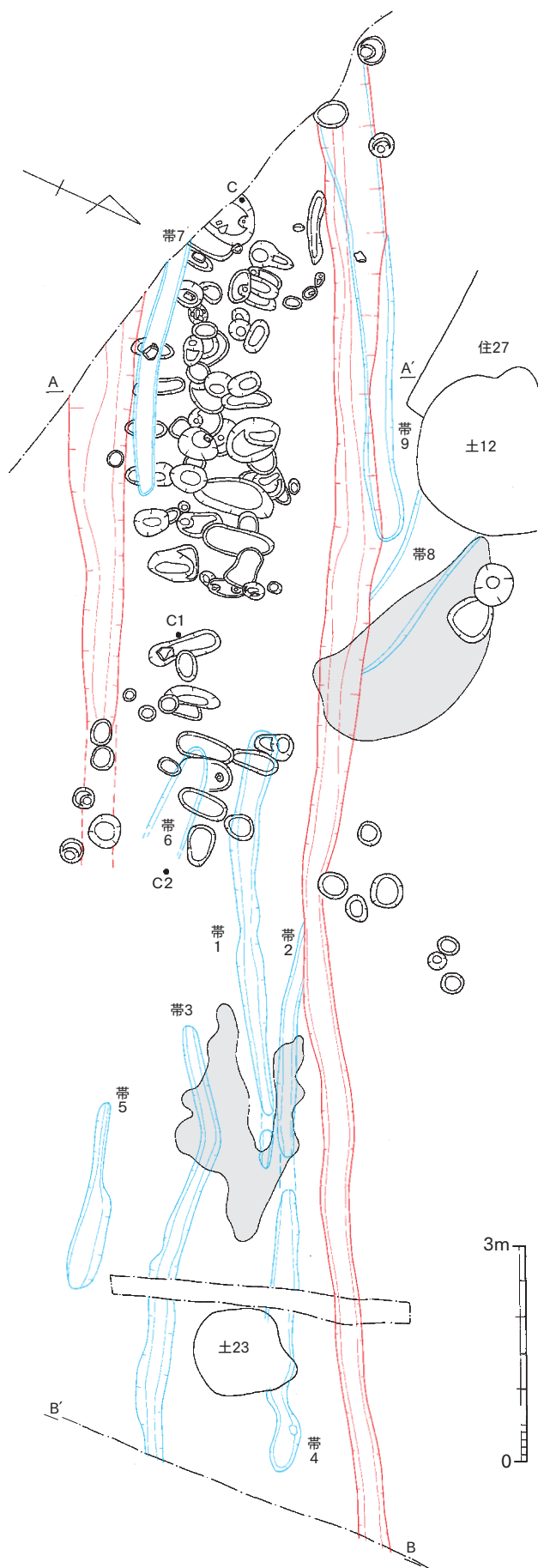
最上面において帯状硬化が少なくとも4本確認された。西半では北側側溝の上面に1条、側溝付近から12号土坑に至る部分(トーン部分)に広く硬化面が認められた。また、東半では、中央部のトーンで示した部分に広く硬化面が認められ、第68図の下段で示した断面の7・8層および14層の上面でも硬化面が確認された。8層は帯状硬化5の延長線上にあり、同一のものである可能性もある。東半では不明確だが、西半では北側側溝の上面に硬化面が認められている。

帯状硬化5

東半南側に位置しており、東側は重機掘削のため削られている。長さ2.6m、幅15～45cm、深さ5～8cmである。埋土は橙色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

帯状硬化9

西半北側に位置しており、北側の側溝のほぼ上面にあたる。長さ7m、幅35～45cm、深さ10



第65図 道路状遺構帯状硬化実測図 (1/90)

cmである。埋土は茶褐色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

上面（側溝と硬化面、足跡状痕跡？）

側溝（赤色部分）

上述の硬化面を剥がしていくと、その下部から側溝が検出された。北側の側溝は全て検出されたが、南側の側溝は先述のように、重機での掘削のため飛ばしてしまっている。ただし、東端の土層では確認できなかった。側溝の埋土は褐灰色が混入した、にぶい褐色土である。

帯状硬化

さらに、側溝に挟まれた部分からは5条（帯状硬化5がこの層のものであれば6条）、外側に1条の帯状硬化が確認された。

帯状硬化1

東半中央部に位置しており、長さ6m、幅30cm、深さ5cmである。埋土は灰褐色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

帯状硬化2・4

東半北側に位置しており、長さ7.5m、幅25～35cm、深さ10cmである。2と4は中央部で切れるものの、重機で下げすぎた可能性があり、位置から考えれば同一のものと考えられる。西端は、北側の側溝から伸びており、側溝の上面には硬化面は確認されていない。埋土は明褐色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

帯状硬化3

東半中央部に位置しており、帯状硬化1の南側に当たる。長さ6m、幅35cm、深さ5～8cmである。途中で逆「く」字状に曲っており、帯状硬化1と90cm間隔で平行する可能性がある。埋土は橙色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

帯状硬化6

道路状遺構の中央部に位置しており、帯



第66図 道路状遺構足跡状痕跡? 実測図 (1/40)

面で、地山に切り込む波板状痕跡を検出した。波板状痕跡は地山が残っている西半でのみ確認されており、東半は包含層を下げたが確認できなかった。

確認された波板状痕跡は、小さいもので20cm内外、大きいもので60cmほどの大きさで中央部には120×55cmほどの長大なものも検出されている。円形と楕円形が主で、列①・②は楕円形のもの、③・④は円形のものが多く並ぶ傾向にある。切り合いは円形のものが楕円形のものを切る傾向にある。各々の芯々距離は明確に対応するものが不明なものもあるが、おおよそ60～75cmである。埋土は、円形の場合は黄褐色土、楕円形の場合は灰黄褐色粘質土が多く形で異なる傾向にある。ただし、土器小片や黒雲母、石英が多く混入し、固く締まるのはともに共通する。

状硬化1の南側に当たる。長さ1.5m、幅50cm、深さ5cmである。東側は重機掘削のため不明である。埋土は橙色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。带状硬化1と平行する可能性がある。

带状硬化7

西半南側に位置しており、南側側溝のすぐ北側に当たる。長さ3.4m、幅30cm、深さ5～8cmである。埋土は黄褐色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

带状硬化8

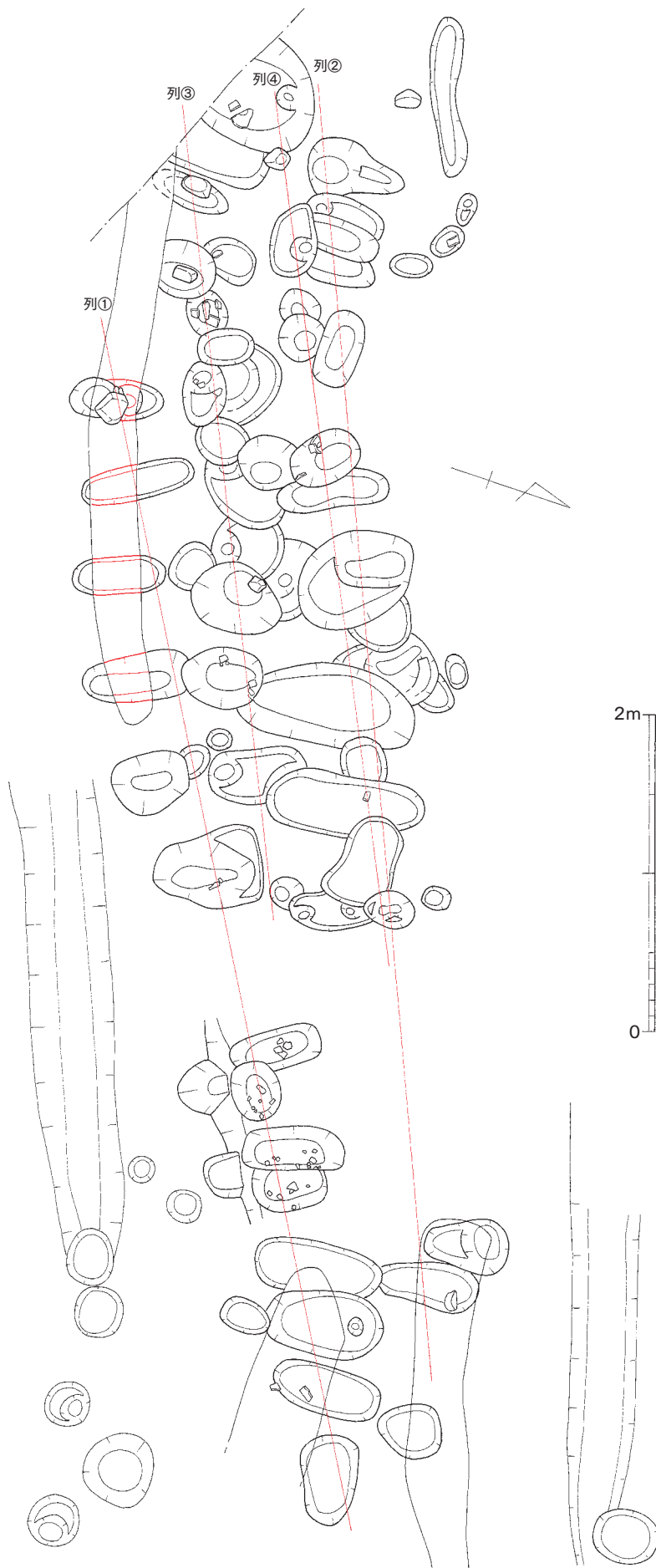
西半北側に位置しており、北側側溝から北西側に伸びる。長さ2.4m、幅75cm、深さ5～8cmである。最上面の硬化面を下げたところから検出され、北側側溝から12号土坑に向かってまっすぐ伸びる。埋土は褐灰色土で、砂やマンガンが多く、固く締まる。

足跡状痕跡?

西半の側溝間で、足跡状の窪みが検出された。西半では带状硬化7を除いて、側溝間では硬化面は確認されておらず、また、足跡状痕跡も带状硬化には掛かっていないため、何らかの痕跡である可能性が高いと考える。検出された足跡状痕跡は10～30cmの円形もしくは楕円形で深さは2～3cmほどである。深さに違いがあるものは概ね西側のほうが低く窪んでいる。埋土は灰白色粘質土である。

下面(波板状痕跡)

带状硬化を検出した面から10cmほど下げた



第67図 道路状遺構波板状痕跡実測図 (1/40)

出土土器 (図版45、第69・70・82図)

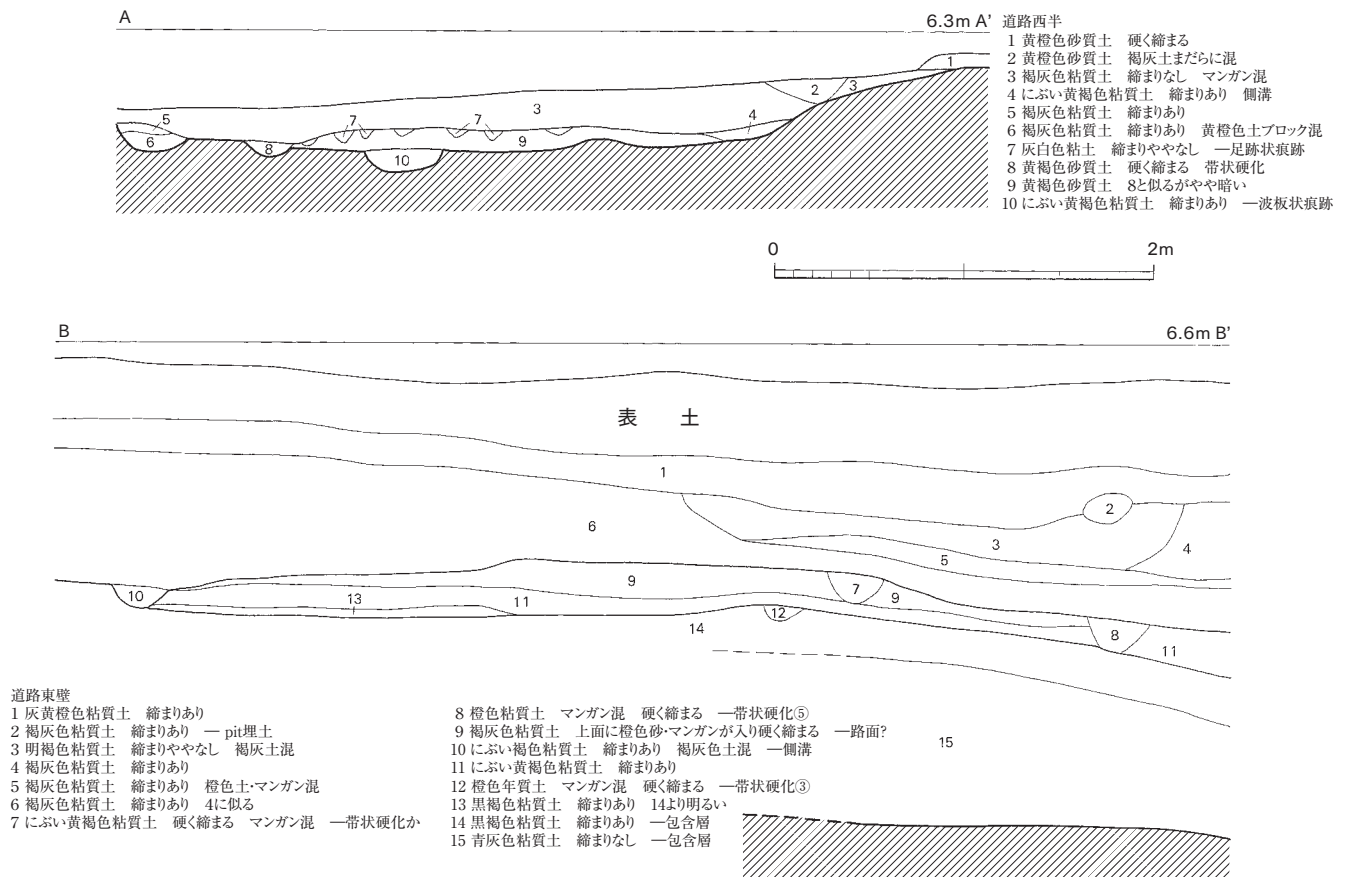
道路状遺構に関しては、約3cmずつ掘削していき、その都度道路の痕跡を確認していった関係で、必ずしも土器の取り上げと土層の関係が対応しているとはいいがたい。下層としているものは、波板状痕跡より上面、帯状硬化確認面より下面であるが、そのほかの層は対応していない。

道路状遺構直上

1・2は須恵器の坏である。1は高台部が外方に開き、2は小さく底部に貼り付けたのみである。ともに底部外面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。3は須恵器の壺か。高台が内湾し、どっしりとしている。4は土師器の甕である。口縁の屈曲は弱く、口縁部外面は横ナデ、他はナデを施す。

上面

5～7・9・11・12は坏である。5・6は土師器で口縁部のみが遺存している。内外面ともにナデを施す。7は須恵器で高台は低く、やや外方に突き出す。底部付近は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。7・9は白色および赤橙色をしており、焼きの悪い須恵器か。9は7より小ぶりの高台が付き外方への突出度も弱い。外面は磨滅のため不明、内面はナデを施す。須恵器の模



第68図 道路状遺構土層実測図 (1/40)

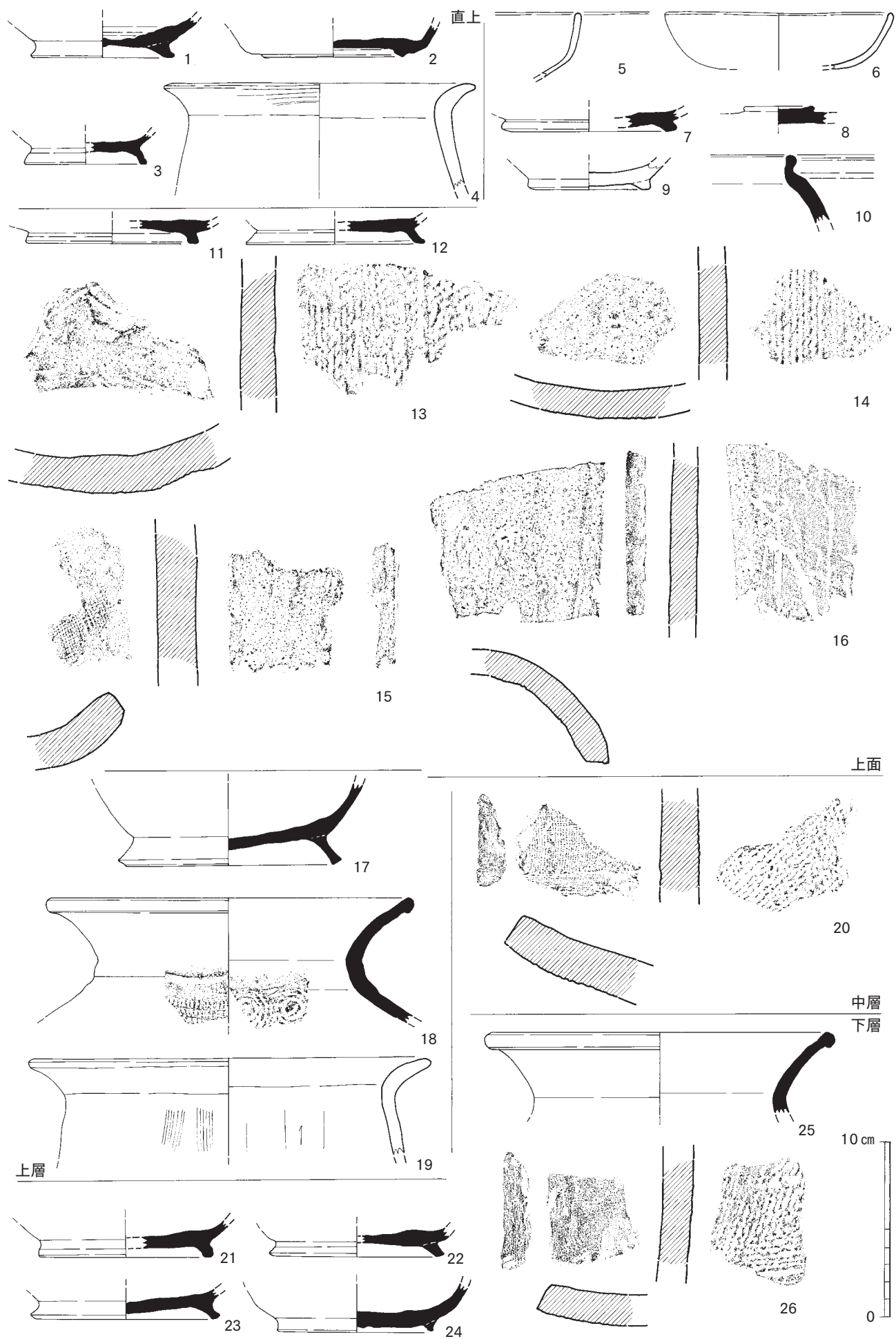
倣品ないしは焼成不良品か。11は高台が太く短く、どっしりしているが、12は細く外方に長く伸びる。ともに底部内外面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。8は須恵器の坏蓋である。潰れたつまみのみが遺存している。内面は不定方向のナデ、外面は回転ナデを施す。10は須恵器の壺である。素口縁で直立する。内外面ともに回転ナデを施す。13～16は瓦である。13～15は平瓦、16は丸瓦の破片である。13・14は、内面は磨滅のためか布目痕等確認できないが、外面には縄目のタタキを施す。15は端部の破片で、内面は布目痕、外面は工具によるナデが確認できる。16は端部の破片で円周の1/4ほどが遺存している。内面には布目痕が残り、外面にはナデを施す。このほか石鏃が出土している。

上層

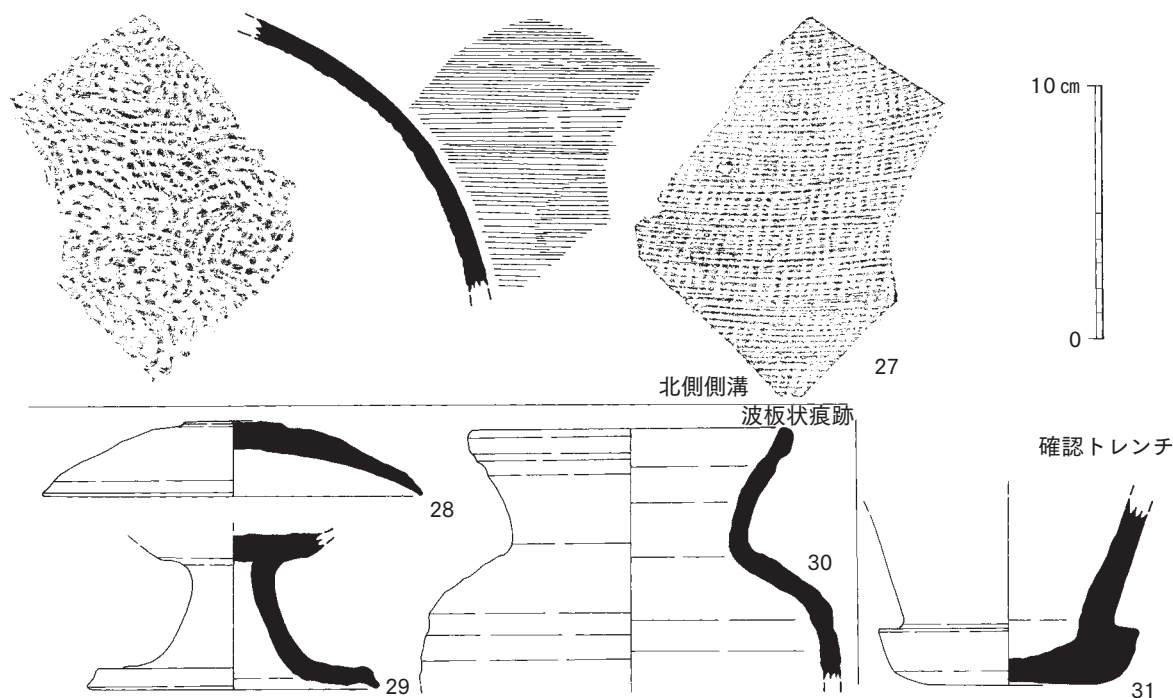
17は須恵器の壺である。底部のみが遺存しており、高台は長く外方に伸びる。底部は不定方向のナデ、他は回転ナデを施し、内外面とも一部に灰かぶりが見られる。18・19は甕である。18は須恵器で胴部外面には格子目タタキ、内面には当て具痕が残る。19は土師器で口縁部の屈曲は弱く、胴部外面はハケ目、内面はケズリ、他はナデを施す。このほか舌状土製品が出土している。

中層

20は平瓦の破片である。端部は未調整、内面は布目痕、外面は縄目のタタキを施す。



第69図 道路状遺構出土土器実測図① (1/3)



第70図 道路状遺構出土土器実測図② (1/3)

下層

21～24は須恵器の坏である。全て底部のみが遺存している。21・24は高台が短く踏ん張るもので、22・23は長く外方に伸びるものである。概ね底部内外面が不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。25は須恵器の甕である。内外面ともに回転ナデを施す。26は平瓦の破片である。端部は未調整、内面は磨滅のため不明、外面は縄目のタタキを施す。

側溝

27は北側の側溝出土の須恵器の甕である。胴部片のみであるが、外面はタタキの後カキメ、内面は同心円の当て具痕が残る。

波板状遺構

28は須恵器の坏蓋である。素口縁で完全に扁平になったつまみが付く。外面は灰かぶりのため調整不明、天井部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。29は須恵器の高坏である。坏部内面は不定方向のナデ、脚部内面は回転ナデ、外面は磨滅のため不明である。30は須恵器の壺である。全面回転ナデを施し、強いナデのためか、口縁下がわずかに窪む。

西半中央部土層確認トレンチ

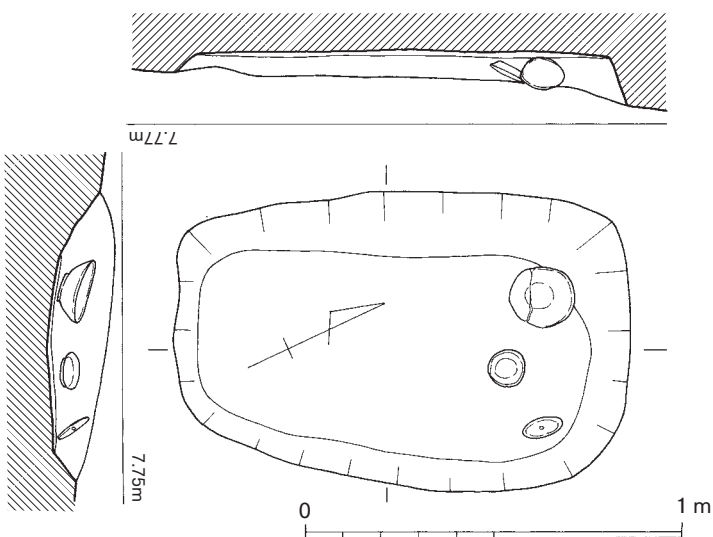
31は須恵器の鉢である。すり鉢状を呈しており、底部内外面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。

出土土器から、7世紀末～8世紀には確実に機能した道路と考えられる。

(6) 土墳墓

13号土墳 (図版35、第71図)

本調査区唯一の墳墓である。調査区の南側、谷に向かう斜面の上方よりに位置している。規模は、南北120cm、東西80cm、深さ5～15cmである。北側で白磁の皿、瓦器碗、銅鏡が出土している。皿および碗は底部より3cmほど浮いており、銅鏡は60°ほど傾いた状態で出土したことから、木棺墓であった可能性もある。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。

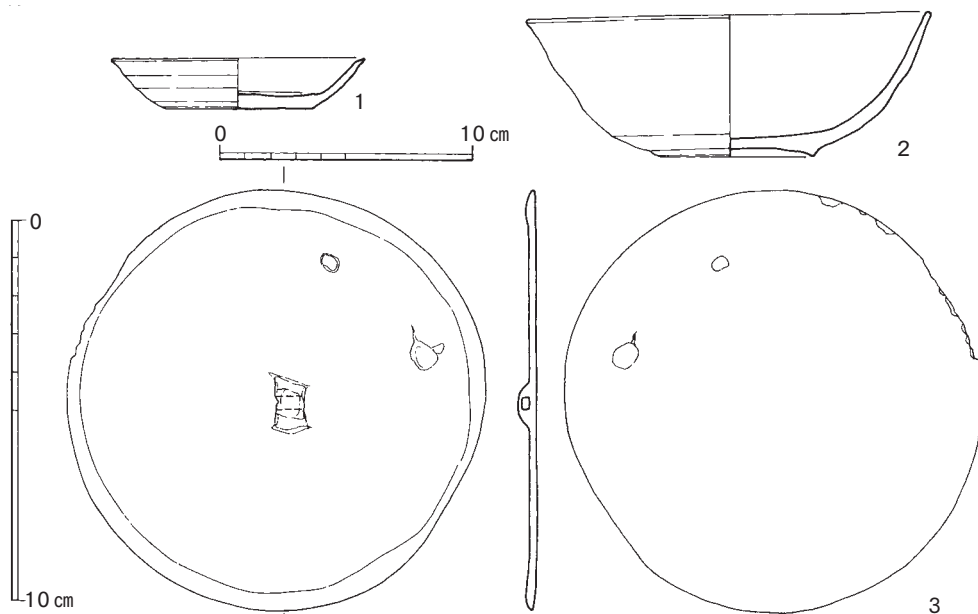


第71図 13号土墳土墳実測図 (1/20)

出土土器 (巻頭図版6、図版43、第72図)

1は白磁の皿である。口縁はわずかに内湾しながら開き、口唇部上面および底部には露胎がみられる。2は瓦器碗である。全体的に磨滅が激しいが、断面三角形の高台を持ち、器形はやや歪む。3は銅鏡である。背面は中央に径0.8cmほどの鈕を持ち、そのほかの文様は見られない。鏡面はほぼ水平になっており、現在でも光沢が残る。

出土遺物から、12世紀頃の墳墓と考えられる。

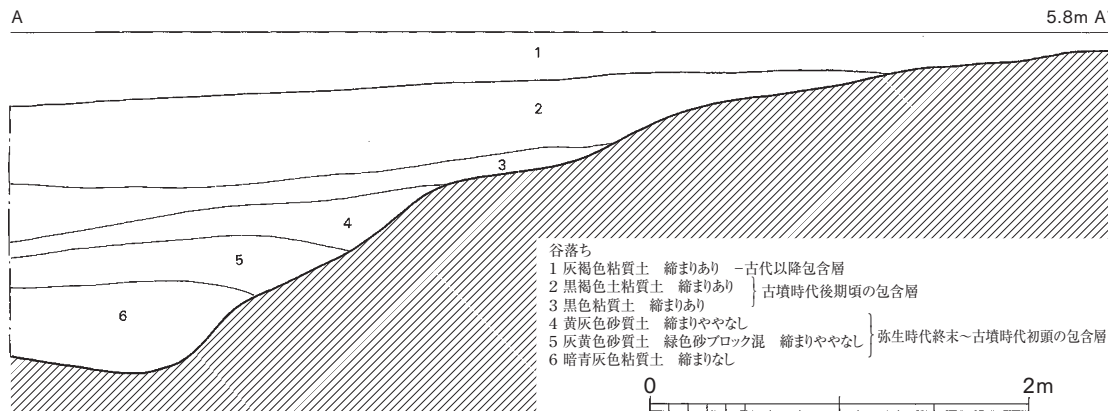


第72図 13号土墳出土遺物実測図 (1/3、3は1/2)

(7) その他の遺構

包含層出土土器 (図版4、第73図)

谷部に堆積した包含層ならびに遺構面上面の包含層より土器が出土している。第73図は調査区の南東端の谷落ち土層である。3・4層間が遺構面であり、この層位下の谷部に堆積した包含層からは比較的多くの土器が見つかった。攪拌があり、単純層ではないものの、灰褐色土層が



第73図 調査区南東端谷落ち土層実測図 (1/40)

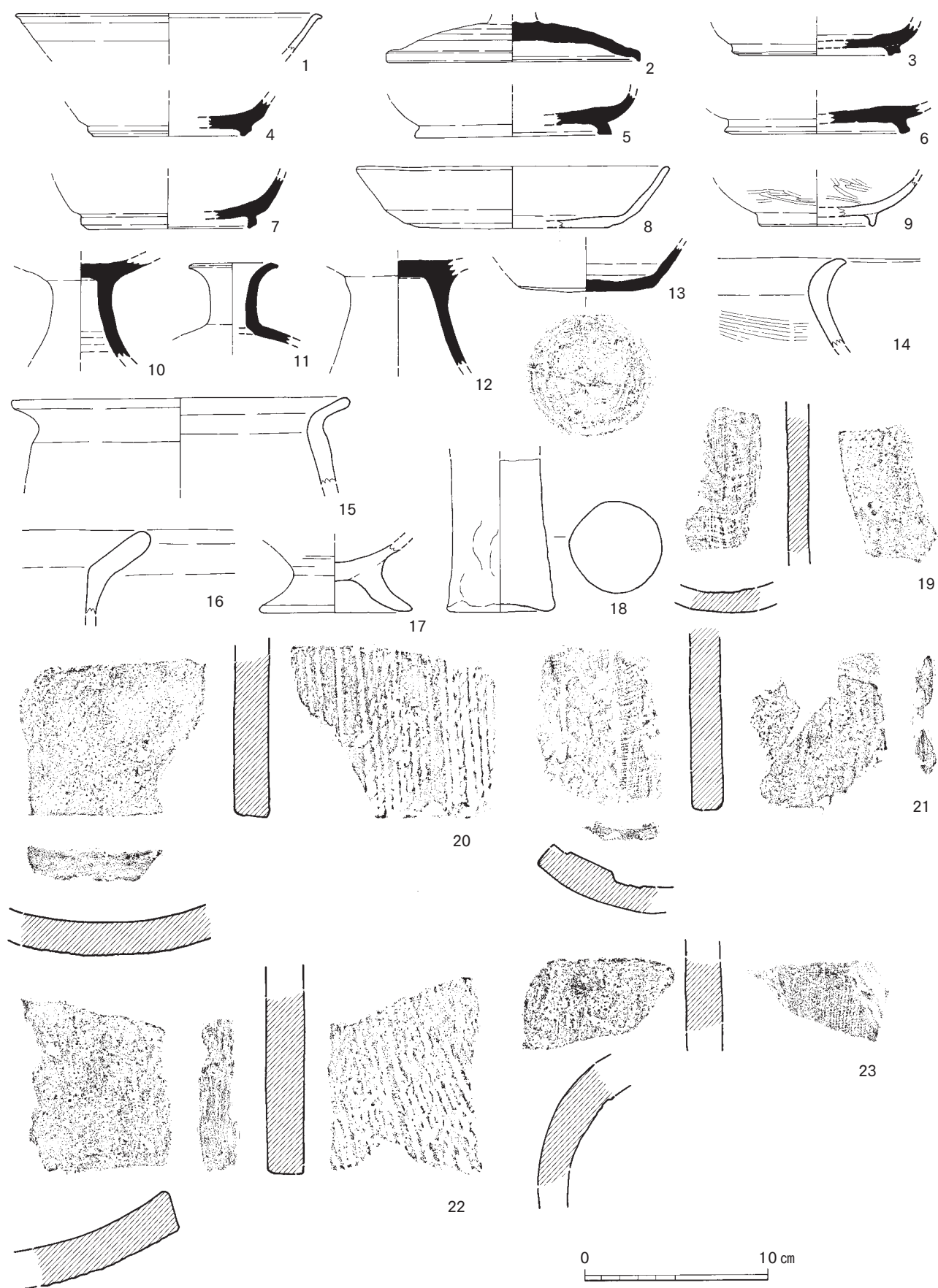
古代以降、黒褐色土層が古墳時代後期、それ以下が弥生時代～古墳時代初頭に形成されたものと考えられる。以下、層ごとに出土土器を報告する。

灰褐色土包含層 (図版45、第74・75・82・84図)

1は白磁の碗である。口縁端を突出させる。2は須恵器の坏蓋である。つまみが剥離しており、外面上部は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。3～9は坏である。3～7は須恵器で底部のみが遺存している。3・4・7は四角形に近い高台で内側が接地する。5・6は高台が外方に伸びる。概ね底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。8・9は土師器である。8は平底で口縁部が直線的に外反する。磨滅のため調整不明。9は高台が短く、わずかに内傾する。胴部外面および内面はミガキ、他は回転ナデを施す。10・12は須恵器の高坏である。頸部のみが残存している。11は須恵器の壺か。口縁部破片で、頸部径は3cmほど、頸部内径は1.5cmと小さく小型の壺になるものか。13は須恵器の壺である。底部のみが遺存しており、外面に「一」のヘラ記号が施される。底部内面は不定方向ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデを施す。14～16は土師器の甕である。14は口縁部の屈曲が弱く、磨滅のため調整は不明瞭だが、内面にハケ目が残る。15はやや口縁部の屈曲が強く、内外面ともナデを施す。16は遺存しているところまででは、胴部が内傾し口縁部が直線的に外反する。磨滅のため調整は不明。17は弥生土器の脚付鉢か。脚部のみが遺存しており、内外面ともナデを施す。18は素焼きの柱状土製品である。底部はやや上げ底になり、体部は中実である。器台の一種か。19～24、第75図1は瓦である。19～22は平瓦、23・75-1は丸瓦である。19は、外面はナデ、内面は布目痕が残る。20は下面の端部が残り、端部と内面はナデ、外面には縄目のタタキを施す。21は側面端部が未調整で、外面はナデを施す。内面は幅2.5cmで模骨痕が認められ、凹部には布目痕が残る。22は側面端部が未調整、外面は縄目のタタキを施す。内面は磨滅のため不明瞭だがナデか。23は、外面は磨滅の不明瞭だが、内面には布目痕が残る。75-1は上部端ならびに側面が残る。上面の調整は磨滅のため不明、側面は未調整、外面はナデ、内面は布目痕が残る。これらのほか石庖丁や釘と考えられる鉄製品が出土している。

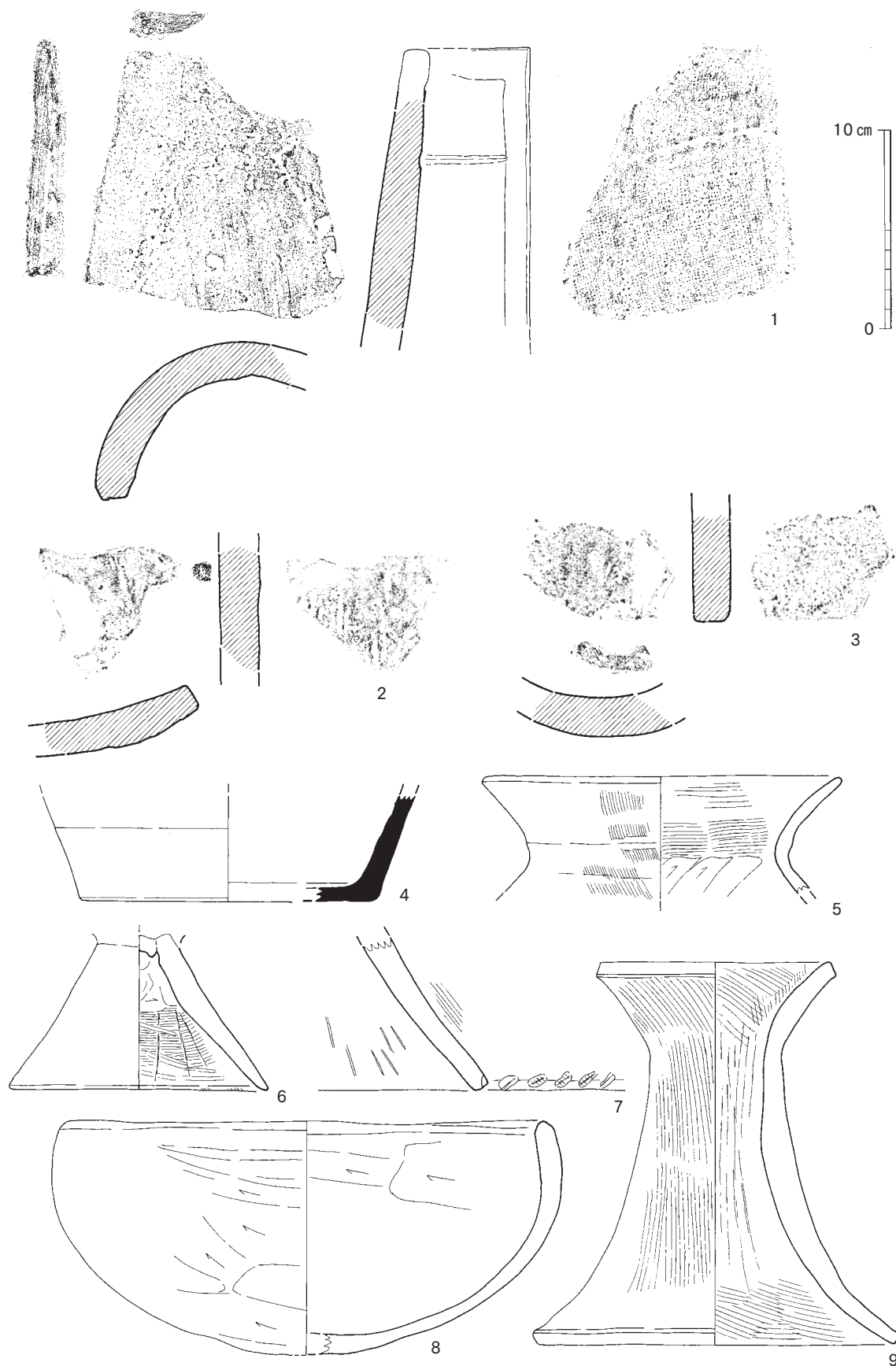
黒褐色土包含層 (図版43、第75・83図)

2・3は平瓦である。2は未調整の端部が残っており、外面には縄目のタタキ、内面はナデを施す。3は下面の端部が残る。端部、内外面ともにナデを施す。4は須恵器の壺である。平底で底部はナデ、胴部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。5は土師器の甕か。口縁部内面は横ハケ、外面はハケ、胴部内面はケズリを施す。6は弥生土器の高坏か。脚部のみが遺存しており、

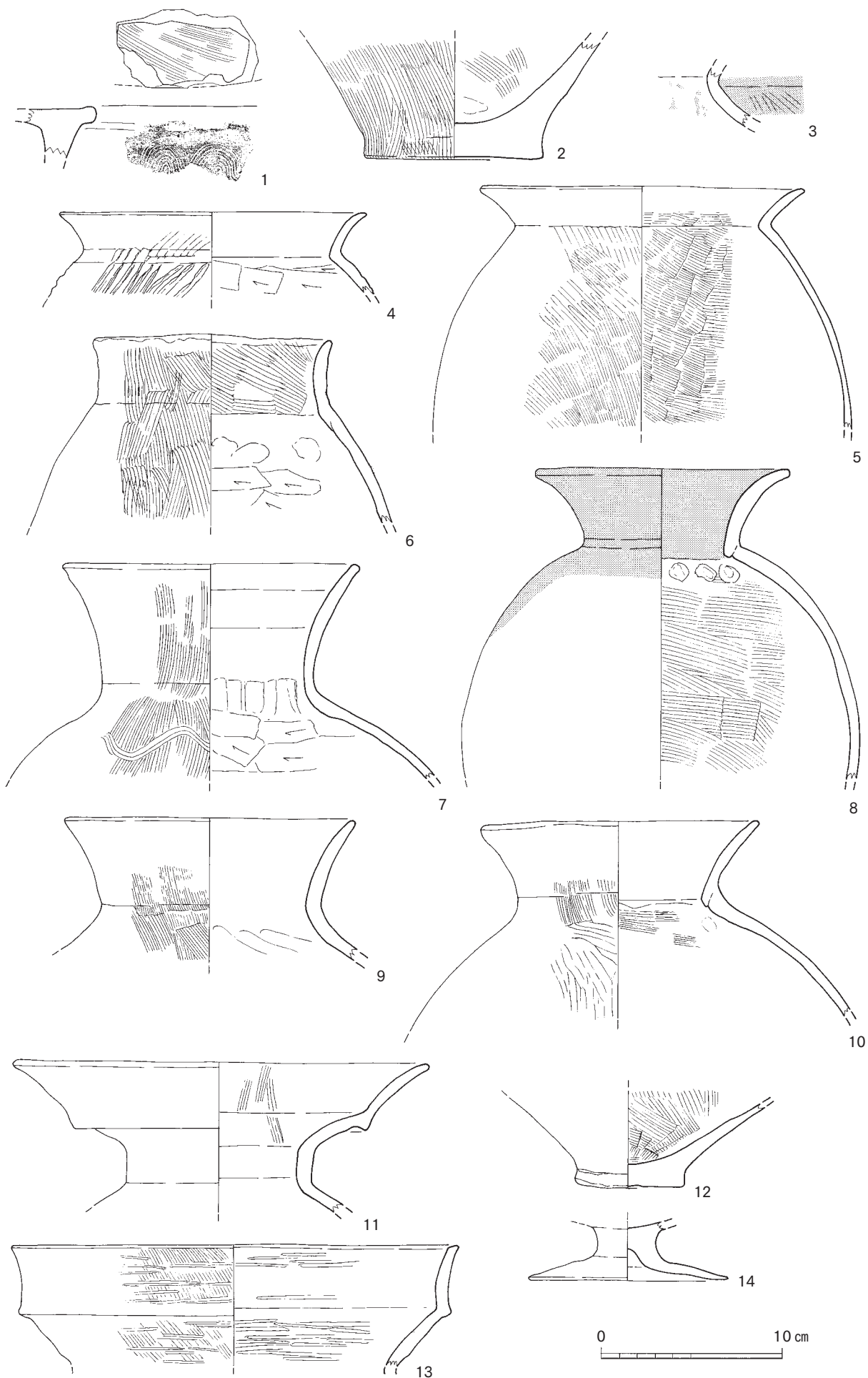


第74图 灰褐色土包含層出土土器实测图 (1/3)

直線的に開く。外面は磨滅のため不明、内面下部はハケ目を施し、放射状にハケを当てた線が認められる。内面上部はケズリ後ナデを施す。7は弥生土器の器台か。直線的に開き、口唇部に脣



第75図 灰褐色土・黒褐色土包含層出土土器実測図 (1/3)

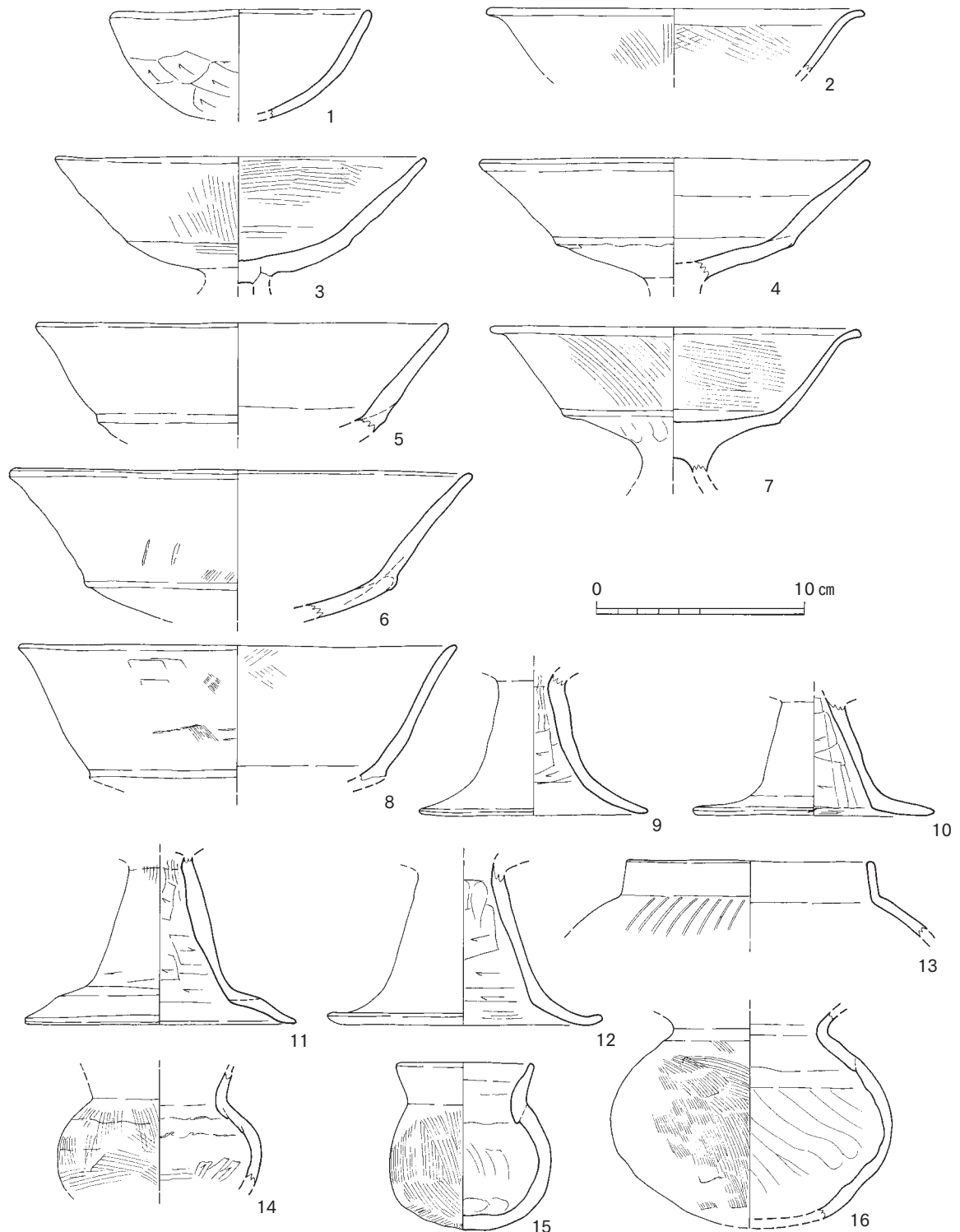


第76図 暗青灰色土包含層出土土器実測図① (1/3)

円形の刻みを施す。内面は工具痕、外面はハケ目が一部に残るが、その後ナデを施すか。8は土師器の鉢か。口縁部はやや内湾し、内外面ともにケズリを施す。9は弥生土器の器台である。頸部最小径が上部にあり、脚部は緩やかに開く。頸部内面はシボリ、他はハケ目を施す。このほか砥石が出土している。

暗青灰色土包含層 (図版43・44、第76～78・84図)

第76図1は甕の口縁である。T字形を呈し、外面の口縁部下に流水文を施す。口縁部上面はハ

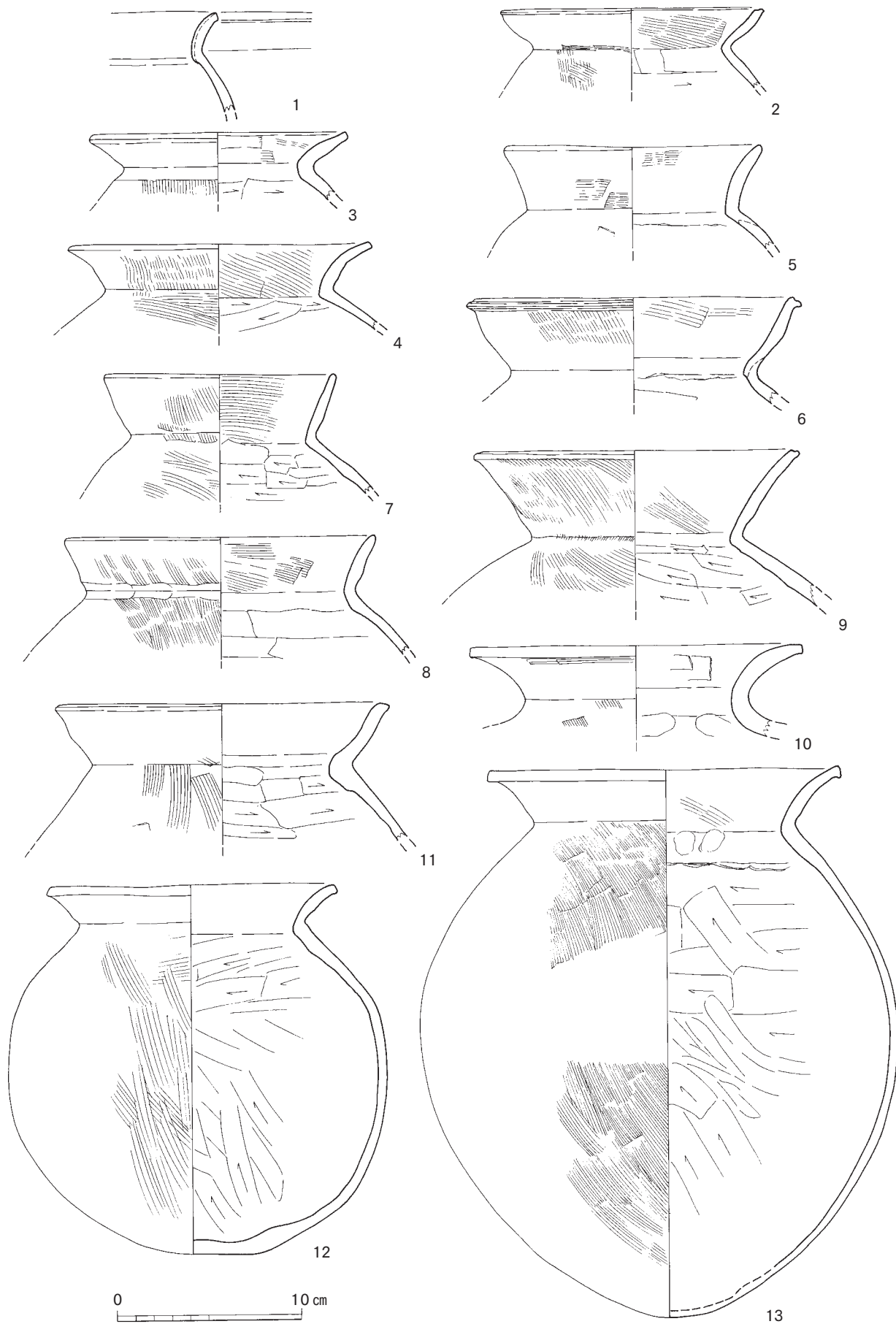


第77図 暗青灰色土包含層出土土器実測図② (1/3)

ケ目、他はナデを施す。2は甕の底部である。平底で内外面ともにハケ目を施す。3は壺の肩部か。内外面ともに赤色顔料が付着しており、磨滅のため不明瞭だが、肩部に斜線文を施すか。1～3のみが弥生時代中期以前に属する可能性のあるものである。しかしながら中期以前の遺構は遺跡内では見つかっていない。4・5は甕である。4は、口縁は外湾し、外面はタタキ、内面はケズリを施す。5の外面は粗いハケ目の後細かいハケ目を施し、内面は細かいハケ目を施す。6～12は壺である。6は素口縁で、ほぼ直立する。口縁部内面、外面はハケ目、胴部内面上半はナデ、下半はケズリを施す。口縁部付近に黒斑が残る。7は素口縁でやや外湾する。外面にはハケ目を施し、肩部付近に緩やかな波状文を施す。口縁部内面はナデ、胴部内面はケズリを施す。8の口縁は強く外湾し、赤色顔料が付着する。胴部内面はハケ目、他はナデを施す。9は素口縁でわずかに外湾する。口縁部外面はハケ後ナデ消し、胴部外面はハケ目を施し、頸部にハケ目を当てた工具痕が認められる。口縁部内面はナデ、胴部内面は工具によるナデか。10は素口縁でやや外湾する。口縁部内外面はナデ、頸部外面はハケ目、胴部外面は縦方向のミガキ、胴部内面はハケ目を施す。内面の一部に工具痕が残る。11は二重口縁壺で屈曲は強く、外湾する。外面はナデ、内面は磨滅のため不明瞭だが、口縁部に一部ハケ目が残る。12は二重口縁壺で、口縁はほぼ直立する。外面はハケ目後一部のみミガキ、内面はミガキを施す。外面下半に煤が付着する。13は鉢か。平底を呈し、外面はナデ、内面はハケ目を施す。14は脚付鉢である。脚部は強く屈曲し開く。内外面ともにナデを施す。4～14は弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものか。

第77図1は土師器の埴である。口縁部は外反し、外面下半付近にケズリを施す他は全てナデを施す。2～12は土師器の高坏である。2は口縁部端が屈曲して外湾し、器壁が薄い。内外面ともハケ目の後ナデを施す。3～8は坏部の屈曲部に明確に段がつく。3は口縁部が直線的に外反し、内外面ともハケ目を施す。4は口縁がわずかに外湾し、坏部の屈曲部に粘土の継ぎ目が見られる。内外面ともナデを施す。5は直線的に外反し、内外面ともにナデを施す。6は口縁部が外湾し、坏部の器高は高い。内外面ともにナデを施し、外面の一部に工具痕が残る。7は口縁部がわずかに内湾して、端部で強く外湾する。器壁は薄く、坏部内外面ともにハケ目、頸部はナデを施す。8は口縁部が緩やかなS字状を呈する。坏部の屈曲部で剥離する。内外面ともにハケ目後ナデか。9～12は脚部のみが遺存している。9は脚部が緩やかに開く。内面上部はシボリ、下部はケズリを施し、ケズリの端部が稜として残る。10～12は脚部下端付近で強く屈曲し内面には明確な稜が見られる。10は外面ナデ、内面ケズリを施し、ケズリの端部が稜として残る。11は屈曲後内湾し、内外面ともに稜が形成される。外面はナデ、内面は粗いケズリを施し、外面に一部黒斑が見られる。12は脚部端が湾曲し、上方に跳ね上がる。外面はナデ、内面はケズリを施す。13は土師器の壺である。口縁は素口縁でわずかに内傾する。肩部に縦方向のミガキが約7mm間隔で施される。14～16は土師器の小型の壺である。14は胴部最大径9.8cmで、口縁部と胴部内面上半はナデ、胴部外面はハケ目、胴部下半はケズリを施す。15は胴部最大径7.2cmで、胴部外面はハケ目、他はナデを施す。外面に煤が付着する。16は胴部最大径13.4cmで胴部外面はハケ目、胴部内面は強い指ナデ、頸部はナデを施す。外面の一部に赤色顔料が付着する。

第78図1～13は土師器の甕である。1は口縁部の屈曲が弱く、口唇部がわずかに突出する。内外面ともにナデを施し、一部工具痕が残る。2は口縁がやや内湾し、口唇部が跳ね上げ気味になる。口縁部内面、胴部外面はハケ目、口縁部外面はナデ、胴部内面はケズリを施す。古墳時代



第78图 暗青灰色土包含層出土土器实测图③ (1/3)

初頭の所産か。3は口縁が強く屈曲し、外反する。口縁部内面、胴部外面はハケ目、口縁部外面はナデ、胴部内面はケズリを施す。4は口縁部が外湾し、胴部内面はケズリ、他はハケ目を施す。5は口縁がやや立ち、わずかに外湾する。全てナデを施すが、一部にハケ目の痕跡が残り、ハケ目後ナデを施したか。6は口縁部が内湾し、口唇部が突出する。胴部内面はケズリ、他はハケ目を施す。7・8は口縁が直線的に外反する。胴部内面はケズリ、他はハケ目を施す。9は口縁部が直線的に外反し、口唇部がわずかに突出する。胴部内面はケズリ、他はハケ目を施す。10は口縁部が強く屈曲し、肩部が張るものと考えられる。外面はハケ目後ナデ、内面はナデを施し、頸部には指頭圧痕が残る。11は口縁部が内湾し、器壁は厚い。口縁部はナデ、胴部外面はハケ目、内面はケズリを施す。12は口縁部が外湾し、底部は平底気味となる。口縁部はナデ、胴部外面はハケ目、胴部内面はケズリを施す。外面に煤が付着する。13は口縁部が外湾し、口唇部が下方に突出する。口縁部外面はナデ、胴部外面はハケ目、口縁部内面はハケ後ナデ、胴部内面はケズリを施す。外面に煤が付着する。このほか板材が出土している。

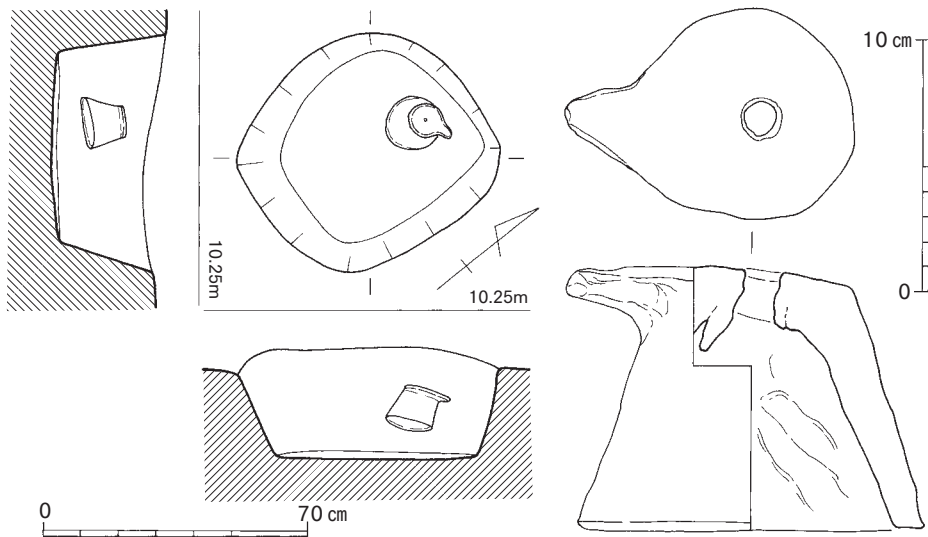
ピット出土土器

P282(第79図)

調査区の北側に位置し、8号溝の下部から検出した。SX07と位置的に近く、住居跡に関連するものである可能性もあるが、詳細は不明である。

出土土器(図版44、第79図)

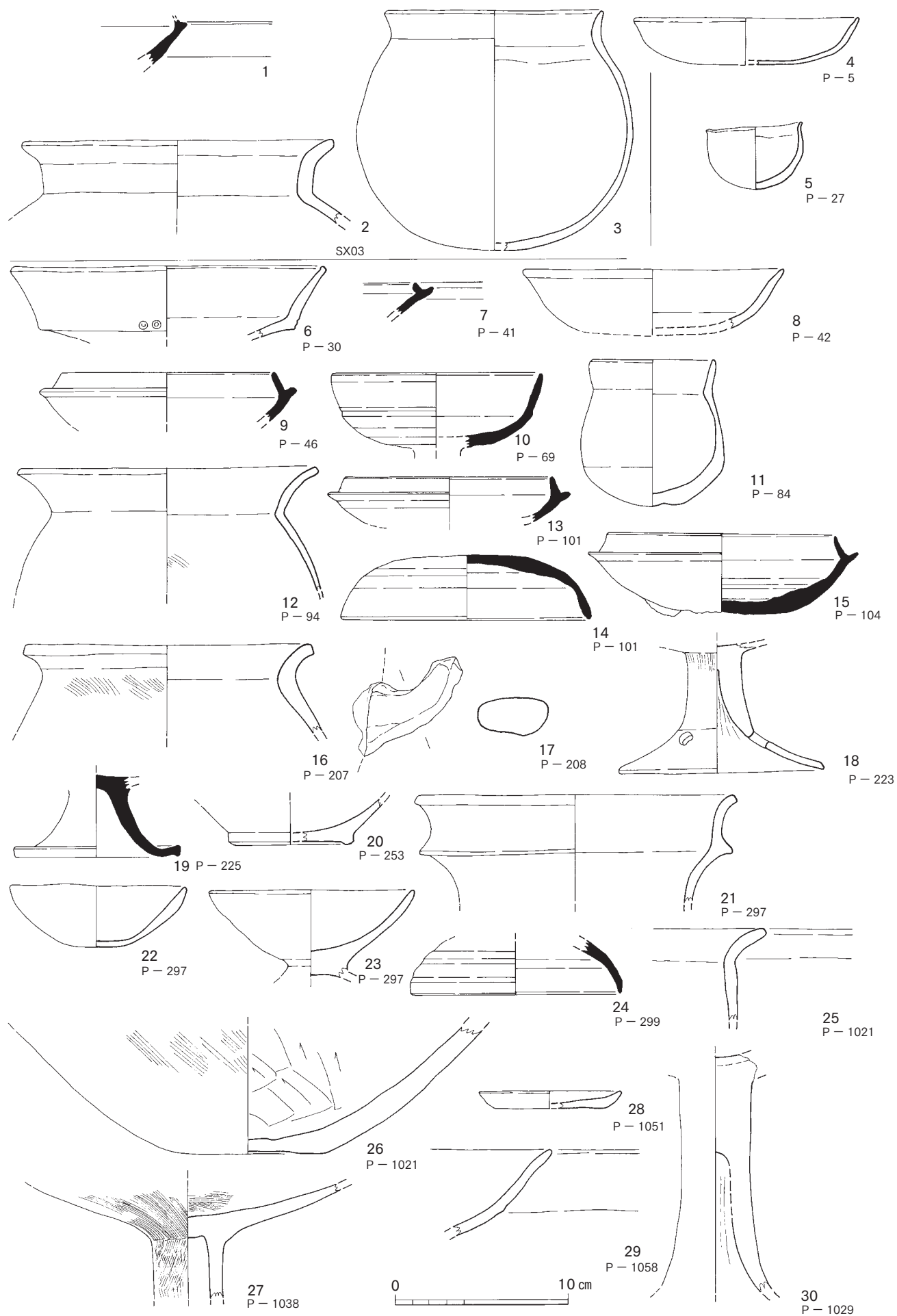
ピットの床面から8cmほど浮いたところで、弥生土器の支脚が出土した。上面から突出部が3cmほど伸び、中央やや右寄りには径1cmの孔が上方から穿たれる。外面は磨滅のため調整不明、内面はナデが施される。



第79図 P282土器出土状況、出土土器実測図(1/20、1/3)

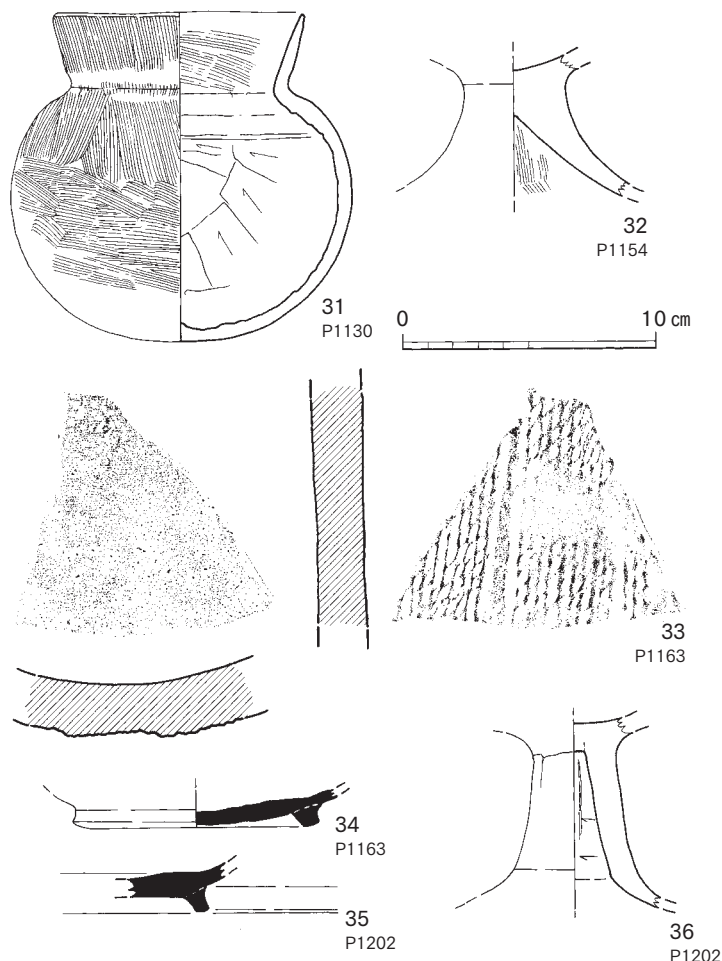
その他のピット等(図版44・45、第80～81図)

1は須恵器の坏身である。外面下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。7世紀の所産か。2は土師器の壺である。口縁が端部付近で屈曲し外反する。磨滅のため調整不明。3は土師



第80図 その他の遺構出土土器実測図① (1/3)

器の甕である。胴部は球形に近く、口縁部は緩やかに外反する。磨滅のため調整不明。1～3はSX03出土。4は土師器の埴である。磨滅のため調整不明。P－5出土。5はミニチュア土器である。口縁部端がわずかに外湾し、S字状を呈する。P－27出土。6は弥生土器の二重口縁壺である。口縁部は外湾し、口唇部を跳ね上げる。屈曲部に2つの竹管文が施される。P－30出土。7は須恵器の坏身である。受け部の屈曲は弱く、胴部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。P－41出土。8は土師器の埴である。口縁は外反し、磨滅のため調整不明。P－42出土。9は須恵器の坏身である。すべて回転ナデを施す。P－46出土。10は須恵器の高坏である。坏部下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。P－69出土。11は土師器の小型壺である。口縁の屈曲は弱く、わずかに外反する。磨滅のため調整不明。P－84出土。12は土師器の甕である。口縁は外湾し、器壁は薄い。磨滅のため調整は不明瞭だが、内面の一部にハケ目が残る。P－94出土。13は須恵器の坏身である。胴部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。P－101出土。14は須恵器の坏蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向のナデを施す。P－101出土。15は須恵器の坏身である。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。外面に他の須恵器片が融着する。P－104出土。16は土師器の甕である。口縁部が外湾し、端部が四角形となる。磨滅のため調整不明瞭だが、外面にハケ目が残る。P－207出土。17は土師器の甕である。取手部のみの遺存で断面が楕円形を呈する。全面ナデ成形を施す。P－208出土。18は弥生時代の高坏である。脚部の屈曲部に孔を3つ穿つ。内面上部はシボリ、他は磨滅のため不明である。脚部端に黒斑が見られる。P－223出土。19は須恵器の高坏である。脚部端が肥厚する。全て回転ナデを施す。P－225出土。20は白磁の碗か。外面は無釉で削り出しの高台である。P－253出土。21は弥生土器の二重口縁壺である。口縁は外反し、端部がわずかに外方に突出する。磨滅のため調整不明。P－297出土。22は弥生土器の鉢か。やや平底気味になり、口縁端部が肥厚する。磨滅のため調整不明だが手づくね様か。外面に黒斑が見られる。P－297出土。23は弥生土器の器台か。口縁はやや内湾し、外面に黒斑が見られる。磨滅のため調整不明。P－297出土。24は須恵器の坏蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデを施す。P－299出土。25は土師器の甕である。口縁の屈曲は弱い。口縁部はナデを施す。P－1031出土。26は弥生土器の壺である。底部は平底を呈し、外面はハケ目、内面はケズリを施す。P－1021出土。27は弥生土器の高坏である。頸部付近だけが遺存しており、脚部径は4cmである。外面はハケ目、脚部内面はナデ、坏部内面はハケ目後ミガキを施す。P－1038出土。28は土師器の皿である。口縁部が短く外反する。磨滅のため調整不明。P－1051出土。29は土師器の高坏である。口縁部端がわずかに外湾する。磨滅のため調整不明。P－1058出土。30は弥生土器の高坏である。脚部上半のみが遺存する。外面は磨滅、内面上部にシボリの痕跡が残る。P－1029出土。31は土師器の壺である。口縁部が直線的に外反し、胴部は球形に近い。外面上部は縦方向のハケ目、外面下部、口縁部内面は横方向のハケ目、胴部内面はケズリを施す。P－1130出土。32は弥生土器の高坏か。頸部のみが遺存しており、外面は磨滅、内面はハケ目を施す。P－1154出土。33は平瓦である。内面は磨滅、外面は縄目のタタキを施す。P－1163出土。34は須恵器の坏である。高台は短く、やや外反する。磨滅のため調整不明。P－1163出土。35は須恵器の坏である。内面は橙色、外面は灰色をしており、生焼けの須恵器である。高台は四角形を呈し、やや内湾する。P－1202出土。36は土師器の高坏である。脚部下端で段を形成し屈曲する。外面は磨滅のため



第81図 その他の遺構出土土器実測図② (1/3)

調整不明、内面上部はシボリ、下部はナデ、坏部内面はハケ目を施す。P-1202出土。

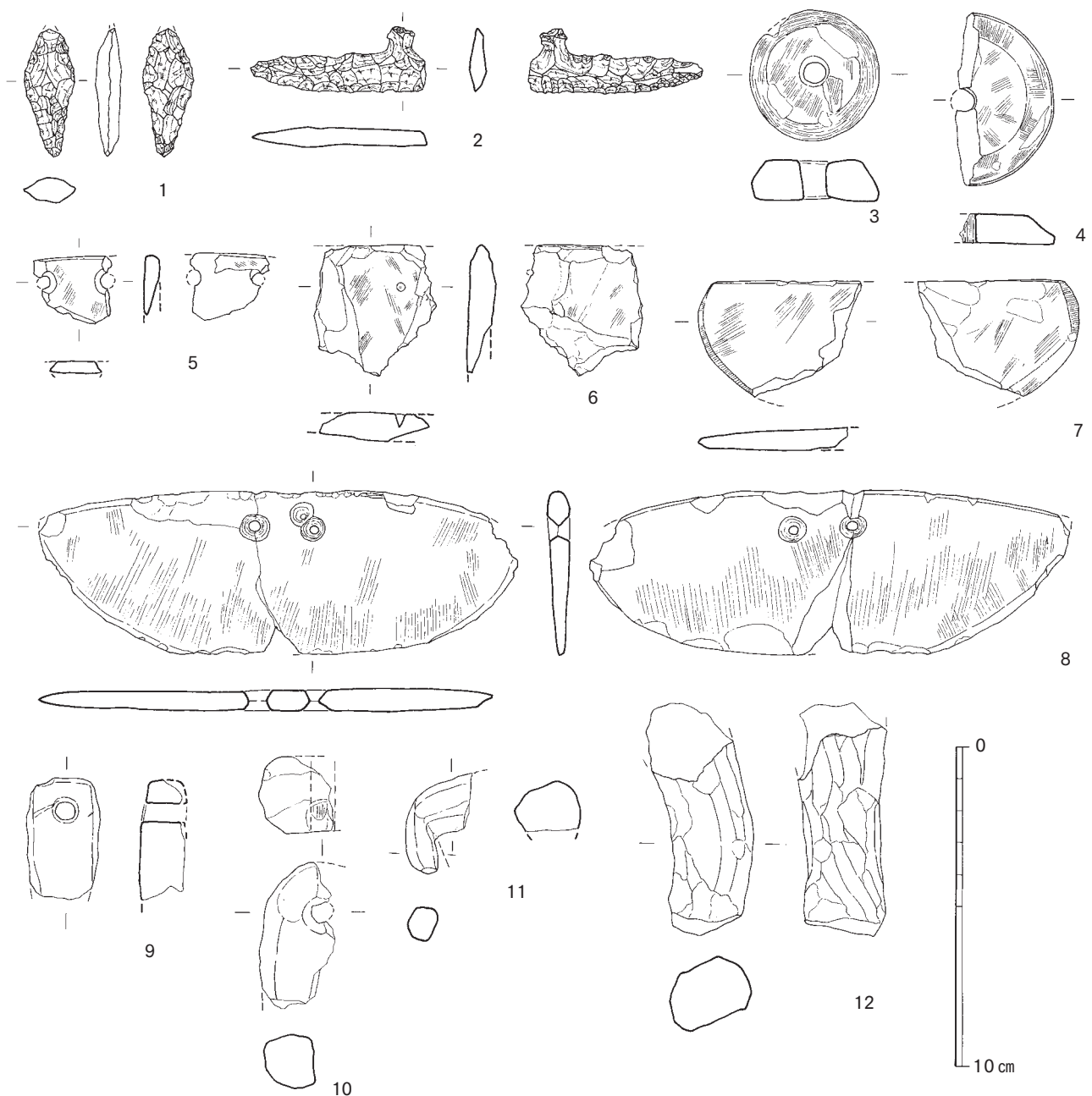
出土石製品・土製品・鉄製品・木製品 (図版42・45・46、第82～84図)

今回の調査区からは少なからず、石製品や土製品等が出土しており、ここでまとめて報告する。

1は打製石鏃である。凸基式で側辺に細かい連続剥離を施すことによって、茎部を作り出す。先端をわずかに欠損する。安山岩製。道路状遺構最上面出土。2は石匙である。両側からの大きな剥離により、 $0.8 \times 0.8\text{cm}$ ほどのつまみ部分を作り出す。刃部は細かい連続剥離を施す。右側の刃部を欠損する。安山岩製。8号溝出土。3・4は紡錘車である。3は断面台形で中央に径 $0.6 \sim 0.8\text{cm}$ の孔を上部から穿つ。周囲部分をわずかに欠損する。片

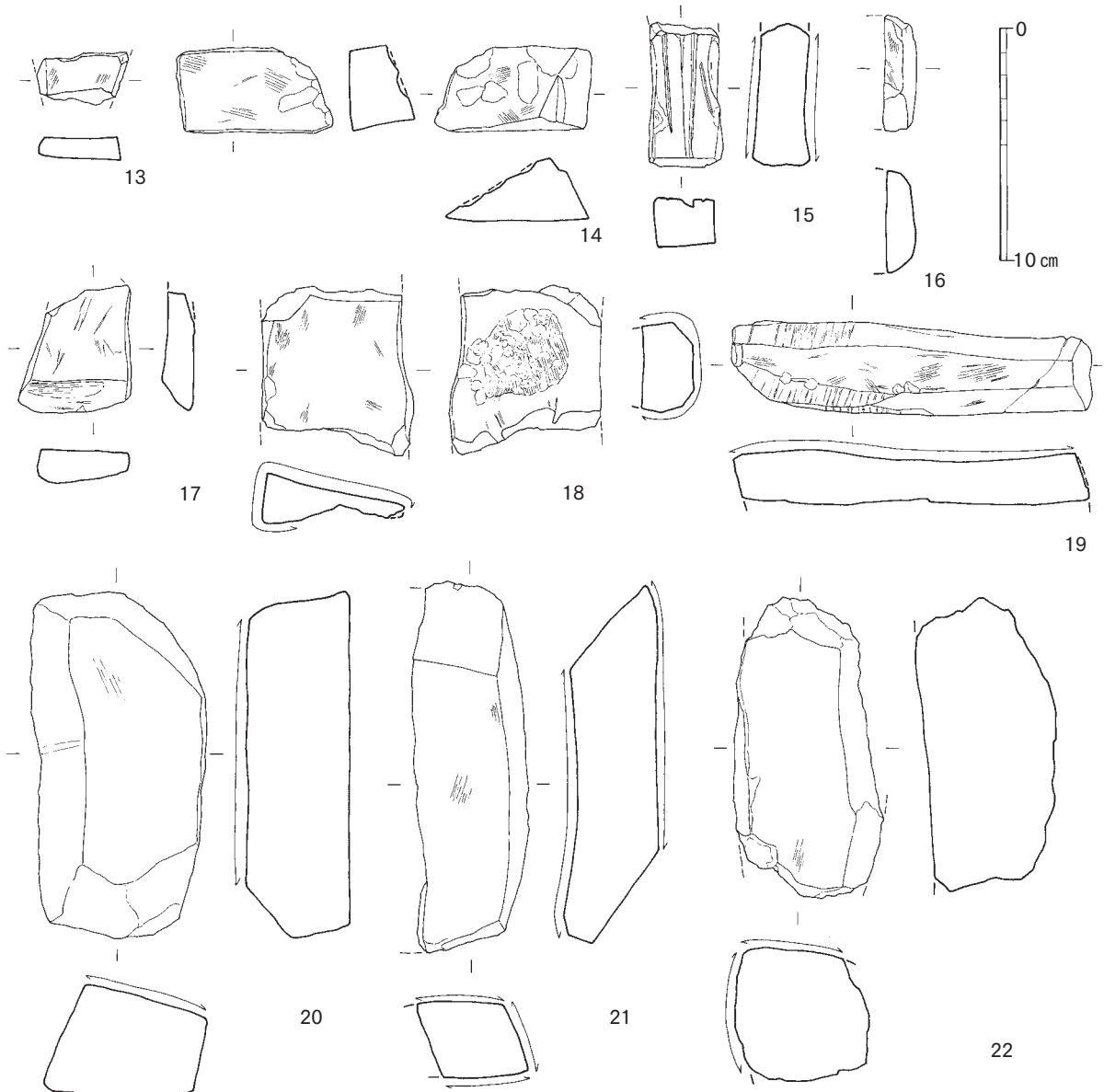
岩製。6号竪穴住居跡出土。4は3より大きく薄い。また、断面はおおよそ台形であるが、側面に 0.3cm ほど平坦面を持つ。径 0.8cm ほどの孔を穿つ。約 $1/2$ が残存している。滑石製。出土地不明。5～8は石庖丁である。5は背部と孔のみが遺存している。内孔 0.4cm 、外孔 0.7cm 、背孔 0.8cm 、孔間 2cm である。片岩製。褐灰色土包含層出土。6は背部の一部のみが遺存する。表面には径 0.3cm 、深さ 0.4cm ほどでとまった孔があり、鉄錐での穿孔を途中でやめたものと考えられる。また、右側には径 0.2cm の孔が穿たれている。左側の孔の背面には石理が通っており、石質が悪かったため途中で穿孔するのをやめ、右側の孔は穿孔中に破損したものである可能性がある。背孔は左右それぞれ 1.3 、 0.85cm である。頁岩質砂岩製。13号竪穴住居跡出土。7は端部の破片で外湾刃半月形になることがわかる。表面は側面から刃部にかけて、裏面は側面のみ、角度を違って研磨することで刃部を作り出している。孔は見当たらず、細長いタイプのものになるか、無孔のもの、もしくは製作途中のものと考えられる。輝緑凝灰岩製。13号竪穴住居跡出土。8は中ほどで折れてはいるが完形に近い。杏仁形を呈し、左側に使用痕が見られる。また、刃部は使用のためか磨滅しており特に右側が著しい。右側の孔は表面から 4mm 程度穿孔した後に、やや下部にあげ直している。孔の位置が高すぎたためか。内孔 0.25 、 0.35cm 、外孔 $0.7 \sim 1.0\text{cm}$ 、背孔 1.1cm 、孔間 1.8cm である。輝緑凝灰岩製。3号竪穴住居跡出土。9は舌状土製品である。上部中央に径 0.5cm の孔を穿つ。焼成は良好で、 $2/3$ ほどが残存する。道路状遺構上層出土。10はやや丸みを帯びるが舌状土製品になるか。上部に径 0.6cm の孔を穿つ。木目のような痕跡があり、木の棒で孔をあけたと考えられる。焼成はやや不良で、胎土もやや粗い。SX07出土。11は須恵質の不明土製品である。

足もしくは取手状になっており、接合面ではがれたものと考えられる。P-109出土。12は不明土製品である。全面をケズリで仕上げており、取手もしくは土馬の脚部か。17号竪穴住居跡出土。13～22は砥石である。13は破片のみだが両面を砥面として使用し、側面は面取りしている。石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。頁岩製。17号竪穴住居跡出土。14はほぼ完形で三角柱形をなす。二側面にのみ研磨の痕跡が見られる。石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。凝灰岩製。黒褐色粘質土包含層出土。15は長方形を呈し、両面および長側面が砥面となる。表面には刃部を研ぎだした際に出来たと考えられる筋状の痕跡が確認できる。石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。細粒砂岩製。25号溝出土。16は側面の破片である。磨滅が著しく、上面のみ砥面と確認できる。石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。白色頁岩製。SX05出土。17は全面砥面と考えられる。石質と大きさから、持ち砥の



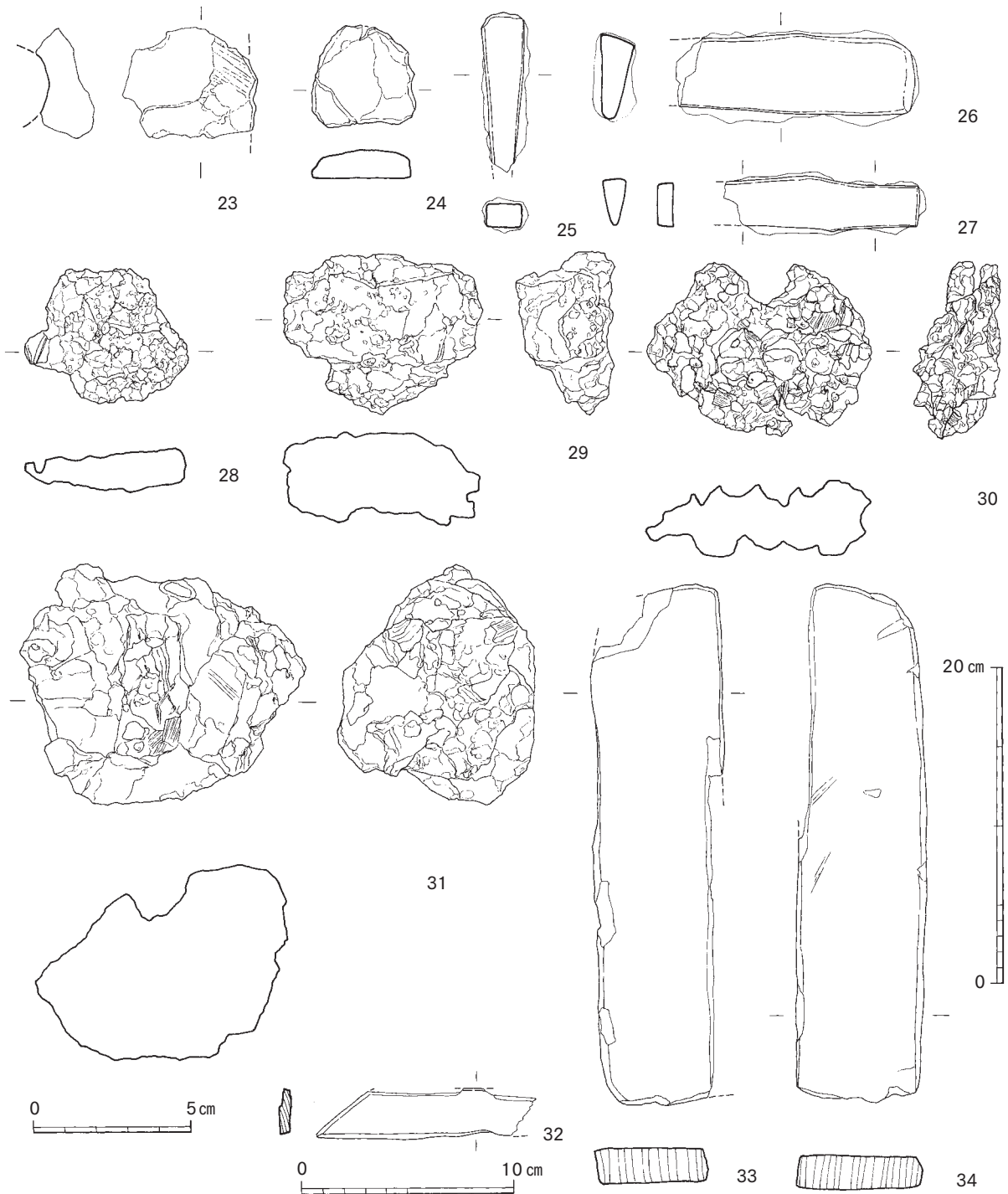
第82図 遺跡出土石・土製品実測図 (1/2)

仕上げ砥と考えられる。頁岩製。SX05出土。18は表面および側面は研磨痕が見られるものの、裏面には叩きにより形成された凹みが見られる。石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。片岩系石材製。13号住居跡出土。19は細長い形を呈し、断面は八角形になると考えられる。全面が砥面で一部に幅1mmで蒲鋒形に凹む直線的な筋状痕跡が見られる。石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。白色頁岩製。SX05出土。20は完形で上面のみが砥面、他面は研磨による面取りのみか。磨滅のため研磨痕はほとんど見えない。石質と大きさから、置き砥の仕上げ砥と考えられる。片岩系石材製。26号竪穴住居跡出土。21は半分ほどが欠損しており、上面のみが砥面、他面は研磨による面取りのみと考えられる。石質と大きさから、置き砥の仕上げ砥と考えられる。緑色片岩製。9号土坑出土。22は風化が著しいが、上面のみが砥面か。石質と大きさから、置き砥の仕上げ砥と考えられる。片岩製。22号竪穴住居跡出土。23は羽口である。先端部の破片と考えられ、端部に鉄分が付着し、黒変している。P-11出土。24は鉄片である。欠損部はみられず、完形に近いものか。メタルが残存している。2号溝出土。25は釘か。直線的に窄まっていき、先端は欠損する。褐灰色土包含層出土。26は刀子か。断面三角形をなし、端



第83図 遺跡出土石製品実測図 (1/3)

部から3.5cmほどのところで、上部に段が付く。P-224出土。27は刀子である。刃部は断面三角形、柄部は四角形である。26より幅が狭く、下段に段が付く。5・6号溝出土。28～31は鉄滓、碗形鍛冶滓である。28は鉄分が遺存している。1号溝出土。29は塊状で、25号溝出土。30は所々に繊維状の擦痕が認められる。25号溝出土。31は塊状で、25号溝出土。このほか鉄滓は中世の溝から1kg分ほど出土している。32は不明木製品である。幅2.3cmで鳥形もしくは桶などの底板の一部か。出土地不明。33・34は板材である。ともに柾目取りで大きさも類似する。ともに暗青灰色粘質土出土。



第84図 遺跡出土鉄・木製品実測図 (1/2、32は1/3、33・34は1/4)

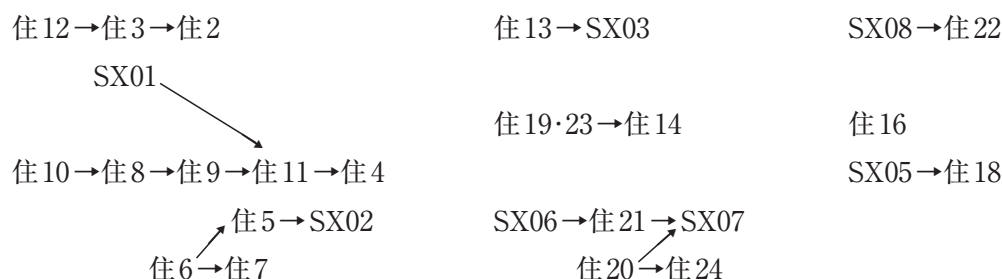
IV おわりに

検出遺構について（第85図）

本調査区においては、弥生時代終末～古墳時代初頭頃、古墳時代後期頃、古代（7世紀末～8世紀）、中世（12,14世紀）と大きく分けて4時期の遺構が確認された。未整理の遺物が多いが、他の調査区でも近世が入る場合がある程度で、この傾向はほぼ同様である。丘陵上全体でこれらの時期に大規模な集落を形成していたことは疑いなく、行橋平野内でも中心的な集落の一つといえよう。詳細は全ての整理作業が終了してから再度検討することとなるが、ここでは本調査区の傾向や特筆すべき事項について纏めておきたい。

住居跡について

今回の調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡9 + α 軒、古墳時代後期の竪穴住居跡19 + α 軒が検出された。特に調査区中央部北よりでは10軒の住居が切りあっており、北西端でも6軒以上の竪穴住居跡が切り合っていたものと考えられる。南東側の斜面を下っていくに従い、住居の数は少なくなり、切り合いもなくなっていく。未整理段階だがこの傾向は、他の調査区でも当てはまっていると考えられ、同じ時期の住居が何軒も切り合っていることから、丘陵頂部付近で何度も建て直しをしたものと考えられる。切り合い関係を示すと以下ようになる。



先に述べたように、同時期と考えられる住居跡が何軒か切り合っている場所がある事から、詳細な時期差が土器にも出て来る可能性がある。しかしながら、他の調査区の整理が進んでいないため、住居群ごとの関係性の認定等とともに今後の報告書の中で述べることとし、現段階では4時期での大まかな傾向のみ述べることとする。

遺構は弥生時代終末～古墳時代初頭では丘陵の頂部付近を中心として集落が展開している。この段階では南東側の谷部は落ちが見られ、そのまま東側に開口する谷に繋がっていたものと考えられる。

古墳時代後期頃になると遺跡は最盛期を迎え、谷部付近まで住居跡が展開するようになる。ただし、丘陵頂部付近が最も切り合いが激しいことから、集落の中心部は丘陵頂部にあるものと考えられる。

古代になると竪穴住居跡は他の調査地点を含めてもほとんど認められなくなる。その一方で、井戸や道路状遺構が作られ、丘陵頂部付近には掘立柱建物（別地点）が作られる。この段階には、谷が埋没のため落ち際が東方に移っているが、東側の国道の調査から、谷は依然として開口していたものと考えられる。

弥生時代終末～古墳時代初頭頃



古墳時代後期頃



7世紀後半～8世紀
(古代)



中世(12世紀)以降



第85図 時期別変遷図(1/800)

中世では、南東側には井戸が作られ、他地点とともに溝が盛んに掘削される。これは区画溝であると考えられ、同様の溝が丘陵上で何条も見つかっている。ただし、内部にあると考えられる建物跡は検出できておらず、今後検討を要する。

井戸出土の貝類等について

12号土坑では、中層で馬骨、その下部から貝・種子と犬頭骨、最下層からは斎串が出土している。馬骨と犬骨については先述のとおり来年度分析に出す予定であるので、井戸自体の意義などは来年度記述することとし、ここでは出土貝類・種子について簡単に纏めておきたい。

出土した貝類は全て持ち帰ったわけではなく、サンプル的に採取している。なお、調査段階では選別等行っていない。同定は、主として九州歴史資料館文化財調査室保存管理班の小池史哲が行ったが、文責は全て城門にある。

出土した貝類で種が認定できたものは、二枚貝がオキシジミ（右21、左22）・シオフキ（右1）・アサリ（右5、左12）・ハマグリ（右8、左8）・イシガイ科（カラスガイ？1）・マテガイ（右1）・不明（腕足類：註1）である。また、巻貝はオオタニシ1・マルタニシ5・スガイ2・ヒメタニシ13である。

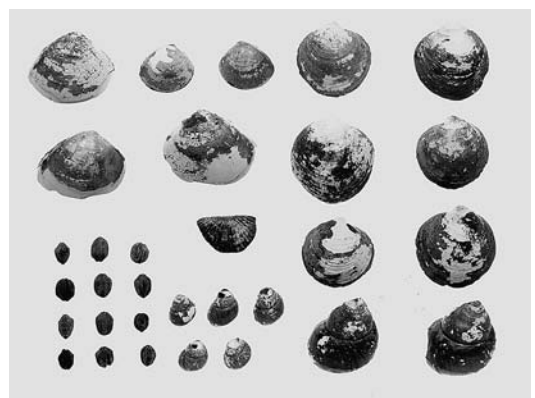
淡水および海水・汽水性両方の貝が出土しており、全て食用に供することが出来るものである。サンプル中では汽水性の二枚貝が多く、淡水性の巻貝が続く。行橋平野は現在でもアサリやマテ貝などの潮干狩りが盛んであり、古代の海岸推定線も遺跡近くまで来ていると考えられることから、周辺で取れる貝を食べていたことは十分に考えられる。

貝中からはセンダンの種子も25個出土している。センダンは5～6月頃に花が咲き、秋に実になる落葉樹である。古代には「あふち（棟）」と呼ばれ、『万葉集』には山上憶良の歌のほか4首が載っているなど、古代より知られている木である。古代の文献では、山上憶良の歌にあるような観賞用の花として記される一方で、同じ『万葉集』には「珠に貫く棟を家に植ゑたらば山ほととぎす離れず来むかも」とあり、祭礼の場で使用したことを偲ばせる歌もある。この他にも広隆寺の毘沙門天など仏像に使われたり、罪人の首をさらす木として使用されたり、現代では家具としても使用される。その種子は苦楝子と呼ばれ薬用となるが、毒性もある。

このほか、層は不明ながら桃の種子が出土している。桃の種は祭祀に供されることもあり、1つのみであるが何らかの祭祀が行われた可能性はある。

以上のように、食用可能なものが全てである貝と、それとは使用法の異なるセンダンが同一層に廃棄されていることがわかる。また、道路状遺構で述べたように、同時期の井戸は他にもあるものの、この井戸のみに硬化面が続いている。これらのことから、詳細は動物骨の分析後に検討するが、古代の集落内において、この井戸が特別なものである可能性は指摘できるであろう。

註1：北九州市立自然史・歴史博物館 下村通誉氏の御指示による。



12号土坑出土貝・種子類

道路状遺構について

本調査区では南端から東西に伸びる道路状遺構が検出された。道路状遺構が向かう方向は東に行くと、馬蹄形になった丘陵の中央部谷付近に向かっており、西に向かうと丘陵の頂部に向かう。東西いずれも延長線上に道路状遺構の続きもしくは建物等検出されておらず、具体的にどこに向かっていたのかは不明である。ちなみに隣接地である国土交通省の事業にともなう発掘調査で検出した道路状遺構は、南北に走っており、南は川付近の谷地形に向かって、北は馬蹄形中央の谷部へ向かっている。丘陵中央部の谷については国交省の事業に伴う発掘調査を行っており、今後整理作業を進めていく予定であり、谷部に船着場等何らかの施設があった可能性等含めて今後検討していく。

構造について

今回検出された道路状遺構は、西半が主に地山面まで掘り込んで作られているのに対し、東半は古墳時代後期の土器を中心とした黒褐色土包含層の上面にも帯状硬化が認められるなど、埋没土の上に敷設されている。この包含層は古墳時代の単純層ではなく、古代の遺物も多少入っており、混入の可能性もあるが、古墳時代末～古代になって人為的に埋めた可能性もある。

東半構造は包含層上に帯状硬化ならびに硬化面が認められ、西半は地山面に波板状痕跡、さらにその上面に帯状硬化ならびに硬化面が認められる。断面で見ると、先に述べたように、3面以上あったことを示しているが、土器を見ても補修に使用したと考えられる小片が多いこともあり、明確に時期は判別できない。

最上面は、硬化面のみが認められており、西半では北側側溝の上面に硬化面が認められている。このことから、少なくとも西半では北側側溝が埋まった状態で道路として使用されたといえる。東半については、トーンで示した部分に硬化面が見られること、また断面で、9層の上面が硬化していることやそこに切り込む形で7・8層が見られることから、帯状硬化を含むある程度の範囲に硬化面が広がっていた状況が考えられる。また、西半の硬化面は12号土坑周辺に広く見られることから、井戸に向かう道としても使用されていた可能性がある。その場合硬化面の形成は通行ないしは通行後の凹みの補修により形成されたことになる。道路近くに井戸がある例は他遺跡でも認められ（山村1995）、通行者に共用されたものであったのだろうか。

上面は東半では帯状硬化が、西半では帯状硬化に加え側溝、足跡状痕跡が確認された。帯状硬化は全面に微細な土器が詰め込まれており、埋土もマンガンを含む土で固く締められていた。帯状硬化の切り合いはなく、1と3が90cm間隔で平行する可能性がある。それぞれの幅は20～30cmと小さいことから通行痕跡というよりも、轍の補修痕である可能性を考えておきたい。1・3は2輪、他は1輪の轍であろうか。ただし、路面が削平されていた場合には全てが2輪になる可能性、他の通行痕で出来た窪みの補修痕である可能性もあり、明確には判断できない。

側溝は西側側溝については検出されたが、東側については、東半が重機により掘削した関係で不明確である。ただし、東端断面でも確認できないことから、東側の側溝はもともとなかった可能性もある。傾斜は南東に向かって落ちていくので、側溝がなくとも水は掃けたものと考えられる。

足跡状痕跡については、埋土が粘質土であり列として並ばないことから、動物等の足跡である

可能性は低いと考える。ただし、先にも述べたように帯状硬化には掛かっていないこと、全てが同一面から切り込んでいることから、道路に関する何らかの痕跡である可能性は高いと考える（註2）。

下面は西半で波板状痕跡が見つっている。波板状痕跡については、研究史上で歩行痕跡、補修痕跡、基礎地業、枕木痕跡などの機能が推定されており（小鹿野2003など）、それぞれの状況によって多様な解釈がなされている。本調査区の場合、楕円形・円形のものがあることから枕木痕跡の可能性は低いだろう。列状に並ぶこと、土器小片が埋められていることから、歩行・補修痕の可能性はあるが、基礎地業の場合でも列状に並ぶ場合はあり、判断できない。芯々距離は60～75cmであり、牛馬の歩行幅とされている距離とほぼ一致するが（東2003）、波板状痕跡の底面がほとんど平らであること、硬化が認められないこと、円形のものがあることなどから、基礎地業の可能性が高いとしておきたい。また、東半の包含層部分には波板状痕跡が認められなかった。経験論でしかないが、道路機能時には谷に向けて水が流れ、道路面には水が溜まらなかったであろうことから、降雨時には地山（赤土）のほうが粘質土よりも滑りやすかったことが考えられないだろうか。

先に円形のものが楕円形のものを切る傾向にあると指摘したが、これは、国交省用地内でみつけた道路が楕円→楕円→円の順であることと類似しており、国交省調査区の整理後改めて検討したい。

註2：仮に、そのときの路面の状況等により列状に並ばない場合がある、削平のため列を成していないなどの可能性が指摘できれば、足跡と認定しうるであろうが、そのような痕跡は見つかっていない。仮に足跡だとすれば、西側が窪んでいることから進行方向は概ね西、大きさから馬か牛かと考えられる。

【参考文献】

- 東和幸 2003「波板状凸凹面牛馬歩行痕説再論」『研究紀要 縄紋の森から』創刊号: pp.81-88, 鹿児島: 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 木下良 1995「日本の古代道路―駅路と伝路の変遷を中心に―」『古代文化』47-4: pp.17-27, 京都: 財団法人古代学協会
- 小鹿野亮 2001「古代の官道―筑紫野市域における調査―」『筑紫野市史資料編（上）考古資料』pp.683-700, 筑紫野: 筑紫野市
- 小鹿野亮 2003「古代道における路体施工の複合性―道路に残された痕跡の分別理解―」『九州考古学』78: pp.53-79, 福岡: 九州考古学会
- 近江俊秀 1995「道路遺構の構造―波板状凸凹面を中心として―」『古代文化』47-4: pp.3-16, 京都: 財団法人古代学協会
- 山村信榮 1995「古代道路の諸相」『古代文化』47-4: pp.38-44, 京都: 財団法人古代学協会
- 山村信榮 2001「古代道路の構造」『古代交通研究』10: pp.85-96, 東京: 古代交通研究会

8号土坑出土の墨書土器について

坯の外底部に四文字の墨書があり、「京郡物太」と判読できる。「京郡」は同遺跡が所在する豊前国京都郡を指す。墨書土器の性格から京都郡の略記の可能性もあるが、『日本書紀』景行天皇十二年九月条に見える郡名起源説話では「京」の一字で「みやこ」と読ませている。「物太」は、管見のかぎり郷名をはじめとした古代の地名や物品名に該当するものがない。「物太」の意味を理解する上で参考となるのは、同遺跡出土の「京都大」銘墨書土器と北九州市水町遺跡出土の「物大」銘墨書土器である（註3）。前者は京都郡の大領を意味すると理解されている（酒井芳司・松川博一「福岡・延永ヤヨミ園遺跡」『木簡研究』第32号、2010年）。久留米市野瀬塚遺跡では、筑

後国三潞郡の郡司を指す「三万大領」「三万少」銘の墨書土器が出土しており、類例として注目される。後者は吉祥句との理解もできるが、古代において「大」と「太」が通用もしくは混用されることがあることから「物太」と「物大」が同意の可能性もある。同じ遺跡出土の「京都大」銘墨書土器の存在から、少なくとも当該の墨書土器は同じく京都郡の大領に関わる表記と考えられる。「大」に冠する「物」の意味するところであるが、岩手県遠野市高瀬Ⅰ遺跡や山形県遊佐町上高田遺跡からは、複数の「物」銘墨書土器とともに「物部」銘のものが出土しており、「物」が「物部」の略記であることを示している。京都郡に隣接する企救郡にあたる北九州市長野角屋敷遺跡出土の木簡に「大領物部臣今継」の名がみえるほか、大宝2年(702)の豊前国仲津郡・上毛郡戸籍に物部氏の存在が確認できる。以上から、京都郡の大領であった物部氏に関わる墨書土器の可能性が考えられる。

註3：財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 学芸員 田村和裕氏の御教示による。

第4表 特殊遺物一覧表

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	登録番号
29	56	39	Ⅱ	住居18	土製品	勾玉	3.4	1	1.1	4.85		298
53	16	41	Ⅱ-1	土坑8	土製品	羽口		7.7		604		111
54	20	41	Ⅱ-1	土坑8	木製品	席編錘		4.2		-		
54	21	41	Ⅱ-1	土坑8	木製品	台		17.6	4.1	-		
54	22	41	Ⅱ-1	土坑8	木製品	燃えさし	18.7	1.8	1	-		
54	23	41	Ⅱ-1	土坑8	木製品	燃えさし	17.4	2.8	2.8	-		
59		42	Ⅱ-1	土坑12	木製品	斎串	23.9	2	0.5	-		
72	3	巻6	Ⅱ-1	土坑13	銅製品	鏡	11		0.2			
82	1	45	Ⅱ-1	道路状遺構最上面	石製品	石鏃	4	1.7	0.8	4.63	安山岩	293
82	2	45	Ⅱ	溝8	石製品	石匙	2		0.7	5.51	安山岩	
82	3	45	Ⅱ	住居6 No1	石製品	紡錘車	4.1		1.4	37.37	片岩	
82	4	45	Ⅱ	不明	石製品	紡錘車	5.4		0.9	24.07	滑石	
82	5		Ⅱ-1	上面褐灰土包含層	石製品	石庖丁			0.5	3.15	片岩	292
82	6	45	Ⅱ	住居13	石製品	石庖丁			1	16.31	頁岩質砂岩	
82	7	45	Ⅱ	住居13	石製品	石庖丁			0.7	13.82	輝緑凝灰岩	
82	8	45	Ⅱ	住居3	石製品	石庖丁	5.1	14.9	0.7	76.88	輝緑凝灰岩製	
82	9	45	Ⅱ-1	道路状遺構上層	土製品	舌状土製品		2.3	1.4	12.2		
82	10	45	Ⅱ	SX07	土製品	不明土製品			2.35	15.92		
82	11		Ⅱ-1	P109	須恵器	不明土製品	3.1	2	2	9.72		
82	12		Ⅱ-1	住居17	土製品	不明土製品	7.2	2.7		55.57		
83	13		Ⅱ-1	住居17	石製品	砥石			1	12.62	頁岩	
83	14		Ⅱ-1	黒褐色土包含層	石製品	砥石	3.7	6.7	2.8	77.57	凝灰岩	
83	15	46	Ⅱ	溝25	石製品	砥石		3.2	2.5	74.42	細粒砂岩	
83	16		Ⅱ	SX05 No.9	石製品	砥石				36.68	頁岩	
83	17		Ⅱ	SX05	石製品	砥石		4.9	1.6	48.08	頁岩	
83	18	46	Ⅱ	住居13	石製品	砥石		6.5	2.2	111.43	片岩	
83	19	46	Ⅱ	SX05 No.4	石製品	砥石	15.5	4	2.4	201	頁岩	
83	20	46	Ⅱ-1	住居26	石製品	砥石	14.9	7.5	4.7	919	片岩	291
83	21	46	Ⅱ-1	土坑9	石製品	砥石	15.9		4	413	緑色片岩	290
83	22		Ⅱ	住居22 No10	石製品	砥石				589		
84	23		Ⅱ	P11	土製品	羽口				20.7	破片	
84	24	46	Ⅱ	溝2	鉄製品	鉄片	3.15	3.3	0.9	17.29		
84	25	46	Ⅱ-1	褐灰色土包含層	鉄製品	釘?		1.3	0.8	12.45		
84	26	46	Ⅱ	P224	鉄製品	刀子?		2.6	1.1	52.74		
84	27	46	Ⅱ	溝5・6	鉄製品	刀子		1.65	0.7	22.35		
84	28	46	Ⅱ	溝1	鉄製品	鉄滓	4.3	5.2	1.5	38.25		
84	29	46	Ⅱ	溝25	鉄製品	鉄滓	5.1	6.2	3.1	144.44		
84	30	46	Ⅱ	溝25	鉄製品	鉄滓	5.6	7.1	2.8	86.2		
84	31	46	Ⅱ	溝25	鉄製品	鉄滓	7.6	9.1	6.2	324		
84	32	42	Ⅱ-1	不明	木製品	鳥形?		2.3	0.55	-		
84	33	46	Ⅱ-1	暗青灰色土包含層	木製品	板	32.9	8.4	2.4	-		
84	34	46	Ⅱ-1	暗青灰色土包含層	木製品	板	32.6	8.2	2.2	-		

第5表 出土遺物一覧表①

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
8	1		Ⅱ	住居1	土師器	壺	15.0			暗黄茶褐、良	3
8	2		Ⅱ	住居1屋内土坑	土師器	甕	16.0			黄橙、良	5
8	3		Ⅱ	住居1	土師器	器台				茶褐、良	1
8	4		Ⅱ	住居1屋内土坑	土師器	埴				茶褐、良	4
8	5		Ⅱ	住居1	土師器	高坏				暗黄茶褐、良	2
8	6		Ⅱ	住居2	土師器	高坏				黄橙、良	8
8	7	36	Ⅱ	住居2 №3	土師器	鉢	9.5	4.4	4.9	灰橙褐、良	6
8	8		Ⅱ	住居2 №2	土師器	甕	21.0			暗黄茶褐、良	7
8	9		Ⅱ	住居4 P1	須恵器	高坏	10.7	8.8		灰、良	36
8	10		Ⅱ	住居4 P1	土師器	甕	11.2			赤褐、良	34
8	11		Ⅱ	住居4 P7	土師器	甕	16.0			淡灰、やや不良	35
8	12		Ⅱ	住居4	土師器	甕	24.0			暗黄茶褐、良	33
10	1		Ⅱ	住居3 №1	土師器	壺	8.3			橙褐・黄橙、良	15
10	2		Ⅱ	住居3	土師器	壺	10.4			外：赤褐/内：黄褐・黒灰、良	30
10	3		Ⅱ	住居3 №18	土師器	甕	14.0			黄褐・黄橙、良	17
10	4		Ⅱ	住居3	土師器	甕	14.6			暗黄茶褐・黄橙、良	11
10	5		Ⅱ	住居3ベルト	土師器	甕	14.6			黄橙・黒灰、良	32
10	6		Ⅱ	住居3 №2	弥生土器	甕				暗茶褐～黒褐、良	25
10	7		Ⅱ	住居3 №14	弥生土器	甕	16.5			暗茶褐～黒褐、良	28
10	8		Ⅱ	住居3 №12	土師器	甕	13.0			暗茶褐～黒褐、良	26
10	9		Ⅱ	住居3	土師器	高坏				灰黄褐、良	12
10	10		Ⅱ	住居3 №3	土師器	高坏?	16.7			灰黄褐、良	16
10	11		Ⅱ	住居3 №16	弥生土器	高坏				黄茶・灰・黒灰、良	18
10	12		Ⅱ	住居3 №15	土師器	高坏		15.0		暗茶褐、良	29
10	13		Ⅱ	住居3 №17	弥生土器	高坏		12.3		黄橙、良	19
10	14		Ⅱ	住居3 P2	弥生土器	支脚	5.1	10.0	9.0	暗茶褐・黄褐、良	20
10	15		Ⅱ	住居3 №5	土師器	小型壺		3.7		灰黄褐、良	27
10	16		Ⅱ	住居3	土師器	鉢				黄茶、良	14
10	17		Ⅱ	住居3	弥生土器	鉢		9.0		黄橙、良	13
10	18		Ⅱ	住居3	土師器	甕				黄褐、良	10
10	19		Ⅱ	住居3	土師器	ミニチュア	3.8		2.8	黒灰、良	9
11	1		Ⅱ	住居3屋内土坑	弥生土器	甕	16.0			淡茶褐、良	24
11	2		Ⅱ	住居3屋内土坑・ベルト	弥生土器	甕		3.3		外：赤褐～暗茶褐/内：暗茶褐、良	31
11	3		Ⅱ	住居3屋内土坑	土師器	高坏		12.1		黄橙・赤褐、良	21
11	4		Ⅱ	住居3屋内土坑	弥生土器	鉢	11.2	1.0	8.8	外：茶褐/内：灰黄茶、良	23
11	5		Ⅱ	住居3屋内土坑	弥生土器	鉢				黄橙・茶褐、良	22
11	6		Ⅱ	住居5	土師器	埴	9.8		3.5	茶褐、良	37
11	7		Ⅱ	住居5 №1	土師器	埴	12.2	6.0	4.7	淡茶褐、やや不良	38
11	8		Ⅱ	住居5	須恵器	坏蓋	8.8			灰、良	43
11	9		Ⅱ	住居5	須恵器	坏蓋	10.0		2.8	灰、良	42
11	10		Ⅱ	住居5 P1	須恵器	高坏	10.0			淡灰、良	39
11	11		Ⅱ	住居5	須恵器	高坏		10.0		灰、良	44
11	12		Ⅱ	住居5	須恵器	高坏	12.0		3.5	灰、良	41
11	13		Ⅱ	住居5	土師器	鉢	11.0			外：暗茶褐/内：黄茶褐、良	40
11	14		Ⅱ	住居6 №12	弥生土器	壺	17.0			淡橙褐、良	48
11	15		Ⅱ	住居6 №17	弥生土器	壺	21.2			淡橙褐、良	51
11	16		Ⅱ	住居6 №7	土師器	壺				灰黄褐～淡橙褐、良	63
11	17		Ⅱ	住居6	弥生土器	壺	20.8			外：暗茶褐～黒褐/内：暗茶褐、良	64
13	1		Ⅱ	住居6 №24	弥生土器	甕				黄褐、良	52
13	2		Ⅱ	住居6 №17	弥生土器	甕	17.6			黄褐～灰、良	50
13	3		Ⅱ	住居6 №12	弥生土器	甕	30.0			淡橙褐、良	47
13	4		Ⅱ	住居6 №25	弥生土器	甕	30.0			橙褐、良	53
13	5	36	Ⅱ	住居6 №13	土師器	甕	12.7		16.5	茶褐、良	62
13	6		Ⅱ	住居6 №20	弥生土器	甕	18.0			橙褐、良	56
13	7		Ⅱ	住居6 №18	土師器	甕	21.0			黄灰、良	57
13	8		Ⅱ	住居6 №16	弥生土器	甕	24.8			黄褐～暗黄褐、良	49
13	9	36	Ⅱ	住居6 №26	土師器	甕	21.0		27.3	淡灰黄～淡灰黄褐、良	61
13	10		Ⅱ	住居6 №2	弥生土器	高坏	29.7			外：暗黄茶褐/内：橙褐・黒灰、良	54
14	1		Ⅱ	住居6 №5	土師器	高坏		10.0		外：灰黄褐/内：灰、良	46
14	2		Ⅱ	住居6 №27	弥生土器	高坏		16.5		淡黄褐、良	58
14	3		Ⅱ	住居6 №5	弥生土器	鉢	22.6			赤橙、良	55
14	4		Ⅱ	住居6	須恵器	坏蓋	14.5		3.0	灰、良	60
14	5		Ⅱ	住居6	須恵器	坏身	12.4		3.5	灰、良	59
14	6		Ⅱ	住居6	須恵器	坏身	14.5			灰白、良	45
14	7	36	Ⅱ	住居7 №22	弥生土器	鉢	10.4		6.9	黄橙、良	88
14	8		Ⅱ	住居7	弥生土器	甕	13.8			淡黄褐、良	72
14	9		Ⅱ	住居7 №21	土師器	小型壺				外：黄橙/内：灰白、良	83
14	10		Ⅱ	住居7 №4	土師器	小型壺	12.1		10.0	外：黄茶/内：黒灰・黄灰、良	68
14	11	36	Ⅱ	住居7 №5	土師器	壺	10.4		13.1	黄橙～暗灰、良	76
14	12	36	Ⅱ	住居7 №20	弥生土器	鉢	16.4		8.2	暗灰黄褐、良	82
14	13		Ⅱ	住居7 №19	弥生土器	壺	12.4			黄橙、良	87
14	14	36	Ⅱ	住居7 №1	弥生土器	壺	15.4		26.9	黄橙、良	65
15	1		Ⅱ	住居7	土師器	甕				淡橙・淡黄灰、良	71
15	2		Ⅱ	住居7 №12	土師器	甕	19.4			灰茶、良	80
15	3		Ⅱ	住居7	土師器	甕	13.2			黄茶、良	70

第5表 出土遺物一覧表②

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
15	4		Ⅱ	住居7 №5	土師器	甕	15.8			黄茶・赤茶・黒茶、不明	81
15	5		Ⅱ	住居7 №18	土師器	甕				灰黄橙、良	86
15	6		Ⅱ	住居7 №7	土師器	甕	12.0			黄茶、良	77
15	7		Ⅱ	住居7 №7	土師器	甕	11.1	4.9	17.0	煤付着、良	78
15	8		Ⅱ	住居7 №14	土師器	甕	17.4	4.4	21.2	外：黄橙・黒褐／内：黄橙、良	67
15	9		Ⅱ	住居7 №2	弥生土器	壺	27.0	5.8	75.8	橙褐・黒褐、良	66
16	1		Ⅱ	住居7 №8	弥生土器	高坏		11.9		橙茶・灰、良	79
16	2		Ⅱ	住居7 P4	土師器	鉢				外：灰白／内：灰白・橙、良	90
16	3		Ⅱ	住居7	弥生土器	甗		3.7		外：黒褐／内：淡黄茶、良	73
16	4	36	Ⅱ	住居7 №17	土師器	埴	9.9		3.3	灰褐、良	85
16	5	36	Ⅱ	住居7 №23	弥生土器	器台	8.0			赤褐、良	89
16	6		Ⅱ	住居7	弥生土器	器台		8.3		茶褐、良	75
16	7		Ⅱ	住居7	弥生土器	器台		9.3		黄橙・茶、良	74
16	8		Ⅱ	住居7	須恵器	坏身	12.6			灰白、良	69
16	9	36	Ⅱ	住居7 №16	弥生土器	土製模造鏡?	11.7		3.5	橙茶・黄橙、良	84
20	1		Ⅱ	住居8	土師器	甕	17.4			淡黄褐、良	91
20	2		Ⅱ	住居8 №4	土師器	甕				黄褐、良	95
20	3		Ⅱ	住居8 №3	土師器	高坏	23.3			赤褐、良	94
20	4		Ⅱ	住居8 №2	須恵器	高坏				灰、良	93
20	5		Ⅱ	住居8 №1	須恵器	高坏				灰白、良	92
20	6		Ⅱ	住居15	弥生土器	器台		12.8		黄橙、良	101
20	7	37	Ⅱ	住居9	須恵器	坏蓋	8.7		2.7	灰、良	96
20	8		Ⅱ	住居9	須恵器	坏蓋	11.0		3.3	暗灰、良	97
20	9		Ⅱ	住居9 №3	須恵器	高坏		8.5		黄灰、やや不良	98
20	10		Ⅱ	住居13 中央炉直上	土師器	甕	22.0			黄灰～淡黄褐、良	99
20	11		Ⅱ	住居13	土師器	鉢	6.6		5.7	黄橙、良	100
20	12		Ⅱ	住居16 P3	土師器	高坏	16.6			橙、良	105
20	13		Ⅱ	住居16	土師器	高坏		10.5		茶褐、良	104
20	14		Ⅱ	住居16	土師器	高坏	20.6			橙茶、良	102
20	15		Ⅱ	住居16	土師器	甕	18.8			黄橙～黄褐、良	103
22	1		Ⅱ-1	住居17	土師器	埴	13.0		5.0	灰黄褐、良	21
22	2		Ⅱ-1	住居17	土師器	埴	13.0		4.9	灰黄褐・橙褐、良	20
22	3		Ⅱ	住居17	土師器	鉢	14.4		5.0	橙褐、良	107
22	4	37	Ⅱ-1	住居17 №9	土師器	埴	14.8		5.3	灰黄褐、良	5
22	5	37	Ⅱ-1	住居17 №14	土師器	鉢	11.8		6.6	黄灰、良	9
22	6		Ⅱ-1	住居17	土師器	鉢	13.8		6.5	外：茶褐／内：暗黄茶褐、良	30
22	7		Ⅱ-1	住居17	土師器	坏				暗茶褐、良	31
22	8		Ⅱ-1	住居17	土師器	高坏	17.0			灰黄褐、良	18
22	9		Ⅱ-1	住居17 №15	土師器	高坏	18.0			黄橙、良	8
22	10		Ⅱ-1	住居17 P14	土師器	高坏	23.0			暗黄茶褐、良	36
22	11		Ⅱ	住居17	土師器	高坏	18.8			黄灰、良	109
22	12		Ⅱ-1	住居17 P14	土師器	高坏				暗茶褐、良	35
22	13		Ⅱ	住居17	土師器	高坏				橙、良	110
22	14		Ⅱ-1	住居17	土師器	高坏				暗茶褐、良	25
22	15		Ⅱ-1	住居17	土師器	高坏				橙褐、良	24
22	16	37	Ⅱ-1	住居17 №6	土師器	高坏		12.6		灰黄褐、良	2
22	17		Ⅱ-1	住居17 №11	土師器	高坏		16.0		橙褐・灰黄褐、良	6
22	18	37	Ⅱ-1	住居17 №12	土師器	高坏	16.0	11.0	11.9	灰黄褐・茶褐、良	7
22	19		Ⅱ-1	住居17 貼り床	土師器	壺				暗茶褐～黒褐、良	27
22	20		Ⅱ-1	住居17 №13	土師器	壺	11.4			暗茶褐、良	37
22	21	37	Ⅱ	住居17 №1	土師器	小型壺	6.5		7.8	淡橙褐、良	112
23	22		Ⅱ-1	住居17	土師器	甕	15.8			茶褐・灰黄褐、良	13
23	23		Ⅱ-1	住居17 №17	土師器	甕	13.8			黄褐・赤褐、やや不良	11
23	24		Ⅱ	住居17 №2	土師器	甕	11.2			暗黒褐、良	118
23	25		Ⅱ-1	住居17	土師器	甕	16.0			黄橙、良	14
23	26		Ⅱ-1	住居17 P5	土師器	甕	13.6			暗茶褐、良	33
23	27	37	Ⅱ	住居17	土師器	ミニチュア	2.9		2.3	橙褐、良	106
23	28	37	Ⅱ-1	住居17 貼り床	土師器	ミニチュア	3.9		2.8	黒灰、良	28
23	29	37	Ⅱ-1	住居17 貼り床	土師器	ミニチュア	3.3		3.4	黒灰、良	29
23	30	37	Ⅱ-1	住居17 №16	土師器	ミニチュア	3.6		3.3	黒灰、良	10
23	31		Ⅱ-1	住居17 №17	土師器	ミニチュア		2.6		黒褐、良	26
23	32		Ⅱ-1	住居17	弥生土器	壺	14.0			灰黄褐、良	19
23	33		Ⅱ-1	住居17	弥生土器	壺	15.0			橙褐・黄褐、良	16
23	34		Ⅱ	住居17	弥生土器	器台				橙、良	111
23	35		Ⅱ-1	住居17	弥生土器	高坏				暗黄茶褐、良	23
23	36		Ⅱ	住居17	土師器	鉢	13.2			淡橙、良	108
23	37		Ⅱ-1	住居17 №5	弥生土器	鉢	11.0			黄褐、良	1
23	38	38	Ⅱ-1	住居17 №8	弥生土器	鉢	12.4	3.6	7.0	茶褐、良	4
23	39	38	Ⅱ-1	住居17 №7	弥生土器	鉢	13.8		7.1	外：茶褐／内：茶褐・暗黄茶褐、良	3
23	40		Ⅱ-1	住居17 №18	弥生土器	鉢	16.0	5.6	9.9	黄橙、良	12
23	41		Ⅱ-1	住居17 P14	弥生土器	器台				黄茶褐、良	34
23	42		Ⅱ	住居17 №3	土師器	埴	16.4	7.0	6.6	灰白、良	113
25	1	38	Ⅱ	住居17 P1	土師器	埴	13.3		5.2	橙褐、良	114
25	2		Ⅱ	住居17 P1	土師器	高坏	20.9			橙褐、良	117
25	3		Ⅱ	住居17 P1	土師器	高坏	17.2			橙、良	116

第5表 出土遺物一覧表③

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
25	4		Ⅱ-1	住居17 P1	土師器	高坏	18.4			暗茶褐、良	32
25	5		Ⅱ	住居17 P1	土師器	高坏	18.6			橙、良	115
25	6	38	Ⅱ	住居17 P1	土師器	ミニチュア	4.0		2.9	茶褐、良	299
25	7	38	Ⅱ	住居17 P1	土師器	ミニチュア	4.1		3.3	茶褐・黄褐、良	301
25	8	38	Ⅱ	住居17 P1	土師器	ミニチュア	4.4		3.9	茶褐、良	302
25	9	38	Ⅱ	住居17 P1	土師器	ミニチュア	4.4		4.2	茶褐、良	300
25	10	38	Ⅱ	住居17 P1	弥生土器	鉢	11.2	3.9	6.1	橙茶、良	297
25	11		Ⅱ	住居17 P1	弥生土器	壺	19.0			外：黄橙/内：灰黄褐、良	296
27	1		Ⅱ	住居18	土師器	高坏				赤褐、良	126
27	2		Ⅱ	住居18	土師器	高坏	18.0			灰黄褐、良	125
27	3		Ⅱ	住居18	土師器	高坏				暗茶褐、良	129
27	4		Ⅱ	住居18 P2	土師器	高坏				黄橙、良	139
27	5		Ⅱ	住居18 №18	土師器	高坏	16.2			外：灰黄/内：灰黄褐、良	154
27	6		Ⅱ	住居18 №17	土師器	高坏	18.0			灰黄褐、良	153
27	7		Ⅱ	住居18 №7	土師器	高坏	16.4			外：橙褐/内：灰黄褐、良	145
27	8		Ⅱ	住居18	土師器	高坏	19.3			灰黄、良	128
27	9		Ⅱ	住居18 №28	土師器	高坏	17.6			外：橙褐/内：茶褐、良	165
27	10		Ⅱ	住居18 №25	土師器	高坏	18.4			外：茶褐/内：暗黄茶褐、良	164
27	11		Ⅱ	住居18 №35	土師器	高坏	17.8			灰黄褐、良	170
27	12		Ⅱ	住居18 №15	土師器	高坏	17.6			赤褐、良	151
27	13		Ⅱ	住居18 P1	土師器	高坏	19.1	11.5		黄褐、良	137
27	14		Ⅱ	住居18	土師器	高坏				橙褐、良	131
27	15		Ⅱ	住居18 №19	土師器	高坏		13.0		茶褐・灰黄褐、良	156
27	16		Ⅱ	住居18 №18	土師器	高坏		10.0		淡茶褐、良	155
27	17		Ⅱ	住居18	土師器	高坏				灰黄褐、良	130
27	18		Ⅱ	住居18	土師器	高坏				橙褐、良	132
27	19		Ⅱ	住居18 №21	土師器	高坏				茶褐、良	160
27	20		Ⅱ	住居18 №22	土師器	高坏				赤褐、良	162
27	21		Ⅱ	住居18 №2	土師器	高坏				黄橙褐、良	141
27	22		Ⅱ	住居18 №37	土師器	高坏				茶褐、良	172
27	23		Ⅱ	住居18 №5	土師器	高坏				灰黄褐、良	144
27	24		Ⅱ	住居18	土師器	高坏				暗黄茶褐、良	133
28	25		Ⅱ	住居18 №27	土師器	高坏		10.2		淡茶褐、良	173
28	26		Ⅱ	住居18 №3	土師器	高坏				茶褐、良	143
28	27		Ⅱ	住居18 P3	土師器	高坏		12.9		橙褐、良	138
28	28		Ⅱ	住居18	土師器	高坏		17.0		外：橙褐/内：黒～橙褐、良	127
28	29		Ⅱ	住居18	土師器	小型壺				橙褐、良	136
28	30		Ⅱ	住居18 №15	土師器	小型壺				茶褐・暗黄茶褐、良	152
28	31		Ⅱ	住居18	土師器	小型壺				橙褐、良	135
28	32		Ⅱ	住居18 №3	土師器	小型壺				茶褐、良	140
28	33		Ⅱ	住居18 №3	土師器	小型壺				橙褐、良	142
28	34		Ⅱ	住居18 №20	土師器	小型壺	7.5			茶褐、良	159
28	35	38	Ⅱ	住居18 №32	土師器	小型壺	8.2		8.1	暗橙褐、良	167
28	36	38	Ⅱ	住居18 №23	土師器	小型壺	7.2		9.2	灰黄、良	161
28	37	38	Ⅱ	住居18 №24	土師器	小型壺	9.9		9.3	灰黄褐、良	163
28	38	38	Ⅱ	住居18 №11	土師器	小型壺	12.4		9.9	灰褐、良	148
28	39	38	Ⅱ	住居18 №36	土師器	小型壺	11.0		9.5	橙褐、良	171
28	40		Ⅱ	住居18 №18	土師器	小型壺	12.4			茶褐、良	147
28	41		Ⅱ	住居18	土師器	甕	15.5			灰黄褐、良	124
28	42		Ⅱ	住居18 №33	土師器	甕	14.7			外：淡茶褐/内：灰黄褐・暗黄茶褐、良	168
28	43		Ⅱ	住居18 №13	土師器	甕	15.7			淡黄橙、良	157
28	44		Ⅱ	住居18 №9	土師器	甕	17.0			黄灰褐、良	146
28	45		Ⅱ	住居18 №31	土師器	甕	12.8			茶褐、良	166
28	46		Ⅱ	住居18 №12	土師器	甕	13.8			外：暗黄茶褐/内：灰、良	149
29	47		Ⅱ	住居18	土師器	甕	16.0			外：淡茶褐/内：茶褐、良	158
29	48		Ⅱ	住居18 №14	土師器	甕	15.0		27.0	灰黄褐、良	150
29	49		Ⅱ	住居18 №34	土師器	甕	15.0			外：赤褐/内：茶褐、良	169
29	50		Ⅱ	住居18	土師器	埴	7.1		3.4	黄茶褐、良	134
29	51		Ⅱ	住居18	弥生土器	壺	13.2			外：灰黄褐/内：黄茶、良	120
29	52		Ⅱ	住居18	弥生土器	壺	21.0			灰黄、良	123
29	53		Ⅱ	住居18	弥生土器	壺				外：黄橙/内：茶褐、良	122
29	54		Ⅱ	住居18	弥生土器	壺	19.0			橙褐、良	121
29	55		Ⅱ	住居18	弥生土器	甕	16.0			灰・橙、良	119
30	1		Ⅱ	SX05 №1	弥生土器	甕				外：黄褐・茶褐/内：茶褐・暗茶褐、良	269
30	2		Ⅱ	SX05	土師器	小型壺		2.1		茶褐、良	280
30	3		Ⅱ	SX05 P1	土師器	小型壺?				黄褐・赤褐、良	274
30	4		Ⅱ	SX05	弥生土器	壺		10.3		外：赤褐/内：暗黄褐、良	268
30	5		Ⅱ	SX05 №2	弥生土器	壺	18.0			外：赤茶褐/内：黄褐・暗茶褐、良	278
30	6		Ⅱ	SX05 №7	弥生土器	壺	13.8			茶褐・赤褐、良	270
30	7		Ⅱ	SX05 №8	弥生土器	甕	15.0			外：黄茶褐・暗褐/内：暗黄茶褐、良	271
30	8	39	Ⅱ	SX05 №3	土師器	甕	12.8		16.8	茶褐、良	277
30	9		Ⅱ	SX05 P1	弥生土器	甕	11.9			茶褐・暗褐、良	275
30	10		Ⅱ	SX05 P1	弥生土器	甕				外：茶褐/内：黄褐、良	276

第5表 出土遺物一覧表④

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
30	11		Ⅱ	SX05 No.9	弥生土器	高坏		15.5		黄橙・黄褐、良	279
30	12	39	Ⅱ	SX05 P1	土師器	高坏	15.6	12.6	10.5	茶褐、良	273
30	13	39	Ⅱ	SX05 No.10	土師器	埴	11.8	2.4	6.1	黄灰、良	272
32	1		Ⅱ	住居19 No.1	土師器	高坏				黄褐、良	176
32	2		Ⅱ	住居19 P4	土師器	高坏		10.9		黄褐、良	177
32	3		Ⅱ	住居19 No.1	土師器	高坏		11.8		黄褐、良	174
32	4		Ⅱ	住居19 P1	土師器	甕	14.0			黄褐、良	175
32	5		Ⅱ	住居20 No.2	土師器	埴	13.8	5.3		黄褐、良	179
32	6		Ⅱ	住居20 No.2	土師器	埴	13.2			黄褐、良	181
32	7		Ⅱ	住居20	土師器	高坏	16.0			黄褐・暗茶褐、良	184
32	8		Ⅱ	住居20 No.1	土師器	甕	20.0			茶褐、良	178
32	9		Ⅱ	住居20 No.1	土師器	甕	22.0	3.2	23.3	茶褐、良	180
32	10		Ⅱ	住居20	土師器	甕	15.0			褐灰・黒褐、良	185
32	11		Ⅱ	住居20 No.3	土師器	器台		9.8		黄褐、良	182
32	12		Ⅱ	住居20 No.5	土師器	器台				黄褐、良	183
32	13		Ⅱ	住居20	土師器	鉢		3.7		黄褐、良	187
32	14		Ⅱ	住居20	土師器	鉢		3.4		灰褐、良	186
34	1	39	Ⅱ	住居21 No.2	土師器	小型壺	7.2		9.3	橙褐、良	188
34	2		Ⅱ	住居21 No.5	土師器	高坏	15.8			灰褐、良	190
34	3		Ⅱ	住居21 No.4	土師器	甕	27.0			灰黄褐、良	189
34	4		Ⅱ	SX06	須恵器	坏身	13.3			灰、良	282
34	5		Ⅱ	SX06	須恵器	坏身	13.4		4.1	灰、良	283
34	6		Ⅱ	SX06 No.1	土師器	小型壺	7.8	4.1	9.4	灰黄褐・暗黄灰褐、良	281
34	7		Ⅱ	住居22 No.1	弥生土器	高坏	33.5			橙褐、良	193
34	8		Ⅱ	住居22 No.2	弥生土器	高坏	29.8			淡橙褐、良	194
34	9		Ⅱ	住居22	弥生土器	高坏				褐、良	191
34	10		Ⅱ	住居22 No.7	弥生土器	鉢	13.0		8.3	灰、良	195
34	11		Ⅱ	住居22 P1	土師器	取手付埴				淡褐灰、良	192
36	1		Ⅱ-1	住居26	土師器	埴	11.2		3.8	橙・黄褐、良	67
36	2		Ⅱ-1	住居26	土師器	埴	12.7		4.5	橙・黄褐、良	66
36	3		Ⅱ-1	住居26	土師器	埴	15.0		5.1	茶褐、良	68
36	4		Ⅱ-1	住居26	土師器	壺	12.0			灰白、良	38
36	5		Ⅱ-1	住居26	土師器	甕	16.6			褐灰、良	40
36	6		Ⅱ-1	住居26	土師器	甕	16.6			黄橙、良	41
36	7		Ⅱ-1	住居26	土師器	壺				褐、良	62
36	8		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏	19.6			橙褐、良	52
36	9		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏	16.4			橙褐・橙、良	49
36	10		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏	16.0			外：橙褐／内：黄橙、良	48
36	11		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏				橙褐、良	51
36	12	39	Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏				茶褐、良	56
36	13		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏		10.8		茶褐、良	54
36	14		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏		14.2		褐、良	60
36	15		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏		11.2		赤褐・黒褐、良	58
36	16		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏		14.4		黄褐、良	61
36	17	39	Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏		13.5		灰黄褐・茶褐、良	59
36	18		Ⅱ-1	住居26	土師器	高坏		13.4		黄橙、良	57
36	19		Ⅱ-1	住居26	土師器	甕				黄褐、良	63
36	20		Ⅱ-1	住居26	土師器	甕		12.8		外：黄褐／内：黒灰、良	64
36	21		Ⅱ-1	住居26	弥生土器	壺				外：橙褐／内：灰褐、良	47
36	22		Ⅱ-1	住居26	土師器	壺	15.4			橙褐、良	43
36	23		Ⅱ-1	住居26	弥生土器	器台	18.2			黄褐、良	42
36	24		Ⅱ-1	住居26	弥生土器	甕				黄褐、良	46
36	25		Ⅱ-1	住居26	弥生土器	鉢		9.6		褐・黒褐、良	55
38	1		Ⅱ-1	住居27 カマドNo.1	土師器	高坏	17.5	10.8		橙褐、良	81
38	2		Ⅱ-1	住居27 カマドNo.1	土師器	高坏	18.2			黄橙褐、良	80
38	3		Ⅱ-1	住居27	土師器	高坏	16.0			黄橙褐、良	76
38	4		Ⅱ-1	住居27	土師器	高坏				茶褐、良	78
38	5		Ⅱ-1	住居27	土師器	高坏	16.4			茶褐、良	74
38	6		Ⅱ-1	住居27	土師器	高坏				黄橙褐、良	90
38	7		Ⅱ-1	住居27	土師器	高坏	16.2			灰黄褐、良	73
38	8	39	Ⅱ-1	住居27	土師器	高坏	19.8			黄褐・赤褐、良	72
38	9		Ⅱ-1	住居27 No.2	土師器	高坏	18.0			黄褐、やや不良	70
38	10		Ⅱ-1	住居27	土師器	甕	12.2			灰褐、良	89
38	11		Ⅱ-1	住居27	土師器	鉢	12.8			灰褐、良	75
38	12		Ⅱ-1	住居27 P10	土師器	小型壺	7.2		7.0	茶褐、良	86
38	13	39	Ⅱ-1	住居27	土師器	ミニチュア	5.4	3.2	4.5	茶褐・黒灰、良	88
38	14	39	Ⅱ-1	住居27 P14	土師器	小型壺	5.7		5.6	茶褐・黒灰、良	87
38	15		Ⅱ-1	住居27	土師器	甕	24.0	13.0	24.5	灰黄褐、良	69
38	16		Ⅱ-1	住居27	弥生土器	器台				黄灰、良	79
38	17	40	Ⅱ-1	住居27 No.3	弥生土器	鉢	12.5	8.8	8.0	茶褐・灰・黒灰、良	71
40	1		Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏	18.8			暗茶褐、良	91
40	2		Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏	18.0			暗茶褐、良	92
40	3		Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏		12.5		茶褐、良	100
40	4	40	Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏		12.4		淡橙褐、良	98
40	5		Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏				暗茶褐、良	102

第5表 出土遺物一覧表⑤

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
40	6		Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏				暗茶褐、良	101
40	7		Ⅱ-1	住居28	土師器	高坏				暗茶褐、良	94
40	8		Ⅱ-1	住居28	土師器	甗				暗茶褐、良	95
40	9		Ⅱ-1	住居28	弥生土器	壺				茶褐、良	96
40	10	40	Ⅱ-1	住居28	弥生土器	器台		6.0		灰黄褐・茶褐、良	99
40	11		Ⅱ-1	住居28	弥生土器	鉢				暗茶褐、良	97
42	1		Ⅱ	SX02	須恵器	坏身				灰、良	263
42	2		Ⅱ	SX02	須恵器	坏身				灰、良	262
42	3		Ⅱ	SX02	土師器	壺				灰、良	264
44	1		Ⅱ	SX07	土師器	埴	13.0		4.0	黄褐・暗黄茶褐、やや良	285
44	2		Ⅱ	SX07 №5	土師器	埴	11.8			黄橙、やや良	293
44	3		Ⅱ	SX07	土師器	埴	11.2		3.1	黄橙、やや良	286
44	4	40	Ⅱ	SX07 №2	土師器	埴	12.8		5.1	灰褐・黄褐、良	290
44	5		Ⅱ	SX07 №6	土師器	壺	10.3			黄褐、やや良	294
44	6		Ⅱ	SX07	土師器	壺				黄褐・黄橙、良	284
44	7		Ⅱ	SX07 №4	土師器	甕	13.6			外：茶褐・淡灰/内：黄褐・淡灰、やや不良	292
44	8		Ⅱ	SX07 №3	土師器	甕	14.2			茶褐、良	291
44	9		Ⅱ	SX07 №7	土師器	甕	14.4		23.1	外：赤褐・黄褐/内：黄褐・淡黒、良	295
44	10	40	Ⅱ	SX07 №1	土師器	甕	13.9		8.2	黄褐・赤褐、良	288
44	11		Ⅱ	SX07	土師器	鉢				黄橙、良	287
44	12	40	Ⅱ	SX07 №1	土師器	甗	19.1	6.9	16.2	黄茶褐、良	289
50	1		Ⅱ	土坑1	土師器	鍋	26.6			茶褐、良	196
50	2		Ⅱ	土坑2	弥生土器	甕	21.3			暗黄褐、良	197
50	3		Ⅱ	土坑3	須恵器	坏身		7.0		灰白、やや不良	202
50	4		Ⅱ	土坑3	須恵器	高坏				暗青灰、やや不良	199
50	5		Ⅱ	土坑3	須恵器	坏蓋	18.4			灰、やや不良	201
50	6		Ⅱ	土坑3	土師器	甕	16.2			黄茶褐、良	200
50	7		Ⅱ	土坑3	瓦	平瓦				灰、良	198
50	8		Ⅱ-1	土坑16	土師器	埴	15.5	6.3	4.3	黄褐、良	127
50	9		Ⅱ-1	土坑17	瓦質土器	甕				黒灰、良	145
50	10		Ⅱ-1	土坑17	瓦質土器	鍋				黄灰・灰、良	147
50	11		Ⅱ-1	土坑17	陶器	壺				紫褐、良	146
50	12	45	Ⅱ-1	土坑18	瓦	軒丸瓦				黄褐、良	182
50	13		Ⅱ-1	土坑19	土師器	甕	15.0			外：橙褐・灰黄褐/内：灰黄褐、良	148
50	14		Ⅱ	SX01 №1	須恵器	坏身	12.0	6.1	5.6	灰、やや不良	261
53	1		Ⅱ-1	土坑8 上面	土師器	坏	12.0			茶褐、良	117
53	2		Ⅱ-1	土坑8 上面	土師器	坏	10.0		2.4	茶褐、良	116
53	3		Ⅱ-1	土坑8	須恵器	坏	16.0			灰、良	109
53	4		Ⅱ-1	土坑8	須恵器	坏		10.2		灰、良	110
53	5		Ⅱ-1	土坑8 №2	須恵器	坏		9.8		外：黄灰/内：灰、良	113
53	6	40	Ⅱ-1	土坑8	須恵器	坏	15.2	9.7	5.8	灰、良	108
53	7		Ⅱ-1	土坑8 上面	須恵器	壺		8.0		灰、良	118
53	8		Ⅱ-1	土坑8 上面	須恵器	壺		9.8		灰、良	119
53	9	40	Ⅱ-1	土坑8	土師器	坏	16.2	12.0	5.6	黄灰・灰、良	107
53	10	40	Ⅱ-1	土坑8 №1	須恵器	壺	16.6	8.5	17.2	灰、良	112
53	11	41	Ⅱ-1	土坑8 №3	土師器	鉢	13.6		8.3	黄茶、良	114
53	12		Ⅱ-1	土坑8	土師器	鉢	26.6		10.0	外：黒褐/内：灰黄褐、良	106
53	13	41	Ⅱ-1	土坑8	土師器	甕	21.8		32.1	灰黄褐、良	103
53	14		Ⅱ-1	土坑8	土師器	甗	25.0			外：灰黄褐/内：褐、良	104
53	15		Ⅱ-1	土坑8	土師器	甗	23.0			淡茶褐、良	105
53	17		Ⅱ-1	土坑8 上面	瓦	丸瓦				灰、良	115
54	18	41	Ⅱ-1	土坑8	須恵器	坏	17.0	11.8	4.8	暗灰、良	墨書
54	19		Ⅱ-1	土坑8上面	瓦	平瓦				灰、良	302
58	1	45	Ⅱ-1	土坑9	白磁	碗				灰、良	122
58	2		Ⅱ-1	土坑9	瓦器	埴		7.0		外：灰/内：灰黄褐・黒褐、良	121
58	3	45	Ⅱ-1	土坑9	青磁	碗				オリープ灰、良	123
58	4	41	Ⅱ-1	土坑9	瓦器	埴	16.4	7.7	6.3	灰、良	120
58	5		Ⅱ-1	土坑10	土師器	皿	10.0	5.8	1.9	黄灰、良	125
58	6	42	Ⅱ-1	土坑10	土師器	皿	9.2	4.4	1.6	暗黄茶褐、良	124
58	7		Ⅱ-1	土坑10	土師器	埴		7.0		外：黄茶褐/内：灰、良	129
58	8		Ⅱ-1	土坑10	土師器	埴		6.0		白、良	130
58	9		Ⅱ-1	土坑10	土師器	埴	16.0	8.2	4.1	灰黄褐、良	126
58	10		Ⅱ-1	土坑10	土師器	埴		6.4		灰黄茶、良	128
58	11	42	Ⅱ-1	土坑11	須恵器	坏	9.8	6.0	4.3	黒灰、良	132
58	12	42	Ⅱ-1	土坑11	須恵器	壺		9.4		灰・灰黄褐、良	131
58	13		Ⅱ-1	土坑11	瓦	丸瓦				褐、良	300
58	14		Ⅱ-1	土坑12 下層	土師器	坏	12.6		3.5	茶褐、良	135
58	15	42	Ⅱ-1	土坑12 最下層	土師器	坏	12.6		3.7	暗黄茶褐、良	140
58	16		Ⅱ-1	土坑12 下層	土師器	坏	12.8			黄灰、良	142
58	17	42	Ⅱ-1	土坑12 下層	土師器	坏	13.2		4.5	黒褐、良	136
58	18		Ⅱ-1	土坑12 下層	須恵器	坏	13.8	9.0	5.4	茶褐・灰黄褐、良	137
58	19		Ⅱ-1	土坑12 下層	土師器	高坏		15.6		茶褐、良	134
58	20		Ⅱ-1	土坑12 上層	土師器	甕	17.0			灰黄褐、良	133
58	21		Ⅱ-1	土坑12 下層	須恵器	甕	25.0			淡灰、良	138

第5表 出土遺物一覧表⑥

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
58	22		Ⅱ-1	土坑12 下層	瓦	丸瓦				灰白、やや不良	139
58	23	45	Ⅱ-1	土坑12 最下層	瓦	平瓦				外：黒褐/内：灰、良	141
61	1	42	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	9.1	6.0	1.4	灰褐、良	156
61	2	42	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	8.6	5.8	1.6	外：暗灰・黒灰/内：黒灰、良	151
61	3	42	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	8.5	5.6	1.6	外：黒褐/内：褐、良	152
61	4	42	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	8.7	6.0	1.8	外：黒褐・灰黄褐/内：灰褐、良	154
61	5	42	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	10.0	5.4	1.3	褐灰、良	157
61	6	42	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	9.8	4.8	1.7	灰・灰褐・橙、良	155
61	7	43	Ⅱ-1	土坑22	土師器	皿	8.1	6.0	1.6	灰黄褐、良	153
61	8		Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴		7.8		灰黄褐、やや不良	215
61	9		Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴		6.4		外：灰黄褐/内：灰褐、良	216
61	10		Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴	14.6	7.0	3.5	灰黄褐、やや不良	213
61	11	43	Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴	16.0	8.2	4.3	灰黄褐、良	211
61	12	43	Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴	13.7	6.8	3.7	黄褐・灰褐、良	212
61	13		Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴	15.6			黄褐・灰黄褐・灰、良	214
61	14		Ⅱ-1	土坑22	黒色土器	埴	15.3	6.8	5.2	外：黒・黒灰/内：灰・黒灰、良	217
61	15	43	Ⅱ-1	土坑22	黒色土器	埴	15.5	6.0	5.5	外：灰黄褐・黄灰/内：灰黄褐、良	150
61	16		Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴		6.3		黄褐、良	158
61	17	43	Ⅱ-1	土坑22	土師器	埴	15.6	7.5	4.3	灰黄褐、良	159
61	18	45	Ⅱ-1	土坑22	磁器	碗	18.0			淡褐灰、良	219
61	19		Ⅱ-1	土坑22	須恵器	鉢				灰、良	218
62	1		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	土師器	坏	12.8	8.6	3.7	灰黄褐、良	177
62	2		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	土師器	坏	15.2	7.0	4.4	灰黄褐・黄灰、良	178
62	3	45	Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	磁器	碗				灰、良	181
62	4	45	Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	磁器	皿	10.0			灰白、良	180
62	5		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	土師器	高坏				外：茶褐・黒灰/内：茶褐、良	173
62	6		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	土師器	高坏				外：茶褐/内：黄灰、良	174
62	7		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	土師器	高坏				外：茶褐・灰黄茶褐/内：灰黄茶褐、良	175
62	8		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	土師器	壺	17.4			灰黄褐、良	179
62	9		Ⅱ-1	土坑23 (井戸1)	弥生土器	壺				外：灰・灰黄茶褐/内：茶褐、良	176
64	1		Ⅱ	溝1	土師器	皿		5.0		橙、良	225
64	2		Ⅱ	溝2	須恵器	坏身	9.8		2.9	灰、良	207
64	3		Ⅱ	溝3	土師器	甕	14.0			外：黄灰/内：暗茶褐、良	208
64	4	43	Ⅱ	溝4	土師器	坏	13.0	6.6	3.3	黄橙褐、良	209
64	5		Ⅱ	溝5・6	瓦質土器	鍋				灰、良	211
64	6		Ⅱ	溝5・6	瓦質土器	鍋				黄灰・暗茶褐、良	210
64	7		Ⅱ	溝6	土師器	甕	14.0			黄灰、良	219
64	8		Ⅱ	溝6	須恵器	坏身				灰、良	218
64	9		Ⅱ	溝6	瓦質土器	鍋	24.0			外：灰/内：黄灰、良	220
64	10		Ⅱ	溝5・6	瓦	平瓦				暗灰、良	303
64	11		Ⅱ	溝10	青磁	瓶		8.9		オリーブ灰、良	214
64	12		Ⅱ	溝8	須恵器	坏身	11.4		4.1	灰、良	216
64	13		Ⅱ	溝8	青磁	碗		5.7		黄灰、良	217
64	14		Ⅱ	溝8	土師器	高坏				黄灰、良	215
64	15		Ⅱ	溝13	須恵器	坏蓋	14.0		3.8	灰白、不良	221
64	16		Ⅱ	溝15	弥生土器	支脚				茶褐、良	222
64	17		Ⅱ	溝23	瓦質土器	鍋				灰、良	228
64	18		Ⅱ	溝19	土師器	皿		6.1		黄灰褐、良	224
64	19		Ⅱ	溝19	土師器	皿		6.6		黄灰、良	226
64	20		Ⅱ	溝19	瓦	平瓦				黄灰、やや不良	227
64	21		Ⅱ	溝25	土師器	壺?		8.0		外：黒/内：黄灰、良	233
64	22		Ⅱ	溝25	磁器	碗		4.1		暗緑、良	231
64	23		Ⅱ	溝25	磁器	碗		6.0		淡緑白、良	232
64	24	45	Ⅱ-1	溝25	磁器	碗				灰、良	172
64	25		Ⅱ	溝25	瓦質土器	鍋				灰、良	229
64	26		Ⅱ	溝25	瓦質土器	鍋				灰、良	230
64	27		Ⅱ	溝28	土師器	皿	7.8	7.2	1.0	黄灰、良	238
64	28		Ⅱ	溝28	土師器	皿		7.0		灰茶、良	239
64	29		Ⅱ	溝28	磁器	碗		5.9		黄灰、良	237
64	30		Ⅱ	溝28	磁器	碗		5.6		オリーブ灰、良	236
64	31		Ⅱ	溝28	瓦質土器	鉢	23.6			黄灰、良	235
69	1		Ⅱ-1	道路状遺構 直上	須恵器	坏		8.2		外：黄灰/内：灰、良	183
69	2		Ⅱ-1	道路状遺構 直上?	須恵器	坏		8.0		黄灰、良	184
69	3		Ⅱ-1	道路状遺構 直上?	須恵器	壺		9.0		灰、良	185
69	4		Ⅱ-1	道路状遺構 直上?	土師器	甕	17.8			灰黄褐、良	186
69	5		Ⅱ-1	道路状遺構 上面	土師器	坏				橙褐、良	191
69	6		Ⅱ-1	道路状遺構 上面	土師器	坏		13.0		黄褐、良	190
69	7		Ⅱ-1	道路状遺構 最上面	須恵器	坏		10.0		黄灰、不良	205
69	8		Ⅱ-1	道路状遺構 上面	須恵器	坏蓋				灰、良	188
69	9		Ⅱ-1	道路状遺構 最上面	須恵器	坏		7.0		白・赤橙、不良	206
69	10		Ⅱ-1	道路状遺構 最上面	須恵器	壺				黄灰、良	204
69	11		Ⅱ-1	道路状遺構 上面	須恵器	坏		10.0		灰、良	189
69	12		Ⅱ-1	道路状遺構 最上面	須恵器	坏		10.2		外：暗灰/内：灰白、良	207
69	13	45	Ⅱ-1	道路状遺構 上面	瓦	平瓦				橙褐、良	187

第5表 出土遺物一覧表⑦

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
69	14		Ⅱ-1	道路状遺構 上面	瓦	平瓦				灰黄褐、やや不良	192
69	15		Ⅱ-1	道路状遺構 上面	瓦	平瓦				橙・赤橙、良	301
69	16	45	Ⅱ-1	道路状遺構 最上面	瓦	丸瓦				外：灰/内：暗灰、良	203
69	17		Ⅱ-1	道路状遺構 上層	須恵器	壺		12.8		黄灰、良	193
69	18		Ⅱ-1	道路状遺構 上層	須恵器	甕	21.0			灰、良	194
69	19		Ⅱ-1	道路状遺構 上層	土師器	甕	23.0			灰黄褐、良	195
69	20		Ⅱ-1	道路状遺構 中層	瓦	平瓦				灰、良	208
69	21		Ⅱ-1	道路状遺構 下層	須恵器	坏		10.0		外：黄灰/内：橙褐、やや不良	198
69	22		Ⅱ-1	道路状遺構 下層	須恵器	坏		10.0		黄灰、やや不良	197
69	23		Ⅱ-1	道路状遺構 下層	須恵器	坏		10.8		橙褐・黄灰、良	199
69	24		Ⅱ-1	道路状遺構 下層	須恵器	坏		9.0		茶褐、良	200
69	25		Ⅱ-1	道路状遺構 下層	須恵器	甕	20.0			灰、良	201
69	26		Ⅱ-1	道路状遺構 下層	瓦	平瓦				灰白、やや不良	202
70	27		Ⅱ-1	道路状遺構 北側溝	須恵器	甕				灰、良	210
70	28		Ⅱ-1	波板状痕跡	須恵器	坏蓋	15.0		2.9	茶灰、良	289
70	29		Ⅱ-1	波板状痕跡31	須恵器	高坏		11.6		黄灰、良	288
70	30		Ⅱ-1	波板状痕跡31	須恵器	壺	12.8			暗灰、良	287
70	31		Ⅱ-1	道路状遺構 確認トレンチ	須恵器	鉢		10.2		外：灰/内：黄灰	209
72	1	43	Ⅱ-1	土壌 13	磁器	皿	10.0	6.0	2.0	淡オリブ灰・灰黄茶、良	143
72	2	43	Ⅱ-1	土壌 13	瓦器	埴	16.0	6.4	5.6	黒灰・黄灰・灰、やや良	144
74	1	45	Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	磁器	碗	16.6			灰、良	273
74	2		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	坏蓋	13.8		2.2	外：暗灰/内：灰、良	267
74	3		Ⅱ-1	褐灰色土包含層	須恵器	坏		9.1		灰、良	260
74	4		Ⅱ-1	褐灰色土包含層	須恵器	坏		9.0		灰、良	261
74	5		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	坏		10.6		灰、良	265
74	6		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	坏		10.0		灰、良	266
74	7		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	坏		9.6		外：黄灰/内：灰白、良	275
74	8		Ⅱ-1	褐灰色土包含層	土師器	埴	17.0	10.5	3.4	暗黄茶褐、良	262
74	9		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	土師器	埴		6.3		黄灰、良	268
74	10		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	高坏				黄灰、良	269
74	11		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	壺		4.8		暗灰、良	274
74	12		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	須恵器	高坏				灰、良	270
74	13		Ⅱ-1	褐灰色土包含層	須恵器	壺		7.4		灰褐、良	259
74	14		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	土師器	甕				灰黄褐、良	272
74	15		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	土師器	甕	17.8			外：淡橙褐/内：茶灰、良	271
74	16		Ⅱ-1	褐灰色土包含層	弥生土器	鉢				暗黄茶褐、良	264
74	17		Ⅱ-1	褐灰色土包含層	弥生土器	鉢		8.2		灰黄褐、良	263
74	18		Ⅱ-1	灰褐色土包含層（道路状遺構上面）	弥生土器	器台？		5.8		橙褐・灰、良	296
74	19		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	瓦	平瓦				褐、良	277
74	20	45	Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	瓦	平瓦				灰、良	278
74	21	45	Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	瓦	平瓦				外：褐/内：褐灰、良	276
74	22	45	Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	瓦	平瓦				外：灰/内：黄灰褐、良	279
74	23		Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	瓦	丸瓦				黄褐、やや不良	280
75	1	45	Ⅱ-1	上面褐灰色土包含層	瓦	丸瓦				外：灰/内：灰褐、良	281
75	2		Ⅱ-1	黒褐色土包含層	瓦	平瓦				黒褐、良	297
75	3		Ⅱ-1	黒褐色土包含層	瓦	平瓦				黄灰、良	298
75	4		Ⅱ-1	(住居27付近)黒褐色土	須恵器	壺		15.0		灰、良	82
75	5		Ⅱ-1	黒褐色土包含層	土師器	甕	18.0			橙褐、良	282
75	6	43	Ⅱ-1	(住居27付近)黒褐色土	弥生土器	高坏		13.0		灰黄褐、良	83
75	7		Ⅱ-1	杭108付近包含層	弥生土器	器台				外：灰黄褐/内：茶褐、良	149
75	8		Ⅱ-1	(住居27付近)黒褐色土	土師器	鉢	24.0		11.7	灰褐、良	85
75	9	43	Ⅱ-1	(住居27付近)黒褐色土	弥生土器	器台	12.0	18.2	19.1	茶褐、良	84
76	1		Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	弥生土器	甕				淡黄褐、良	252
76	2		Ⅱ-1	暗青灰色包含層	弥生土器	甕		10.0		灰、良	283
76	3		Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	壺				外：丹？/内：灰、良	299
76	4		Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	甕	16.9			黄灰褐、良	239
76	5		Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	甕	17.5			外：煤付着/内：灰黄褐、良	221
76	6		Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	壺	13.2			褐、良	251
76	7	43	Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	壺	16.4			茶褐、良	249
76	8	43	Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	弥生土器	壺	14.0			橙灰、良	255
76	9		Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	弥生土器	壺	16.0			外：灰黄褐・茶褐/内：灰黄褐、良	256
76	10	44	Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	弥生土器	壺	15.3			灰褐、良	254
76	11	44	Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	壺	23.0			灰褐、良	244
76	12		Ⅱ-1	暗青灰色包含層	弥生土器	壺	24.7			外：青灰/内：黒褐、良	286
76	13		Ⅱ-1	暗青灰色包含層	弥生土器	鉢		6.1		外：灰黄褐・橙/内：灰黄褐、良	284
76	14		Ⅱ-1	青灰色包含層	弥生土器	鉢		10.9		黄灰、良	242
77	1	44	Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	埴	12.6			橙褐、良	237
77	2		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	18.2			淡黄褐、良	238
77	3	44	Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	18.0			茶褐、良	248
77	4		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	18.8			茶褐、良	227
77	5		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	19.4			赤橙褐、良	245
77	6		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	22.2			褐、良	247
77	7	44	Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	18.7			黄茶褐、良	236
77	8		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏	20.9			暗黄褐、良	228

第5表 出土遺物一覧表⑧

挿図	番号	図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	口径	底径	器高	色調、焼成	登録 番号
77	9		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏		10.2		赤褐・灰黄褐、良	225
77	10		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏		11.1		灰黄褐、良	224
77	11		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏		13.1		外：橙褐・灰黄褐/内：橙褐、良	226
77	12		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	高坏		11.5		灰黄褐、良	223
77	13		Ⅱ-1	暗青灰色包含層	土師器	壺	11.8			灰黄褐、良	285
77	14		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	小型壺				橙褐、良	246
77	15	44	Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	土師器	小型壺	6.5		8.1	灰黄褐・淡赤褐、良	258
77	16		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	壺				灰黄褐、良	243
78	1		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕				外：灰黄褐/内：灰黄褐・暗黄灰褐、良	232
78	2		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	14.2			灰黄褐、良	233
78	3		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	13.8			灰黄褐、良	234
78	4		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	16.1			灰黄褐、良	231
78	5		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	13.7			灰黄褐、良	241
78	6		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	17.1			黄褐、良	240
78	7	44	Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	土師器	甕	12.6			灰褐、良	257
78	8		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	16.8			灰黄褐、良	230
78	9		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	壺	17.4			外：褐・灰褐/内：灰褐、良	250
78	10		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	壺	17.9			淡黄橙、良	235
78	11		Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	17.1			灰黄褐、良	229
78	12		Ⅱ-1	地山直上青灰粘包含層	土師器	甕	15.6		20.0	外：黒/内：灰黄褐、良	253
78	13	44	Ⅱ-1	青灰色包含層	土師器	甕	19.0		29.5	外：黄茶/内：灰黄褐・灰褐、良	222
79	1	44	Ⅱ	P282	弥生土器	支脚		13.7	10.4	灰黄褐、良	256
80	1		Ⅱ	SX03	須恵器	坏身				灰・暗灰、やや不良	267
80	2		Ⅱ	SX03	土師器	壺	17.6			灰黄褐・黄褐、良	266
80	3		Ⅱ	SX03	土師器	甕	12.4		13.8	外：黄橙・暗黄褐/内：黄褐・暗黄褐、良	265
80	4		Ⅱ	P5	土師器	埴	13.0		2.7	赤褐、不良	240
80	5	44	Ⅱ	P27	土師器	ミニチュア	5.7		3.2	外：橙褐/内：黒灰、良	241
80	6		Ⅱ	P30	弥生土器	壺	18.2			黄橙、良	304
80	7		Ⅱ	P46	須恵器	坏蓋				灰、良	242
80	8		Ⅱ	P42	土師器	埴	15.0		3.5	外：赤褐・淡黄褐/内：赤褐、良	243
80	9		Ⅱ	P46	須恵器	坏身	12.4			灰、良	244
80	10		Ⅱ	P69	須恵器	高坏	12.0			外：灰・黒灰/内：黒・黒灰、良	245
80	11		Ⅱ	P84	土師器	小型壺	7.3		8.5	外：淡赤褐/内：暗赤褐・黄褐、やや良	246
80	12		Ⅱ	P94	弥生土器	甕	17.4			外：黄橙/内：灰黄褐・黄橙、良	247
80	13		Ⅱ	P101	須恵器	坏身	12.0			灰、良	248
80	14		Ⅱ	P101	須恵器	坏蓋	14.4		3.2	オリブ灰、良	249
80	15		Ⅱ	P104	須恵器	坏身	13.1		4.5	外：灰/内：青灰、良	250
80	16		Ⅱ	P207	土師器	甕	16.8			灰黄褐、良	251
80	17		Ⅱ	P208	土師器	甕				茶褐、良	252
80	18		Ⅱ	P223	弥生土器	高坏		11.8		外：淡黄褐/内：黄橙、良	253
80	19		Ⅱ	P225	須恵器	高坏		9.6		灰白、やや良	254
80	20		Ⅱ	P253	磁器	碗		7.2		茶灰、良	255
80	21		Ⅱ	P297	弥生土器	壺	18.6			灰黄褐、良	257
80	22		Ⅱ	P297	弥生土器	鉢	10.4		3.5	外：茶褐・黄褐/内：茶褐・淡茶褐、やや良	258
80	23		Ⅱ	P297	弥生土器	器台	11.8			外：淡茶・黒褐/内：茶褐・黒褐、やや良	259
80	24		Ⅱ	P299	須恵器	坏蓋	12.2			外：灰/内：青灰、良	260
80	25		Ⅱ-1	P1031	土師器	甕				茶褐、良	162
80	26		Ⅱ-1	P1021	弥生土器	壺		8.6		茶褐、良	160
80	27		Ⅱ-1	P1038	弥生土器	高坏				茶褐、良	163
80	28		Ⅱ-1	P1051	土師器	皿	8.2	6.4	1.0	灰黄褐、良	164
80	29		Ⅱ-1	P1058	土師器	高坏				茶褐、良	165
80	30		Ⅱ-1	P1029	弥生土器	高坏				茶褐、良	161
81	31	45	Ⅱ-1	P1130	土師器	壺	10.0		15.0	茶褐、良	166
81	32		Ⅱ-1	P1154	弥生土器	高坏				灰黄褐、良	167
81	33	45	Ⅱ-1	P1163	瓦	平瓦				外：黒・黄灰/内：茶褐、良	169
81	34		Ⅱ-1	P1163	須恵器	坏		9.8		黄灰・灰黄褐、良	168
81	35		Ⅱ-1	P1202	須恵器	坏				外：灰/内：橙、不良	171
81	36		Ⅱ-1	P1202	土師器	高坏				茶褐、良	170
		巻5	Ⅱ-1	溝25	緑釉陶器					オリブ灰・灰白、良	294